阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年4月28日発行

月刊 きんもくせい

05年4月号
(50+36+NO. 25)

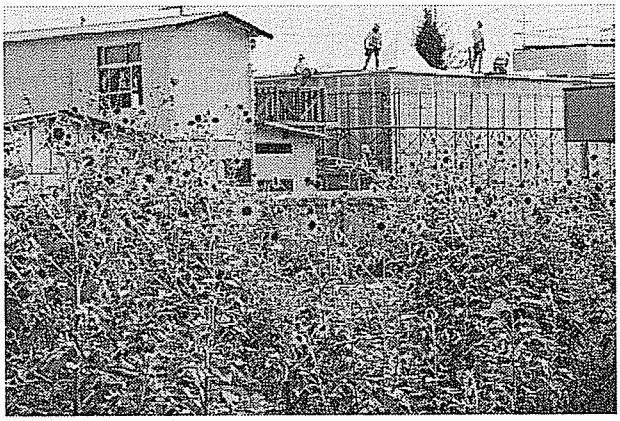
発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■ペーパードームたかとり台湾再生プロジェクト

阪神･淡路大震災によって壊滅的な被害を受けた神戸･鷹取。国籍も宗教も越え、全国からボランティアが鷹取教会救援基地に集まった。その敷地に建った「ペーパードームたかとり」は、住民たちも交えた出会いの場となり、「まちづくりは、ダチ（友達）づくり」と言い交わされた。

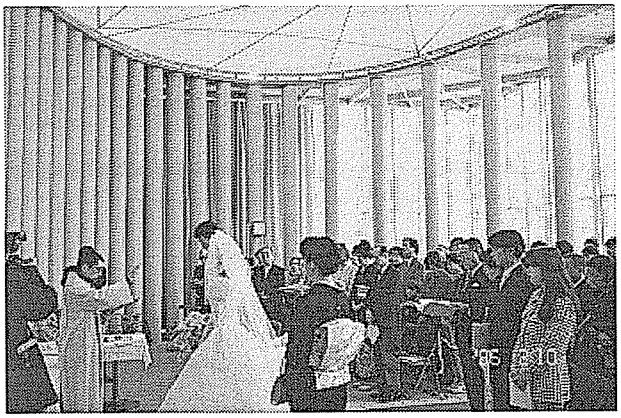
ペーパードームの計画は、東京から鷹取を訪れた建築家坂茂さんが提案したことに始まる。高さ5メートル、直径33センチの紙の列柱58本が弧を描いて並び、テント張りの屋根を支える。ボランティアたちが汗して作業をし、地震から8カ月後の1995年9月17日に竣工式が開かれた。面積は200人を収容できる約170平方米。以来10年、住民の集会や映画の上映会、コンサート、教会のミサ、結婚式、修学旅行生の受け入れなど、さまざまな使い方をされてきた。違いを豊かさとし、人と人とのきずなを紡ぐ。「ダチづくり」の復興を目指す歩みを、ドームは見守ってきた。

我々が台湾のまちづくり（社区営造）を知るきっかけになったのは、やはり1999年9月21日に発生した台湾集集大地震後の復興まちづくりであったといえる。阪神・淡路大震災で被災し、復興まちづくりでさまざまな経験をした我々は多くのことを台湾に伝えたいと思った。様々なメンバーがそれぞれ台湾の「まちづくり」の一端に触れる中で、逆に台湾のまちづくりの方法やまちづくりに取組む人たちの熱情から多くを学ぶ必要性を感じた。



ペーパードーム建設中（1995年8月10日）

そして台湾と神戸がともに震災の節目となった昨年から今年にかけて開催された「台湾－神戸　震災被災地市民交流会」は、被災地市民が直接交流する絶好の機会となった。この交流会の中で、神戸の鷹取で震災後10年間様々な発信を続けてきた「ペーパードームたかとり」を台湾へ移設し再生させることで、台湾?神戸の交流をさらに発展させたいとの話が持ち上がったのである。



ペーパードームの結婚式（1996年2月10日）

2005年阪神・淡路大震災から10年を経てカトリックたかとり教会は建て替えが始まる。この地域の仮設集会所としてのペーパードームも

その役目を終え、取り壊され、新しい教会が建つ。

このペーパードームにはミサに訪れる人々だけではなくさまざまな多くの人々がここに集い、この場所で悲しみや苦しみ、そして喜びを分かち合い、育んできた。

今度は台湾でその役割を担い、神戸のように人と人との絆を結び、多くの人々に愛されることを願って、「ペーパードームたかとり台湾再生プロジェクト」を立ち上げた。

2005年4月16日

ペーパードームたかとり台湾再生プロジェクト実行委員会

浅山三郎（野田北部まちづくり協議会会長）
天川佳美（市民まちづくり支援ネットワーク事務局）
井垣昭人（台湾ー神戸　震災被災地市民交流会幹事）
河合節二（野田北ふるさとネット事務局長）
神田　裕（たかとりコミュニティセンター代表）
小林郁雄（人と防災未来センター上級研究員）
垂水英司（台湾まちづくり研究会代表）
宮沢之祐（たかとり10周年記念誌編集委員）
森崎輝行（建築家）◎
三輪康一（神戸大学工学部助教授）
陸　超（中華民国留日神戸華僑総会副理事長）
（以上50音順、◎印は委員長）
坂　茂（建築家、坂茂建築設計代表）
石田摩美子（坂茂建築設計）
菅井啓太（坂茂建築設計）
石岡桂奈（坂茂建築設計）

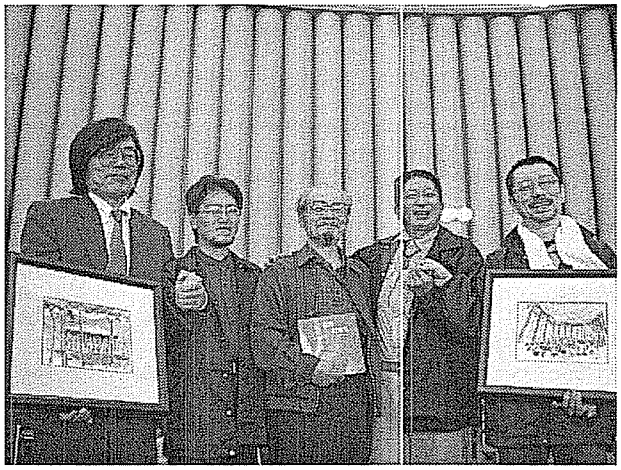
2005年4月16日（土）午後、鷹取カトリック教会にて「ペーパードームたかとり」を台湾に移設再生するプロジェクト立ち上げの記者発表を開催しました。

それに合わせて台湾から廖嘉展さん（新故郷文教基金會代表）と孫崇傑さん（同研究員・建築師）のお二人が参加してくださり、記者会見に先駆けて開催しました実行委員会では建設地を協議し埔里鎮桃米里に決定いたしました。

その後ペーパードーム内で開催された記者発表では台湾からのお土産として神戸の実行委員会に絵が2つ贈られました。1枚は神戸のペーパードーム内部の絵で、もう1枚は台湾へ送られたペーパードームが林の中に建っている情景が描かれています。



実行委員会で建設地を検討



記者発表のあとの実行委員長同士の記念撮影
（右から神田神父（絵は現在／神戸）、廖代表、浅山会長、孫さん、森崎委員長（絵は計画／台湾））

■「だんだん畑は元気の素！」阪神・淡路大震災10周年記念事業助成
南芦屋浜コミュニティ＆アートプロジェクトの７年を語る/フォーラム＆交流会

橋本　敏子（生活環境文化研究所）

5月14日（土）に、表記のプログラムが行われます。実施するのは、畑の活動を行っている住民有志と応援団のメンバーによるだんだん畑10周年実行委員会。私もその一員として参加しています。

巷では、震災10周年関係の様々なイベントが行われていますが、実行委員会はあえて「イベント」という特別な位置づけをしないでおこうということになりました。というのは、「畑の活動を住民や外の人たちに知ってほしいけれど、へとへとになるようなイベントはしたくないな」「もっと若い世代や子どもたちに参加してほしいねぇ」「なんでだんだん畑ができたのか、アーティストや計画した人たちに一度きいてみたいな」そんな声が多かったからです。イベントのためのイベントはしないという方針は当初から今まで続いていることの一つですが、高齢化が進むこのまちでは現実的にもそうしないともたないというのも事実。そんな中から決まったのが今回のプログラムです。

●フォーラム　（13:30～15：30）

・芦屋市総合公園内・緑の相談所会議室にて

（芦屋市陽光町1-1　tel 0797-25-2023）

まち開き・畑びらきからちょうど７年、この機会にだんだん畑の制作者である田甫律子さんをはじめ当時の関係者の方々このプロジェクトに参加した方々にも来ていただき、畑のメンバーと一緒にこの７年を振り返ります。

計画した側と住民が一緒に語るという機会は意外に少ないため、どんな話が飛び出すか期待大です。

●だんだん畑パーティ（交流会）　16:00～17:30

市営だんだん畑にて

いつもよくやっている催しです。今回は市営エリアが主会場。畑のそばで軽い飲食をとりながら住民やゲスト参加者やフォーラムに来ていただいた方々との交流を図ります。当日収穫した空豆やエンドウがおつまみに登場するかもしれません。

いずれも参加費は無料。フォーラムは申し込み制。Fax　0797-32-7178　フォーラム担当　橋本まで

●『春のじゃがいも収穫祭～親子で作るカレーライスと菜の花サラダ』の報告

今回の一連のイベントの第一弾として、4月3日に、「春のじゃがいも収穫祭」が行われました。

畑のじゃがいもを収穫して、それを使って、親子でカレーライスを作って、畑の菜の花や大根を使ったサラダと一緒にみんなで食べました。

また、食事の後には、みんなで畑の土起こしをしました。



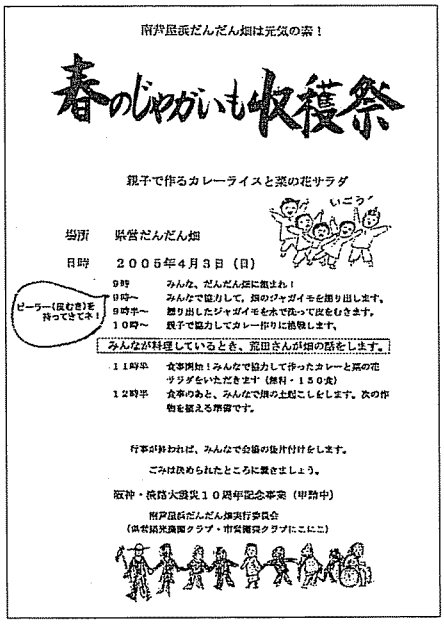
畑で採れた大根と記念撮影



収穫したじゃがいもをみんなで皮むき



みんなで作ったカレーを食べました



住民手づくりの案内チラシ

ふれあい住宅（復興公営コレクティブ住宅）の検証（その５）

今後の展開に向けて（２段階住宅供給方式）

石東　直子（石東・都市環境研究室）

はじめに

「きんもくせい　04 年３月号」から始めたふれあい住宅の入居後数年を経た課程の検証シリーズも今号でひとまず終えるのでシリーズの概要まとめと今後の展開へ向けての提案を記します。ちょうど兵庫県の震災復興 10 年総括検証も発表されたので、その報告書概要版からふれあい住宅の検証を文末に転載しました。なお 10 年検証については、ふれあい住宅連絡会で話し合ってみたいと思っています。

1. ふれあい住宅事業化の功罪

・ふれあい住宅の事業化は震災直後のコレクティブハウジング事業推進応援団の提案や地域型仮設住宅での高齢者の安定居住のモデル等があって、復興公営住宅に 10 地区 341 戸が供給された。コレクティブ応援団の提案主旨は、仮設住宅で多発し大きな社会問題となっている孤独死が恒久住宅に入居した後も続発することを防ぐために、日常生活の中で自然な形で住人どうしがふれ合う場をもち、相互扶助を育むことができるしかけを持った住まいの復興であり、下町長屋の再生である。

・10 地区のうち４地区は多世代向け住宅、６地区は高齢者向け住宅であるが、復興公営住宅という特殊性から多世代向け住宅も高齢者の占める割合が多く、コレクティブ住宅＝高齢者向け住宅というイメージが広まり、本来のコレクティブ住宅の理解に誤解を生じさせてしまったきらいがある。これは阪神・淡路大震災復興基金事業によって創設された「被災者向けコレクティブ・ハウジング建設等事業補助制度」の適用を受けて建設された民間住宅（18 件）についても言えることであり、本来のコレクティブ住宅のもつ多世代居住、生活の合理化をめざした家事の一部の協同化、住人たちによる自律した住コミュニティ運営の視点が置き去りにされているようだ。単に共同スペースがあるという建物形態だけでコレクティブ住宅と呼んでいては、日本の住宅史に汚点を残すことになろう。「被災地にコレクティブ住宅を！」の言いだしっぺで、その事業推進を応援してきた私にとっては悔やまれる点である。

・ふれあい住宅は募集時に十分な情報提供と説明がなくて協同居住の意味を理解しないで入居した住人が少なくなく、入居当初は新しい住まい方に戸惑い住人間のトラブルがあったが、コレクティブ応援団や LSA（生活援助員）、多様なボランティアのサポートを得て入居後数年が経ち、ひとつ屋根の下に生活しているという相互扶助の気持ちが育また。緊急時の対応や日々の生活の異変等に住人の気配りがあり、十分ではないにしても安心居住の住まいであると住人の多くは感じているようだ。相互扶助が育ち自律した高齢者住宅の先進事例とみなされ、他自治体でも数ヶ所が事業化されている。他地域で事業化された高齢者ふれあい住宅は、その形態や協同居住の状況は様々であるが、1987 年に創設された国の制度「シルバーハウジング・プロジェクト」の LSA による住人個別対応の見守りシステムから発展して、住人同士のつながりや自律した相互扶助のある住まい方としてモデル供給された。

2. 住人の動態、加齢等による課題

入居後数年が経って住人の動態は住宅によって差があり、第一次入居時からの居住者率が 58～67%という住人の入れ替わりの多い住宅が３住宅ある。死亡や高齢者施設への入所等によって生じた空住戸に入居してきた新住人に対して自治会役員等は新しい住まい方に馴じめるようにと心を配っているが、ふれあい住宅（新しい住まい方）という認識がなく、新旧住人に戸惑いがある。空家募集に際して適確な事前説明や情報提供が望まれる。また、高齢者２人世帯として 2DK住戸に入居したが１人が亡くなって単身住まいになっている住戸が増えている（2DK戸数の 32%に及んでいる）。今後このような状況がさらに増加し、３DK でも同様な状況が生じ居住人数が減少すると、計画人口に対応して設けられている協同スペース等の維持管理も難しくなってくる。同一住宅内で世帯人数に合った住戸に住替えたり、親しい住人同士が同居（シェアード居住）できるような新しい手立てが望まれる。

3. ふれあい活動の変様

住人の加齢に伴ってエネルギーがなくなり、お茶会や定期的な食事会、節季の集いなどのふれあい活

動が一時期に比べて大幅に減少してきているが、住人たちはこのようなふれあいの機会の重要性を認識し何とかお茶会等を続けたいと思っており、新規入居者はできるだけ若い人に限定してもらって自律した住運営のエネルギーが持続できることを強く望んでいる。真野ふれあい住宅と岩屋北町ふれあい住宅は外部ボランティアのサポートを受けてお茶会や朝食会を続けている。また、現行制度を活用して住人が日常生活の中でふれあう機会をつくっている福井ふれあい住宅では、宝塚市看護協会の看護師訪問健康チェックを毎月協同室で行っている。介護保険制度の家事ヘルパーの食事づくりを利用している人たちが協同室でまとめて食事をつくってもらい一緒に食べることが実現できたり、希望者が共同で食事サポーターを雇ったり、仲よしグループが一緒につくって食べるなどが実現化することを私は望んでいる。

4. 持続した安定居住の展開に向けて

全国に先がけて事業化された高齢者協同居住のふれあい住宅は数年の居住を経て新たな展開の時期を迎えている。震災直後の計画段階では具体像として予測できなかった今後の展開も見えてきた。今までの課程はハードな住宅建設とモデル居住の模索・試行の課程であり、これを第1段階の住宅供給とすると、今後は将来とも安定した居住が持続できるためのシステムづくりと住人ニーズにの時期に応じた居住サポートを提供する段階（持続したソフトな住宅供給）に入る。私はこれを2段階住宅供給方式と呼び、その必要性を強く感じている。

なお、下に転載した10年検証にある『ふれあい住宅の活性化のために住宅の管理・運営を社会福祉法人やＮＰＯ等の民間事業者へ委託するなど』の提案は、将来的には必要な方策のひとつであろうが、一律に早急な導入は適切ではないように思う。まず、現状でうまく運営を続けているふれあい住宅のやり方を学び、他のふれあい住宅もそれをとり入れることができるような住人自治の育みが大切である。外部組織に丸がかえ委託する方式をとらないで、2段階住宅供給方式としてまず大家さんである自治体が責任を持って居住実態や住人のニーズ、意向を把握し、住人の意思を尊重した、住人自らが参加しながら対応できるようなサポートが必要である。2ヶ月ごとにふれあい住宅の有志とコレクティブ応援団が集まって情報交換をしている「ふれあい住宅連絡会」に大家さんも参加して欲しい。

■「兵庫県復興10年総括検証・提言報告（案）の概要版」からの転載

2-（10）「新しい住まい方における取り組み」

① 取り組みの成果と課題

ア.「ひょうご復興コレクティブハウジング等」供給の成果と課題

応急仮設住宅の居住者特性に超高齢社会の縮図を読み取り、居住者自身によるコミュニティの形成を基本とするコレクティブハウジングという新たな居住様式を全国に先駆けて公営住宅に導入し、県営、市営をあわせて10団地341戸を供給した。また、NPOやボランティアによる協同居住へのソフト支援が行われたことから、居住者の生活再建の励みにとなった。

今後の課題として、「新しい住まい方」の価値の浸透不足もあり、「入居動機」とのミスマッチが生じた。

＜ 以下省略＞

② 今後への提案

ア. 既存の「ひょうご復興コレクティブハウジング等」の活性化

既存の住宅ストックを活用して、さらなる高齢者の自立と安心居住に資する次世代「シルバーハウジング」（高齢者向け設備・仕様の公共賃貸住宅で、ＬＳＡ・生活援助員によるサービスが受けられるもの）のモデルとして再活用を図る必要がある。このため、高齢者のみの集団では、居住者主体の持続的コミュニティ形成の期待は困難になることから、今後、住宅の管理・運営を社会福祉法人やＮＰＯ等の民間事業者へ委託するなど、コレクティブハウジングの運営を支援すべき。

＜以下省略＞

■Dr.フランキーの街角たんけん 第14回 栄町通 過去・現在・・・・（序）

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

今シリーズは「田園都市」から、再び街中に戻ることにしたい。取り上げるのは、筆者の属する「港まち神戸を愛する会」のホームグラウンドのひとつ・栄町通である。「あの日」を境にして、旧居留地も栄町通も、やはり、大きく変わった。私たちが思いを注いでいた建物があった跡地は、いまだに空地のままの場所もあれば、別の会社のビルやマンションに建て替わったり、とそれぞれである。総じて、この通りの界隈は、高層集合住宅建設がピークを迎え、また自然発生的な盛り場が繁殖するなど、神戸の中心市街地の現在を象徴している。

まずは、開通から今年で132年になった栄町通のあゆみを辿ってみよう。

栄町通のルーツを語るとき、語り落とせないのはもちろん「居留地」と、もうひとつは「鉄道開通」という二大プロジェクトである。

明治元（1868）年、生田川（現フラワーロード）西側に出現した神戸外国人居留地は、格子状に区画された街区割や幅27mの京町筋など、当時の日本人の感覚とはかけ離れた空間であったと考えられるが、この居留地の強烈な印象が、その後の、神戸駅北側の仲町部（現神戸市中央区橘通、多聞通）の開発や、明治中期から展開する新道開鑿、耕地整理など民間による神戸の市街地基盤整備に大きな影響を与えたことは想像に難しくない。

栄町通の建設も、そうした「居留地」の与えたインパクトのひとつと考えられるが、その実現には、明治初期の兵庫県庁を根城に活躍した一人のメリケン帰りの「プランナー」の存在が大きかった。

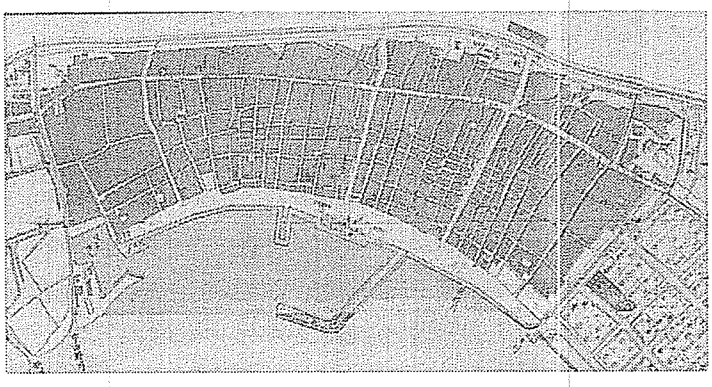
明治の初め、西国街道（現元町通商店街）と、海岸通に挟まれた区域は、兵庫津から引き続いて形成されてきた神戸・二つ茶屋・走水の三ヵ村の中心部で、場所柄、水産物を商う人々などが住まう密集市街地であった。できたばかりの居留地と大阪神戸間を結ぶ鉄道の終着駅が建設される東川崎町とを連絡するのは、江戸時代そのままの西国街道と明治4年に整備された海岸通（現国道2号線）以外に目抜き通りはなく、漁村特有の毛細血管のように家々の軒先を縫って歩いていく有様であった。

鉄道の開通を約2年後に控えた明治5年、このまちを揺るがす計画が、県庁から出された。神戸・二つ茶屋・走水の三ヵ村の真ん中、西国街道の南側に、幅員18mの大通りを建設するというのだ。

この一大土木事業を計画したのは、当時県庁の新大道取開掛であった関戸由義である。赤松啓介によれば、関戸は福井藩の、おそらくは江戸屋敷詰めの武士だったが、幕府崩壊の混乱に乗じて江戸中の豪商や御家人などから二束三文で買い叩いて集めた書画骨董刀剣を携えてサンフランシスコへ渡航、現地の好事家に高値で売り飛ばして得た資金で、こんどは最新式の銃器を仕入れて、日本にとってかえし、諸藩諸侯に売り込んでひと財産作った、というなかなか武家らしからぬ抜け目のない人物だった。関戸は、開港間もない神戸で一旗あげることを決意。早速現地へ飛ぶとメリケン帰りの新知識を生かして今の鯉川筋のあたりで英語・数学などを教授する私塾を始め、これがよく繁盛をしたという。

まもなく兵庫県庁が、関戸に目をつけた。何しろまだ地方自治の基盤も確立しておらず人材不足の状況で、短期間とはいえアメリカ滞在という関戸の経歴が光ったのだろう。

栄町通の建設にあたっては、道路建設だけでなく沿道の市街地整備も合わせて計画されていて、鯉川筋から宇治川の間まで道路幅員の3倍強・69mの幅で、用地買収が進められた。兵庫県は、外国人居留地に対して「日本人のためのビジネス街づくり」を目論んでいた。鉄道の終着・神戸駅から居留地への玄関口となる大通りに相応しいまちづくりを企図して、そのプランにはある秘策が込められていた。（この項続く）



「明治五年兵庫神戸実測図 三千分箇之縮図」海側（神戸市立博物館蔵）の元町周辺部分 ※町の中央の大きな通りは西国街道（現元町通）（出典「異人館のある町並み 北野・山本」（神戸市教委））

マンションKをめぐる人々1「屋上」

祖父と鳥

中川 紺

財布がピンチだ。プレステの中古ソフトのせいで今日発売のマンガが買えなくなった。どうするって？　通勤定期落としてイライラしているおふくろには頼めない。僕は仕方なく祖父のところに行くことにした。

祖父はこのマンションが建ってすぐに最上階に……といっても七階建ての小さいマンションだけど……引っ越して来たそうだ。うちの家族はそのちょうど一ヶ月後に二階下の部屋に。実は祖父がいるとは知らなくてちょっと驚いたけど。

独り暮らしで結構広い部屋借りて、お金はあるはずだけど、僕は祖父からおこづかいをもらった記憶がない。親戚の間でもケチで有名だ。でもそんなとこしかもう思いつかない。小学生じゃバイトもできないしさ。

●●

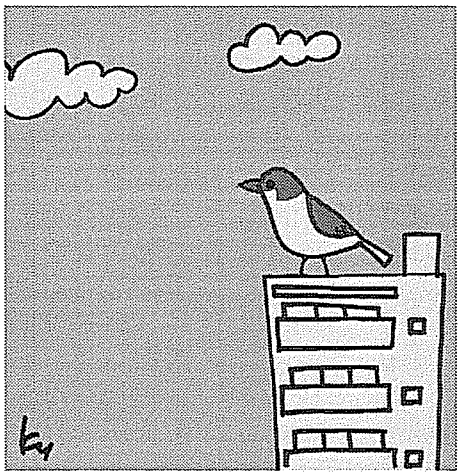
ピンポン。押してすぐにドアが開いて驚いた。どこかに出かけるみたいだ。

「なんだ、モトオか、珍しいな。どうせ何か頼みごとだろう。でも小遣いはやらんぞ」

開口一番これだ。でもここで諦めるわけにはいかない。違うよ、じいちゃんどうしてるかなって思って、と心にもないことを言って、そのまま祖父の後をついていった。

エレベーターには乗らず、非常階段から屋上へ上がると、祖父は持っていた折たたみイスを広げて腰をかけた。脇の籠には小さなポットと急須と湯のみ、それから袋がひとつ。

「何すんの？」と聞くと、黙って空を見上げ、袋からひと掴み取り出したものを、屋



上の隅っこにまいた。鳥のエサらしい。すぐに十数羽やってきて、ついばみはじめた。それを見て微笑んでいる祖父は何だか別人だ。

「ここでえさやって、怒られない？」

「……ばあさんがな……」急須にお茶っ葉を入れながら、唐突に話し始めた。

●●

マンションが建つ前、ここは小さなお屋敷だった。庭には二階の屋根より背が高い木が植わっていて、木はスズメのねぐらになっていた。毎日、鳥たちの声がとても賑やかで、三年前に亡くなった祖母は、その木が気に入っていたらしい。

「楽しそうねえ。私、スズメに生まれ変わってあの木に住もうかしら」

ベッドの上でよくこう言っていた。それなのに祖母が亡くなって一年もしないうちにその土地は売られ、あとにはマンションが建った。もちろん木は切られて、スズメは新しい宿を求めて散り散りばらばら飛んでいった。

●●

「でも戻ってくるかもしれないからな。目印の木がなくても、ばあさんが迷わないように、わしはここで待つことにした」

いつも無愛想な祖父がそんなことを考えていたことに少し驚いていた。

無駄遣いはするな。話し終えると千円札を一枚くれた。僕は戸惑いながら受け取った。

次の日の明け方、祖父は心臓発作で亡くなった。お葬式から帰ったあと、僕は屋上に一人であがった。最初で最後のおこづかいで買った「鳥のエサ」を、祖父と同じ場所でハトやスズメたちにやった。鳥たちの中に、ずっと一緒にいる二羽のスズメがいて、僕にはそれが祖父と祖母の姿に見えた。　（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第４３回連絡会報告

今回のテーマは**「団地再生の動向－明舞と浜甲子園団地」**で、４月８日（金）神戸市勤労会館において行われました。タイトルと報告者は以下の通り。

- **「明舞団地～ＮＰＯとの協働による再生の取り組み」**
  ／野崎隆一（遊空間工房）
- **「浜甲子園団地～住民参加による団地再生」**
  ／吉川健一郎（コー・プラン）

野崎さんからは、まず今回のコーディネータとして、「団地再生の動向・パースペクティブ」と題しての我が国及び世界の団地再生の流れを整理されたのちに、兵庫県が昭和３０年代から開発してきた郊外型住宅地である明舞団地（明石舞子団地）の再生の取り組みについて報告されました。開発ポテンシャルの低い団地の再生では住民主体の取り組みが不可欠であるとの考えから、平成１４年度より地元ＮＰＯと行政、専門家との協働事業として、空き店舗事業やまちづくりワークショップ、団地再生アイデアコンペ等の取り組みが紹介されました。

吉川さんからは、西宮市東部にある浜甲子園団地（昭和３０年代後半に公団が開発、約 4,600 戸の賃貸住宅、４～５階建階段室型住棟）の再生に関して、平成１３年より地域住民とともにワークショップにより建替え後の住まい方等について検討を積み重ねている取り組みについて報告されました。

討論では、賃貸住宅団地とに関して今後のあり方の検討が必要であること、再生コンペの方法に工夫が必要であること、人口が減少していくときの都市計画・まちづくりのあり方など、様々な興味深い意見が出されました。（中井都市研究室　中井　豊）

■ 第７５回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは**「兵庫県下のコンバージョン←→リフォームの事例」**で、4月 22 日(金)、こうべまちづくり会館で行われました。タイトルと報告者は以下の通り。

- **「御影の病院→コレクティブハウスへのコンバージョン」**
  ／野崎淑美（遊空間工房）
- **「太子町の家（明治建築のリニューアル）」**
  ／森崎輝行（森崎建築設計事務所）
- **「ワコーレのバリュアップ事業2題」**
  ／松尾裕二、有馬博行（和田興産）

野崎さんからは、築後３０年たった医院付き住宅の医院部分（５階建ての１，２階）を、グループハウスとして用途転換した事例を報告されました。消防や福祉施設としての対応、設備や費用面での不確定要素が多いことなど、コンバージョンの難しさ、設計者としての苦心が語られました。森崎さんからは、播磨地域に多く残る伝統的な民家の風景を守りながら、現代風にリニューアルした事例が報告されました。神戸大学安田研究室との共同作業とのことで、大胆に打ち放しコンクリート壁を耐震等への対応として使用していることが印象的でした。松尾さん、有馬さんからは、入居状況のあまり良くない集合賃貸住宅を一棟ごと購入して、リニューアルする事例が報告されました。これらの報告はいずれも、これからの時代に確実に増加していくと思われる事例であり、関わる主体や目的の違いにより、多様な方法でコンバージョンやリニューアルが展開されていくであろう、ということが感じられた報告会でした。
（中井都市研究室　中井　豊）

■ 情報コーナー

- **「炊き出し体験会・そして絆」**
  ・日時：5月29日(金)10:00～17:00
  ・場所：湊川公園（市営地下鉄湊川公園駅、神戸電鉄湊川駅すぐ）
  ・内容：ステージ／第1部「あの日に立ち戻る」…ブラスバンド演奏など、第2部「この１０年をふりかえる」…防災訓練、救急救命士養成講座など、第3部「未来へ」…犬の一発芸大会など、イベント広場／まちづくり協議会による模擬店、パネル展示など
  ・問合せ：コー・プラン（担当：吉原、TEL.078-842-2311）

訃　報

震災以降、千歳地区（鷹取東第二地区）をはじめ多数の地区で復興まちづくりにコンサルタントとしてご尽力してこられ、「きんもくせい」にも寄稿していただいている淺野弥三一さんの奥さん、妹さんが尼崎の列車事故で亡くなられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

- **きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ**
  - http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
  - http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク　事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年5月31日発行

月刊 きんもくせい

05年5月号
(50+36+NO. 26)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■新潟県中越大震災・震災から半年復興スタート宣言・産官学リレーシンポジウム　共同宣言

大地復興推進会議

2005年4月23日、新潟県中越地方は2004年10月23日の新潟県中越地震から半年の節目の時を迎えた。被災地は地震後19年ぶりという豪雪に埋もれたが、ようやく春を迎え、各地で雪解けが進んでいる。

新潟県中越地震・大地復興推進会議は中越地震復興を推進しようとする、中越地域内外の市民・研究者・実務家の集まりである。この会議の目的は、情報の共有による震災復興に対する意識や活動の有機的連携と相乗効果の生み出しである。本会議は提言、行動、検証を絶え間なく行う。この一連の活動は我々自身に向けられるものが最大であるが、市民や行政にも向けられる。会議への参加資格は問わない。中越地震の被災体験のみならず阪神・淡路大震災をはじめ過去の災害の教訓を活かした中越地域の復興をめざしつつ、今後、大都市、地方都市を問わず我が国のどこにでも起こりえる地震、さらには来るべき首都直下や東海・南海の大地震等への対応指針を得ることもめざしている。

大地復興推進会議は地震後半年の節目にあたり、2005年4月22日・23日の2日間にわたる産官学リレーシンポジウムの成果をふまえて以下の宣言を行う。地震後1年目にはこの宣言の内実を確かめると同時に新しい宣言を行う。その間にも必要に応じ適宜会議として声明発表や行動提起も行う。

1．2005年3月1日発表の「新潟県中越大震災 震災復興ビジョン」をふまえて、各市町村が2005年6月の策定を目途に、現在作成中の市町村の震災復興計画に積極的に関与する。

中越地震では、地震後の初期の2ヵ月は豪雪に備えての緊急・応急対策に全力があげられ、その後の3ヵ月は豪雪の中でひたすら雪解けを待って復旧・復興活動はほぼ完全に休止状態という特異な状況におかれた。近年の地震災害ではかつてなかったことである。

新潟県はこの地震後モラトリアムともいうべき期間に「震災復興ビジョン」をまとめた。

中越地震では、長岡市を中心とする地方都市の市街地（町場（まちば））、郊外部（平場（ひらば））、中山間地（山場（やまば））のいずれもが大きな被害を受けたが、とりわけ中山間地の被害は激甚であった。県の復興ビジョンは、地震前から衰退傾向が著しかった山場において住宅・生業・暮らしが一体となった新しい生活を生み出し、町場、平場との新しい相互依存関係を築いて中越地域全体としての活力創造を掲げた。これは中越地方のみならず日本全国の地方

都市のめざすものでもある。期間としては 10 年が設定された。大地復興推進会議のメンバーは、県の復興ビジョンの策定には何人か加わったし、ビジョンをふまえて作成中の市町村の震災復興計画には多数のメンバーが直接、間接に関係している。推進会議はビジョンの実現に向けて各方面で積極的な活動を行う。

2．大地復興推進会議は、県のビジョンには大きくは取り上げられていないが、被災市民と行政をつなぐ「中間組織」、「仮設住宅生活」、「景観」の３点は特に重要と考える。

①中間組織

今回の地震では被災市民は避難場所だけでなく様々な場所に自主的に避難し、相互に助け合うなど秩序維持に大きな役割を果たしたし、その後の仮設住宅等の被災後生活でも地域コミュニティは地域のまとまりの中心的役割を果たしている。今後の復旧・復興計画の策定や事業推進の基本は、行政との連携のもと地域コミュニティの意思と合意であることはいうまでもない。しかし、行政と被災市民という２対関係では限界がある。このため、中越地方内外の市民、ボランティア、専門家を結ぶネットワークを形成し、地域コミュニティをさりげなく支えて市民―行政間の橋渡しをする多様な「中間組織」の存在を重視し、市民―中間組織―行政の３対関係を生み出して復旧・復興を推進する。

②仮設住宅生活

仮の住まいはあっても「仮の生活」というものはない。仮設住宅の環境と生活も豊かなものでなければならない。また、仮設住宅生活から復興生活までの道は「直線的」なものではなく、両者がオーバーラップする「複線的復興」ともいうべき復興もありえるとも考え、仮設住宅だけでなく、仮設店舗や仮設作業所などを含んだ「仮設市街地的建設」的な復興形態の明確化と具体化の方策を追求する。

仮設市街地は現在の仮設住宅にもありえるし、中山間地に被災者が戻っていく場合にもありえると考える。

③景観

中越地震報道の中で、全国の人々の心を大きくうごかしたものの中に、地震前に保たれていた地域の固有の文化と美しい風景がある。風景、景観に配慮する余裕がなかったということは阪神・淡路大震災の苦い教訓のひとつである。中越地震の復興においては農地や森の再生だけではなく、住宅、集落も含め「美しい日本」をつくる先鞭をつけたい。美しい景観が人々をひきつけてやまない時代はもうすぐそこに来ている。

3．中越地震に関する県、市町村の公式文書には載りにくい問題として「広域合併と災害問題」、「災害後対応における自治体・市民の裁量重視」、「復旧と復興の法制度上の明確化」の３点は特に重要な問題として指摘しておきたい。

①広域合併と災害問題

中越地震は県知事交代の２日前、広域合併の５ヵ月前という政治的にも極めて異例な時期に起きた。

長岡市は 2005 年４月１日に周辺５町村を吸収合併して新長岡市となった。地震発生時の災害対策本部は旧市町村ごとに、復旧・復興に関しては、初期５ヵ月間は旧市町村ごと、４月１日からは新長岡市がすべてを行うこととなった。新市の広がりは一気に広大なものとなった。市長のみならず市職員も含めて新市の実態を把握している人はいない状況であるといっていい。

これは市民についても同じである。平成の大合併は全国で進んだし、これからも進む。今後10年程度は広域合併と災害問題の関係は全国でも特に留意が必要であることを指摘しておく。

②災害後対応における自治体・市民の裁量重視

中越地震での被災者生活再建支援法適用では住宅再建への資金充当は認められず、物品購入には細かな制限がつけられた。住宅再建はもっとも重要な生活支援であるにもかかわらず、である。また生活再建の方法は被災者個々に異なる。購入する物品まで国に定めてもらう必要はない。首都直下地震や東海、南海地震などが発生すれば数百万規模の被災者発生や数十万のオーダーの住宅喪失が起こる。

このような時に国の定めた事務手続き、費目や仕様に基づいた給食や仮設住宅建設、生活再建などは不可能である。国は災害後対応における手続きや資金と使用などを根本から見直すべきである。

③復旧に対置した復興を明確にすること

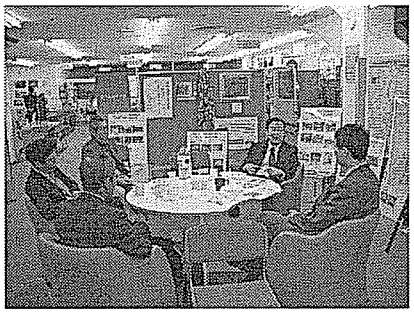
地震等の災害後の道路等の公共施設整備において国が認めているのは原則「原形復旧」つまり災害前の状態にもどすことである。これに対しては手厚い補助が用意されている。しかしながら、全く新しいことつまり「復興」に対しては特別な措置はない。再度災害防止のための「改良復旧」の道があるが非常に限定的である。これでは抜本的な復興は難しい。この復旧と復興の問題は難しい問題であることは承知している。しかしながら、復興の概念や法制度上の明確化は時代の要請であり、早急な検討開始を望むものである。　　以上

2005年4月23日

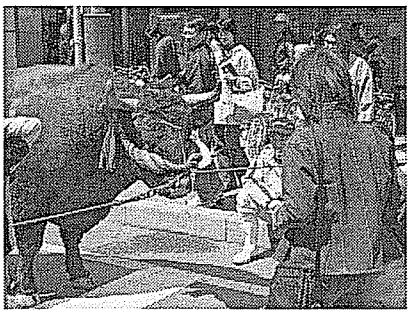
大地復興推進会議・代表世話人平井 邦彦



澤田さん、顔さん何さん、平井さん



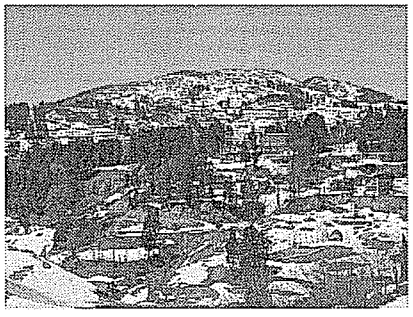
伊藤先生平井さん、森市長泉田知事



長岡中心地の歩行者天国の闘牛

●この半年後復興スタートシンポジウムは、大地復興推進会議が中心になって企画されたものですが、実質は長岡造形大学の平井教授と澤田講師の努力の結晶です。上の左端写真の中央2人は、921地震からの復興報告をされた台湾埔里のＮＰＯ新故郷のメンバーです。中央写真は4/23に鼎談された方々と「まちなか考房」でお祭りのカレーを食べながら、「ガレキに花を」の活動など阪神大震災の話をしました。くらし研究所の山口一史さんも一緒でした。右端写真は山古志などの有名な闘牛が、お祭りに参加してました。さすがにデカイ！けど、おとなしかった。右の写真は翌4/24の被災地ツアで、特別に村の中心部を見学させてもらった山古志の雪の残っている風景です。切ないほどの美しさでした。

1年後、1年半後、2年後も、同じメンバー同じ場所同じテーマで、再び、三たびシンポを重ねることを提案しました。（小林郁雄）



山古志村中心部残雪景色

■『コンパクトシティ』を考える 13

−英国のインナーシティ化とサッチャー政権の政策

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．英国のインナーシティ問題の顕在化

「工業社会」英国の戦前戦後の都市政策の基本は、混雑した大都市から人口と経済活動の分散化を促進する地域政策・ニュータウン政策であった。1950～60 年代にかけて、大都市インナー地域から人口と雇用の転出が促進された。しかし、老朽・劣悪化した工場や住宅の放置、人口の高齢化、購買力不足による商業不振、空き店舗の増加という、集中化、郊外化に次ぐ「第３の都市化」、すなわち「インナーシティ化」を顕在化させた。

さらに、英国にはインナーシティ化に拍車をかける特殊な実情があった。かつての大英帝国繁栄の時代に、帝国内の国民の移動の自由が保障され、英国には一攫千金を求めて多くの人間が海外から移住してきた。圧倒的な大多数は都市地域に貧困層として住みついた。まさにインナーシティでは、全国より３割以上高い失業率と、住宅の老朽化、貧困層の拡大、高い犯罪発生率が恒常化した。

2．公共主導型インナーシティ政策の限界

インナーシティ問題の高まりは、長年の都市の衰退を放置した政府に、非難の声を高めた。

労働党のウィルソン政権(64-70)は、都市の貧困は個人や集団の社会的病理に原因があるとする伝統的見解に立ち、子供の遊ぶ施設、保育施設、住宅相談所、老人援助など公共介入の対象を特定化する選択主義と積極的優先措置に基づく都市の衰退対策を実施した。しかし、効果はなく、逆に都市の経済的衰退を促し、国家や国際レベルまで影響しているという評価に終わった。

次の保守党ヒース政権(70-74)は、都市の荒廃の解決策は、「物理的」で、同時に「経済的」であるべきと考えた。しかし従来の物的再開発方式から脱却できず、一方、経済的対策で民間の投資を刺激する金融緩和が、不動産投機ブームが起こし、公共部門が長期的に進めてきた都市政策が市場からはじき飛ばされ、壊滅的になってしまった。

74 年に政権を取った労働党(74-79)は、都市問題は集中による混雑の問題ではなく、都市経済の崩壊の再生過程を支援する民間投資が欠如しているとの認識に変わった。従来の分散化政策から転換し、都市開発資金を大都市内部の開発・更新に重点を移した。78 年深刻な地域に『パートナーシップ地域』を指定し、中央政府と地方公共団体が密接な連携の下で、民間活力を都市の経済活性化の主役として都市計画、都市再生にあたることとした。しかし、労働党政権下では、中央政府が、民間部門を支持することに限界があった。

3．サッチャリズムによる国家主導型経済からの構造転換

79 年の総選挙で保守党が圧勝し、英国初の女性首相のサッチャー政権(79-90)が誕生した。サッチャーは、勤勉と達成を尊ぶ「自助努力」を訴えて、社会主義的な福祉国家と混合経済から脱して、自由主義的経済国家に復帰させる「強くて小さな政府」を政策の中心課題とした。

サッチャリズムの手法哲学は、次の４点である。

1)政府は肥大化しすぎであり、民間部門の利益を妨げない程度に縮小すべきである。

2)市場の重視で効率的な成長管理ができる。

3)経済の全ての分野で民間部門は公共部門より効率的である。

4)公共部門の依存度を下げることで、企業・地域・家庭は、進取の気性、率先、自律的な伝統的価値・利益を再発見する。

具体的政策として、長年放置されてきた労働組合の独占に対して、「鉄の女宰相」として力で組合を屈服させ、適正に機能する労働市場に再生した。国有企業の独占に対しては「民営化」の実施で、経営の効率化のほか、86 年の「ビッグ・バン」による金融緩和、国際化やＩＴ化で、市場経済への対応を図り、経済の活性化に成功した。

都市政策に関わる民営化では、公共住宅を既存

借家人へ払い下げた。払下げ戸数は、106 万戸にも及び、持家率は 70 年 49%が、85 年には 61%へ上昇した。80 年以降 3 年間政府の国庫補助金を大幅に削減し、地方団体の住宅政策の比重を下げた。さらに、長年の家賃規制を廃止し、市場に家賃を決めさせ、住宅市場を振興し、質の高い賃貸住宅供給を促進させ、民間による効率的な住宅供給を図った。これで、地方公共団体は民間との競争にさらされ、単に公営住宅の建設・管理ではなく、より良いサービスの提供を強いられた。

4．民間活力誘導による都市再生事業と評価

都市再生政策として、民間活力による都市経済の活性化を図るための大改革を実施した。徹底した都市計画行政の簡素化と規制緩和を基本政策とする中央政府主導型の政策に転換した。戦前からの分散化政策を終焉させ、既存の都市市街地内での再生プロジェクトに都市開発投資の焦点を移した。事務所や産業開発の開発許可を緩和し、市場経済メカニズムの法則に任せた。

特に、インナーシティの再生のために、80 年に『都市開発公社』『エンタープライズ・ゾーン(EZ)』、82 年に『都市開発補助金』の導入を打ち出し、インナー地域により多くの民間資金を誘導する施策を打ち出した。

『都市開発公社』は、都市環境整備や社会資本整備を官民協調で誘導するために設立するもので、広範な権限を与えた。土地収用権限と、環境大臣の命令で公社自身が計画権限も持ち、民間の開発投資に対する的確な対応を可能にした。81 年にロンドンのドッグランズとリバプールのマージサイドで公社が設立され、その後 90 年までに 9 公社が設立された。

『ＥＺ』は大臣の要請に基づき、地方公共団体や公社が地域開発計画を策定し、大臣の指定を受ける。指定により開発計画許可の効力が生じ、税制面では、地方税 Rate（固定資産税）の免税（地方の歳入欠損は大蔵省から補填される）、建物の新増築に対する資本支出の法人税・所得税の全額資本控除などの恩典が与えられる。ＥＺは主に鉄鋼・造船・自動車などの基幹産業が衰退した地域に設定され、93 年で 27 地域が指定された。

『都市開発補助金』は、国が地方公共団体に75%の補助金を交付し、限定的資本補助金として民間のデベロッパーに分配し、それを「レバレッジ（てこ）」として数倍の民間の投資を産み出すものである。官民パートナーシップの形成を図り、政府と企業双方に、様々な展開を実現させることに効果を発揮したといわれている。

これらの政策により、民間活力による開発の誘導や雇用促進が進み、都市更新や都市再生を促進する一定の成果を産み出すことができた。

しかし、民間活力による手法には、市場の力を活用できる経済的背景が必要であった。また、ビジネス社会が追究する本質は経済（利益）最優先であった。このため、全てのインナーシティの経済活動、土地、住宅が、民活化の対象となったわけではなかった。

さらに、経済の最優先は、好況期には成果が顕著に現れるが、市場の停滞あるいは後退期には、目的のレバレッジ効果が余り機能しなかった。

結果的に見れば、失業率が 79 年の 5%強であるに対し、87 年には 13%と、解決の糸口どころか悪化した。荒廃したインナーシティの都市再生・繁栄化ができたのは、市場で活用できる地域資源を、民間資本が不動産開発事業として成功した一部の限定された都市や地域に過ぎなかった。

皮肉にも、民営化で小さな政府化はできたが、実質的に進んだのは中央集権化であり、都市政策面の地方自治の衰退が余儀なくされた。

5．工業社会から持続可能な社会づくりへ

20 世紀の工業社会が産んだ「インナーシティ」は、公共主導でも、民間活力誘導でも解決できない「負の遺産」として次世代に引き継がれることとなった。「工業社会」が終焉したといわれ、21 世紀の新たなパラダイム（規範）として『持続可能な社会』が世界中に浸透しつつある。そして、持続可能な都市づくりとして、『コンパクトシティ』が注目を集めることとなってきた。

■Ｄｒ.フランキーの街角たんけん 第15回 栄町通 過去・現在・・・（その２）

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

明治５年の暮れ、新道建設予定地とその沿道の用地買収と建物の除去がほぼ終わった。

兵庫県は新道沿道に、間口７間以下の建物の建設を禁じる「建築条件」を付した。このことで、零細な従前居住者は、他地域への移転を余儀なくされたが、その目的は、鉄道駅と居留地を連絡する新しい目抜き通りに相応しい景観を創出することにあった。

新道の工事は翌６年の年明け早々から開始され、８月には全通。従前居住者が再建をした区画以外の沿道の宅地は、三井、小野善助（小野組）などの政商、そして九鬼隆義、小寺泰次郎ら旧三田藩関係者を構成員とする志摩三商会などに売却され、景観は一変した。栄町通や山手通の建設、城ヶ口墓地辣腕を振るった関戸は、ほどなく県庁を退職。小野組の顧問に迎えられる。同組が明治７年に破綻後は、諏訪山界隈の開発にも手も染めたが、「関戸の足跡は、今のところ明治 20 年頃から消えている」（赤松啓介「神戸財界開拓者伝」）。

やがて、西南の役、日清戦争を経て、居留地の外国人や華僑に伍して、海運業やマッチ製造・製茶業の伸びを背景に日本人の商業者が頭角を現した明治 20 年前後には、上京途上の正岡子規が「その美、その壮、実に名状すべからず」と書き記すほど、栄町通はビジネス街として発展を見せた。岩崎弥太郎に食い込み回漕業で大成した後藤勝造、洋糖や薄荷の貿易で知られた鈴木岩次郎、川西清兵衛と組んで日豪貿易のさきがけとなった兼松房次郎、敬虔なクリスチャンでカナダとの交易を開いた田村新一などが、栄町通界隈でひとり立ちの第一歩を記し、あるいは日本での本拠を構えている。

明治中期までの財界人は、乱暴に言えば、政府要人と関係を築いて好機をつかむタイプと、こつこつ努力の苦労人型に大別できる。後藤は前者、丁稚奉公や異国での商館勤めなど下積み時代の長かった兼松や田村は後者に属するだろう。鈴木岩次郎の急死後、柳田富士松とともによね未亡人を立てて鈴木商店を牽引した「煙突男」金子直吉も、後藤勝造を通じて後藤新平に接近しており一見前者に属するようだが、小学校に通えなかったハンデを独学でカバーした努力型の一面を持つ金子の思考・行動基準は、「お家さん（よね未亡人）のため、主家鈴木のため」に尽きるといってよく、単純な線引きを許しそうにない。

ともかく、彼らは、生き馬の目を抜く混沌とした開港場の修羅場を勝ち残った強者であった。とりわけ後藤勝造は、回漕業に始まり、旅館業・ホテル業など多角経営を進めた。そして、旅館業で宿泊客となった後藤新平に接近し、台湾での事業展開の基盤を固めるきっかけを掴んだだけでなく、新平の勧めで神戸駅「みかど食堂」を創業し、ついで不振に陥っていた山陽鉄道（現山陽本線）の食堂車経営を引き受け、後年の「旅のレストラン」日本食堂（現日本レストランエンタープライズ）の基礎を築くことにもなったのである。

（この項、つづく）

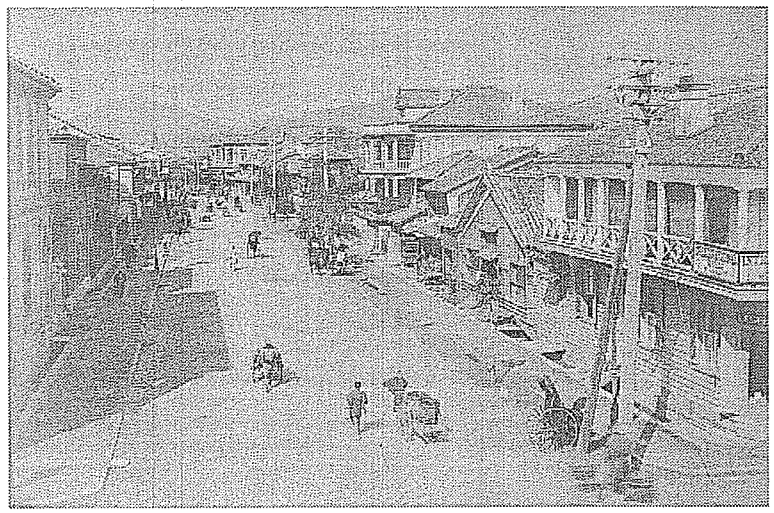


写真１ 明治20年代の栄町通（出典「写真集神戸１００年」）

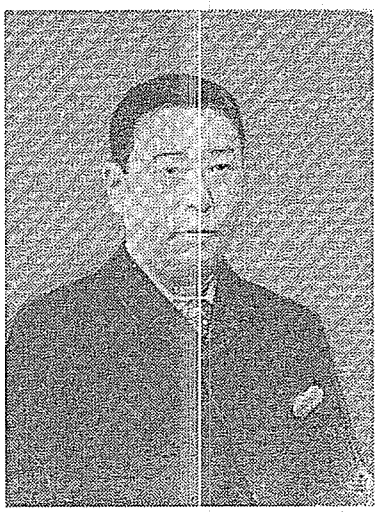


写真２ 後藤勝造（1848～1915）

マンションKをめぐる人々2「五階」

蝶の住む部屋

中川 紺

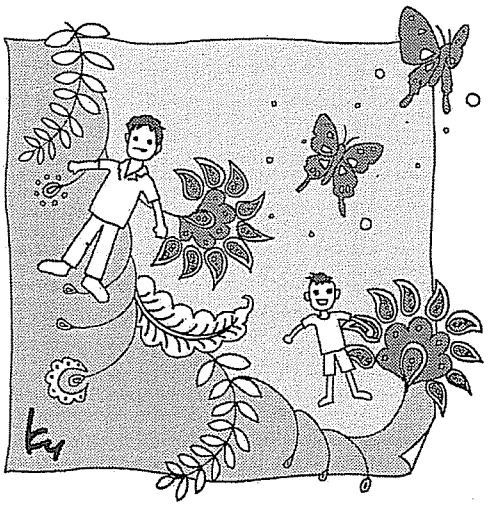
誰？　さっきのピザ屋かな？　あれ、たしか隣の家の……ああ、佐々木モトオ…くんっていうんだ。……で、何の用かな？　昨日の蝶を見せてほしい？　何だそれ？　俺ん家のベランダに入っていく珍しい蝶を見たって？　知らないなあ、蝶なんて。確かに窓から入ったって？　何時だ？　一時？　夜中の？　小学生のくせに……夜更かしして寝ぼけてたんじゃないのか。何？　「バチャンミイロタイマイ」？　何だ？　ああ蝶の名前か。詳しいな、蝶好きなのか。へえ。……すごいな、そんなことも知ってるのか。

……え、蝶をどうしても見せてほしい？……しょうがないなあ。お前さ、約束守れるか。……だったら特別だぞ。ほら、玄関に突っ立ってないで……入ってここ座れよ。あの蝶な、たしかにウチにいるよ。でもな、普通の蝶じゃないんだ。だから珍しい種類だとか、そういう意味じゃなくってさ。……ちょっと待ってろ。

●　●

ほらこれ見てみろ。これはバティックっていうインドネシアの染め布なんだ。向こうの蝶と植物をデザインしてあるんだ。……ああ、それがなんとかって蝶なのか。

俺、五年くらい前にインドネシアに旅行したんだ。写真の勉強してさ、いろいろ撮ってみたくて、バイトして金ためてはあちこちに旅行してた。あっちには一ヶ月くらいいたんだけど、現地のある小さな村に滞在した



時に、泊まった宿の息子がさ、ワヤンっていってちょうどお前くらいの歳なんだけど、そいつがこれを土産にくれたんだ。

「この布、生きてる。晴れた新月の夜には、風通しがいいところに広げてあげて」って言ってさ。最初はさ、自然素材だから痛みやすいとか、そういう意味だと思ってたんだけどさ、何回か風にあててるうちに気がついたんだ。何にって？　あのな、一晩のうちに蝶の模様だけが変わるんだ。こっちの枝に描かれていた青いのが反対の枝に移ってたりする。この十数羽の蝶たちが布の上で動きまわってるんだ。驚くなよ。……どうやらこの蝶、新月の夜になると布を抜け出すらしいんだ。

ほんとだぞ。こうやってさ、軒下に吊るしておくと知らないうちにいなくなってさ、また一羽ずつ戻ってきてるんだ。翌朝ベランダにうっすらと鱗粉が残ってることもある。

おそらく誰にも見られないように新月の真夜中にだけ行動する習性なんだろうな。

だからモトオ、お前が蝶を見たのはすごいよ。五年この布と一緒にいる俺さえ実際飛んでるとこは見たことがなかったんだからさ……。きれいだろうな……こいつ。

でも最近、ちょっと数が減り始めてるんだ。やっぱりこの辺の空気には馴染めないんだろうな。だから俺さ、こいつら国に帰してやろうかと思ってるんだ……。お前もその方がいいと思うか？

●　●

・・・一年後・・・

モトオ、見ろよ。ワヤンから手紙がきたんだ。絵が一緒に入っててさ、ほらここ、蝶と幼虫が描いてあるだろ？　あいつら、どうやら新しい家族をつくったらしいぞ！（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

きんもくせい日記001

■久米将夫さんと阿波のまちなみ研究会

小林郁雄（非認証ＮＰＯきんもくせい代表）

●徳島の久米将夫さんが亡くなった。6月2日木曜の早朝である。前日も変わりなく徳島市役所に出勤されていたというから、心臓麻痺のような突然死である。第一報を聞いて耳を疑った。なんでまた、どうして？

●日本建築士会連合会のまちづくり委員会で10年以上ご一緒させていただいた。都市環境デザイン会議のＪＵＤＩ四国の中心でもあり、徳島の建築関係者のみならず、四国・全国に広く久米ファンがいる。淡路景観園芸学校の私の授業「市民まちづくり論」の水緑都市徳島見学案内も毎年してもらっていた。今年も7月20日に頼むよねと、先日連絡したところだったのに。6月4日の葬儀当日の午後も、久米さんが尽力されて予定されていた木造住宅の耐震性能測定と古民家移築の講演会が、神戸から宮西悠司さんを講師に行われたそうである。

●阿波のまちなみ研究会を中心に、脇町や貞光のうだつのまちなみ調査、出羽島などミセ造り調査、多くの民家・社寺、農村舞台の調査研究など、その多くは大部なきちんとした報告書にまとめられ、販売もしている。建築歴史系や農村建築系の学者はもって瞑すべき業績である。久米さんは常にそれらのリーダーとして、設計事務所をしている林茂樹さんとともに中心にいた。

●四国徳島の建築士会を中核にした活動に、多くのメンバーが参集し、森兼さん・島さん、田村さん、吉原さんなど中堅若手も数多く活躍している。それも、久米さんと林さんの官民の親しい連携から実りあるチームワークの賜物と思う。大学に建築学科がなく建築学者がいないことがうまくいっているのではないかと、冗談半分であるが、かなり真剣に思ってしまう。

●阪神大震災前年に兵庫区上沢2丁目公園ワークショップを東京から林泰義さんや伊藤雅春さんらに来てもらって実験的に行った。関西でのまちづくりＷＳの始まりであった。徳島からも久米さんがはせ参じてくれた。それまでに、徳島市内の小学校周辺の環境整備で素晴らしい実績を上げていたが、その後の公営住宅と公園の整備にもＷＳ手法を加味してさらに上質な整備が進められた。さらには、ひょうたん島整備、河川沿岸整備、都市景観整備など、ほぼあらゆる都市・まちづくり面での久米さんのまとめる力が重要であったと思う。そして、いよいよ徳島市行政の重要なポストに就き、これからという55歳直前の急逝であった。惜しい、残念無念、何故、思いはあふれるが、言葉には、今はならない。（050607記）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「月刊きんもくせい」の最高愛読者でありいつもファンレターをいただいている御舩哲さんから、コー・プラン引退報告にいつものようにお葉書をいただき、今後の励ましのお言葉とともに「きんもくせい日記」はいかが？と進められた。小人閑居して不善を為す（だったかなァ？）という恐れと、暇に任せてなんぞしたらどない？（関西弁でいえば、きっとそういうこと）という暖かいご忠告に、さっそく編集長の独断専決できんもくせい日記をはじめます。

つれづれなるままによしなしことを、などと思っていたら、最初からとんでもない悲報への追悼の日記になってしまいました。合掌。

■情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第４４回連絡会

・日時：6月10日(金)18:30～21:00
・場所：神戸市勤労会館403号室
・内容：テーマ／震災復興住宅10年検証を検証する、報告／①「公的住宅について」浜田有司（神戸市）、②「民間住宅について」太田尊靖（ＵＲ神戸事務所）、③「コレクティブ住宅について」石東直子（石東・都市環境研究室）、④「総括コメント」平山洋介（神戸大学）、コーディネータ／石東直子
・会費：５００円
・問合せ：GU計画研究所（TEL.078-435-6510、FAX.435-6513）

●第７６回水谷ゼミナール

・日時：6月24日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館（予定）
・内容：テーマ／震災復興マンションの結末（予定）、詳細の内容は未定
・問合せ：GU計画研究所（TEL.078-435-6510、FAX.435-6513）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm

◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年6月30日発行

月刊 きんもくせい

05年6月号
(50+36+NO. 27)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■災害語り継ぎネットワーク／TeLL－Net

小林　郁雄（人と防災未来センター　上級研究員）

阪神・淡路大震災から10年が経過し、まちや生活が復興するにつれ、震災の記憶は薄れつつあり、その痕跡すら消え去ろうとしている。このような震災の風化に歯止めをかけ、被災者の視点から息長く継続的に「大災害を語り継ぐ」ことは、これからの災害に際して被災者を少しでも減らすことにつながっていく。

ＨＡＴ神戸に人と防災未来センターが、震災のメモリアルセンターとして、2002年４月にオープンした。このセンターは、語り継ぎの主役である市民から提供された資料展示など、実際の被災体験をベースにした先導的な防災博物館であり、防災教育・研修研究施設でもあることが、国際的に認知されつつある。

そして、人と防災未来センターのオープン後、昨今の大災害を経験したトルコや台湾、インド、イラン、パプア・ニューギニア等の関係者が来訪し、災害経験を生々しく語り継ぐこのような施設の有効性を肌で感じ、すでに被災地で同様の施設を建設、計画するなどの動きが起こりつつある。

国際防災・人道支援協議会（ＤＲＡ）は、2004 年２月８日（日）神戸国際会議場において、「大災害を語り継ぐ」をテーマに「国際防災・人道支援フォーラム 2004」を開催し、市民レベルで災害を語り継ぐことの重要性や有効性について、国際社会へ次のような提言を行った。

●語り継ぎネットワーク形成への提案／単に記憶を残すためではなく、来るべき災害に対する減災に実践的に貢献する視点を持ちながら、市民と行政とが連携しつつ防災に対する様々な取り組みを推進しつつある防災博物館や防災関係施設を構成メンバーとする「災害語り継ぎネットワーク」を提案する。

これを受け継ぎ、2006年のネットワーク設立に向けての第一歩として、2005年１月19日神戸クオリティホテルにおいて、12カ国の対象施設に直接・間接的に関係する13名をメンバー(当日は９カ国参加)として「災害語り継ぎネットワーク（Transfer Live Lessons Network)」発起人会が開催され、今後の活動方針が討議され、略称もTeLL-Netと定められた。この成果は翌１月20日の「持続的開発と防災教育」をテーマに、ユネスコとＤＲＡなどが共催した国連防災世界会議テーマ別会合において、河田恵昭・人と防災未来センター長から報告された。

こうした経緯をふまえて、2005年５月に六甲アイランドに極東本社のあるＰ＆Ｇ社から、将来の減災にむけての震災10年を期とした貢献活動の一環として、TeLL-Netの今後の活動に対して500万円の支援の申し出があり、早速「テルネット事業推進日本協力委員会」をたちあげ、ＮＧＯ／ＮＰＯを含めた広く多くのメンバーに参加頂き、TeLL-Netの活動を継続的に広げていくことになっている。

同じ地域に暮らしているのに
台風２３号被害　障害者の経験生かそう

山口　一史（ひょうご・まち・くらし研究所）

昨年（２００４年）１０月２０日、兵庫県内を襲った台風２３号は各地に大きな爪あとを残した。なかでも豊岡市をはじめとした但馬地域は円山川水系がずたずたに切断され、市街地や農地の多くが冠水、浸水するなど被害は広がった。市民の多くは避難できず自宅に取り残され不安な時間をすごした。中でも障害を持つ人たちの不安はいっそう大きく、生命の危険さえ感じた。

２３号水害からおよそ半年たった今年４月から筆者は「障害者がその時どうしたか」を直接聞くため、調査を始めた。まだ予定している半数ほどの人からしか聞き取りができていないが、中間的に感じたことを報告したい。

◈熟睡中に避難ファックス

「あの時どうでしたか」との問いに聴覚障害の女性（６０代）のＡさんは、手話で次々と語り始めた。手話を操る手許がもどかしく思えるほど、懸命に当時の怖かったことを伝えてくれる。その一生懸命の姿を見て、阪神大震災の被災者について語られた話を思い出した。それは「被災者はもっともっと話したいのだ。話すことによってきっと胸の中につかえていることを吐き出して、何かとバランスをとろうとするのだ」という見方である。

誰しも怖かったことを精一杯聞いてほしい、しかしみんな「もういい、分かった、分かった」と聞いてくれない。胸のつかえはいつまでも消えずに沈殿していく。

きっと聴覚障害の人ももっと聴いてほしい、尋ねてほしいと思っているのだろう。

別の聴覚障害の女性（５０代）のＢさんは、新聞にも紹介された「経験」をしてしまった人だ。「新聞に載っていたような経験をした方はこの中にいますか」と質問したところ、すぐ近くに座っていたＢさんはニコニコと笑って「はーい」と手を挙げた。

Ｂさんは１０月２０日、とても疲れていて午後８時ごろ就寝してしまった。眠っている間に緊急を知らせるファックスが入ってきた。「ファックスが入ると電気がピカピカと光るので起きていたら気づくが、寝ていたらそれも見えないからね」と、まったく気づかなかった。Ｂさんは中層アパートの２階に住んでいる。一晩明けて、次の朝、いつものように起きて窓から外を見た。きょうは何だか外がいやに黄色っぽいな、と思ったそうだ。Ｂさんは目も視野が狭くなって見づらい。

しばらくしてもう一度、外を見てびっくりした。黄色っぽいと思ったのは１階をすっぽり覆う洪水の泥水の色だったのだ。

「エッ、なにこれ」とびっくりしたもののどうしようもない。寝ている間に、浸水し１階を水没させたのだ。

あとで知ったのだが、３階に住んでいる人が避難する時、Ｂさんの家の鉄の扉をドンドンとたたいて合図してくれたらしい。その音も寝ていてまったく知らなかった。

近所に住むやはり聴覚障害の女性が、Ｂさんが避難所に来ていないと知って、携帯メールを使い福祉団体や心当たりに連絡し、Ｂさんを探すよう頼みまわっていた。

翌朝、救助隊がボートに乗って取り残された人を探しにやってきて、Ｂさんの無事が確認されてみんなほっとしたという。

◈真っ暗では手話が見えない

もう少し聴覚障害者の話を続けたい。

ある避難所での出来事。聴覚障害の人が連れ立って近くの避難所に逃げ込んだ。停電で室内は真っ暗。避難者はラジオを聴いたり、どこかから聞き込んできた情報をそれぞれに交換し、台風や出水の状況を確認しあっていた。

真っ暗な闇の中でそんな声がざわざわと流れている。しかし、聴覚障害者にはまったく声も音も聞こえない。従って情報はぜんぜん入ってこない。真っ暗ではお互いの手話も見えない。

聴覚障害者の一人がそんなために用意していたのだろうか、懐中電灯を２本取り出して、他の人の邪魔にならないよう垂直に懐中電灯を立てて、そのぼんやりした光の中で手話を交わして細々と情報交換を始めた。ところがその途端、周りの人から「光が目に入ってう

るさい」と苦情が出てやめざるを得なかった。避難といっても長期化したわけでなく、いまみんな一緒に逃げ込んだ同じ被災者ではないか。どうしてそのぐらいのことに寛容になれないのだろうか。

◆少なかった近所からの情報

豊岡市の台風水害は市の避難勧告、避難指示が遅れて、実際に発令した時には、円山川に流入する支川の濁流が円山川に流れ込めずにあふれ始めていて、逃げたくとも逃げられない状況だった。勧告、指示の遅れや言葉の意味がよく分からない、防災無線の内容が理解できなかったなどの批判がある。それは大きな課題として今後解決していかなければならないが、市が出した情報を１次情報とすると、それを知った市民や団体がさまざまな手段でまだ知らない市民に伝えていった。これをここでは２次情報と呼ぶ。

２次情報をどこから得たか、障害者はどうであったか。

こうした場合、最もよく２次情報を伝えてくれるのは隣近所のコミュニティである。危険情報をキャッチすればすぐにお隣さんに声をかける、一緒に避難する、あるいは避難を促すことは容易に想像できる。

ところが障害者はそうではない。作業所に通所している利用者に作業所の代表や指導員が１軒１軒電話をかけて、状況を説明し、その付近は危ないから早く避難するよう促したケースがあった。小規模作業所を運営しているＣさんはそうして利用者の自宅に電話をし続けた。危険な場所に住んでいる利用者はその時すでに道路が冠水し逃げられないと返事をしてきた。

聴覚障害者の場合は同居の家族や別居の家族からの通報以外に多かったのが、同じ聴覚障害を持っている仲間からの連絡だった。

社会福祉協議会の事務局からの連絡を受け取った人もいるし福祉団体からの電話で知った人もいた。しかし、近所から知らされたというケースはごく僅かだった。

◆コミュニティを「公益」へ

聴き取り調査で地域の自治会などの組織や隣近所との付き合いも尋ねている。ほとんどの人が自治会には入っているが、近所の人と出会えば「会釈する程度」と答えている。

作業所を運営しているＣさんはこう指摘する。

「地域の人は障害者がいて作業所に通っているとか、施設にいっているとかは知っている。しかし、障害者が自分たちと同じ地域で暮らしている、生活しているという実感を持ってもらえていない。生活のリアリティを感じてもらってないことが今回の災害ではっきりとした」と。

私たちは自分の周囲の付き合いの輪（コミュニティ）を２つに分けている。ひとつは文字通り地域コミュニティだ。隣近所のコミュニティ、その外に小学校区程度のコミュニティ、そして自治会やＰＴＡ、子ども会、婦人会などの地域組織、さらに個人的な親戚や友人・知人の輪を持っている。もうひとつは勤め人であれば、同じ目的を持つ会社の部や課の輪、そして会社全体の輪、さらに同業者の輪、もう少し大きな経済団体の輪などと広がっている。前者は私的なつながりであり、後者は公的なつながりと理解されている。

この区分けは国民の多くがサラリーマン化して後に生まれたものである。「公」が大事で「私」は軽い―とするある種の格付けができている。

しかし、そうだろうか。地域コミュニティや地域組織は「私」なのか。大きな「私」は、小さな「私」を前にして「公」に転換するが、会社主義的社会においては、暮らしの場の「私」はいつまでも「私」に過ぎなくなっている。

地域コミュニティや地域組織を「私」から解放し「公益」概念で組み立てなおす必要がありはしないか。その構成員はすべて公益を担っている、そうすれば日常の生活であらゆる人が公益を維持したり、増進する役割が正当に評価されてくるのだ。

高齢者や障害者を災害から守るために避難勧告の前に「避難準備情報」を出して、避難行動の時間を確保しようという発想が政府に生まれている。どんな情報を出しても、それを伝える人がいなければ文字通り絵に描いたもちに過ぎない。

◇

阪神・淡路大震災から１０年が過ぎた。しかし１０年ですべての課題が解決したわけでも、被災者が立ち直れたわけでもない。さまざまな課題を大震災の被災地を含め広くレポートしていきたい。

■隣人たちと楽しみを育くむ共同住宅

神戸市営ウェストコート9番街のお弁当昼食会

石東　直子（石東・都市環境研究室）

5月半ば過ぎ、若葉が萌える明るい町、六甲アイランドにほぼ1年ぶりに降り立った。10日ほど前、神戸市営復興住宅ウェストコート9番街のHさんから突然ファックスが入ってきた。「仲良しお弁当会を続けています。5月19日12時から3時までやっています。お元気になられていたら顔を出してください」と。12月のクリスマス会の時も連絡をいただいたが、当時はまだ体調が整わず残念した。

●WC9（West Court 9番街）の人々

私たち「コミュニティ支援ステーション」は03年7月から1年間、週に1回、ここWC9でコミュニティ茶店を開いていた。WC9は六甲アイランドの西の端にあり、7階～15階建200戸の住宅で、97年10月に入居が始まった。03年7月のデーターによると住人は約420人で、高齢化率は44%、単身高齢世帯率は30%（全体の単身世帯率は35%）であるが、19歳以下の青年層は17%、学童率は11%で、高齢者と若い世帯が多くて、その中間年齢層が少ない。入居者は六甲アイランドにあった数ヶ所の仮設住宅から移ってきた人が多く、新しい住宅に入居した後も、仮設住宅ごとの人の付き合いや活動が続いていて、誰もが気軽に顔を出せる全体の集いの場が育ちにくいという悩みをかかえていた。03年4月に40代後半の女性が自治会長に選出された時、みんなが集える場づくりがしたいということで、私たちは社会実験としてサポートすることにした。居住者の継続した自主的な運営のきっかけづくりとなるように、誰でも気軽に立ち寄れる陽だまりづくりとしてコミュニティプラザを有料で借りて「コミュニティ茶店」を自治会長はじめ2、3人の住人と協力して開店した。この住宅は仲良しグループによる趣味活動は活発で、生け花、絵手紙、大正琴、詩吟、カラオケなど毎週コミプラの利用は多い。ただ仲良しグループの活動には新しい人が参加しにくいという。

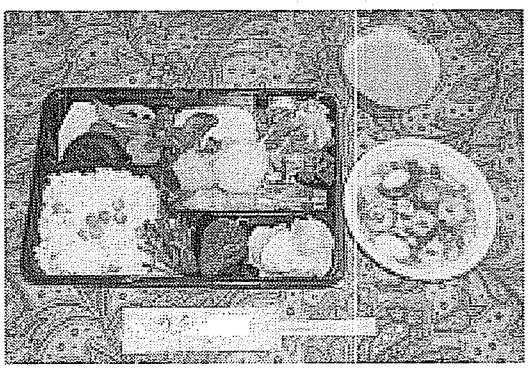
近くにある地域福祉センターでも定期的にお茶会があり、そちらに参加している人もいたが、コミュニティ茶店の開店当初は物珍しさもあって、一日に30人余りの来客があったが、暫くすると常連さんたち10数名になった。また、仲良し男性の数名は毎朝六甲アイランド駅近くの喫茶店にモーニングサービスを食べに出かけていたが、そこが閉店になってしまったので、コミュニティ茶店の常連から昼食会やモーニングサービスがあればいいなぁという声があがってきた。六甲アイランド駅前のレストラン「ふれあい向陽」（NPO法人ひょうご農業クラブ運営）にお弁当の宅配を打診すると、OKとの返事があり、「ふれあい向陽」に行ったことがあるというOさんがとりまとめ役をかって出てくれたので、3月にお弁当をとって14名が試食会をした。モーニングサービスは自治会長が2、3人の協力を得てやってみようということになり、住人の自主的な集いができる目処がついたので、私たちのコミュニティ茶店は1年で引き上げた。

●盛りだくさんの品数は体にいいよ

コミプラの入口で靴を脱いでいると、なつかしい声に迎えられた。長机を寄せてコーヒーブラウンの大きな布地で覆ったすてきな大テーブルを囲んで15人程が食事中。集いの場づくりは雰囲気も大切な要素で、私たちのコミュニティ茶店でもインテリアに工夫をこらしていた。昼食会のお弁当は「ふれあい向陽」から宅配してもらって、住人の世話役たちが手づくりのお味噌汁を添え、食



大テーブルを囲んで昼食



盛りだくさんのお弁当

後のコーヒーがつく。私のお弁当も用意してくださっていた。お弁当のメニューは盛りたくさん（豆ご飯にふきの佃煮、スライス大根とうすあげの甘酢あえ、しいたけ・にんじん・えんどう・れんこん・高野豆腐の煮しめ、ジャガイモ・玉ねぎ・海老の天ぷら、だし巻き、若芽と若竹煮、大きな苺がひとつ）で、私は食べ切れなかったけど、ほとんどの方はきれいに平らげておられた。味は薄めで揚げ物もあっさりして、とても美味しい。近ければ私も毎回参加させて欲しいわ。ご夫婦でいつも参加されているという夫君は「こんなに品数多くは家ではつくれないので、ここで食べると体にいいよ」と言われた。ここのコミプラは居住者が自主使用する時は1回500円の使用料がいるので、お弁当代にお味噌汁とコーヒー代も含めて昼食会はひとり550円を集めているとのこと。毎回15人ちょっとの参加のうち半数以上の人がコミュニティ茶店からの常連で、久しぶりの私との再会を喜んでくださった。食後のひとときコーヒーをいただきながら、私は得意な折り紙を披露した。少し折り紙も持参して行ったので、みんなで簡単なTシャツを折って楽しんだ（写真）。

この仲良し昼食会の他に、月2回のモーニングサービスには40人ほどの参加があり、トースト、野菜サラダ、ゆで卵に飲み物セットで100円。この他に有志による「悠遊クラブ」の喫茶が月に1回あり、月に4回は誰でも集える有料サービスが開かれている。住人が自主的な集いの場を企画して、親しくなって暮すことはとても大切なことである。ただ住宅が集合して建設されているという「集合住宅」から住人たちが日常生活の中で共同の時間をもち楽しむ「共同住宅」への変身である。

住宅全体として高齢化率が高くても、比較的若い中高年層の活動エネルギーや意欲のある人が住んでいると、住宅全体が活気づき安心居住の住宅となる。多世代居住は重要である。

●帰り道のめぐり合い

薫風に吹かれていい気分で帰る途中、アクシデントがあった。幹線道路の大きな交差点で信号待ちをしていると、斜め向かいの信号待ち角に腰を降ろしている人が目に入った。信号が青になっても尻餅をついたままで頭を押さえている。まさかと思い、車が来ないのを確かめて対角線状に走っていくと、かなりご高齢の男性が頭をハンカチで押さえており、首筋までに血が流れている。そばに買い物袋が投げ出されている。信号待ちに敷かれた点字ブロックで滑ったとのこと。おじいさんからハンカチを受けとり、そっと上げてみると頭のてっぺんに2センチほどの傷口が開き、まだ血が出てきている。救急車を呼びましょうかというと、家がすぐそこなので大丈夫と言われる。そこに自転車に乗った女性が通りかかり、そこに医院があるので呼んでくるわと走って行ってくれた。「おじいさん大丈夫よ。私にもたれてじっとしていて。すぐお医者さんがきてくれるから」「すいませんねぇ」と恐縮される。そこに若い男性が車から下りてきて、すぐ救急車を呼んだ方がいいと言うと、もう携帯電話をしている。さっきの自転車の女性が医院は閉っていたと引き返してきたが、すでに救急車に連絡してもらってたのでホッとした。別の買い物帰りの女性が通りかかり、

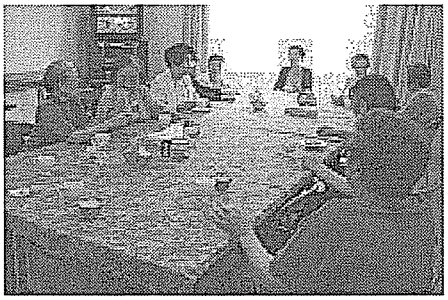
「この人、私の住宅の人や。名前は知らんけど。おじいさん何階？」

「9番街の4階。独りやから家に誰もおらへん」

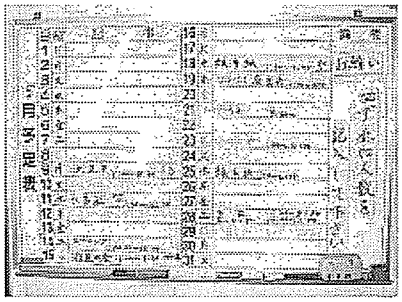
「わたしは今その住宅の昼食会によばれてたのよ」

「そう、先に帰って自治会長さんに伝えとくわ」と。

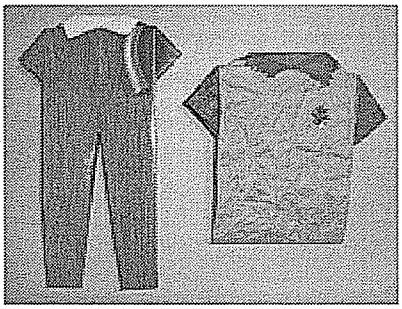
そこに救急車が到着し、傷口を消毒して包帯を巻いてくれて、六甲アイランド病院へ連れて行ってくれた。側を通った人が、3人、4人とかかわってくださったので、私はパニックに陥らずにすんだ。気丈なおじいさんだったが、独り暮らしだというので大丈夫かなと気にしながら帰路についた。帰宅すると、自治会長さんから留守電が入っていた。「おじいさんは無事に病院から帰ってこられました。安心してください」と



食後のコーヒータイム



コミニティプラザの白板に書き込まれた数々の行事



とても簡単な折り紙Tシャツ

■Dr.フランキーの街角たんけん 第16回 栄町通 過去・現在・・・（その３）

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

外国人居留地があり明治初期から洋風建築が建てられていた神戸の町だが、日本人建築家による最初の本格的近代洋風建築は、どこに、いつ、建てられたのか。現在確認できる範囲で言えば、それは栄町通に、明治29（1896）年竣工した横浜正金銀行神戸支店である。煉瓦造２階建、外装は擬石仕上げで、近世イタリアルネッサンス調の端正な佇まいを見せていた。イギリス流の工部大学校出身の建築家達の作風に比べればその表現は地味であるが、独特の品の良さが残された写真から伝わってくる（写真１）。

設計は、後に兵庫県庁舎（現県公館）を手がけることになる山口半六である。山口は、松江藩出身。明治３（1870）年、大学南校（東京大学の前身）に入る。同９（1876）年、同校の成績優秀者による欧州留学生団の一員として渡欧、沖野忠雄とともにパリ中央工業専門学校に入学。同13年（1880）に卒業後も、現地で実務経験を積む。同14年（1881）に帰国後、三菱を経て文部省に入り各地の高等中学校建設に携わるが、激務から肺を病み、同25（1892）年に文部省を退官。療養生活の後、大阪の桑原政事務所（本邦初の建設コンサルタント事務所）に建築部長として招かれ、同33（1900）年、42歳の誕生日に急逝するまでの間、建築はもちろん、大阪市区改正など都市計画の立案にも腕を振るった。

ちなみに山口と同窓の沖野は豊岡藩出身。土木技術者として淀川を始めとする各地の河川改修に携わり、神戸港修築計画にも関与した。山口の没後に出版された建築図集の略伝を執筆したのも沖野である。

神戸で現存最古の本格的近代洋風建築は、栄町通と宇治川筋との交差点に建つ、明治33（1900）年竣工の三菱銀行神戸支店（現ファミリアホール）である。曾禰達蔵の数少ない現存初期作品であり、米騒動のクライマックス「鈴木商店焼き討ち事件」（大正７（1918）年）を「目撃」していた建物でもある。

鈴木商店は当時、三菱銀行の道を挟んで南側、東川崎町１丁目１番地（現兵庫郵便貯金地域センター敷地）の元ミカドホテルの建物を本店屋に使っていた。ミカドホテル（自由亭ホテルを改称）は、かの後藤勝造が西洋料理店、旅館経営のノウハウを「統合」して創業した。「自由亭」の名前から、板垣退助が定宿とするなど話題を呼び、河合浩蔵に設計を依頼して、明治39(1906)年に石造風３階建の新館を建設するまでになった（写真３）が、後藤の借財の担保として鈴木商店が建物を差し押さえていた。

鈴木商店では、毎朝、世界各地から届く暗号電文を店員たちが競い合って解読していたという。電報電話局に程近いミカドホテルを差し押さえたのは、偶然なのか、あるいは新しい情報を一刻も早く入手したいという、金子直吉の思いがあったためなのか、今となっては定かではない。

（この項続く）

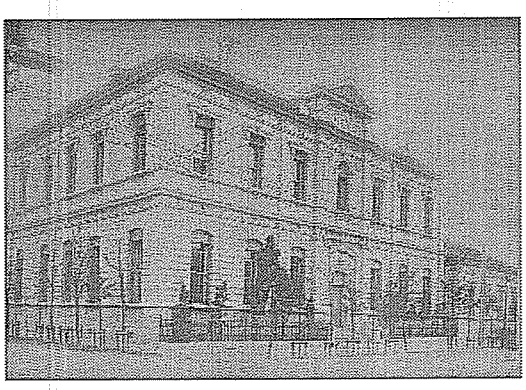


写真１ 横浜正金銀行神戸支店（明治29年、現存せず）出典：山口博士建築図集

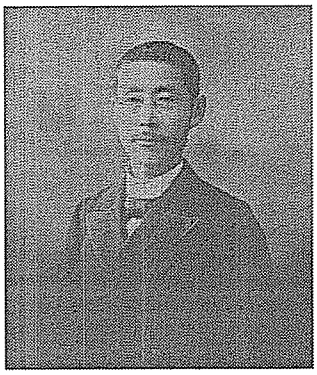


写真２ 山口半六（1858～1900）出典：山口博士建築図集

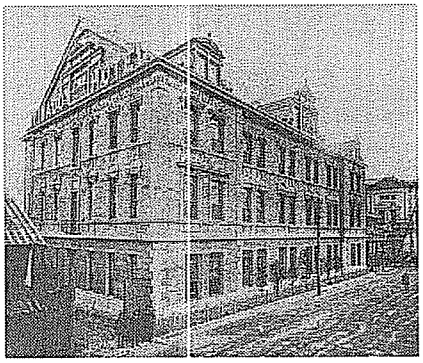


写真３ 自由亭ホテル（明治39年、現存せず）出典：写真集神戸100年

マンションKをめぐる人々3「三階」

鉢植えたち

中川 紺

その部屋には娘が一人で住んでいた。年の頃は十八、九。黒くて長い髪、切れ長の瞳。一人暮らしの老婆が住んでいたことがあり、何となく、その孫娘だと、皆思っていた。

娘は生まれつき耳が聞こえず、声も出せなかった。笑うこともなかった。目は見えていても、涙がこぼれることはなかった。

働いていなかったが、時折、娘は夜中に出かけて行く。遠いまちにも足を運んで、捨てられた鉢や花を手に戻ってきた。鉢はベランダにきっちりと並べられ、その数は次第に増えていった。

娘は眠らなかった。食べることもしなかった。ただひたすら、鉢を世話していた。

どんなに弱った枝葉も、すっかり枯れているように見える草木も、娘の手にかかると嘘のように生き返った。娘の爪はうっすらと緑色を帯びていた。

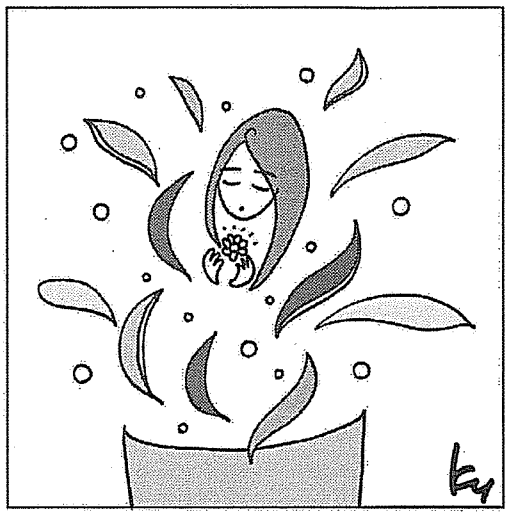
●●

娘は鉢の植物たちがつくり出したものだった。捨てられ、枯れる運命にあった多くの鉢は生きようとした。自分たちを世話するものを必要とした。そして娘が生まれた。

娘は毎日、鉢の世話をした。枯れるはずだった鉢が、いくつもの花を咲かせた。花はいい香りを放ち、蜂がミツを集めにくることもあったが、決して娘を刺すことはなかった。

時には見たこともない美しい蝶が来ることもあった。

ある朝、ベランダの鉢植えに、鮮やかな



色の布が引っ掛かっていた。そこには蝶の模様が、それは見事に描かれていた。

けれど感情の無い娘にとって、その布の美しさは何の意味も無かった。

ほどなく部屋を訪れる人があった。今まで、誰も娘の部屋を気にするものはいなかった。初めての訪問者だった。

訪ね人は二つ上の階の男。日に焼けた顔のその男は、布を落としてしまったと言った。

娘は蝶の布を手渡し、男は礼を言って立ち去った。娘の手は小さく震えていた。

●●

感情が無かった娘に、小さな心が芽生えていた。男にもう一度会いたいと思った。しかし言葉を持たない娘は、どうしてよいのか分からなかった。

娘は窓辺で布を待つようになった。

そのうちに鉢植えたちは異変に気づいた。どうしようか。鉢植えたちは幾日か相談して、ある決心をした。

彼等は持っていた全ての力を娘に捧げた。その瞬間、娘は実体を持った。声を持ち、表情を持ち、空腹も感じるようになった。

だが力がほんの少し足りなかった。人になった娘は、男に関する記憶を全て失った。

部屋は空き部屋となり、鉢植えも姿を消した。まるで最初から誰もいなかったように。

●●

小さな港町の洋食屋で娘は働いている。

最近友達になった馴染みの女性客がこんなことを聞くことがある。

「ねえ、どんな人がタイプ？」

娘の答えを聞いて女は不思議な顔をする。

答えはこうだ。

「私、蝶が好きな人がいいな」　（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第４４回連絡会報告

今回のテーマは「震災復興住宅１０年検証を検証する」で、６月１０日（金）神戸市勤労会館において行われました。石東直子さん（石東・都市環境研究室）のテーマ解説ののち、次の４氏から報告がありました。

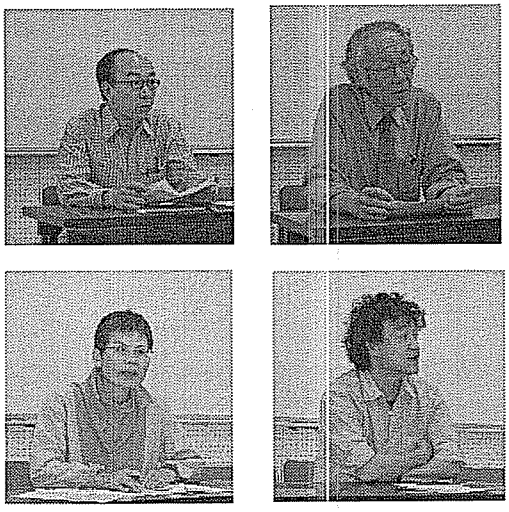
- ◍「公的住宅について」／浜田有司（神戸市）
- ◍「民間住宅について」／太田尊靖（UR 神戸事務所）
- ◍「コレクティブ住宅について」／石東直子（前掲）
- ◍「総括コメント」／平山洋介（神戸大学）

震災当時神戸市における公的住宅供給の担当であった浜田さんからは、「震災復興住宅整備緊急３か年計画」の内容について、特に何戸の住宅をどのように供給すべきかについての当時の議論をふりかえり、早急に大量の住宅供給が求められていたことから、ＨＡＴ神戸など大規模住宅を整備せざるを得なかった状況等について語られました。

太田さんからは、震災後１０年間において民間住宅がどのように供給されたかについて、詳細なデータを駆使した報告が行われました。賃貸住宅では、“大量の公営住宅が賃貸市場を圧迫している”のではなく、震災で滅失した木賃住宅の代わりに賃貸マンションが多く建てられ、需給のミスマッチが生じていることで空家が多く生じていること、一方分譲住宅では、大阪都心に供給が多いこと、賃貸よりは震災の影響をあまり引きずっていないこと、高級物件が多かった阪神間では震災後の開発指導要綱の緩和措置などにより急激な人口増が起こっていること、などが報告されました。

石東さんからは、公営住宅で初めてコレクティブ住宅（10 地区 341 戸）が事業化され、コレクティブハウジング事業推進応援団として様々なサポートをしてきたが、その後入居者が相当数入れ替わっている住宅があることや、ふれあいの活動が大幅に減少してきているといった状況があり、今後は第２段階の住宅供給ともいうべきソフトを重視した安定居住のための施策が必要であることを強調されました。

平山さんからは「震災復興と住宅政策」と題するコメントがあり、震災復興でとられた住宅施策やその後の動き、最近の国の住宅施策の変化等について、統計調査等を示しながら語られました。（中井都市研究室　中井　豊）



報告者の皆さん。浜田さん(左上)、太田さん(右上)、石東さん(右下)、平山さん(右下)

■ 情報コーナー

◍夏越ゆかた祭り「長田神社ゆかたでナイト」

・日時：７月 17 日(日)～18 日（祝）16:00～21:00
・場所：長田神社内特設ステージ、長田神社前商店街２丁目広場
・内容：夏越男・夏越女ゆかたコンテスト、富くじ抽選会、ジェム占いの街、他
・問合せ：長田神社前商店街振興組合（TEL. 078-691-2914）

◍灘・夢ナリエ～あかりで発信する 10 年ーあかりの盆～、ｵｰﾌﾟﾝﾊｰﾄｺﾝｻｰﾄ、記憶の回廊

＜オープンハートコンサート＞
・日時：７月 16 日(日)19:00～
・場所：都賀川河川敷特設ステージ

＜記憶の回廊＞
・日時：７月 16 日(日)・17 日(祝)19:30～
・場所：水道筋アーケード
・内容：光とオブジェの展示

＜灘・夢ナリエ＞
・日時：７月 17 日(日)16:00～20:30
・場所：都賀川公園及び河川敷一帯
・内容：あかりの点灯、少年少女合唱団、和太鼓、盆踊り、模擬店、他
・主催：灘・夢ナリエ実行委員会
・問合せ：灘区役所まちづくり推進課（TEL. 078-843-7034）

◍ きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm

◆ http://www1. plala. or. jp/hos_a/kinmokusei_international. html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:micari@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年7月31日発行

月刊 きんもくせい

05年7月号
(50+36+NO. 28)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■震災１０年神戸からの発信

橋本　彰（震災１０年神戸からの発信推進委員会事務局）

阪神・淡路大震災から１０年、現在神戸では市民・事業者・行政一体となって全国に感謝の気持ちを発信しているところである。

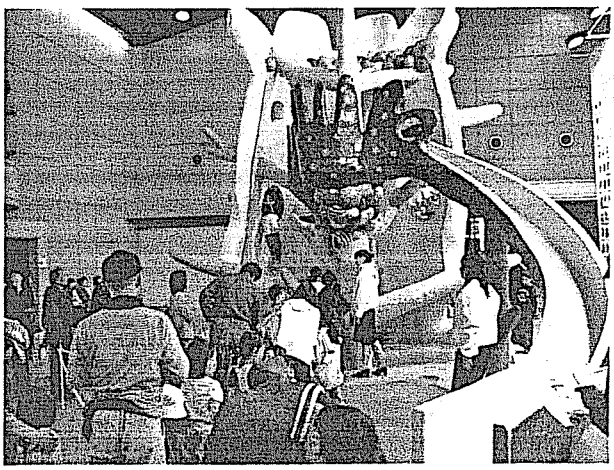
「震災１０年、神戸からの発信」事業は、市民・事業者・行政により、推進委員会を設立、実施しているもので、神戸市民が震災で学んだ「経験・教訓」この１０年間に取り組んだことの「成果・課題」そしてそれらを踏まえた「これからの神戸づくり」を震災のときに世界からいただく多くの支援への感謝を込めて「協働と参画」の理念に基づき発信する事業である。

一部を紹介すると①まず、ろうそくの灯が印象的な**「１・１７のつどい」**を初めとして市民の手によって様々な追悼の行事が行われ、また、関連して「国連防災世界会議」も開催された。

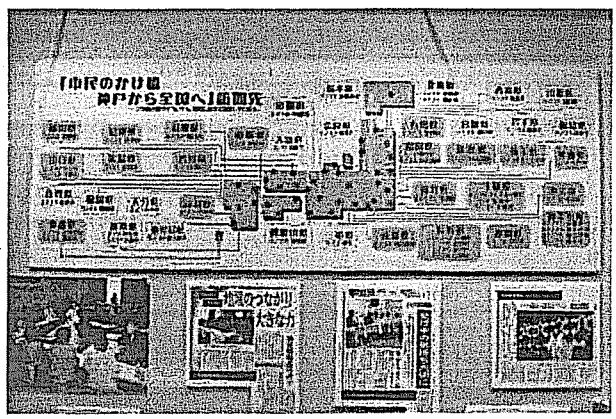
②又、関連して推進委員会が自ら実施している象徴的事業として**「市民のかけ橋　神戸から全国へ」**を展開している。この事業は、神戸市民が感謝の気持ちを込めて全国５１都市を訪問し、震災の教訓、復興の取組みを伝え、交流を深めていこうとする事業である。

③又、**市民自主企画事業**　約４００の行事が市内各所で、市民自らの手で実施、又予定され、現時点で約９０万の人々が参加している。

④更に、市民や神戸を訪れる人々に発信事業をわかりやすく情報提供する拠点として**タイムズメリケン（神戸からの発信館）**を設け、震災を乗り越えた地域の人、長年培った伝統の技を伝える人、これからの神戸ブランドづくりを担う若者や学生、自立と社会参加を目指す障害者



タイムズ・メリケン　シンボルオブジェ「元気の木」



「市民のかけ橋　神戸から全国へ」

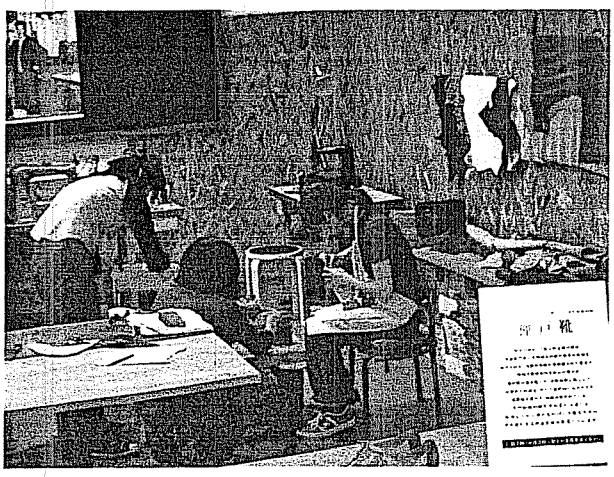
など、神戸を支えている「人」を主役に神戸の「元気」と「魅力」を発信している。（８月末まで）（詳しくはホームページを見ていただきたい）

これらの事業を通じ、私自身感銘を受けたことは**市民の力、地域の力**である。市民のかけ橋事業には４２人の市民ボランティアが全国へ出かけ、自分自身の震災体験を自分の言葉で発信し、各都市の人々に感銘を与えている。彼らからは今後も語り部を続けたいという強い熱意が感じられる。又、タイムズメリケンには学校、企業団体などだけでなく様々なＮＰＯなどの市民団体が運営に参画している。紹介すると各地区まちづくり協議会、「いきいき下町協」（まちづくり支援）、「ユースネット」（青少年育成）、「アスリートクラブ」（市民スポーツ）、「セルプ」（障害者支援）、「カルコム」（市民音楽）、案内ボランティア、「１００年映画祭」、「ＣＡＰ」（芸術）であるが、彼らの力がなければ運営が成り立たない程である。神戸は「協働と参画」を唱っているが、このように市民の力が確かなものになりつつあることをタイムズメリケンの運営の中で実感している。

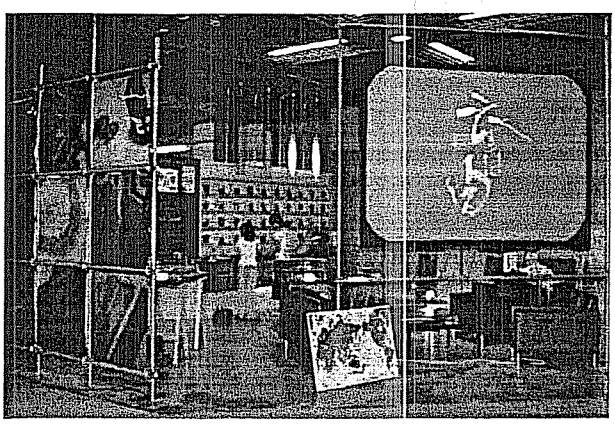
続いて、神戸の魅力を支える**若い力**である。タイムズメリケンに参画している神戸市ものづくり職人大学の学生と港の倉庫とか古いビルの一室などの工房で活躍している若手クリエーター達で、いずれも３０歳前後の若き青年達。紆余曲折の後、自分のやりたい道に進み活動している人達である。彼らは神戸というまちに愛着を持ち、この神戸の環境の中でトレンドや情報にまどわされず、自分の価値観を熟成させようとしている。今後の彼らの活躍により更に神戸の魅力がたかまること期待している。

最後にタイムズメリケンでメッセージボードから**神戸市民の言葉**でもって神戸からの発信としたい。「あれから１０年　忘れようとしても決して忘れる事のできない、あの出来事。たくさんの犠牲がでてしまった事はものすごく悲しいことです。その人達の分まで生き残った人は人生を悔いなく明るく未来に向けて生きていこう！そして、神戸をすばらしい街へ」

ホームページ http://www.kobe10th-year.jp



神戸の伝統の技コーナー　くつ職人の卵達の実演



“衣食自由”コーナー　港の倉庫等の工房で活躍する若手クリエーターの展示

■Dr.フランキーの街角たんけん 第16回 栄町通 過去・現在・・・（その４）

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

７月のとある土曜日、私は栄町通を歩いていた。

栄町通４丁目に、ビクトリアン調の煉瓦壁が建っている。旧第一銀行神戸支店。明治 41（1908）年竣工の辰野金吾の作品である。空襲で赤煉瓦の外壁を残して焼け落ち、復旧後は長らく大林組が神戸支店として使っていた。震災で半壊したが、明治の東京駅建設工事で自社の基盤を確立できたという辰野との縁から、オーナーの決断で、通りに面した煉瓦壁を多大な費用と手間をかけて保存した。今は、市営地下鉄海岸線みなと元町駅の出入口となり、将来的に煉瓦壁の内側に高層ビルが建つ予定である。先日、ある会で一緒になったご婦人から、「みなと元町駅の赤煉瓦は、他所から持ってきたものですか」と言われてずっこけたのだが、「胴巻き」保存の悲しさである。所有者の大林組には、ビル建設時にもう少しファサードを竣工当時に近づけるため復元的に手を加えるなど、煉瓦壁を残した意味を、観る者が積極的に感じ取ることができる工夫を、更にやっていただきたい。

高層住宅の建設が相次ぐ栄町通だけに、この旧第一銀行の隣にも、最近 10 数階建てのマンションが建った。将来、隣に建つビルのヴォリュームを考えれば、分からないでもないが、２階建の旧第一銀行とのアンバランスは、隠しようがない。容積を一杯使い、安手のトラバーチンもどきを低層部に巡らせているのも「どうよ」という感じだ。「トチ再生」なんてキャッチを掲げ、手前の会社の「再生」に血眼になるのも結構だが、「明治建築界の帝王」の作品の隣に建物を建てるなら、せめて、はす向かいの地元老舗デベロッパーのギャラリーの佇まいを見習うべきである。

栄町通３丁目の交差点に立つと、第一勧業銀行神戸支店（大正６（1917）年竣工、長野宇平治設計）跡の「虚ろな」空地と、南東角の旧さくら銀行跡地に新築された「ショートケーキハウス」ならぬ「ウェディングケーキ」マンションが一望できる。この２つの敷地のアンバランスさが、栄町通の今日的状況を象徴している。

真夏日は、体に堪える。一休みしようと、栄町通２丁目に最近できた、某マンションの公開空地にある石のベンチに腰を下ろそうとして、私は腰を止めた。その「ベンチ」が震災で解体される迄、この敷地にあった三和ビル（大正 12（1923）年竣工、河合浩蔵設計）の開口部アーチの迫石と要石の組物そのものだと気付いたからだ。

解体後に建った某銀行営業所の東側壁面に、この部位は移植された。そのときは、曲りなりに説明版があった。今、素人目には奇妙な石のオブジェにしか写らないこの物体の素性を伝えるものは、何もない。夜な夜なジベタ（地べた）リアンの兄ちゃん姉ちゃんに足蹴にされているのか。私は、Hiromi Goh と樹木希林のスマッシュヒットの１フレーズを、思わず口ずさんでいた。

「あぁ 悲しいぃねぇぇ 悲しいぃねぇ」

（この項終わり）。



写真１ みなと元町駅と新築マンション



写真２ 栄町通３丁目界隈

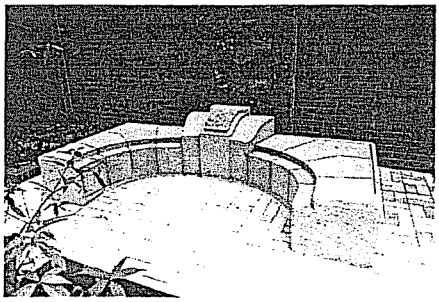


写真３ 旧三和ビルの石造アーチ

■『コンパクトシティ』を考える 14

－ヨーロッパ統合とコンパクトシティ政策の登場①

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

はじめに

２０世紀の先進工業国の繁栄は、共通の言語、民族、宗教などを基礎とする「国民国家」が中心になって、技術革新を繰り返し、国民生産の持続的な増加でもたらされた。さらに、第２次大戦後の冷戦構造が、２大陣営の技術競争を激しくし、「工業社会」のパラダイムが定着したからであった。しかし、70 年代の劇的な経済社会構造の大転換が、やがて 90 年代の冷戦の終焉などの歴史的な激動を産み、ヨーロッパでは「工業社会」に代わるパラダイムの転換の模索が始まる。

その中にあって、新しい都市政策として登場するのが「コンパクトシティ」である。その流れについて、２回に分けて考えていきたい。

１．激動の９０年代とＥＵの誕生

1989 年夏に東ドイツ国民がハンガリー経由で西ドイツに脱出したことをきっかけとして、ベルリンの壁が崩れ、東欧諸国に民主化革命が起こった。ソビエト連邦は共産党の解体を経て崩壊し、半世紀続いた冷戦構造が終焉した。

90 年に東西ドイツは統合した。92 年末の単一市場の完成を控えて、21 世紀の初めに至る経済統合のみならず安全保障や政治統合の道のりを定める『マーストリヒト条約』が、92 年 2 月ＥＣ加盟 12 カ国で調印された。批准のための国民投票でデンマークでは否認されたが、フランスやイギリスでかろうじての賛成を得て、93 年 11 月に条約は発効し、『ＥＵ（ヨーロッパ連合）』が正式発足した。加盟国の間で人、物（商品）、カネ（資本）、サービス（保健・医療・教育など）の移動が自由になり、国境という障害がなくなった。政府は国策企業を優遇できなくなり、活動の場が公平になった。

2002 年 2 月末に、ドル価格の変動によるＥＵ域内の為替レートの変動リスクを無くすため、共通通貨『ユーロ』が誕生し、経済統合（イギリス、デンマーク、スウェーデンを除く）を果たした。

ＥＵは現在 25 カ国が加盟し、07 年には 27 カ国にまで拡大する計画である。ここに、冷戦終焉を契機として、ＥＵはヨーロッパ全体の統合へと発展した。

２．「一つのヨーロッパ」模索の道

第２次世界大戦後、西ヨーロッパは米ソの２大陣営に挟まれながら、経済的繁栄と政治力の強化を模索し続けてきた。２度と戦争を起こさないために、各国がバラバラで経済競争をするのではなく、相互の経済的・政治的協力体制の確立を図る「一つのヨーロッパ」という構想が指導者の中に生まれていた。国家間戦争の的になる石炭や原子力に共通の政策をとるために、52 年に『ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体』が発足、57 年には『ヨーロッパ原子力共同体』と『ヨーロッパ経済共同体（ＥＥＣ）』が発足した。特にＥＥＣは関税同盟を基礎にして、労働、資本、サービスの自由移動を図り、農業、運輸、エネルギー、通商、社会政策の共通政策を実施し、経済同盟を実現してきた。共同体の仕組みは、加盟国政府が権限を完全に共同体に委譲し、国家が何らの権限も行使しないところにあった。この３つの超国家共同体は 67 年に『ＥＣ（ヨーロッパ共同体）』に一本化された。

３．７０年代の経済社会構造の大転換

70 年代に激震が世界を揺らした。２度の石油ショックとドル・ショックであった。石油価格の高騰は、安価で安定した原材料の供給による工業システムを崩壊させた。ドルの変動相場制によって、明日が予想できない不確実な時代への突入だけではなく、企業はコストの安い発展途上国へ工場を移す経済のグローバル化が不可避となった。

ＥＣ加盟各国は自国の経済再建に追われて、共同体で協力し合う余裕を失い、勝手な保護主義に走り、国際競争力を落としてしまった。

80 年代にはアメリカが金融市場などの規制緩

和をしたため、ＥＣ各国は市場原理を無制限に適用する企業経営のあり方に対抗しなければならない危機感に目覚めた。

４．ヨーロッパ統合の意義と前途

85 年にＥＣの委員長に就任したジャック・ドロール（元：仏蔵相）は、ＥＣの新しい考え方を示した。ヨーロッパは、歴史的に「社会的ヨーロッパ」あるいは「市民のヨーロッパ」と呼ばれ、福祉を重視し、常に個人と社会のバランスを保ってきた。つまり、ヨーロッパ文明の土台であるギリシャの都市国家、ローマ法、キリスト教、近年では社会民主主義に遡る伝統がある。今、個人の自由だけを尊重し、社会の価値を軽視するアメリカ型の市場原理による経済構造に陥ってはならない。ヨーロッパ共通のルールを作り、ＥＣ加盟国内で調和ある経済発展ができる「ヨーロッパ社会領域」の確立を最優先目標とし、市場に自由な広がりを与え、国家、公共機関、地方自治体、社会パートナーの活動や労働者保護などを認める社会モデルの構築を必要とするものであった。

ヨーロッパの再生のためにはヨーロッパ全体の市場の統合と通貨の統合の必要を訴えた。まず、「域内の国境」を全て撤廃し、単一市場にする統合の計画が具体化された。準備期間に 8 年、92 年末に全てを発効させる目標に、300 近い法令の改正・整備が必要になった。そのために、86 年に『単一ヨーロッパ議定書』が首脳会議で調印され、加盟各国で国民投票、憲法改正を含む批准措置が取られ 87 年 7 月に発効した。

『ヨーロッパ憲法』を持つことで、ＥＵは単なる統合から連邦国家に発展する。加盟各国は独自の憲法と内閣、立法、司法の３権を持つ「州」のようになり、ＥＵは「一つのヨーロッパ」＝「ヨーロッパ合衆国」になる。そして、ＥＵ域内の諸国民は「ヨーロッパ市民」としての権利が保障される。国籍を保有しない加盟国に住んでいても、居住地におけるヨーロッパ議会の議員選挙への選挙権や被選挙権を保障されることになる。自由に移動することができるヨーロッパ社会の中で、ヨーロッパ市民の概念は、国家への帰属ではなく、地域コミュニティへの帰属が重要になってくる。

ヨーロッパは本来、国家の集合体であるとともに、地域・民族の集合体でもあった。このため、70 年代以降少数民族問題が多発し、フランス、スペイン、イギリスなどでは、分離・独立や権限の委譲を巡る民族問題を抱えてきた。

ＥＵ統合は、国家主権の縮小を意味することとなる。それは、従来から「国家」の原理につながれてきた地域や民族は、本部のあるブリュッセルに代表部を設置して、国家を介さないで隣国の地域と関係を結び、ＥＵレベルで行動することができるようになった。これからは、少数民族として分離・独立を問うのではなく、一地域として自助努力での発展に力注ぐことができる。

ヨーロッパ統合が深化することで、ヨーロッパ市民が住む地方自治体の機能に、「ヨーロッパの中の地方」としての新しい機能を加えることになる。地方自治体はＥＵの中の地域自治体(region)と基礎自治体(local)の２層による地位を明確にし、ＥＵ法の規制が適用される。また、ＥＵ政策の執行者として、ＥＵと中央政府と協力して地域政策を推進していくパートナーになる。さらに、ＥＵレベルでの意思決定の参加を強化するべく水平方向のネットワークが重視されるようになる。

ＥＵ統合によって、かつて中世ヨーロッパが崩れる際に国家主権の絶対性を前提として発展し、近代を形づくった「国民国家」に戻ることが不可能となる。「国境なきヨーロッパ」という「新しい中世ヨーロッパ」が出現することでもある。

2004 年 6 月には『ヨーロッパ憲法草案』を採択し、06 年 10 月末までに加盟国の国民投票で 5 分の 4（20 カ国）以上の承認を得れば、憲法としての効力を持つことになる。05 年国民投票がありスペインで承認が得られたが、続くフランスとオランダでは否認され、ヨーロッパ統合の前途に暗雲が漂った。しかし、各国では集権型国家から地域重視の分権国家への転換が進んできている。

（次回に続く）

■張黎明さんとトレンディな北京の街なみ

小林郁雄（非認証ＮＰＯきんもくせい代表）

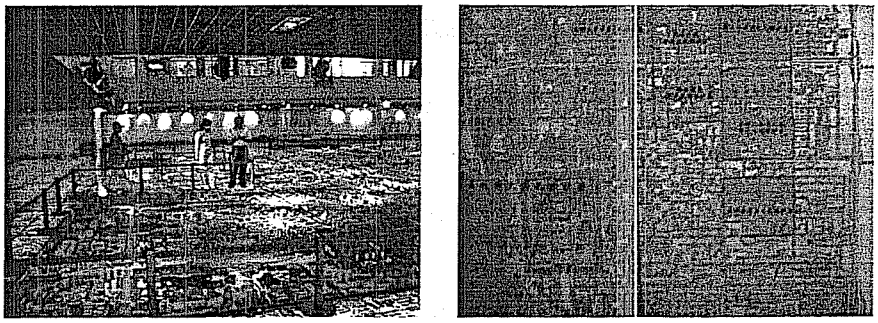
●2005 年 6 月 18 日～22 日、10 年ぶりに北京を張黎明さんの招待で訪問した。張さんは青島で生まれ、上海の同済大学で建築を学び、北京市の都市計画設計院で働いていたが、30 歳にして一念奮起し、日本で都市計画とりわけ歴史的町なみ保存の勉強をしようと、1992 年に神戸にやってきて、93～94 年度に神戸大学工学研究科修士課程（早川和男研究室）に入学した。私費留学生なので経済的にしんどいから、働きながら研究するようにできないかという早川さんの依頼で、神戸大学のすぐ下に事務所があるコー・プランでアルバイトしながらということになった。

●1995 年 1 月「中日両国における歴史的都市の特徴と都市保全に関する比較研究」という修士論文がほぼ完成し、3 月に北京に帰りいずれ独立して事務所を出す時に、「コー・プラン北京」を併せて開設しようということまでは相談していたのだが、1 月 17 日の阪神大震災に遭遇、すべてはチャラとなった。張さんはたまたま広島に行っていたので難を逃れたが、震災直後のどたばた、まだ平常状況にほど遠い中ではあったが無事修了卒業し、4 月に北京に帰った。

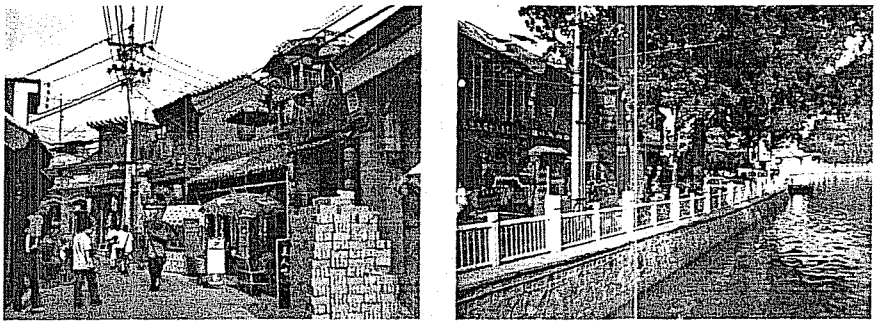
●あれからちょうど 10 年、今は北京鉱冶研究総院工程設計院というところの第 5 設計室で、20 人ほどの所員をかかえ、城市規劃（都市計画）・建築設計・園林景観をひろく手がけている。今回は、天川雅晴さんと瀋陽（昔の奉天）で百貨店を作ることになり、コー・プランも一枚噛んでいるので、その関係（費用負担でということ）での訪中であった。というより、10 年目の張さんのお礼の招待で、天川夫妻と細野彰さんと 4 人で北京とその周辺（万里の長城や明十三陵など）を訪れ、同僚の梁肖さんにすっかりお世話になった。

●2008 年の北京五輪に向けて施設整備や交通整備が急ピッチで、周辺部への大規模な住宅開発はもちろん、中関村などへの IT 関連企業はじめあちこちで商業・業務超高層ビルも、上海ほどではないが、林立し始めている。それらの状況は天安門広場南にある北京市計画展覧館にいけば一目瞭然である。同時に、かつて街を埋め尽くしていた四合院などの古民家と胡同（路地）の保存も地区を選定して進められてはいる。

●さらには、古くからの街なみを活かし、大阪・空堀や神戸・乙仲とちょうど同じように、烟袋斜街や后海沿いの古民家を改修した店舗や飲食店街がもっともトレンディなスポットとして、北京の若者に人気だ。ＴＶやインターネットを通じて即時に世界同時流行していることを実感した。



050618 天安門広場南にある北京市計画展覧館の北京市街地大模型（立っているのが張さんと梁さん）故宮北東の胡同保存地区図



050621 北京の新トレンディスポット・烟袋斜街と后海沿いの荷花市坊につながる古民家など改修した店舗群

マンションKをめぐる人々4「一階 駐車場」

家出少年

中川 紺

誰でも一度くらいは子供の頃に家出を経験しているのではないかと思う。ここにも、つい最近家出を決行したばかりの少年がいる。

翔太は両親と三人でマンションの一室で暮らしていた。七階建てで、明るいレンガ色の壁が遠くからもよく分かる建物で、学校から帰る途中に、道の向こうにその色が見えてくる瞬間が、翔太は好きだった。

●●

家族が増えたのは小学校に入って初めての夏休みが始まった頃だった。生まれたばかりの弟は手のかかる赤ん坊で、両親は（特に母親は）、これまで翔太に費やしていた時間のほとんどを弟にかけなければいけなかった。

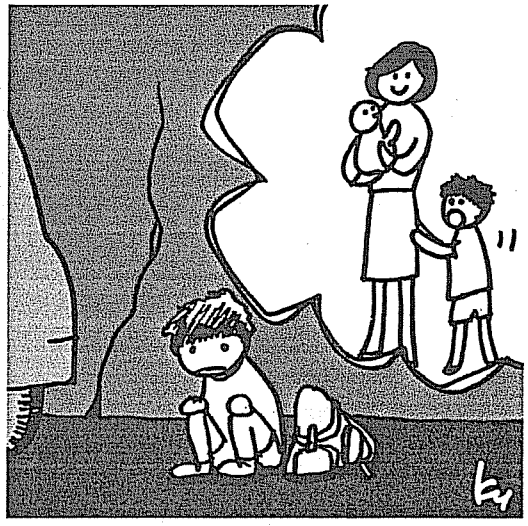
八月も終わりに近づくと、翔太の不満と不安はどんどん大きくなっていった。

……休みが終わってまた僕が学校に行けば、ママとはもっと会えなくなって、ママをユウキにとられちゃう。そんなのダメだ。ママは最初僕だけのママだったのに……。

彼は一大決心をして、家出計画を立てた。

「怖い人に連れていかれちゃうから一人で遊びに行ったらダメよ」と言われていたことを思い出す。きっと僕がいなくなったらすごく心配するはずだ。でも遠くへ行くのは怖いなぁ。安全で、すぐには見つからないけど、ちゃんと探しに来てもらえるところ。翔太は悩んだ末にそっと玄関から出て階段をおりた。

一階はピロティで、駐車場になっていた。翔太は迷わず一番隅っこの車の陰にしゃがみこんだ。二階住人の青い軽自動車は、月に数回程度しか使われないためにうっすらホコリを被っていた。ママが僕を探しに来なかったらどうしよう……。不安と疲れで翔太は知らない間に眠っていた。



●●

マンションの前に停まったトラックから、たくさんの家具や段ボールが運び出される。青い作業服の人たちに混じって、両親の姿が見えた。母親のお腹は少しふくらんでいて、髪は今よりも長い。近所の人に笑顔で何か話している。翔太の姿は見えていないようだ。

瞬きをする時間で風景が変化した。夜。ベランダで植木鉢の世話をする女の人がいる。上の階ではきれいな布が風にゆれていた。

もう帰らなくちゃ……翔太は鳥になって空を飛んでいた。ほどなくツタのからまった大きな木が見え、それが目指すものだと分かる。自分を呼ぶ仲間のさえずり。まわりの建物には見覚えがある。その時突風が吹いて、枝から足を踏み外した。しまった。薄れゆく意識の中で、翔太はふと思った。……あれぇ、ここ、僕のマンションがあるはずだけどなぁ。

●●

目覚めた翔太は急に母親が恋しくなって一目散に家に向かった。実のところ、家出してからまだ三十分しか経っていなかった。

翔太が眠っていたすぐそばのコンクリートの割れ目からは、小さなツタがひっそりと芽を出していた。あの大木のツタなのかもしれなかった。

二十年後、家族を連れた翔太は再びこの街に戻って、ツタに被われたマンションを目にすることになるのだが、それはまた別の話である。（完）

（イラスト やまもとかずよ）

■ 第７６回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは「震災復興マンション再建の結末は？」で、６月２４日（金）こうべまちづくり会館において行われました。小林郁雄さん（NPO きんもくせい）のテーマ解説ののち、次の３氏から報告がありました。

- 「被災マンションの復旧復興を巡る課題」／大西一嘉（神戸大学工学部）
- 「兵庫区・東山コーポの再建」／岩崎俊延（プランまちさと）
- 「灘区・高羽グランドパレス再建の現状」／野崎隆一（遊空間工房）

大西さんからは、被災マンションの再建過程について、全体のプロセス（“復旧か、建替えか”に関する意志決定要因等）や、最近のマンションに関する法改正にふれながら、再建に関する合意形成への支援や建物被害の判定方法等についての課題や改善策を述べられました。

岩崎さんからは、“補修か、建替えか”で合意形成が図れないままになっているマンションについて、この間の条件変化等を整理しながら、ねばり強い活動を積み重ねながら合意形成にこぎ着けた経験について語られました。

野崎さんからは、岩崎さんの報告と同様に長らく再建が決まらなかったマンションに関して、これまでの詳細な経緯や最近の状況について語られました。

討論の時間があまりありませんでしたが、まとめで小林さんの「マンション再建は、最後は金で決まるというのは、まちづくりとは少し違うなあ」というのが印象的でした。（中井都市研究室　中井　豊）







報告者の皆さん。大西さん（左上）、岩崎さん（右上）、野崎さん（左下）

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第４５回連絡会

・日時：８月５日(金)18:30~21:00
・場所：神戸市勤労会館４０３号室
・内容：テーマ「まちづくりワークショップを考える」、プログラム①「こうべまちづくりワークショップ研究会」と「ＷＳ本」について／西修（こうべまちづくりワークショップ研究会）、②最新事例報告・「雲中公園の野良猫対策ワークショップ」他／辻信一（環境緑地設計）、③グループワークで考える「まちづくりワークショップの諸問題」、④全員で考える「まちづくりワークショップの諸問題」、コーディネータ：松原永季（ｽﾀｼﾞｵｶﾀﾘｽﾄ）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●第７７回・水谷ゼミナール

・日時：８月26日(金)18:30~21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室（神戸市中央区元町通４丁目、tel.078-362-4523）
・内容：テーマ「ランドスケープと市民参加」、発表①「デザイン共有化のためのビジュアルなプレゼン手法／白井治（まち空間研究所）、②「復興まちづくりにおける参加型ランドスケープｉｎ築地」／山崎満（ＵＲ大阪事務所）、③「みんなでビオトープづくり」／門上保雄（門上環境計画）、④「大規模公園の管理運営への市民参加の動き」／長谷川利恵子（環境緑地設計研究所）、コーディネータ：辻信一（環境緑地設計）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年8月31日発行

月刊 きんもくせい

05年8月号
(50+36+NO. 29)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■兵庫県住宅再建共済制度

藤原　雅人（兵庫県住宅復興局長）

９月１日防災の日に全国初の仕組みとして、兵庫県住宅再建共済制度がスタートします。

この制度の創設は、兵庫県にとって、長年の悲願でもありました。あの大震災の経験の中で、被災者の住宅再建が如何に重要か、そして、自助努力や公的支援には限界があることを痛感しました。復興の過程では、被災者の皆さんはもとより、県内外の多くの人々は「困ったときはお互い様」と声を掛け合いながら助け合うことで直面する多くの課題に立ち向かってきたのです。このことを、仕組みとして私たちの子や孫たちに伝えようというのがこの共済制度なのです。

住み慣れた地域には、長年親しんだ風景や人間関係、生活文化など他に代え難い「愛着」があります。その地域で、自ら復興の青写真を描き、自力で生活基盤の再建を果たすことは、ご本人の生活復興はもとより、地域の再生にも大きく貢献するはずです。被災地では、今なお、慣れない土地での生活に馴染めず閉じこもる高齢者がいます。支え合いの場となるコミュニティができない地域もあります。さらに、かつてのにぎわいが戻らずシャッターの下ろされた商店街も少なくありません。こうした阪神・淡路大震災の経験の中から「住宅再建共済制度」は生まれました。

制度の基本は、誰でも加入できる低負担（年額5,000円）で、災害時には、再建への勇気や意欲がわく給付水準（再建時600万円）です。対象災害も地震や風水害などすべての自然災害としました。昨年の度重なる台風災害や新潟県、福岡県での地震など自然災害はいつ、どこで起こるか分かりません。近い将来、東海、東南海、南海地震は確実に起こるとも言われています。何としても、こうした災害への備えを怠るわけにはいきません。みんなで協力して備えるこの安心システムにご理解をいただきたいと思うのです。

阪神・淡路大震災の教訓は、ひとり兵庫県だけのものではありません。是非、この仕組みを全国で共有したいと考えています。兵庫県住宅再建共済制度の運用の実を示して、全国的な理解を深め、広げて行きたいと思います。読者の皆様のご理解、ご支援を衷心よりお願い申し上げる次第です。

※みなさん是非ご加入を！（事務局より）

※筆者プロフィール
震災直後から復興対策に従事
復興本部総括部生活復興課長、復興推進課長歴任
05年4月から現職

■神戸のみどり・その1『六甲山植樹100年・上』

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

1．森林の中の石積み

確か1982年年のことだったと思う。私たちはその2で書く予定の『都市林こうべの森』の基本計画を立案中のときだ。私たちスタッフは再度公園の仙人谷ハイキングコースを歩いていた。そこで新聞や雑誌などによく掲載されている草木が生えていない山を段切りした石積みを見つけた。約80年過ぎ、はげ山から豊かなみどりへ変わった森の中で石積みは今もしっかりと息づいていた。そしてその石の一つひとつを積んだ先人たちの思いが私に伝わってきた。

2．明治初期の六甲山

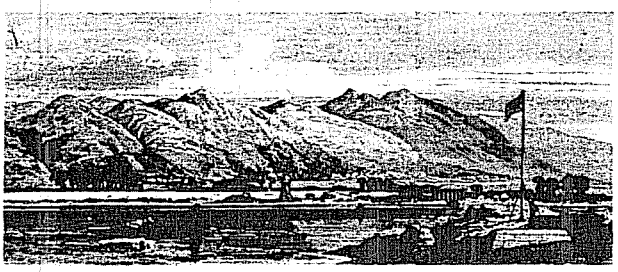
明治初年の六甲山は、①1867年12月7日の開港当日の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』のイラスト　②明治中期ごろの神戸港上から見た絵はがき　③明治14年(1881年)4月、我が国を代表する植物学者牧野富太郎は高知から東京へ行く途中神戸に上陸し、海上から見た六甲山を「私は瀬戸内海の海上から六甲の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った」と随想『東京への初旅』に記述　④『六甲山の100年そしてこれからの100年　神戸市2003年発行』記載、松下まり子氏作成の明治20年(1887年)ごろの六甲山荒廃図などから草木のない白い花崗岩の露出した山であったことを知ることができる。

3．六甲山緑化のはじまり

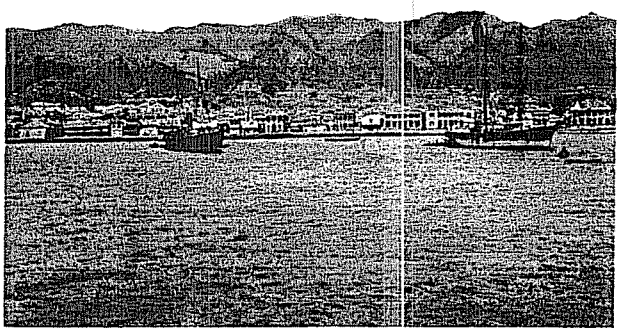
慶応3年(1867年)12月、開港に伴い神戸外国人居留地が設けられ、多くの外国人が交易のために集まってきた。神戸はこの欧米人から多くのことを学んだ。特に英国出身のA.H.グルームは六甲山上の別荘開発や我が国初のゴルフ場の整備などを手がける一方、私費を投じて植林や登山道の整備を行い、県知事などに六甲山の砂防、植林の必要性を説いたと言われている。

①このような外国人の提言　②近代都市として歩み始めた神戸の人口増加は著しく、コレラなど疫病の流行もあって上水道の整備のため生田川上流に布引貯水池が設けられた。しかしその集水域の山地は荒廃がひどく、大雨の度に泥流が流入して良質な水の確保は困難だった。そのため水源涵養林の整備は急務であった。　③また外国人居留地始め市街地は大雨の度に洪水や浸水に悩まされた。そのため洪水や土石流防止の砂防植林が必要な状況にあった。

このような状況の中、ドイツへ留学し、ドイツ林学を修めた東京帝国大学教授本多静六に神戸市は調査を依頼し、明治35年(1902年)11月13日植林作業の一つ地拵えに着手した。これが計画的で大規模な六甲山植樹開始元年である。



明治元年ごろの六甲山



明治30年ごろの六甲山

4．風致林の考え方

この大規模な計画的植林で特筆すべきことは植栽樹種の多さだ。クロマツなど砂防樹を主にしながらも、木蝋を採取するハゼや樟脳を採るクスなどを混植して森林経営の安定を図る一方、20 種に及ぶ樹木を植林していることはもともと地形の急峻な六甲山での森林経営の困難さを見抜き、風致林に重きを置いた植樹がされていることだ。このように都市林としてのドイツ林学の特徴である「森林美学」論に基づく神戸市の近代都市としての発展を見込んだ風致林（都市林）の整備が考えられていたらしいことは先人の明に感謝したい。この考え方は今日まで継承されており、また将来へ引き継がれていくと確信している。

5．市民の山・六甲山とレクリエーション

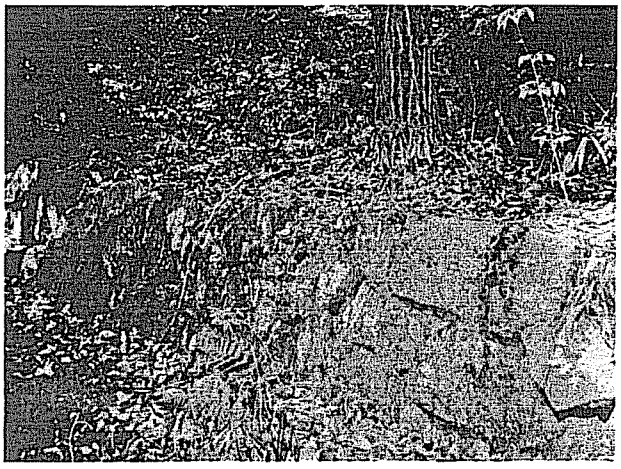
六甲山にはトゥエンティクロス、シュラインロード、シェールロード、カスケードバレー、アイスロードなど横文字の登山道が多い。居留地の外国人がつけた名前だ。彼らは出勤前に毎朝、背山に登り、休みの日はハイキングや軽い登山をするなど季節の折おりにレクリエーションを楽しんだ。そしてその外国人のまねをして登ったのが、今日でも市民の間に盛んな「毎日登山」だ。「毎日登山発祥の地」の碑のある再度山の善助茶屋（現在は碑のみ）では音楽を聴き、紅茶やトーストなど欧風の朝食も用意されていたと聞く。結構その辺に庶民の隠された楽しみがあったのかもしれない。また陳舜臣の『神戸ものがたり』の「布引と六甲」には、外国人の毎日登山の「習慣」と外国人たちの本当の楽しみ、布引茶屋のスリーグレーセス（三美人姉妹）との恋物語が書かれていておもしろい。

神戸における最初の登山団体は「神戸草鞋会」だ。この会は外国人のグループＭＧＫ（The Mountin Goats of Kobe）のワーレンが登山道を整備している姿に感じて、塚本永堯が会員を募集して明治 43 年に作った民間登山会である。塚本らは烏原貯水池から摩耶山まで約 40Km の登山道を整備した。その他「ヒヨコ登山会」「神戸突破嶺会」などは今日も活動している。このような底辺の大きい市民登山を下地として新田次郎の『孤高の人』の主人公、六甲山を拠点とする不世出の登山家加藤文太郎が現れる。

小森正幹さんは長年神戸市で公園緑地のご担当として「みどり」に携わってこられました。我らが先輩、山本吉之助氏から続く「神戸のみどり」を書き残すことを願ってご執筆いただきたいとお願いいたしました。
何を隠そう、実は小森さんの本業は小説家でいらっしゃいます。本場の連載の文章をお楽しみ下さい。（天川佳美）



明治 36 年ごろの六甲山



現在も残る森林内の石積み

■コミュニティに公的性格を機能化

山口　一史（ひょうご・まち・くらし研究所）

６月号に書いた「同じ地域に暮らしているのに－台風 23 号被害　障害者の経験生かそう」で、言葉足らずだったことを引き続いて書いてみたい。

６月号では豊岡の台風被害の際に、障害を持った人たちへ災害情報が届かなかった背景を考えた。一般の市民の多くが行政からの避難勧告や避難指示を聞き逃しても、近隣の人たちから、その危険情報を知らされて、避難所に行くなり自宅で対応するなりの行動に移れたのにもかかわらず、障害者は近隣から情報がほとんどといっていいほど伝達されずに、濁流が押し寄せてはじめて危険を知ったということを中心に紹介した。

そして、その理由として、日常生活の中で地域のコミュニティの輪に入っていない、何らかの事情から疎外されているのではないか。それならばコミュニティ自体を、組み替えていく必要がありはしないかというところで終わってしまっていた。

コミュニティのありようについて、少し重なるところがあるが、そこから始めたい。

◆小さなつながりが徐々に大きく

「図１」は人々の生活の面から形成されている社会的な関係を模式的に描いたものだ。4 つの象限によって区切られたものを第Ⅰ象限と第Ⅳ象限を私的(地域的)領域、第Ⅱ象限と第Ⅲ象限を社会的領域と名付けておく。まず、第Ⅳ象限は個人が地域社会でつくっているコミュニティの姿を現している。自分と家族が一番内側にいる。その外は、隣近所のつながりだ。その輪はもう少し広い近隣のつながりや自治会のメンバーとしてのつながり、婦人会や老人会、子ども会といった性別、年齢階層別のつながりがある。さらに小学校や中学校のＰＴＡ、青少年育成協議会などのつながりもあるだろう。古いまちだと、神社の氏子やお寺の檀家という組織もある。少年野球チームのメンバーといった関係もある。

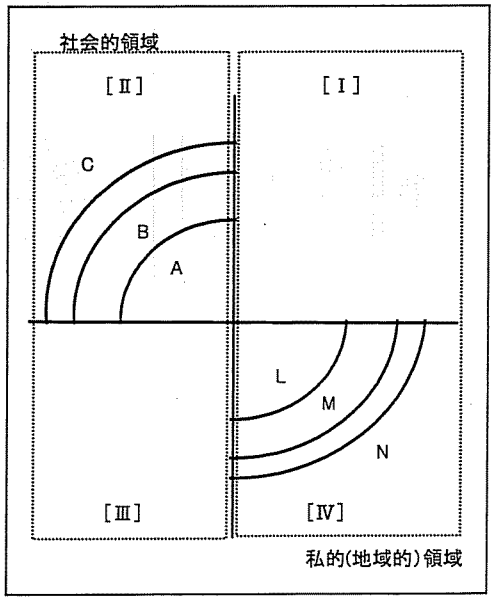


図１コミュニティの姿

一方、社会的領域の第Ⅱ象限は会社や商店に勤務したり、経営したりしていると、おそらくその輪が一番内側に来るのだろう。大きな会社だと、自分が属している課や支店などが一番内側で、会社全体はその外側の輪であるという意識があるかもしれない。

さらに業界団体や組合などはもうひとつ外の輪となる。業界団体などの規模と範囲が全国的になれば、もっと外の輪に位置づけられる。また、地域社会と離れた同窓会やＮＰＯ的つながりも社会的領域に属している。

◆大きな「私」は「公」に転換

ここでひとつの気づきが生まれる。

それは社会的領域も私的領域もともにプライベートな領域であり、「官」の領域ではないことだ。それにもかかわらず、私たちは必ずしも、完全な「私」（ワタクシ）として自分たちのコミュニティをみていない。私的領域では、自治会の役員の行動や自治会の事業は「公」（オオヤケ）とみなされる。それは通常の議論でも、「私」にとらわれずに考えようとか、「公私」のけじめをつけるべきだ、といった発言が行われていることからもうかがわれる。

そして単位自治会の会長が、連合自治会の役員になると、連合自治会が「公」を主張し、単位自治会は「私」となってしまう。より大きな「私」は、下位の「私」に対して姿を「公」と変えていくのだ。

一方の社会的領域でも同じことが行われている。商店街からみれば個別の商店は「私」であり、商店街としての事業や活動は「公」となる。

さらに、社会的領域から私的領域をみると、前者が「公」であり。後者は「私」となっている。「会社のため」「仕事のため」というフレーズは必ずしも、会社主義的な側面だけでなく、仕事は「公」であり、くらしは「私」であるという関係が生まれている。(*)

ところで障害者の場合、家族や近隣に住んでいる親戚がない限り、この私的領域でのコミュニティの輪のどこにも実質的に帰属していないことが、災害によって明らかになってきた。「実質的」というのは、名義上、もしくは名目上は自治会などの組織に加入しているが、実際はメンバーとして十分に扱われていないことを指す。

通っている作業所の代表が、懸命に利用者の自宅に電話をかけて、「危険情報」を流したことを 6 月号で紹介した。作業所はこの図でいうならば、社会的領域に含まれるはずだ。社会提領域から私的領域へメッセージを発信しなければ、誰も情報を流してくれないということを、この代表は知っているからこそであろう。

◆公益のフィールドを新たに

そこで社会的、私的領域を通して発想を転換しなければいけないのではなかろうか。

図２は、第Ⅳ象限の私的領域の中で公的色彩を持っているものを、コミュニティの機能として第Ⅲ象限に移していくことをイメージしている。（点線で描いた半円弧）

一方、第Ⅱ象限の社会的領域の中からも、公的色彩を持った機能を第Ⅰ象限に移す。

大小はあるものの元々、公的意味合いを持っているコミュニティの輪や機能を、プライベートな分野に閉じ込めてしまっていて、本来発揮すべき公益性を見失っているからではないかと考える。生活の中で育んできたある種の知恵、つまり自治会の役員をすることはみんなのためにしているのであって根底で「ご苦労さま」と感じるのは、そこに公益性をいくらかは認めているからであろう。

地域や企業社会が公益性を内包していることを明確にし、その公益性が高まっていくような仕組みづくりが重要と思われる。

ただし、現在の地域社会、地域団体のままでは、かつての行政の下請けとしての地域団体に戻るだけでなく、私たちが歴史の中で否定してきた古いコミュニティを再現させてしまう恐れがある。

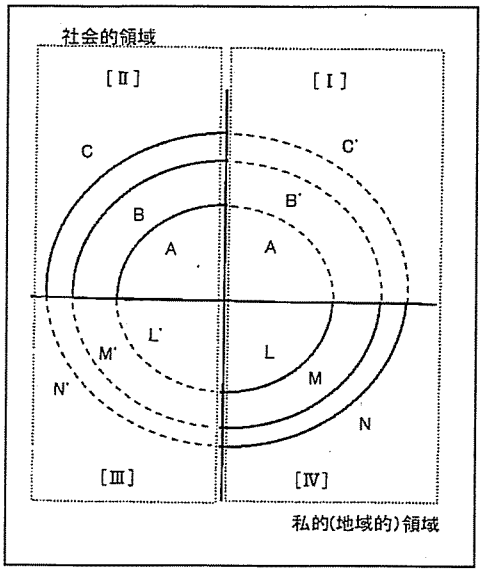


図２　新しいコミュニティの姿

新しいコミュニティをつくるために、コミュニティを開いていかなければならない。コミュニティを開くというと、多くの人は「地域社会によその人が勝手気ままに入り込んでくれば、地域のアイデンティティがなくなってしまう」と警戒感をあらわにする。コミュニティを開くとはそうではなく、少なくとも次の３つの要件を充たすことが望まれる。

その３要件とは①コミュニティのルールを一般社会のルールと同じにする②共生社会を実現する③専門性を尊び、地域の内外のさまざまな専門家と積極的に連携する―だ。

開かれたコミュニティが「新しい公益」を生み出し、図１でいう第Ⅰ象限＋第Ⅲ象限が公益コミュニティとして、第Ⅱ象限と第Ⅳ象限を挟み込む。

◇

豊岡の台風被害で障害者の実情を知りたいと考えたのは、阪神大震災のとき、障害者に対するケアはまったくといっていいほど何もなかった。あれから 10 年、私たちの社会はどれほど進歩したかも知りたかった。残念ながら、災害時の障害者対応は 10 年前と違いはなかった。

(*)公と私の関係は有賀喜左衛門著作集Ⅳ「封建遺制と近代化」(未来社、1967)から学ぶことが多かった。

■「くらし・すまい塾」の発足とお誘い

石東　直子（石東・都市環境研究室）

7月半ばに「くらし・すまい塾」がスタートしました。

「暮らしと家族形態の変化によって、住まいがどう変わってきたのか、どう変わっていくのか」をフィールドワークやさまざまな現象、文献などをもとに話し合う場です。

くらし・すまい塾の発足にはいくつかのきっかけがありました。

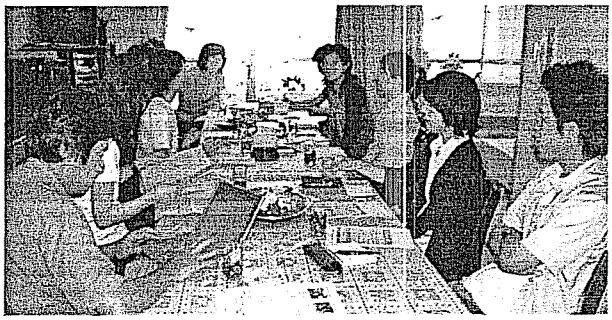
ひとつは、毎年夏の初めから秋にかけて、何人かの学生、院生から連絡が入り、「論文のテーマにコレクティブ住宅をとりあげているので、話を聞きたい」「調査をしたいので、住宅の誰と連絡をとったらいいのか教えてほしい」ひどいのは「コレクティブ関係の資料を送ってほしい」．．．．．と。また、大学の先生から特別講義でコレクティブ住宅の話をしてほしい、住宅を案内してほしいという依頼もあります。できるだけ対応しようと努めていますが、また、社会的マナーを知らなすぎる学生が少なくないということにはもう慣れたのですが、学びの浅さにしばしば考えさせられます。

ここ数年、グループリビングやコレクティブ住宅などと称される共生型住まいが出てきましたが、なぜこのような新しい住まいが出てきたのかという背景は、学生たちの論文ではなかなか言及されません。特に被災地では全国に先駆けてコレクティブ住宅という呼び名ばかりが普及してしまいましたが、本来のコレクティブ住宅とは何か、その歴史はという基礎知識を踏まえて、被災地のコレクティブ住宅の事業化された背景を知り、本来のコレクティブと被災地のコレクティブ住宅の相違を把握した上で、コレクティブ住宅の調査をしてほしいと思っています。現象面だけの調査と評価では、協同室が使われていないとか、共益費が高い、人間関係がややこしいなどと言う居住者の不満が多いとか、高齢者ばかりの居住で問題があるなどしか見えていないようです。ひとりひとりの学生に対応するのは大変なので、まとめて基礎的な知識を知る場を提供したいと感じていました。

もうひとつは、社会の潮流は明らかに新しい居住ニーズを顕在化させつつあり、さまざまな住まい方がでてきていますが、私自身これからの住まいや住まい方をじっくり語り合える機会がほしいという思いがあります。これについては真野ふれあい住宅のモーニングサービスを1年前からサポートしている田中奈美さん（神戸芸術工科大学助教授）も同じ思いだったので、くらし・すまい塾の設立に至りました。

現在の塾生は、4つの大学の専攻も多様な学部生と院生や卒業生たち、数名の研究者と実務者の 15 名ほどです。1～2ヶ月に1回の定例会を予定しています。

ご関心のある方の参加を歓迎いたします。



くらし・すまい塾の発足会　7月17日

住吉川物語1

水道局の昼休み

中川 紺

今日もいい天気。だから川に足をつけてみる。気持ちいい！　すぐ横の草地に黄色い花を見つける。そうやっていつもの道を散歩していたボクは、橋の手前で“おじさん”に出会った。最初は遠くから観察。段々近くに寄ってみた。白髪まじりのおじさんは、ボクに気がつくと優しく笑いかけてくれた。だから勇気を出してボクは話しかけてみたんだ。

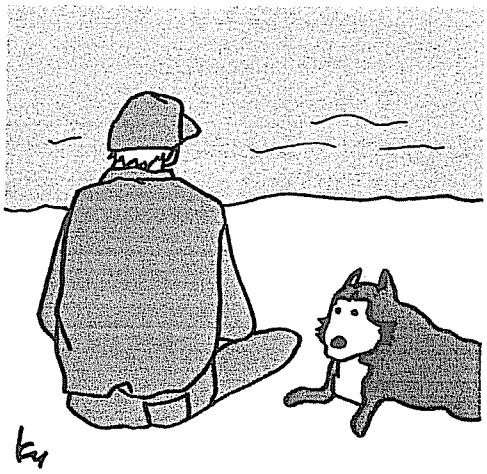
おじさんはボクの呼びかけにちゃあんと答えてくれた。橋のすぐ近くの“すいどうきょく”で働いていて、天気がいい昼休みにはこうして川べりでお弁当を食べるのがおじさんの日課。自分でつくったという卵焼きをボクにくれたけど、それはホントにおいしかった。亡くなった妻よりも実は料理がうまいんだ、とおじさんは言った。

それからは、こうやってお昼に川で会うことが、ボクたちの日課に加わった。

●　●

ボクと会っているときのおじさんは、とてもおしゃべりだ。それにたくさんの事を知っている。橋のすぐそばの大きな建物は「おくしょん」で、とってもお金持ちの人が住んでいることだとか、昔、「にらくそう」というお屋敷があったことだとか、いろんなお話をしてくれる。もっとも、ボクには何のことだかほとんど分からない。それでもボクはおじさんが話すことを一生懸命聞いていた。時々質問をはさんだりしながらね。

おじさんはボクのことも聞いた。だからボクは憶えていることを全部教えてあげた。



ボクを産んだお母さんはどこかへ行っちゃったこと、他の兄弟とバラバラになっちゃったこと、だから今はひとりぼっちだってことを。

俺とおまえは似てるかもなあ、とおじさんは奥さんがプレゼントしてくれた“かいちゅう時計”を取り出す。昼休みはすぐに終わってしまう。

そうやってボクたちは毎日いろんなことをおしゃべりした。川沿いの道を通るたくさんの人がボクたちを見て、微笑んでいった。ボクはおじさんといるのがとっても幸せだった。

●　●

ある日、ボクは言った。

「ボクね、おじさんと暮らしたい」

ちょっと考えてから、おじさんは「ええよ」と笑った。

ボクは「ありがとう」のかわりに川でひろった石をプレゼントした。それは白地に黒い模様が入った、ちょっと珍しい石。川にある他のどの石とも違う模様をしていたから、きっとすごく特別な石だと思う。だからおじさんにあげることにしたんだ。

おじさんは目を細めてじっくりと石を観察してからこう言った。

「おまえの仲間にこういう模様のやつがいるやろ？　知ってるか？」

ボクは首を横に振った。

「……ダルメシアンっていったかな」

そしてボクの頭から背中にかけてゆっくりと撫でながら、「おまえは何て種類なんだろうなあ」と言った。

ボクはそれに答えるかわりに精一杯しっぽを振っておじさんのほっぺたをなめてあげた。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第４５回連絡会報告

今回の担当者は「若手ネット」でしたが、そのメンバーの多くが「神戸まちづくりワークショップ研究会（以下、WS 研）」に属し、多くの活動を実践していることもあり、また近年「まちづくりワークショップ」への疑問が投げ掛けられる機会も多かったため、「まちづくりワークショップを考える」というテーマで、WS 研が中心となって、企画運営することになりました。

まずカタリスト松原から、テーマの解説があり、続いて以下の報告がありました。①**「神戸まちづくりワークショップ研究会と『WS の本』について」／西修（神戸市）、②最新事例報告／辻信一（㈱環境緑地設計研究所）**

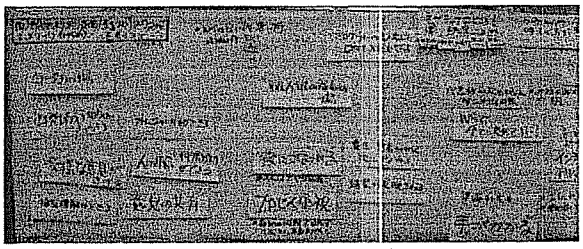
西さんからは、神戸市でのまちづくりワークショップの歴史の概説の後、WS 研の設立趣旨やそれに至る経緯の説明があり、さらに最近発刊した神戸のＷＳ事例集『WS の本』の報告＆広報が行われました。次に辻さんからは、最新事例の一つである「野良猫対策ワークショップ」のお話しや、それに関連したまちづくりワークショップの課題などについて触れていただきました。

その後は、参加者全員で「まちづくりワークショップの諸問題」というテーマのワークショップを行いました（ややこしい）。まず 2 班に分かれていただき、各々で「まちづくりワークショップ」の良い点・悪い点を挙げ、グルーピングしたものにタイトルを付け、それをテーマ用紙（A3 半分）に書きだしてもらいます。その後、テーマ用紙を壁面に貼りだし、全員でそれを見ながら討議するという２段階のプログラムで行いました。後半のファシリテーターはカタリスト松原、レコーダーは田中正人さん（㈱都市調査計画事務所）で担当しました。

「まちづくりワークショップ」に関わる様々な論点が提出されましたが（写真参照）、後半は特に「ワークショップで得られる結論は平凡ではないか」という論点を中心に議論が交わされました。その中で「個性的な案というのはワークショップでは消えてしまうのではなく、全体に影響を与え、変わっているのだ」との意見が、参加者のみなさんの心を捉えたように感じられました。他にも「ファシリテーターのスキルの重要性」「主催者が抱く WS という手法への幻想」など、興味深いお話をたくさんいただきましたが、残念ながら時間切れ終了となりました。

連絡会後の WS 研メンバーの打ち上げでは、まだまだ議論がくすぶり、やがて燃えさかり、そして「同じテーマで継続的に議論する場を持つべき」との結論に達しました。まだ日程等は未定ですが、決まりましたらみなさまにもご連絡したいと思います。

（スタヂオ・カタリスト　松原永季）



ワークショップ結果の様子

■ 情報コーナー

●六甲道まちびらき
- 日時：９月 17 日(土)、18 日（日）10:00~20:00
- 場所：ＪＲ六甲道駅周辺～六甲道南公園周辺
- 内容：完成記念式典、六甲道マイステージ、野外劇「星の王子様」、ぐ～チョコランタン小劇場、だんじりコーナー、いざ！カエルキャンプ！、ミニボーリング、他
- 問合せ：六甲道まちびらき行事実行委員会事務局（コー・プラン内 TEL.078-842-2311、FAX.842-2203）

●阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第４６回連絡会
- 日時：10 月 7 日(金)18:30~21:00
- 場所：未定
- 内容：テーマ／「まちづくり協議会とまちづくりコンサルタントのゆくえ」、詳細は未定
- 問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●「HANSHINKAN NAVETTE―MUS□E」
- 日時：11 月 3 日(木･祝)
- 内容：阪神芦屋駅～阪神西宮駅を起点に、阪神間の美術館を巡る「うごく美術館」を企画中！（詳細は次回お知らせします）

●　きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
- http：//web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
- http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年9月28日発行

月刊 きんもくせい

05年9月号
(50+36+NO. 30)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■阪神間ナベット・ミュゼ －うごく美術館－

天川　佳美（阪神間倶楽部）

2005年11月3日（木・祝）阪神間倶楽部はNPO法人芦屋ミュージアム・マネージメントの方々と一緒に阪神間の美術館・博物館を廻る「HANSHINKAN NAVETTE-MUSEE」という巡回バスを走らせます。これは交通機関のバスではなく、「うごく美術館」と考えて、文化の日に阪神間文化に親しんで頂こうという企画です。

阪神間倶楽部の活動は、これまでにも「きんもくせい」紙上で何度か皆さまに報告をいたしてきましたとおり、阪神間のよき文化を生活レベルで継承しようという有志の集りです。2ヶ月に一度程度、六甲山上のホテルの中の教会でオルゴールの調べに耳を傾けたり、須磨や芦屋のお花見、また池田の町並みを歩いたりして3年を経ました。そこでそろそろ何か実のある事業をということで、阪神間の美術館や博物館を廻る巡回バスのようなものが運行できないか、とメンバーのお一人河内厚郎さんのご提案で、今年の初めからNAVETTE-MUSEE－うごく美術館－の準備を進めて参りました。

阪神間には様々な規模で公私多くの美術館や博物館があります。が、点在しており一日に複数を廻るのはなかなか難しいのです。この文化の日に全てとはいきませんが、芦屋市と西宮市のいくつかのミュージアム(MUSEE)を訪ねることができるよう、しかもその巡回バス(NAVETTE)中では阪神間文化を支えるリーダー達が同乗し（ドクトルと呼びますが、バスガイド、ですね)、阪神間文化についてのうんちくを語る仕掛けです。

興味のある方は、下記の要領により、参加申込み下さい。

HANSHINKAN NAVETTE-MUSÉE

ナベット＝ミュゼとは仏語で<美術館巡回バス>の意味です。

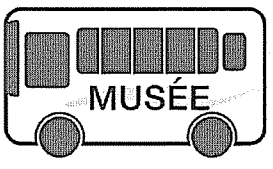
11月03日 2005年(文化の日)

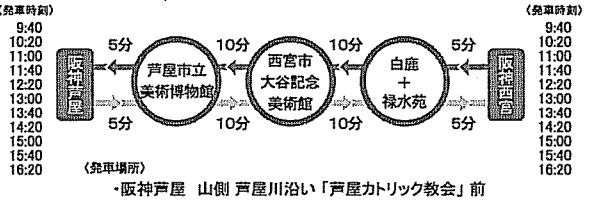
一日だけのうごく美術館

知るほどに歴史は深い。乗って、歩いて、回って感じる文化の街。

阪神芦屋、阪神西宮を起点に阪神間の見所をNAVETTE-MUSÉE(うごく美術館)が巡回運行します。オリジナルに楽しめる、解説博士(地域の文化を紹介)によるガイド付きです。 ※NAVETTE参加ご希望の方は要申込み

解説博士(バスガイド):角野幸博(建築ドクトル)/河内厚郎(阪神間ドクトル)/小林郁雄(街並みドクトル)/たつみ都志(文学ドクトル)/土井勉(交通土木ドクトル)/三宅正弘(ケーキドクトル)





(発車場所)
・阪神芦屋　山側 芦屋川沿い「芦屋カトリック教会」前
・阪神西宮　東出入口前（「西宮市役所」方面）

NAVETTE-MUSÉE(うごく美術館) 参加申込み要項

参加ご希望の方は下記の事項をご記入いただき、往復ハガキにてお申し込みください。→折り返し参加証をお送りいたします。

【申し込み方法】:
1)ご氏名（ふりがな）＋年齢
2)ご連絡先（①郵便番号②住所③電話番号)
3)ご参加希望人数
4)最初の乗車希望場所
(①阪神芦屋②芦屋市立美術博物館③西宮市大谷記念美術館④白鹿/禄水苑⑤阪神西宮)
5)最初の乗車希望時間帯（午前・午後・どちらでもよい)
以上をご記入の上、往復ハガキにて下記までお申込みください。
※往復ハガキの返信にあて先をご明記してください。

【申込先】: 〒659-0052
兵庫県芦屋市伊勢町12-25 芦屋市立美術博物館「ナベット係」まで

【募集人数】:限定250名

【申込締切】:平成17年10月22日(土)(必着)

<個人情報は当イベント以外には使用いたしません。>

■『コンパクトシティ』を考える 15

－ヨーロッパ統合とコンパクトシティ政策の登場②

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

５．持続可能な都市を目指して

ＥＵは、冷戦終焉後の「一つのヨーロッパ」として経済的・政治的統合を目指すための「超国家的」な組織である。１国でも反対すれば決定できない全会一致制ではなく、加重特定多数決制などが採用されている。決定されれば、反対であっても、全体の決定を阻止できない。つまり、国家主権の絶対性を克服する仕組みである。ＥＵ法は一般の国際法とは違い、国内法化する必要なく、ＥＵ官報に公示されると、国家、市民、企業に対して法として効力を持つ。ただし、ＥＵの政策は中央集権化を避けるため、「補完性原理」を基本に、ＥＵが施行するのが効果的な政策はＥＵが、それ以外は国家が行う権限配分が原則である。

ＥＵの大きな政策課題の１つは、ＥＣ時代からのヨーロッパ全体の環境問題への取組みであった。86 年『単一ヨーロッパ議定書』においても、環境政策がＥＣの権限として条約上明記された。

ヨーロッパは工業化の進展で、国境を越えた環境破壊の問題が顕在化していた。森林は減少し、地下水面は低下し、土壌が汚染され、湿地が消失し、漁場が減少し、河川が干上がり、気温が上昇していた。地球の生態系を守るための環境指標は着実に低下しつつあった。特に、CO2 濃度の増加による地球温暖化は、生態系の異常だけではなく、海面上昇を招き、オランダなどの低地国では国土喪失というゆゆしき事態に至る。

環境政策への取り組みは、73 年以来 4 次にわたる「環境行動計画」の形で展開されてきた。「グリーン・タックス」と呼ばれるガソリン税や大型車への重量税、エネルギー多消費型産業施設に対する重加算税など省エネルギーを促進させるための税率を 2～3%と日(1.7%)米(0.9%)に比べて高く設定している。有機農業比率も、アメリカとは比較にならないほど高い。ゴミの分別収集は、どの国でも６種類が当たり前である。都心でも田園部でもＥＣ各国では自転車専用道路が完備し、森の中の遊歩道もよく整備されている。

環境政策で求められるキーワードが、「持続可能な都市（サスティナブル・シティ）」である。「サスティナビリティ（持続可能性）」は、72 年のストックホルムでの国連人間環境会議で、環境への深い配慮を人間が払うべきであるという「人間宣言」中の言葉として使われた。

90 年に『都市環境に関する緑書』が公表された。この中で、ヨーロッパの 80%の人々が生活する都市地域で、公共交通及び交通管制の改善、環境汚染の防止、丘陵地や農地などの開発の抑制や緑化の推進、歴史的文化財の保存など、都市の再生に努め、「持続可能な開発ないし発展（サスティナブル・デベロップメント）」のための都市計画を政策の基本におくことが強調された。これを契機として、都市の環境問題が新たに注目されることとなった。

92 年には国連のリオデジャネイロ・サミットで、持続可能な開発重視の流れが世界の潮流へと発展した。93 年のＥＵへの統合後も、持続可能な都市を目指したプロジェクトが始まり、ＥＣ加盟 12 カ国で中央政府が国境を超えて、共通した空間計画により、国、地域、都市や地区レベルで対応するという方向でまとめられた。

97 年に京都での『気候変動枠組条約第 3 回締約国会議（COP3）』において、先進国 2012 年の温室効果ガスの排出削減目標等を定めた『京都議定書』が採択され、84 カ国が署名した。締結国は 140 カ国である。最大の CO2 排出国であるアメリカは、一旦、合意したが、ブッシュ政権になると、国内事情を配慮して合意を撤回した。しかし、04 年にロシアが批准し、55 カ国以上の批准と、締結国の 1990 年 CO2 排出量の合計が 55%以上となったので、05 年２月 16 日に議定書が発効した。ＥＵの削減目標値は 8%だが、現時点で 1990 年

の基準値より、さらに 8～10%増加しているため、ＥＵは 20%近くの厳しい CO2 排出削減に取り組まなければならなくなった。

６．「コンパクトシティ」政策の登場

持続可能な都市の発展を実現するＥＵの都市政策が「コンパクトシティ」政策であり、実施は補完性原理により各国で推進されることとなった。都市の肥大化が人と物の移動に無駄なエネルギーを消費しているという反省に立ったからである。

産業革命を達成した工業化時代の都市は、自己増殖による拡大化の歴史を刻んだ。第１の都市化が「集中化」、第２の都市化が「郊外化」であった。特に、工業化に市場原理が重なり、人間の欲望としての利便性と快適性、資本の効率性が追求されることとなった。結果的に規模の経済が働き、人口と産業の集中化と郊外化が繰り返され、周辺都市を飲み込む形で拡大の一途をたどった。そして、母都市を中心とした衛星都市群を包含した「メガロポリス（巨帯都市）」の概念でしか都市をとらえられなくなった。都市の固有の境界は希薄化し、職と住が異なる都市では市民意識も希薄化し、都市の自立性が失われた。さらに、70 年代からの都市の自動車化で、都市住民の生活は、利便性の追求のための自動車依存が前提となった。自動車に頼らざるを得ない郊外住宅地開発や、大規模駐車場が確保できる郊外商業立地を促進した。それが、第３の都市化である「インナーシティ化」という難解な都市問題を顕在化させることとなった。自動車による排気ガス、特に CO2 による温暖化の問題は政治問題へと発展した。

ＥＵは持続可能なコンパクトシティに対して、市場原理を無制限に適用するのではなく、非市場制度を注意深く守り育成することを求めている。労働力を生み出す家庭や教育機関、地域共同体、個人の精神生活を律する倫理や価値観は市場原理が作り出すことができず、非市場制度の中から生まれる。市場原理に委ねれば投資家に直接利益をもたらさない公共交通手段のサービス水準は高まらない。持続可能で快適な社会を作るには、政府を小さくすればよいとするのではなく、市民の自律ある行動と、知恵のある強力な地域団体やコミュニティなどの非市場部門の役割を重要視する。

この考えは、ＥＵ統合が、アメリカの経済に対抗するための経済統合だけではなく、より優れた経済社会の構築、すなわち市場原理を暴走させずに、弱者と貧者に配慮するヨーロッパ型の資本主義を発展させる「ヨーロッパ合衆国」を創ろうとする思考に合致する。

「コンパクトシティ」とは、都市そのものが「コンパクト性」を追求し、持続可能な都市開発やコミュニティを目指す。プロトタイプはまだない。

歩行者や自転車が利用しやすい空間づくりや、公共交通機関のネットワーク化で効率を図り、できる限り自動車に頼らない交通環境、CO2 などのエネルギー消費削減への貢献を果たす。都市センター地区も魅力を高め、歩いていける範囲内でほとんどが揃う商業施設や公共施設の再配置や再開発を実施する。さらに、都市の建物空間を低層階を商業・業務に、上層階を住居とする混合用途にして効率的で利便性の高い高密度住空間とするだけではなく、公園や緑地のオープンスペースを組み合わせたサーキュレーションの改善で、快適で質の高い生活空間を提供する。また、都市のアイデンティティを高める歴史的・文化的な遺産の保全や都市景観の形成を図るものである。

ＥＵ各国の都市の中には、分権型国家であったドイツやイタリアのように、中世の城壁都市の伝統を守り、都市の中心部には大聖堂や広場、市役所が配置され、歴史的なまち並みの中で中流階層が住む都心居住の形態が残っている。都市内には路面電車や地下鉄が早朝から深夜までサービスを提供している。自治体を中心に、住宅・建物の改善や修復、居住環境の改善、交通コントロールなどの施策が実施され、コンパクトシティとして都市の再生に成功している事例も多くある。

しかし、英国のような集権型国家では、ロンドンなどの大都市周辺で、国家主導の郊外化政策が進められる一方で、インナーシティ問題に苦しんでいる。コンパクトシティ政策が急がれている。

■「くらし・すまい塾」発足会の報告

石井　清巳（神戸芸術工科大学大学院）

○はじめに

7月の半ば、「ふれあい住宅」でお馴染み、石東さんの前編で書かれた呼びかけにより、ふれあい住宅をサポートする学生や、「くらし・すまいの変遷」に興味を持つ、学生・社会人・研究者など 12 人が色々な思惑を持ちながら「大倉山ふれあい住宅・協同スペース」に集まりました。勉強会を「くらし・すまい塾」と名付け、今後の活動方法と方針について話し合を行いました。そして、今後の活動を記録し、それを発信する方法として「きんもくせい」の紙面をお借りすることができましたので、レポートさせていただきます。

○「くらし・すまい塾」発足会レポート

（2005. 07. 17　16 時～18 時　初顔会わせ）

【プログラム】ふれあい住宅連絡会終了後

①石東さん田中さんによる勉強会の発足について　②自己紹介　③文献リスト紹介

④今後の方針について　⑤ふれあい住宅について

今回の目的は、塾発足と参加者の要望を出し合いながら、今後の基本方針を決めること。そして、お互いの立場や目的を知り合うことです。集まった 12 人は、ベテラン実務者から大学生（建築・社会学専攻　他）と多様な立場の人でしたので、初回から色々な視点から考えた意見が多く出されました。

「くらし・すまい塾」は今後、２つの方向で進めて行くことになります。一つは、最近の暮らしや住まいについて書かれた文献を熟読し、意見を交わします。社会の潮流を背景に増加する新しい居住ニーズや住まい方について、じっくり探究できるように努めます。もう一つは、ふれあい住宅などベテラン実務者の方が手がけてこられた場をフィールドとしてお借りし、塾で学んだことを活用しながら、実社会へ向けて調査や何か働きかけをしたいと考えています。

私は学生の立場からモーニングのサポートに参加し居住者の方と接するうちに、その住まい方に可能性を感じると同時に疑問も抱えます。また、コーポラティブハウスや団地建替えなど、多様な集合住宅ができるなか、そこでのコミュニティと社会システムの仕掛け作りはとても重要だと考えます。今後この塾で、暮らし・住まいについて、実社会と照らし合わしながら学べることを期待しています。

■提案された文献のリスト（書籍名　／　著者名）

①家族と住まない家　血縁から〈暮らし縁〉へ
　／　島村八重子/著 寺田和代/著

②コレクティブハウスただいま奮闘中
　／　石東直子＋コレクティブ応援団/著

③住まいと家族をめぐる物語
　男の家、女の家、性別のない部屋
　／　西川祐子/著

④あなたは老後、誰と、どこで暮らしますか
　／　佐橋慶女/編

⑤愛しすぎる家族が壊れるとき　／　信田さよ子/著

⑥家族を容れるハコ家族を超えるハコ
　／　上野千鶴子/著

⑦少子高齢化時代の都市住宅学
　／　広原盛明　岩崎信彦　高田光雄/著

⑧21 世紀家族へ　家族の戦後体制の見かた・超え方
　／　落合恵美子/著

⑨近代家族の曲がり角　／　落合恵美子/著

⑩現代住まい論のフロンティア　／　住田昌二/著

⑪「51C」家族を容れるハコの戦後と現在
　／　鈴木成文　上野千鶴子　山本理顕　他/著

■第1回 本来のコレクティブハウジングから日本型を考える

平野　奈々（神戸芸術工科大学大学院）

台風11号が近づく8月24日の夜、石東・都市環境研究室にて第1回くらし・すまい塾が行われました。第1回の議題は、事前に石東さんから以下のテーマが提案され、それをもとに9人のメンバーで議論を交わしました。

1．「本来のコレクティブハウジングと被災地の公営ふれあい住宅について」
2．参考書籍「家族と住まない家」についての意見交流
3．その他、自由なテーマで意見交流

日本でコレクティブハウジングと呼ばれるものの大多数は、本来それがもつ意味とは異なっているのが現状です。その原因を明確にする為、本来のコレクティブハウジングの定義について学び、建築や社会学など様々な見地から議論しました。

○コレクティブハウジングとは何か？

コレクティブハウジングとは「さまざまな立場の人が、個々人のアパートメントをもちながら、ひとつの建物内に共有の場をもち、協同の食事運営がある住宅システム」です。また、現代的なコレクティブの条件として、(Ⅰ)協同の食事運営に関する何らかの義務があること、(Ⅱ)インドアで居住者の密接なふれあいがあること、(Ⅲ)全ての人に開かれていること、(Ⅳ)私的な住戸が完備していること、とされています。（コレクティブハウジング研究の第一人者スウエーデン王立工科大学 Dr. Dick Urban Vestbro の定義 ／ コレクティブハウジングの勧め　小谷部郁子著　丸善株式会社　2001年発行より）

○北欧でコレクティブハウジングが普及した理由

デンマークでは１９７９年に都市社会における個人や家族が抱える問題や期待に対応した、住環境のひとつの解として、公共のコレクティブハウジング第１号ができました。王立アカデミーの教授ツアーレ(Karen Zahle)は、その目的を以下の１０項目に述べています。①小規模・孤立化した核家族の子供や高齢者のための環境問題、②女性の社会進出の伴う家事の合理化の必要性、③居住地におけるレクリエーション機能への期待、④居住地での他人との日常的な友好関係への期待、⑤家族形態の変化に伴う近隣での住み替えの可能性、⑥学生にとっての生活の高さと経済性の両立、⑦失業者が社会的情報を得られる場、⑧身体障害者の自立促進の場づくり、⑨社会的・精神的問題を抱えている人の独立可能な場、⑩共同仕事が生み出す可能性。それらに加え、⑪省資源や環境問題への取り組みの可能性も現代社会に適した利点のひとつと言えます。（コレクティブハウジングで暮そう　小谷部郁子編著　丸善株式会社　から）

このように、コレクティブハウジングとは、住まい方の形態のひとつであるにもかかわらず、日本では建物の形態だけを取り上げたものが多く、間違った解釈がなされています。また、阪神大震災被災地の公営コレクティブハウジング（ふれあい住宅）の大部分は、高齢者のみが居住するタイプのもので、本来の機能の利点が全くいかされていません。

○日本のコレクティブハウジングのここがおかしい！

共働きやひとり親世帯、単身世帯、夫婦のみの世帯が多い北欧や北米では、コレクティブハウジングに住む居住者同士の間で食事を当番制にしたり、ルールを決めて家事を協同化したりすることにより、互いの生活を支えています。一方、日本のコレクティブハウジングと称して

いる事例の多くはそのような目的や義務はありません。時折、住民やボランティアにより共同の食事会や茶話会が行われますが、一方的にサービスを受ける形が多く、共有スペースもあまり活用されていません。高齢者だけの居住では特にこのようになりがちで、コレクティブハウジングというよりはシニア共生型住宅と呼ぶのが適切だと思います。介護や子育てなどを目的に居住者が一方的に依存を求める関係だけでは、本来のコレクティブハウジングは成立しないのではないでしょうか？

日本で本来のコレクティブハウジングが普及しない原因は他にも考えられます。例えば、コレクティブハウジングを先導した建築家にも責任があります。共生型住宅をハード面に関しては提唱したもののその本来の趣旨が居住者に伝わらず、ソフト面の誘導がうまくできなかったことも原因の一つです。また社会学的見地から、戦後のライフサイクルや世帯構造の変化・社会保障制度を時代別に他の国と比較すると、いくつかの要素が関連していることが見えてきました。個人主義が基本となるコレクティブハウジングでは、日本のような家族主義の国では難しいのかもしれません。しかしコレクティブハウジングは、多様化する日本人の生活スタイルや生活観に応えるひとつの方法でもあります。その為にも、単なる集合住宅とコレクティブハウジングのような共同住宅は違うということを認識する必要があります。

○本日の参加者の一言

「日本のコレクティブハウジングは日本の生活、歴史、文化等を考えると、スウェーデンのDr. Dick の言う現代的なコレクティブの４条件とは異なるものになるのではないか」　「日本での本格的コレクティブ住宅と言っている東京のかんかんの森コレクティブ住宅のように事業化までに数年に及ぶ専門家の手厚いサポートが必要とされるようでは、普及は難しいのではないか」　「コレクティブ居住において家事の合理化のうち、育児と介護が出てきたら、コレクティブは終わりだと思う。これらは一過性のものなので」「コレクティブ居住は現在のないものねだりではないか。田舎から都会に大量の人が出てきた当時は住宅にプライバシーを求めた。今はふれあいを求めている。コレクティブ神話と言えそう」。このように日本でのコレクティブハウジングの難しさを痛感する一方、実体験から「学生同士や出会いで意気投合した人たちとならコレクティブ居住はスムーズにできそう」というようなコメントもありました。

第１回から他分野、多年齢層での話題豊富な議論が交わされ、とくに学生は良い刺激を受けたようです。『くらし･住まい塾』の素敵な勉強会の始まりとなりました。

☆★「暮らしと家族形態の変化によって、住まいがどう変わってきたのか、どう変わっていくのか」を現場や文献を元に話し合う研究会です。ご関心のある方はご参加ください★☆



第１回くらし・すまい塾の様子　　'050824

住吉川物語2

天井川

中川 紺

俺の仕事は「公務員」。区役所で日々、“住民の皆様”の“苦情電話”に対応するのが仕事だ（といっても差しつかえのないくらい毎日電話対応で時間が過ぎる）。

春から配属になって、数カ月経つというのに、この部署はどうも肌に合わない。そしてそんな俺の気持ちを察するかのように、課の連中は俺と距離を置いて話をしてきた。同期のTは別の区の窓口に配属されたが、今ではすっかり笑顔をつくることに馴れたらしい。俺には無理だ。

ストレスは、たまる一方だった。一年かけて禁煙をしたというのに、ものの一週間でそれは破られ、最近は日に数回、階段横の喫煙スペースに通うのが当たり前になってしまった。もちろん一日一箱ではきかない。体調もいいとは言えなかった。

●●

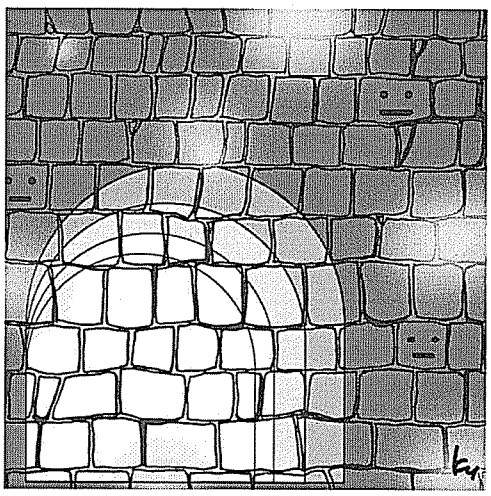
いつものタバコタイム。知らない間に、横に銀縁眼鏡をかけた初老の女性が立っていて、俺のことをじっと見ていた。

「えっと、何か私にご用でしょうか」

何言ってるんだ俺は。“役所”に用があるに決まってるだろ。

「ずいぶんとお吸いになるのねえ……。ねえ、こんなところじゃなくて、川で休憩しなさいな。いい場所があるのよ。そこのね……」

一方的にしゃべると、婦人はさっさとエレベーターに乗り込んで行ってしまった。



次の日の昼休み、俺は訳の分からないまま、でもなぜか惹き付けられるものを感じて、あの女性がおしえてくれた場所……JRが川の下を通り天井川になっているあたり……へ出かけた。鉄道を跨いでいるために、川には南北に緩やかな傾斜がついていた。両岸の遊歩道はきゅっと狭くなっていて、さらに外側には石垣がそびえていた。

その石垣に、俺はゆっくりともたれかかった。目の前を流れる川の音と、歩道の狭さが心地よかった。一服。煙をふうっと吐く。すぐ近くの駅の放送が、風に乗って聞こえてきた。少しの間、目を閉じてみた。

●●

昼休みは、ほぼ毎日出かけるようになった。ちょうど石垣に、工事か何かの時についたらしい青いペンキの跡があって、そこを定位置にした。

川通いが数カ月続いた。不思議なことに、タバコの量は段々減り、課の人とも普通に話をするようになっていった。この場所に来ることと何か関係があるのかどうか分からなかったが、無関係だとは言い切れなかった。あの老婦人に聞いてみたかったが、あれから一度も見かけることはなかった。

●●

ようやく秋らしくなったある日、俺はいつものように川にいた。タバコはもう日に数本になっていた。あっ。水の中で跳ねた何かの水しぶきがタバコの火を消した。

立ち上がると、もたれていたあたりの石垣が焦げたように変色していた。最初からこんな石だったのか、いつの間にかこうなったのかは、思い出せなかった。

「……こんどこそ禁煙できそうやな」

そうつぶやいた俺の耳に、新快速列車通過の音が微かに届いた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第７７回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは「ランドスケープと市民参加」で、８月26日（金）こうべまちづくり会館にて行われました。辻信一さん（環境緑地設計研究所）のテーマ解説ののち、次の４氏から報告がありました。

- 「デザイン共有化のためのビジュアルなプレゼン手法」／白井治（まち空間研究所）
- 「復興まちづくりにおける参加型ランドスケープｉｎ築地」／山崎満（ＵＲ大阪事務所）
- 「みんなでビオトープづくり」／門上保雄（門上環境計画）
- 「大規模公園の管理運営への市民参加の動き」／長谷川利恵子（環境緑地設計研究所）

白井さんからは、公園や建築のデザインイメージを、住民にわかりやすくビジュアルなかたちで説明するために、パソコンソフトを駆使した様々な事例について語られました。

山崎さんからは、震災復興土地区画整理事業が行われている築地地区（兵庫県尼崎市）で、住民参加による一連の公園づくりのプロセスについての報告がありました。

門上さんからは、住民参加のまちづくりの先駆けとなった真野地区（神戸市長田区）における住民参加の公園づくり－荒れ地となっていた公園の一角でのビオトープづくりと、震災で空地になった場所でのコミュニティガーデンづくり－について報告されました。長谷川さんからは、大規模な公園での市民参加のあり方、コンサルタントや行政の役割について、芦屋総合公園と播磨中央公園での実践をもとに語られました。

公園などでの住民参加はかなり実践が進んできていますが、住民参加の様々な工夫や、新たなコンサルタントの役割などが語られたように思いました。（中井都市研究室　中井豊）






報告者の皆さん。上から白井さん、山崎さん、門上さん、長谷川さん

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第４６回連絡会

・日時：10月7日(金)18:30～21:00
・場所：神戸市勤労会館４０３号室
・内容：テーマ「まちづくり系コンサルタントのゆくえ」、パネラー①まちづくり派ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ／上山卓（ｺｰ･ﾌﾟﾗﾝ）、松原永季（ｽﾀｼﾞｵｶﾀﾘｽﾄ）、②ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ派ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ／松下慶一（環境緑地設計）、門上保雄（門上環境計画）、③ｱｰｷﾃｸﾄ派ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ／高月昭子（計画工房INACHI）、森崎輝行（森崎建築設計事務所）、④ｼﾋﾞﾙｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞ派ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ／井原友建（ｳｴｽｺ）、斉藤洋三（長大）、⑤総合派ｺﾝｻﾙﾀﾝﾄ／森下真（都市計画連合）、山崎満（都市･計画･設計研究所）、コーディネータ：中井豊（中井都市研究室）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL. 078-435-6510）

●開港５都市景観まちづくり会議

・日時：10月7日(金) ～8日(土)
・場所：ホテル北野プラザ六甲荘、人と防災未来センター、他
・内容：全体会議Ⅰ／各都市紹介、講演「源平合戦と神戸」小池弘三（真言宗須磨寺派管長）、語り部と琵琶演奏「平家物語」上原まり、分科会／防災とまちづくり～港町の安全について考える～、観光交流とまちなみ景観～画になるまちをめざして～、全体会議Ⅱ
・問合せ：開港５都市景観まちづくり会議・神戸大会実行委員会（TEL. 078-322-5484）

●第４回安全・安心まちづくりワークショップ

・日時：11月12日(土) ～13日(日)
・場所：神戸市立長田中学校、他
・内容：活動発表ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ、活動発表ﾎﾟｽﾀｰｾｯｼｮﾝ、交流会・まちなか懇談会、まちあるき（新長田、御蔵通、真野、野田北部、北須磨）、テーマ別ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ、他
・問合せ：第４回安全・安心まちづくりワークショップ実行委員会事務局（地域交流センター）（TEL. 03-3580-8284、FAX. -8265）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年10月30日発行

月刊 きんもくせい

05年10月号
(50+36+NO. 31)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■新潟中越地震・旧山古志村の人たち
ー集落自治機能を生かした避難所、仮設住宅の日々

石東　直子（石東・都市環境研究室）

間もなく震災１周年を迎える９月初め東京で、元山古志村企画課長の青木勝さん（市町村合併により現在は長岡市復興推進室主幹）に中越地震後の山古志村民の避難状況やその後の仮設住宅での日々、村再建にかける思いなどをお聞きする機会がありました。私は６月に長岡市にある山古志村等の仮設住宅地を訪れたので、青木さんの話とあわせて私の印象等を記します。

●集落自治機能を生かした避難所運営

山間地域の集落は集落全体で地域を護っていく伝統的な集落自治機能がある。10月23日に地震が発生したが、26日には全村民が長岡市に用意してもらった施設にヘリコプターで避難した。誰ひとり村内に残ると言う人はいなかった。とりあえず避難所に入ったが、「被害状況の異なる集落」の人たちが一緒にいるのは、同じ心で話ができないということで、1週間後に避難所間を移動して集落ごとにまとまったので、避難所運営は集機能が働き、山の生活を避難所でもつくったと言える。

２ヵ月後山古志村の仮設住宅が長岡ニュータウンの未利用地に分散して建設されたので、集落ごとにまとまって入居した。避難村民の80%が仮設住宅に居住しており、残り20%は親戚や知り合いの家に身を寄せているが、同居生活が長くなると、仮設住宅に入りたいという人もでている。632戸、562世帯、1797人のための仮設住宅は３タイプが建設され、１ＤＫはひとり用、２ＤＫは２～３人用、３Ｋは４～５人用で、６人以上は人数に応じてタイプを組み合わせて供給し、地区・集落のコミュニティを重視した入居なので、山の生活に近い近隣関係にある。住宅以外の生活施設としては、集落ごとに１ヶ所の集会所、診療所、ディサービスセンター（後から建設）と、仮設住宅の入口近くに行政支所（旧山古志村役場、現在は長岡市役所支所）と交番が設けられた。また、理髪店、美容院、たばこ屋は、自営業者の生活保証として出張営業ということで認められたが、店舗は法制度上建設できないので仮設住宅の自室を使って営業している。

●山の生活

集落と農地は一体のもので、老人が元気なのは毎日畑に通っているからで、ここでも仮設住宅地のすぐそばの土地に３ヘクタールの農地を作り、野菜や花を植えている。村の伝統産業に錦鯉と闘牛があるが、錦鯉は１歳魚、２歳魚と毎年続かなければならず１年休むと次に続かないので、長岡市内に池を自力で造った。池造りも先祖からの知恵を受け継いだ適切な造り方があり、コンクリートで固めればいいと言うものではない。闘牛は仮設牛

舎を作り、残った牛を集め、５月６日には第一回闘牛を開催した。

●集落再建に向けて

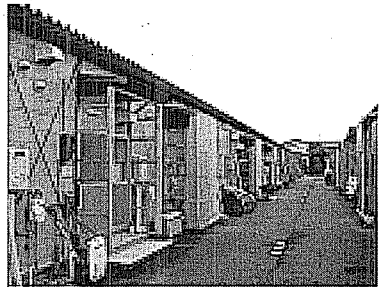
地震による中山間地域の地盤災害は傾斜地なので復興にはかなり時間がかかるので、仮設住宅住まいは２年では終わらないだろう。今回の地震を千載一遇のチャンスとして、今までやろうと思っていたがやれなかった集落再建、村おこしがやれると思っている。例えば、住宅再建ではなくて集落再建として除雪可能な１本の道路の沿道に住宅を建て、集落機能の中に罹災者用の戸建ての公営住宅を集落ごとに建てたい。なお、仮設住宅に住んでいる時間は山に帰る準備段階ととらえており、これまで野菜を作ってもスーパーに売ることはなかったが、今、生産組合をつくり「長岡野菜」の研修をしており、山に帰った時に野菜をスーパーに卸すことはできないかという村づくりも始めている。

村民は仮設住宅住まいであってもあせっている人はいない。仮設住宅でどれだけ長い時間過ごせるかが、今後の住まいを考えるいい機会だと思っている。集落再建には自力でやっていかなければやれないことがあり、村民には行政には頼ってはおれないという気持ちが強い。

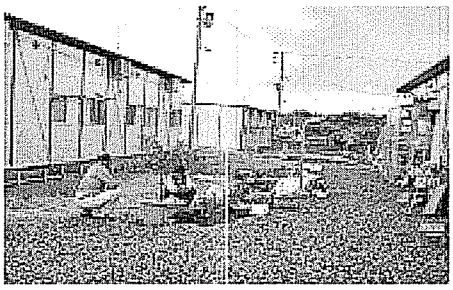
●仮設住宅地の風景

仮設住宅の配置はいずれも兵舎風平行配置だが、神戸の仮設住宅地に比べてなぜかのどかな雰囲気だった。私が訪れた日は震災後初めて泊りがけで村に帰り、田植えの準備をするということで、仮設住宅地には人影が少なかったが、二人、三人と立ち話をしたり、住宅前の花壇やミニ菜園の手入れをしておられ、私の話しかけにものんびりと応対があった。「こののどかな雰囲気はなぜかしら」と、ずっと不思議に感じていたので、青木さんに伺うと「村民はこうなった運命を達観している。あせっていない。それに山の暮らしの隣人たちと一緒なので日々の心配はない。一年のうち何ヶ月も雪のため動けないので、神戸に比べると復興には時間がかかるものと思っている」と。各戸の住宅の入口には雪よけの囲いがあり、多くの住宅はそこに畑仕事の道具や肥料などが置かれ、美容室や散髪屋の看板があり、タバコ屋の旗がなびき、外壁いっぱいに錦鯉が泳いでいる（絵）住宅があり、私には物珍しい風景だった。

住まい方は保守的なものでなかなか変革が難しいが、近年は各地で多様な住まい方がでてきているので、これまでの一世帯一住宅の供給に加えて、高齢化が進む山の暮らしで体力が弱体化しても安心して暮らせるような新しい住まいづくりへの挑戦をしてほしいと私は願っています。



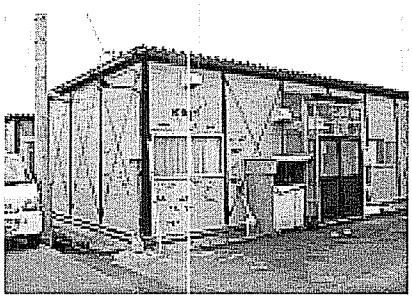
雪よけ囲いがある仮設住宅入口



土いじりしながらのんびり話



ヘヤーサロンの営業



錦鯉が泳ぐ外壁

■第2回 シルバーハウジング制度を学ぶ

稲見　直子（大阪大学大学院）

第2回くらし・すまい塾は、9月28日（水）午後6時より行いました。今回の議題は前回と同様、「日本におけるコレクティブハウジングの可能性」について、以下のテーマをもとに議論を交わしました。

1．日本の人口減少や世帯構造の変化について

2．参考書籍「家族と住まない家」について

3．その他、住宅や家族にまつわる社会制度について自由に意見交流

なかでも、今回の勉強会では「シルバーハウジング制度」という住宅制度が話題に上がりました。震災復興公営コレクティブ住宅（ふれあい住宅）は、「高齢者住宅のモデル」として事業化され、ほとんどの住宅にシルバーハウジング制度が適応されています。その背景には、被災者の多くが低所得者・高齢者であったこと、復興公営住宅にコレクティブ住宅を導入するには国の住宅建設制度がなく、新しい制度を創設するには時間的にも難しかったことなどが挙げられます。そこで、「シルバーハウジング制度」とはどのような制度なのかを学び、その制度が抱える諸問題について話し合いました。

○シルバーハウジング制度とは？

「シルバーハウジング制度」は、1987年、当時の厚生省と建設省により創設された制度で、「住宅施策と福祉施策の連携により、高齢者が地域社会の中で自立して安全で快適な生活を営むことができるように、ハード・ソフト両面にわたり高齢者の生活特性に配慮した住宅をモデル的に供給するもの」です。具体的な特色としては、(1)　緊急通報システム・手すり・開閉の容易な引き戸・生活相談および団らん室等の設備の設置、(2)　生活相談員（LSA：ライフサポートアドバイザー）の配置等の基本サービスの提供、などがあります。なお、LSAの具体的な仕事としては、(1)　生活指導・相談、(2)安否の確認、(3)一時的な家事援助、(4)　緊急時の対応、などが挙げられます。（復興まちづくりキーワード集　阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク著　1999年発行より）

○シルバーハウジング制度の課題

このように、シルバーハウジング制度は、元厚生省と元建設省の両省が、これからの日本の高齢社会を見据えたひとつの対応策として取り組んでいる画期的な施策です。しかしながら、震災後、多くの公営住宅にシルバーハウジング制度が導入されるなか、さまざまな問題が生じてきているのも事実です。なかでも、LSAが行っているサービスの対象はシルバーハウジング制度の住宅の居住者に限られているため、一般住宅とシルバーハウジング制度の住宅とが併設された建物では、一般住宅の居住者（その多くは高齢者）は不公平感を抱いてしまうという問題が生じています。またLSAの重要な役割としては「居住者への個別対応の基本業務だけでなく、コミュニティ育成（居住者同士および地域との交流事業）」という任務が必要とされる一方、LSAからは専門職としての研修や社会的に認められた職能の確立が要望されており、震災後、県下のLSA有志により「ＬＳＡ連絡会」が結成され、検討交流会が定期的に行われているようです。

○本日の参加者の一言

「コレクティブ住宅の事業化に際してシルバーハウジング制度を適応したことは、本来のコレクティブの特性を活かしていく上で、いくらか課題を作ってしまったのではないか」「一般住宅とシルバーハウジング制度の住宅における（LSAによる）サービスの不公平感を解消するために、介護保険制度が利用できないか」

神戸のみどり・その2『六甲山植樹 100 年・下』

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

6．六甲山と災害

（1）山火事

昭和 3 年(1928 年)、灘区高羽から芦屋川上流までの区域 500～600ha を消失する山火事が起こっている。住吉村は「秘蔵の原生林」を失っており、翌年から約 100ha の植林と防火帯の整備を行っている。また山麓の自治体が協同して「六甲山系火防協会」を組織して山火事の早期発見に努めた。防火帯については明治の植林開始時から山火事の延焼を防ぐため設けてきたが、4～8m の防火帯の外側にさらに 7～8m の帯状のヤマモモ、マテバシイ、ユズリハ、サンゴジュなどの防火樹林帯を設け、延焼の防止に努めた。この防火帯の管理は今日も続けられている。

（2）土砂災害・水害

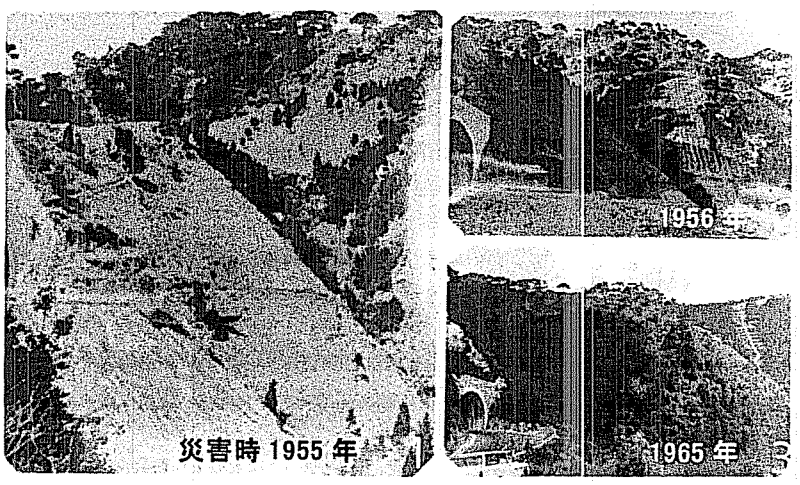
六甲山系の土砂災害は 30 年周期で繰り返されるといわれている。六甲山において本格に近代的砂防工事や治山事業が始まったのは昭和 13 年(1938)7 月の「阪神大水害」のときからだ。それまでは植林が行われてきたにもかかわらず、災害を忘れた乱伐が繰り返され、多くの被害を受けた。このあとも昭和 42 年(1967)7 月の大水害などを経験する。私たちは土砂災害防止のためにもさらに植林を続けていかなければならない。そのためには、今ある森林の改造が必要であり、災害に強い森林を作るための継続した地道な森林の手入れが必要である。人の手によって創られた森林は人の手で管理しなければならない。

（3）地震

六甲造山運動が始まって約 200 万年が経過している。今、六甲山最高峰の標高は約 931m である。平成 7 年(1995 年)1 月 17 日午前 5 時 46 分の「阪神・淡路大震災」では 13cm 隆起したという。単純に換算すれば、今の山容になるまでに今回の規模の大地震が 7,000 回以上もあったことになる。ただ人間が忘れてしまっているだけだ。この地震で六甲山系は約 770 箇所の崩壊地が確認されたが、市街地から眺める六甲山は厳然と存在し、私たちの心のよりどころとなった。

7．国立公園の編入

第二次世界大戦後、昭和 23 年(1948 年)に六甲観光交通委員会が結成され、昭和 27 年(1952 年)には新池スケート場、六甲山牧場、六甲ゴルフ場が再開した。さらに昭和 30 年(1955 年)には奥摩耶ロープウェイが開業するなど次第に復興していった。そんな中、昭和 31 年(1956 年)5 月 10 日六甲山は六甲山地区として瀬戸内海国立公園の一部に編入された。このことにより、大都市に近い国立公園として六甲山の自然の保全と適正な利用が自然公園法に基づき行われるようになった。それはそれからの六甲山の未来を変える大きな契機となった。そして現在、国立公園である故に自然はある程度守られているが、十分でなく、これからの六甲山はどうあるべきか、その保全と適正利用についてそれでいいのかという問題を抱えている。国立公園の存在は六甲山を魅力ある観光資源とし



て復元するためにはどうしたらよいのか、議論する上で大きな課題となっている。

８．市民活動による六甲山緑化

明治初期に居留外国人によって提唱され、六甲山植樹の市民植樹は今も続いている。また大都市に隣接して存在する森林の価値がいわゆる「里山」として大きく見直され、都市林の整備が大きく唱えられている現在、市民の都市林・六甲山緑化に対する関心は高まっている。

昭和 30 年(1955 年)、第二次世界大戦により手入れもされず荒廃した六甲山の市民の手による植樹が始まった。それは阪急百貨店の清水雅社長が提唱した六甲山を緑のオアシスしょうという「六甲を緑にする会」の運動だ。また「六甲の緑化はまず地元のわれわれが……」という思いから始められた国立公園六甲山地区環境保全要綱の緑化協力事業もある。六甲山地区にホテル、山荘などを建てるときに建設費の 1%を基金に積み立て六甲山を自ら緑化しようとするものだ。しかし、近年の金利の低下や六甲山から撤退する企業の増加やまた逆に進出する企業の極端な減少によりその運用はかなり困難になっている。

神戸では居留外国人の影響を受けて、六甲植樹の黎明期から市民による登山道の植樹が行われてきた。毎日登山の会のハイキングコース管理会や六甲全縦走市民の会は今も修景樹や防火樹の植栽を続けている。

その他、阪神・淡路大震災後、「ドングリネット神戸」「こうべ森の小学校」「こうべ森の学校」「雑木林会議」などさまざまな緑化市民活動が始まっているし、企業のよる社会貢献の一環として名ブランド「六甲山」への 100 年の将来を見据えた貢献も始まっている。今後もこのような新しい形の市民運動が裾野を広げていくと思う。

９．再度山永久植生保存地

昭和 49 年(1974 年)国際植生学会が神戸の再度山と森林植物園で行われた。そのとき、ドイツの世界的な植物学者チュクセン教授から再度山を「植栽した樹種、本数、面積などが記録され、禿山から緑が復元されてゆく様子が写真で残されているのは貴重である。
植生を観察する場所として保存することを考えてみては？」と提案を受け、神戸市ではその後、5 年ごとに調査を神戸大学に委託し調査を継続している。このことは自然観察の事例として世界的にも貴重な調査だと思う。

１０．みどりの継承　～これからの 100 年～

六甲山植樹は 100 年経ったが、まだ道半ばといえる。この森林が本当の意味で定着するのはまだ 70～100 年かかる。100 年目の今を生きる私たちは後世の人たちから何をしていたのだと言われないように、今すべきことをしなければならない。100 年目を考える市民懇話会は下記の提言をしているので、それを掲げこの章の結びとしたい。

- 過去 100 年の取り組みを見つめ直し、これからの 100 年に向けた長期的視野を持つ。
- 市民生活と密接に関わる「ふるさとの山」として六甲山の緑を育て次代に継承していく。
- 自然と人々との共存をめざし保全と利用のメリハリをつけて六甲山の緑化活動を発展させる。
- 人の手によって継続的に森林を育成し、量から質への転換によって質の高い森づくりを行う。
- 自然や環境や人に関する学習の場所として活用を図る。


六甲山市民植樹の活動

■Dr.フランキーの街角たんけん 第18回 幻の銅御殿

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

読者のみなさまは、本誌 50+36+5 号の「上山手通」の回でご紹介した山本通5丁目の銅御殿のことを覚えておいでだろうか。相楽園北側の元諏訪山ゴルフセンター跡、14階建高層住宅が建っている敷地にあった、実業家・湯浅竹之助の「銅御殿」である。

本題に入る前に、湯浅竹之助の経歴を紹介する。明治3（1870）年、現在の和歌山県有田郡湯浅町に生まれた竹之助は、幼少のころから行商などで生家の生計を助けていたが、十五の年に横浜の貿易商「増田屋」に入店する。ここで貿易取引の実務を叩き込まれた竹之助は、やがて独立の決心を固め、増田屋当主の弟・中村房次郎のとりなしもあったのか円満に店を出た。ばかりでなく、慰労金として七千円（当時）を主人から贈られた。手元の貯金一千円と合わせ八千円を懐に、竹之助は神戸へ赴き栄町通3丁目に有田屋商店を開店する。明治 31(1898)年のことである。

居留地の外国商館から仕入れたメリケン粉の販売を手始めに、砂糖、外国米と手を広げ、浮き沈みはあったものの、大陸との貿易で第一次世界大戦で巨万の富を得た。砂糖は、神戸製糖株式会社を設立、神戸・尻池に建設した工場へ台湾から原料を運んで製造・販売した。現在の台糖神戸工場（深江浜）の前身である

大正5（1916）年頃、栄町通3丁目の本店を煉瓦造建築に改築し、更に山本通の地所を買収して建設した自邸が、「銅御殿」だった。

「上山手通」の回では、最近まで残っていた鉄平石貼の外構だけ紹介したが、その後、いくつかの写真資料が見つかった。

一つは昭和5年頃に諏訪山金星台から市街地を撮影した写真に、「銅御殿」湯浅邸洋館の全景が写っている（写真1）。大正 11（1922）年、来神したエドワード皇太子の宿泊所に選ばれただけのことはあり、東側にベイウインドウ（弓形出窓）を備えた真壁造の壁体と、とんがり屋根の塔屋、複雑な形状の屋根に煙突というピクチャレスク（絵画的）な味わいのある洋風住宅の様子が伺われる。もう一つは平尾善保の「最新住宅読本」（昭和 13 年）で、鉄平石の外構の事例として湯浅邸が紹介されている（写真2）。

栄町通の本店（写真3）と、この銅御殿の洋館は、いずれも古典的な英国系のデザインであるが、設計者の名はいずれもいまだにあきらかにはなっていない。「銅御殿」こと湯浅邸は、（当時は武庫郡であった住吉・御影・本山を除けば）、神戸市内で、日本人のために建てられた大規模な洋風住宅のさきがけをなすものである。

第一次世界大戦後の反動で、竹之助は巨額の負債を背負うが、会社を整理することなく昭和 18（1943）年に完済した。しかし昭和 20（1945）年の神戸空襲で、栄町通の本店が罹災、竹之助が精魂傾けた銅御殿も灰塵に帰した。震災後、栄町通の旧本店建物が取り壊されて、湯浅竹之助の足跡は、もう神戸に残されてはいない。

（この項終わり）

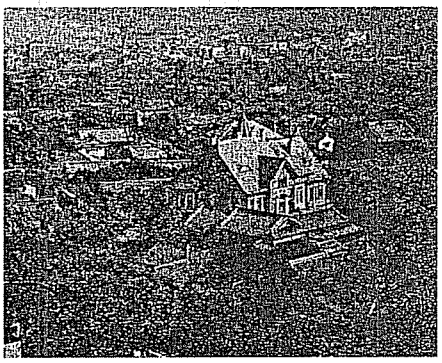


写真1 金星台から見た湯浅邸
（「大神戸」（赤田庄之助著）より）



写真2 昭和10年代の湯浅邸西側（「最新住宅読本」より）

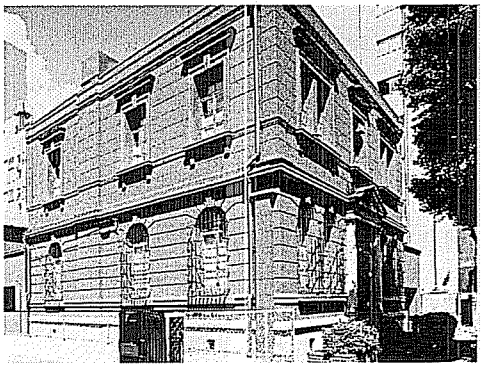


写真3 旧湯浅商店
（杉原産業ビル、平成10年解体）

住吉川物語3

十円玉の時間

中川　紺

コンビニで雑誌を買った。手渡されたおつりの十円玉に刻まれている年号が、中学時代のある出来事を思い出させた。

●　●

それは中三の夏休み。夜はいつも二階の自分の部屋で勉強していた。週に二回は塾へ行ったけれど、私は自宅の方が集中できるので好きだった。勉強している時間は、家中が静かだ。父は小児科医で当直が多い。母は私に気を遣っているのか、最近テレビをイヤホンで聞くようになった。もっとも多少うるさくても別に気は散ったりしない。その時、私の耳に入る音は、時計の秒針音だけ。

針は九時二十分を指していた。いつものように私は階段を静かに降りて、こっそり家を出た。近くの川に架かる橋を急いで渡る。向かうのは向こう岸沿いの公衆電話だ。

こうやって毎晩、この時間になると私は出かけた。母親は十時の夜食までは絶対に部屋をのぞきに来ない。

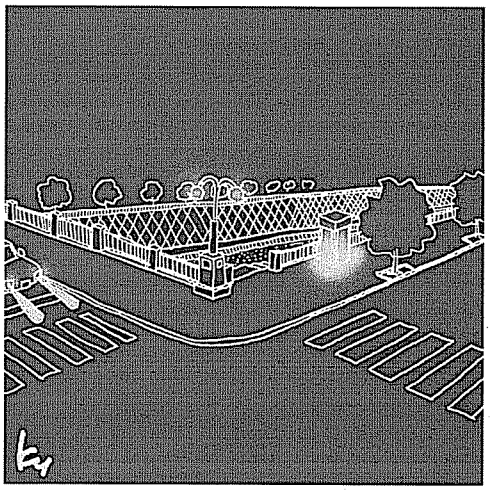
しん、と静まり返った道路沿いで電話ボックスは不思議な光を放っている。そばに立っている街灯は電球が切れかけているらしく、ついたり消えたりをくり返していた。

私は受話器をあげると、硬貨を入れて、指が覚えている番号をプッシュした。

もしもし。1コールでFが出た。

●　●

Fと私が付き合っていることは、両方の親だけでなく学校の誰もが知らなかった。そもそも同じクラスにはなったことはないし、共通の知り合いもいない。獣医に興味がある私が時々のぞきに行く動物のお医者さんのところに、たまたまFが下痢をした飼い猫をつれてきたのが、きっかけだった。キジトラの子猫で、眼差しがどことなくFに似ていた。



猫を介して私たちは少しずつ仲良くなった。私は学歴重視の親にうんざりしていると言い、Fは親がまったく自分に無関心であることを話した。

電話を思いついたのは私の方だった。Fの母親は九時を過ぎると夜の仕事に出かけると聞いたからだ。父親は早くに亡くなったらしいので、毎晩九時過ぎになれば家にはFが一人で留守番をしている状態だった。

九時半からきっかり十分。それが私たちの電話の時間。ケータイなんて無かった時代。話すことはいくらでもあった。「歴史の年号のゴロあわせを思いついた」でも「最近読んだ本」についてでもいい。

私が好きな話題は、Fが話す「猫のユーリ」のことだった。

専用の小銭入れにはいつも十円玉を切らさないようにしていた。茶色のコインが私とFをつないでいた。

そうやって一生懸命大事な時間を共有していたはずなのに、知らないうちに私たちは離れていってしまった。理由は今思い起こしてもあまりよく分からない。受験か、親か、単に飽きたのか、面倒になったのか。

●　●

最後の電話の日。帰り道で橋の上から、財布に残っていた一枚の十円玉を川に沈めた。

硬貨には昭和四十七年とあって、その年号が、私たちが生まれた年であったことが、妙に悲しかった。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第４６回連絡会報告

今回のテーマは、「まちづくり系コンサルタントのゆくえ」で、当ネットワークでは初めて取り組むテーマでした。まちづくり系コンサルタントを勝手に５分類し、各２名総勢１０名の方々に語っていただきました。

<パネラー>
①まちづくり派コンサルタント
上山卓（コー・プラン）、松原永季（スタヂオカタリスト）
②ランドスケープ派コンサルタント
松下慶浩（環境緑地設計研究所）、門上保雄（門上環境計画）
③アーキテクト派コンサルタント
高月昭子（計画工房 INACHI）、森崎輝行（森崎建築設計事務所）
④シビルエンジニアリング派コンサルタント
井原友建（ウエスコ）、斉藤洋三（長大）
⑤総合派コンサルタント
森下真（都市設計連合）、山崎満（UR 大阪）（敬称略）
<開催日時・場所>
１０月７日（金）18:30～、神戸市勤労会館

「まちづくり系コンサルタント」は、不況のあおりや自治体の財政悪化などの様々な要因で、苦境にたたされています。一般的にはこのように言われていますが、まちづくり系コンサルタントの職種、所属する事務所等の規模、年齢などでどのような違いがあるか、それぞれにどんな努力をしているか、今後の展望はどのようなものか等について、お互いに知り合い、語り合う機会として今回の会合がもたれました。

パネラーから語られた内容は多岐にわたり、とても言い尽くせませんが、印象に残ったことをかいつまんで言うと、多様な市民参加、コンサルタント同士の連携、復興事業が一段落しての仕事の減少、大きな仕事からよりきめ細かな仕事の増加、コンサルトとしての仕事を見つける努力、行政頼りでなく新たな事業の展開、“アーキテクト派”の元気さ（人選によると思われますが）などがあげられます。司会者（筆者）のまずさから最後は時間がなくて充分な討論が出来ませんでしたが、いずれの機会に第２ラウンドを行いたいと思うような会合でした。

（中井都市研究室　中井　豊）



連絡会の様子、2005.10/7、於：神戸市勤労会館

■ 情報コーナー

●<旧乾邸>活用応援倶楽部･2005 年度総会、他
・日時：11 月５日(土)10:30～16:00
・場所：旧乾邸（神戸市東灘区住吉山手５）、他
・内容：総会（15:00～16:00）、小原流の挿花鑑賞（10:30～）、小原流豊雲記念館見学（13:00～）
・問合せ：<旧乾邸>活用応援倶楽部事務局（遊空間工房内、TEL. 078-261-0337 野崎）

●フォーラム「地域と NPO による防災まちづくり」
・日時：11 月 12 日(土)13:30～16:30
・場所：尼崎市立労働福祉会館中ホール（阪神尼崎駅より五合橋線を北へ約７分、TEL. 06-6481-4561）
・内容：基調講演「地域と NPO による防災まちづくり」室崎益輝（消防研究所理事長、神戸まちづくり研究所理事長）、報告「地震火災ハザードマップ」（神戸まちづくり研究所）、地域と NPO による防災まちづくりの事例報告（日本災害救援ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱﾈｯﾄﾜｰｸ、ｼﾝﾌｫﾆｰ、旧居留地連絡協議会、ﾌﾞﾚｰﾝﾌｭｰﾏﾆﾃｨ、尼崎、宝塚の地元自治組織、東京向島関係）
・問合せ：神戸まちづくり研究所（TEL. 078-230-8501）

●第 14 回都市環境デザインフォーラム関西「都心のまちづくり、その担い手」
・日時：11 月 12 日(土)10:00～17:00
・場所：アクセスホール（地下鉄御堂筋線淀屋橋駅 11 番出口すぐ）
・内容：基調講演／箕原敬（箕原計画事務所）、パネルディスカッション、他
・問合せ：都市環境デザイン会議関西ブロック（前田）（TEL. 075－342-265）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm
◆ http://www1. plala. or. jp/hos_a/kinmokusei_international. html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年11月30日発行

月刊 きんもくせい

05年11月号
(50+36+NO. 32)

発行 ： 阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■中越地震一周年シンポジウム報告

澤田　雅浩（長岡造形大学）

新潟県中越地震からほぼ一年が経過した平成17年10月22日（土）、一周年記念シンポジウムが長岡造形大学を会場として開催されました。当日はあいにくの天候にもかかわらず、約100名の方が参加し、熱心な議論がなされました。これは震災から半年の4月23日に小千谷市で開催された産官学リレーシンポジウムの延長線上にあるもので、その際報告いただいた行政や学会、中間支援組織からこの半年の状況を踏まえた発表が行なわれました。ここではその経過をかいつまんで報告します。

行政からは復興計画の概要や、復旧・復興関連事業の説明が行なわれ、特に旧山古志村を対象とした「よりみち街道」の提案や低価格で地域風土に根ざした住宅モデル案が報告されました。また、学会提言が正式に公表されたばかりの建築学会からその紹介があり、地方都市、中山間地域での防災対策・災害復興のあり方に関する視座が提示されました（詳細は建築学会のホームページをご覧ください）。また、被災地で活動を展開する中越復興市民会議と中越ひまわり基金公設事務所からは、設立直後の報告であった半年前からこれまで、精力的に展開された活動の報告ならびにその経験を通じた問題点や今後の課題などが報告されました。そこでは継続的な支援や、この地域の被災者にあった支援策の重要性が指摘されました。また、阪神や東京からの報告では、大規模災害時に行なわれる各種法制度の「運用」による支援の拡充を、制度としてきちんと位置づける重要性が半年シンポと同様に力説され、中越地震の被災地も被災地責任としてこれらの問題にも積極的に関わる必要性と重要性が認識されました。

全体を通じた総括討論では、中越地域の特徴と復興に関する諸問題が議論されました。震災前後に大規模な合併が行なわれた被災地におけるその影響に関する議論や、日本有数の豪雪地帯である中越地域での冬の期間を見越した復興のあり方、または少子高齢化、過疎化の進展する中山間地域における復興のあり方、そして復興に際しての財政収支の問題など、議論は多岐にわたり具体的な結論を得るには至りませんでした。その中で、特に中山間地域の問題を解決しながら復興に取り組む姿勢として、「特殊解」の積み上げが重要であるのではという興味深い発言がなされました。復興に際しては日本の中山間地全体の今後の再生に関してのモデルとなることも重要であるが、とにかく復興の可能性を持つ地域ではその対応に全力を挙げるべきだという趣旨の発言で、復興に対する姿勢として重要な指摘であったと思います。その一方で、復興に関するさまざまな活動や提言を束ねていくパラダイムの共有の重要性も指摘されました。残念ながらこの議論に十分な時間を割くことができませんでしたが、今後も重要となる点であろうと思います。

今回も被災地内外から多様な参加者からの熱のこもった議論が展開されたおかげで、地域の復興に向けてより一層の活動を展開していくきっかけとなりました。次回は1年半後の来年4月23日に開催予定です。その際にはぜひ皆さんも中越へ足をお運びいただければと思います。

■『コンパクトシティ』を考える16

－コンパクトシティ（COMPACT CITY）の３つの概念①

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

はじめに

ＥＵでは持続可能な都市形態として「コンパクトシティ」が一般的な政策として採用されることとなった。しかし、実現しようとする具体的なコンパクトシティの都市形態は、各々の国の都市の発展経過の違いと「補完性原理」の尊重で、その形態は様々である。いいかえれば、各々の国が求める「コンパクト」性が異なっている。

これがコンパクトシティの概念を不明確にしている要因となっている。そこで、今回から３回に分けて、研究会で議論してきた「コンパクトシティ(COMPACT CITY)」の概念を整理したい。

１．工業社会からのパラダイム転換

工業社会とは、「絶え間ない技術革新によって国民一人あたりの生産量あるいは消費量を持続的に増加させることができる社会」といわれてきた。特に、第２次大戦以降、欧米諸国は国家が主導的に生産拡大をコントロールしながら、国富の増大に力を入れてきた。それは、資本主義であろうと、共産主義であろうと大きな差がなかった。より確実に実現できたのは、中央集権型の構造を採用できた国々であった。英国や戦後の日本がその典型である。

国家主導で工業化を促進するためには、限られた資本、資源、土地、労働力等を成長可能な分野に投入し、比較優位を獲得し、国際競争力を維持しなければならない。その際の基準の一つが「いかに効率性を図るか」であった。それは国土計画、都市計画に反映され、工業化に適した地域に、港湾や鉄道、道路などの社会資本を整備し、技術革新に適合する工場設備や、それを支えるサービス産業を有機的に連結させてきた。

工業社会というパラダイムによる経済成長は、都市の成長すなわち「郊外化」による都市圏の拡大を余儀なくさせ、しかも中心部は工業や商業機能、郊外部は住宅機能という機能分化が避けられなかった。郊外へは鉄軌道や道路が放射状に建設された。国家が都市計画権限を持つ「都市計画法」が、工業、商業、住宅の用途を区分（ゾーニング）し、土地利用規制を行い、必要となる都市施設と開発事業の計画と実現化の法的担保性を与えた。英国や日本の集権型の工業社会においては、必然的に母都市を中心とした「メガロポリス」が形成されることとなった。

パラダイムの転換は、1970 年代のドル・ショックに端を発した。ドルの変動相場制で、各国は産業の比較優位を確保するには、国内の産業の再配置ではなく、コストの安い国での生産体制の確立というグローバル化が避けられなくなった。それは国内での持続的成長の停止であった。もう一つは、90 年代の少子高齢化の中で人口収縮社会への転換であった。さらに、もはや限界点に達した地球環境問題とりわけ温暖化に対して化石燃料の消費削減が国家の重要な課題となった。

２．都市のコンパクト性の追求

グローバル化で中心都市への産業の集積が弱まり雇用機会が減少する。人口収縮社会では都市は人口圧力から開放され郊外化の意義が希薄になっただけではなく、密度の低下や空地の点在化が顕著になってくる。メガロポリスの解体を迎えることとなる。

このように成長社会から持続可能な社会への転換を軟着陸させるには、一点集中型の都市構造を、分節化し、各々の地域をコンパクトにまとめ上げなければならない。

求められる「コンパクト性」とは、第１が地域が自立できる都市の区域、例えば水系、交通網でまとまることと、地域を自律的にコントロールできる分権化された自治権と住民の参加（公選による首長や議会）が基本となる。地域がまとまるためには必ずしも都市の人口規模に左右される必要はない。重要なことは、自治権による都市自身の

マスタープラン（ローカルプラン）を築き上げて実施することである。

第２には、地域として望ましい「生活の質」を住民自身が設定し、自覚することである。「コンパクト＝密」であると考えられるが、コンパクトシティを巡る論争、すなわち「高密型都市か低密型都市か」でも結論がでていないように、互いに長短がある。特に、情報化時代となり、インターネットで情報の入手・選択を居ながらにして可能になり、これまでのように大都市に集積する必要は無くなっている。自動車の燃料消費の面からも、過度の集中による渋滞の発生等で、必ずしも高密型が適しているとも言い難い。アメリカでは、中心都市への企業の集積をコントロールする「成長管理政策」が 80 年代から実施されている。「過密から得られるものは何もない（アンウィン）」と言われる。地域にとって「必要とするものが適度に詰まっている密度」が重要である。

第３には、地域が一つにまとまるためのアイデンティティをもつ中心地域の設定と育成である。都市が発生するまでには、必ず歴史的経過があり、街道筋、河川港、港湾、城、寺院など人口が集住する要因があった。必ずこれらの存在を示す歴史的文化財が存在する。こうした歴史と、上記２点を加味すると、自治権を持つまとまった地域で、地域の実情（利便性重視の高密度型・環境重視の低密度型）に合った各々の「生活の質」を満足させる中心市街地（タウンセンター）の充実が必要である。自立に可能な産業と雇用があり、必要な行政サービスや商業サービスが受けられる。理想的に言えば、自転車や公共交通機関で行ける範囲に、日常生活で必要とする７割程度が満たせることである。残りは、より広域的に自動車や鉄道に乗るか情報手段で達成されればよいと考える。

以上の３点を総合的にまとめると、「コンパクトシティ」の第１の概念とは、「生活の質を維持するための必要なものが適度に詰まったコンパクトな(COMPACT)都市(CITY)」である。そのためにはまとまった地域の設定と分権化された自治権、住民の直接参加意識の高揚が必要である。

３．コンパクトな都市を目指して

コンパクトな都市のモデルとして、ヨーロッパ中世城壁都市から発展したドイツの都市が例示される。それには、ドイツが集権型国家になれなかった歴史的経緯がある。ドイツはルターから始まった宗教改革(1519)で、国内が新教と旧教に分かれて争い、宗教戦争（30 年戦争：1618-48）の結果の和議で、封建領主の信じる宗派を選択することとなった。このため、ドイツは２宗派がモザイク状に分布する分裂国家となり、近代化のための「国民国家」への道が 19 世紀まで途絶えた。その結果、分権型国家として発展し、産業革命後も、都市は中世城壁都市の伝統を守り、中心部に大聖堂や広場、都心居住というコンパクトな都市の形態が維持されてきた。

集権型国家の英国では、20 世紀当初に、コンパクトシティのモデルに例示されるハワードの「ガーデンシティ（田園都市）」が提唱され、レッチワースが建設されたが、後続が生まれなかった（本誌 04 年 9･12 月号参照）。しかし、近年ブレア労働党政権(1997～)のもとで、ＥＵの政策を受け入れ、分権化を進めようとしている。国を 12 の地域（州のようなもの）に分け、各々の地域に独立した公選の議会を置き、権限を国から委譲し、地域主権の確立を目指そうとしている。さらに、素人主義でボランタリーな地方議会議員で構成される地方自治体に、強力なリーダーシップを発揮する直接公選首長や専門性や実務に精通した議員による議会活動を目指す改革を進めようとしている（本誌 05 年 3 月号参照）。

集権型の日本は、明治維新で分権型の藩を廃止した府県制(1871)と、不平等条約解消と近代国家を目指すために設置された市町村制(1888)を引きずる形で、近代化・工業化を達成してきた。大戦後の日本国憲法では地方分権は規定されたが、権限は委譲されなかった。コンパクトシティを目指すには、都市のコンパクト化と合わせた地方分権と住民参加の拡充は不可避である。

■真野モーニング徒然

田中　奈美（神戸芸術工科大学）

●真野とぼっかけコロッケ

2004 年の春、神戸芸術工科大学に勤務するため神戸市内に転居をした。それ以前に神戸を訪れたのは学生の頃に学外実習で滞在した数日のみで、残りは阪神大震災時にテレビに映される街を驚きとともに観た記憶以外にはなかった。

職場も生活もあわただしく始まった４月に、まちづくりシンポジウムにて石東直子さんとお会いしたのを縁に、大学院の担当授業での「ふれあい住宅」の紹介をお願いした。この特別授業として、約 10 名の学生と初めて久二塚西、真野の各ふれあい住宅を訪れた。

初めて歩く長田、特に久二塚から真野までの界隈は再開発事業による新しい街と震災の跡も残る古い街が混在しており、神戸がまだ震災復興の途中にあることを改めて意識した。

いずれのふれあい住宅でも共同室にお邪魔したが、これまでにも注目を集めているとはいえ、いずれの自治会長さんも快く見せてくださったことは非常にありがたく、学生も多くを得た印象であった。

しかも真野ではお茶と牛筋の入ったぼっかけコロッケをご馳走になるという寛大なもてなしを受けた。図々しく住まいに見学にやってくる我々に対して疲れて空腹だろうと用意してくださった自治会長　李さんの暖かい心遣いは、身にしみて、その人柄に一目ぼれをした。この時に月２回のモーニングが開催されている話を聞き、何かお手伝いができないものかと考えた。幸いにも同様の思いを抱いた学生が数名おり、６月以降のモーニングを数名で手伝うことが約１年半続いている。皆、一様に李さんの人柄に魅せられたわけである。

●モーニングの面々

毎月第１、第３日曜日の朝 7 時から始まるモーニングには様々な人が集まる。100 円で提供する飲み物、パン、バナナ、ゆで卵の朝食には真野ふれあい住宅の居住者のみでなく、近所の住宅居住者、遠くは湊川からバイクで来る人もいる。時には地元出身の市や県議会議員も顔を出す（写真１）。

年齢もバラバラで、最高齢者は 90 歳代のふれあい住宅の女性で、歩行器を使いつつも毎回、１階の自室から自力で共同室まで訪れる。この１年半の間に一時期入院した時期を除きほぼ毎回モーニングに顔を出し、決まった席で数名の同じ住宅内のご婦人方と１時間ほど歓談して過ごす。

近隣の住宅からの参加者は、一番乗り（時には 6 時台）に現れる 80 歳代の女性を筆頭に、同じ住宅から供だって訪れる２人や３人程度のグループが数組ある。男性 2 人組の常連さんの一人は時々、手づくりの鉢細工（色つきプラスチックで花や木を再現）を真野の共同室に提供してくれる（写真２）。この鉢細工は共同室を明るくするアクセントとなる。

目が少し不自由なご婦人も常連さんの一人だが、一緒のテーブルを囲む相手はほぼ決まっており、どちらかが先に来た時は相手が現れるのを待って、歓談をして過ごす。

湊川からバイクで来る男性は、長田区や兵庫区のあちらこちらで開かれているモーニングの達人で、平日の木曜日以外はほぼどこかでモーニングが開かれていること、料金は大抵 100 円から 200



写真１

円の間であること、メニューもほぼ同様であるが、場所によってはバナナが半分、サンドイッチを出すということなどを教えてくれた。

この男性は湊川の自宅で奥様と２人暮らしということであるが、「お互いどこに住んでいるかはよく知らないけど、ここに来ると皆に会えるからね」という言葉からの推察で、一人でモーニングを渡り歩く心は、各所で出会う常連さん達との交流にあるのではと感じた。

同様な印象は他の参加者からも受ける。特に冬場の最も寒い時期でも外の住宅から徒歩で参加する人達がいることを不思議に感じていたが、その目的は誰かに会って、少しの時間でも話をしたり、聞いたりして過ごすことにあるようで、「家にいてもテレビばかり観て過ごしてしまう」、「テレビは返事をしてくれない」などが会話の端々に出てきた。

また、驚くことに自治会長の李さんは、常連参加者の好みを覚えており、コーヒーか紅茶か、砂糖は多めか等を指示してくれる。加えて李さんは宣伝上手でもあり、前日に近所で行われる昼食会の席で、翌日の真野ふれあい住宅でのモーニングの宣伝を忘れないことが、毎回の固定メンバーの獲得につながっているのであろう。

市や県の議員諸氏の訪問時にはモーニング参加者の健康を気遣う言葉があり、参加者も地元の先生として歓迎している様子である。こうした政治家の訪問はふれあい住宅自体や居住者が意識されているという意味で意義があると感じるが、同時に今後の支援施策の必要性を意識してもらい何らかの具体的な制度等につながることを祈る気持ちである。



写真２

●サポーターの役割とこれから

この１年半、真野に出入りをしてきたが、最もモーニング実施が厳しいと感じた時期は李さんが体調を崩し、入院した期間であった。モーニングは実質、李さんと居住者２名との３人で運営しているが、李さんという主導者を失うと覇気がなくなり、冬であったことも関係してか、毎回の参加者の集まりも悪い印象であった。おそらく、別所の食事会での宣伝等も上手く機能していないのではと感じた。そうした中で、我々の支援をどのように行っていくかは非常に難しい問題だと感じた。

外部の人間が主導権を握ってしまうことは、ふれあい住宅のあり方からも望ましいことではなく、高齢化を迎えている住宅住民の活動に対して最小限で必要な支援をどのように提供するべきかという問題である。これは、偶然に数人が手伝いに入り、人手が十分であった時に「学生さんの邪魔をしないほうがいい　教育上の意味もある」といったコメントを住民の方から耳にしたこともあり、本来の目的を逸してしまったと反省した。むしろ、参加者が食器を下げる等の協力を含めて、皆で運営するような仕組みが持続性という面では望ましいのではと感じた。

また、無償で手伝うことに対しても「悪い」という印象を与えてしまうようで、交通費や謝礼の申し出を受けることもしばしばあり、これを断ることは容易ではなかった。最後にはボランティアという学生の意思を尊重していること、毎回固定した人数で手伝えるわけではないこと、その都度モーニングの残り食材をいただくことで了承してもらった。

平均して一人が毎回手伝える仕組みをつくるのが望ましいのかもしれないが、そもそも人数が少ないことや、義務的な活動とはしたくないという面から個々の都合や意思も入る。そのため、数人

が参加する日もあれば誰も行けない日も生じてしまう。また、学生は卒業を機に大学からは離れるため、毎年の参加者探しが必要となる。こうした支援方法の難しさを改めて認識した。これはボランティア自体のあり方を考えなければならないということでもあるが、難題であるため、常に頭の中の懸案事項として残っている。

ふれあい住宅でモーニングを開催する意義は、共同室を有効に使い、居住者間の交流や共同生活を推進するという意味のみではなく、周辺地域も含めたコミュニティの交流、連帯、協力形成など様々であろう。また、そこに外部の人間が関わることで、新たな交流や関係が生じる可能性がある。

モーニングの参加者に市の広報関係配布物が配られる場合もあるし、長田地区で行われる、バザー、祭り、イベントの情報が提供される場合もある。各自が自室にこもっていては情報へのアクセスも難しいであろう。

モーニングのピーク時は賑やかで、あちらこちらのテーブルから談笑する声が聞かれ、時には演歌を流すCDに合せて踊りだす人もいる。

今年の新たな動きには月1回はモーニング終了後に映画会を共同室で開くことになり、これによって参加者は増加している。映画機材と映画は真野ふれあい住宅担当の巡回LSAさんが準備しているが（「君の名は」、「24の瞳」等）、映画上映のある日は住宅前の歩道にも映画会の案内が掲示され、モーニング参加者には映画上映があると、ゆっくり過ごしていただきたいことを伝えるようにしている。朝食後、一旦帰宅してから再度現れる人もいる。このイベントは上映映画の選択も良いのか人気であり、参加者が楽しみにしている様子がよくわかる。

先にも述べたが、ふれあい住宅の生活に対して外部の人間がどの程度まで関わっていけるかの明快で適当な解法は容易ではないが、少しでも住宅の生活が楽しくなるように支援を続けていければと考えている。大学院生以外でも1年生の基礎的学習の見学先として真野のふれあい住宅を2回ほど見学させてもらったが、バリアフリー、高齢者用住宅、共同室、共有空間（共用廊下部分、屋上菜園、ソーラーパネル等）、オール電化の実際を見ることも言葉も初めて聞く場合の多い学生にとっては、非常に刺激になるようで、「ここに住んで大学に通いたい！キッチンが広くて使いやすそう！」等の感想を言う（写真3、4）。

理想的な話ではあるが、ふれあい住宅に学生も含む若い層が混住する環境が整えば、外部の支援抜きに共用室や共用空間が有効に使われる可能性も出てくるであろう。制度的な問題、どの程度の混住を目指すのか等、検討するべき課題は多くあるとは思うが、試行してみる価値はあるのではと考える。（2005/10/5）

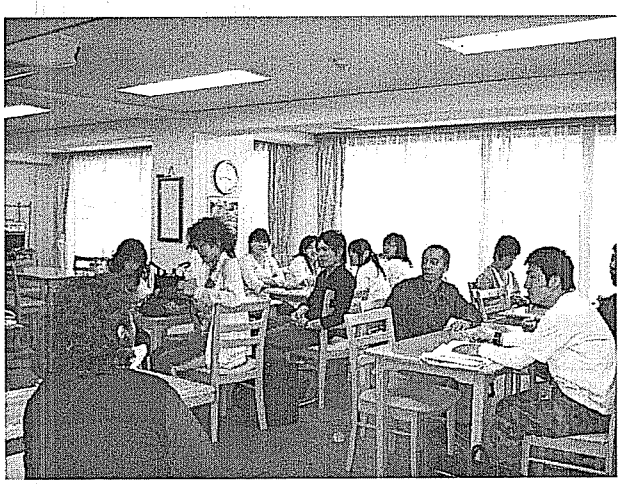


写真3

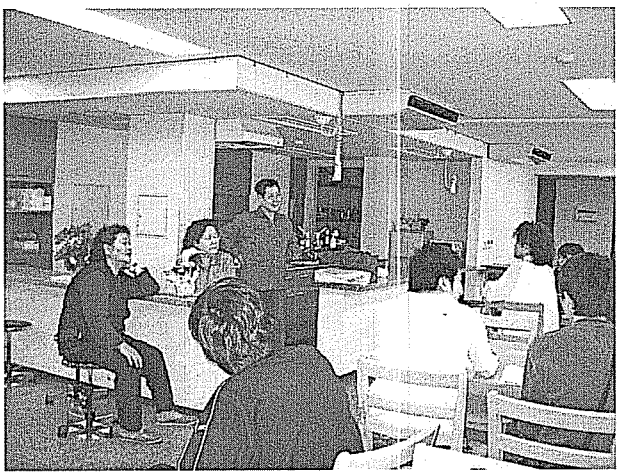


写真4

住吉川物語4

蜘蛛が入った琥珀

中川 紺

雨の中、スピードの出し過ぎでスリップした、と聞いた。43号線沿いの住吉大橋にはたくさんの花束が置かれていた。誰も巻き込まへんかったんがせめてもの救いやけどね、と亮介のおばさんは言った。そう言うことで、自分を支えているようだった。私はうなずくことすら出来なかった。

大学生の息子を亡くした母親と、恋人を亡くした高校生。私たち二人の全身からは、ものすごい量の悲しみが溢れ出ていたと思う。

バイクにつぶされた黄色い破片だけが、私に残された。亮介がとても気に入っていた琥珀のキーホルダー。

形見分けでもらった琥珀の破片には、小さなクモが入っていた。亮介がハマっていた恐竜映画にも、太古の蚊が閉じ込められた琥珀が出てきた。黄色い樹液に入ったクモは、まるで亮介の魂のカケラみたいだった。

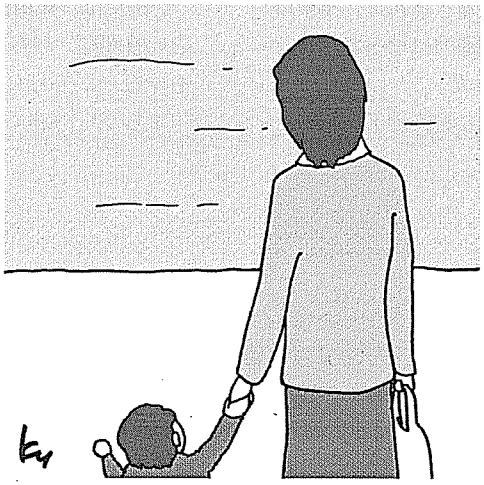
あれから私は、誰のバイクにも乗らないと決めた。そして私も、周りの人たちも、彼のことを次第に口にしなくなった。

だけど、橋には毎日のように通った。あの橋から住吉川を眺めていると、背後を途切れること無く車が通過して、まるで事故なんて無かったんじゃないか、そんな気がした。

●●

年月は過ぎ、私はあの頃の亮介と同じ大学生になった。卒業後は地元のスーパーに就職し、そのうちに同い年の恋人ができた。同期入社の私と彼は、一年後に結婚した。

今年、私たちの子供は三歳になった。



●●

新居は実家のそばにあったので、私は息子の龍平を連れて時々川に遊びに行った。北の方角を見上げると、ちょうど住吉大橋が視界に入る。でも事故のことは記憶の奥底に眠り、もう私はあの時のように悲しみにつぶされそうになることはない。

「いたい！」

河原で遊んでいた龍平が声をあげた。慌てて駆け寄ると、泣きそうな顔で手を差し出した。人指し指にうっすらと血がにじんでいる。「大丈夫、大丈夫」とバンドエイドを貼ってやると、ケガのことなど忘れたかのように、また石集めに夢中になりはじめた。

集めている小石の中に、黄色いガラス片が混じっていた。ああ、これで切ったのか。そう思うと同時に、その深い黄色が私を不安にさせた。この色を知っている。あの時の琥珀の色……亮介の事故、クモが入った琥珀…突然、記憶と悲しみが鮮明に蘇った。

ずっと手放せずに引き出しの奥にしまっていた琥珀の破片のことを、はっきりと思い出していた。

●●

水音で我に返った。息子が集めた石を水に投げ戻していた。私もそばにあった石を手に取って投げ入れた。今度来る時、琥珀を川へ流そう、そう思った。あのクモは私だ。亮介の思い出に閉じ込められた私なのだ。

もう解放しなくちゃいけない。

そう思って、次々に石を投げ続けた。集めてあった石がなくなってもまだ、まわりの石を拾っては投げ、拾っては投げ続けた。龍平が心配そうに「おかあさん」と呼んでいても、投げていた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第７８回・水谷ゼミナール報告

今回のテーマは**「密集市街地細街路整備の取組み例～難しい事業に取り組んでいます。～」**で、10月28日（金）、こうべまちづくり会館で行われました。岩崎俊延さん（プランまちさと）のテーマ解説ののち、次の４氏から報告がありました。

- **「宝塚市高松地区密集事業における細街路整備」／後藤祐介（ジーユー計画研究所）**
- **「新在家南地区防災街路としての酒蔵の道整備」／朝平武文（朝平都市計画事務所）**
- **「明石大蔵地区密集事業における細街路整備」／門上保雄（門上環境計画事務所）**
- **「堺湊西地区密集事業における細街路整備計画」／田中貢（（財）大阪府都市整備推進センター）**

後藤さんからは、密集事業を担当するきっかけ、事業の概要および推進状況とともに事業の推進力になっている行政の事情と地元の力について語られました。

朝平さんからは、「酒蔵の道」を取り巻く地区の概況と近隣住民の合意形成を図りながら進める都市防災総合推進事業の課題について語られました。

門上さんからは、密集事業の概要とワークショップを活用した細街路整備での取組み、住民の同意がないと進められない任意事業としての難しさなどを語られました。

田中さんからは、現況幅員が2.5～4.5mしかない中筋を用地買収し、建物も補償しながら6.7mに拡幅していく取組みについて語られました。

続いて、吉田薫さん（まちづくりワークショップ）から、次のような代表コメントがありました。「密集地という負の遺産に積極的に取り組む姿勢を評価する。また、密集事業は任意事業であるから、止まったら止まったで将来に期待したらよいのではないか。細街路を整備する上では、京都や空堀のように町家や長屋にある路地裏文化を再評価するという視点も必要である。」

討論では、細街路を拡幅する絵は描けるが予算がつくかという問題、現在の密集事業は、老朽住宅、密集地、集落も十把一からげにしているという意見が出されました。

（まちづくり㈱コー・プラン　吉原　誠）

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第４７回連絡会

・日時：12月2日(金)18:00～20:30（いつもより時間が早くなっております）
・場所：こうべまちづくり会館２階ホール（神戸市中央区元町通４丁目、TEL.078-361-4523）
・内容：テーマ「景観法と景観行政の新たな取り組み」、パネラー：①「京都市の取り組み」／寺本健三（京都市都市景観課）、②「近江八幡市の取り組み」／深尾甚一郎（近江八幡市風景づくり推進室）、③「神戸市の景観法への対応」／上田真己（神戸市地域支援室）、コーディネータ：三輪康一（神戸大学工学部建設学科助教授）
・会費：無料
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●イギリスのコミュニティに根ざしたＶＮＰＯによる都市再生～行政とＶＮＰＯのコラボレーションで活性を取り戻す、まちづくりトラストの先進モデルから～

・日時：12月9日(金)18:30～20:45
・場所：神戸市勤労会館２階多目的ホール（神戸市中央区雲井通 5-1-2、TEL.078-232-1881、三宮駅から徒歩３分）
・内容：①「まちづくりトラストとは?」／西山康雄（東京電機大学教授）、②講演「イギリスにおけるコミュニティに根ざした都市再生」／ジョン・オールドントン（環境トラスト事務局長）、③質疑応答と交流会
・参加費：2,000 円（軽食、ドリンク付き）
・人数：５０名程度
・問合せ、申し込み：(特)コミュニティ・サポートセンター神戸（担当：飛田、TEL.078-841-0310、FAX.078-841-0312、e-mail:info@cskobe.com）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク　事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2005年12月62日発行

月　刊

きんもくせい

05年12月号
(50+36+NO. 33)

発行　：　阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■阪神大震災から10年

大西　一嘉（神戸大学）

1995年１月１７日に起こった阪神大震災は多くの生命と住まいを奪い、数十万人に及ぶ住宅難民と一面の更地を生み出した。地震により人々の生活と地域の経済は深刻な影響を受け、学校、病院、公共施設、鉄道、高速道路、港湾、工場も被災し復興には長期間かかった。有名な地場産業である酒造業も木造蔵のほとんどを失い転廃業が相次いだ。商業地域の１／３、市場・商店街の半分が壊れ、化学工場や製鉄業も操業停止に追い込まれるなど、神戸の地域経済を支える産業の多くが崩壊し、再開には多くの時間がかかった。

◉住宅難民の発生

阪神大震災は多くの生命と住まいを奪い、数十万人に及ぶ住宅難民と一面の更地を生み出した。多くの世帯が震災によって移転を余儀なくされ、親戚の家や賃貸住宅へと移った一方で、政府が無償提供する仮設住宅に入居せざるを得ない被災者も多かった。仮設の建設は１月中には始まり８月までの半年余りで 48300 戸供給されたが、大規模な建設用地は利便性の低い都市周縁部にしか確保できず、過半を占める高齢の入居者は住み慣れた地域やコミュニティから切り離された。長い人では４年まで退去期限が延長された。

◉国の復興政策と区画整理と再開発手法による復興スキーム

広範囲に及ぶ被災地復興は戦後日本の工業化社会がはじめて経験する規模で行なわれた。国は３ヵ年で５兆 8000 億円の復興予算を投入して、インフラや公共施設、住宅の再建を支援した。一方、自治体に対しては地震 １ ヶ月後に面的復興事業地区に対する建築制限を行なわせ、その計画案作りに２ヶ月の猶予期間を与えた。兵庫県と神戸市は１９９５年３月に復興計画案を採択したが、単に従前のまちの復旧復興にとどまらず、経済や産業面の活性化を伴う創造的復興を目指すものとされた。

自治体は.結局６１地区に及ぶ復興市街地整備事業を行ない、４３地区では区画整理と再開発事業が適用されたが、これらの計画手法は日本では土地の権利関係の整序や都市開発促進のために広く使われてきたものである。区画整理は、国の補助金により区画道路の整備や公園緑地の確保、公共施設の整備を行うものであるが、それを生み出すために地区内の権利者は土地の交換分合を通じて減歩され、小さくなった新しい敷地を与えられることになる。権利関係は複雑で錯綜しており、交渉には長い時間がかかる。再開発は大規模な再開発ビルを建設し、従前権利者は等価交換によりビルの権利床を取得する。こうした事業指定により新しい副都心が形成されるが、広大な面的再開発の完了までには時間がかかる。それゆえ、被災市街地復興特別措置法では事業予定地区における計画策定までの猶予期間（建築制限）を２年間まで延長する措置がとられた。

（被災市街地復興推進地域の指定はなされたが、２年間の猶予期間のための建築制限は実際に

は適用されなかった。）

●住宅復興とまちづくり支援

恒久住宅復興の支援プログラムは、第一に復興公営住宅の建設であり、神戸市は15000戸を新規供給した。第二に再建のための低利融資、第三に共同化助成やマンション再建の整備拡充、第四に家主層に対する賃貸住宅供給促進の補助制度があり、特優賃入居者へも家賃軽減措置がある。

ところで、民間住宅は行政の当初見込みを大幅に上回る勢いで建設が進み、ついには喪失数を超えて住宅市場バランスを崩すほどの過剰供給の課題がでてきた。デベロッパーは好立地で市場価値の高い被災地東部の阪神間地区に狙いを定めてマンションなど住宅建設を集中的に展開する一方、被害が深刻な被災地西部では建設活動が低調であった。神戸市では解体撤去された住宅数８万戸に対して、公共と民間をあわせて1.5倍の住宅が新規供給された。

復興において特に事業地区ではまちづくり協議会の果たした役割は大きい。神戸市は全国に先駆けてまちづくり条例をつくるなど、地震前からまちづくり支援には先進的取り組みの長い歴史を持っており、震災復興でも官民協働の経験が大いに生かされた。市から派遣されたコンサルタントは、地元と行政の間の意見調整役として活躍した。

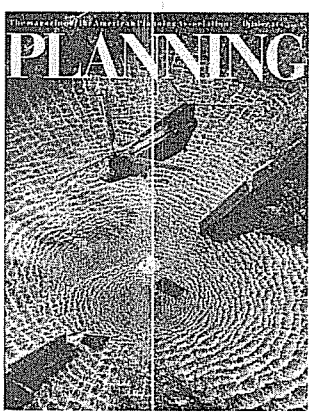
●震災１０年の復興の現状

日本全体がバブル経済後の景気後退期であり、さらに重工業中心の産業構造からの脱却や都心の空洞化対策という構造的転換期を迎えていた神戸にとって、今回の地震はストレートとボディのダブルパンチを受けたようなものであった。地域間競争における神戸の基幹産業や商業業務での失速は地震で加速した。世界有数の取扱量を誇った神戸港は、震災を契機に競合するアジア諸港にハブ港の機能を完全に奪われる結果となった。

神戸は何とか震災から立ち直りつつある。1999 年までに経済指標は 75～90%回復し、今では一部の事業地区を除けば街並みもおおむね復興し、安全でモダンな建物に置き替わったし、再開発により住まいや店舗は新しくなり、道路アクセスも良くなった。しかし、良いことずくめという訳ではない。

被災が集中した住宅密集地域は住み、働く場とすれば便利で、地域のつながりも豊かだったが、高齢化が進み、脆弱な低家賃住宅が主体の地域でもあった。公的住宅の大量建設中心の復興戦略は必要量を充足していたものの、復興公営住宅のかなりが郊外や湾岸部埋立地に立地し、また住み慣れた地域とは異なる地に移り住むことによって社会的なつながりは断たれ、被災者の生活の基盤が崩れてしまった

●教訓をどう生かすか



復興では、修復より建替に、ソフトな安心よりハードな安全に、コミュニティの再建より住戸数の確保に力点が置かれてしまった。もし評価すべき点があるとすれば、復興途上でまちのビジョン作りを議論しコミュニティ感覚を保ち続けてきたまちづくり協議会の存在であり、今後のまちづくりに期待するところは大きい。

被災地はこの 10 年間で驚くほどの復興を遂げた。この神戸の経験を通じて日本の各地の大都市地域だけでなく世界の各都市が、大規模な都市災害では包括的な復興計画技術の開発が必要であるという、神戸の苦い教訓をしっかりと受け止め役立てて欲しいと願わずにいられない。

The Kobe Earthquake, Ten Years Later

On January 17, 1995, a disastrous earthquake struck Japan's Hanshin region—one of the nation's densest urban areas. The quake caused 6,394 deaths (out of an area population of about 2.9 million) and destroyed about 150,000 housing units in Kobe and surrounding cities in Hyogo Prefecture. Another 250,000 housing units were severely damaged. Tens of thousands of people were made homeless, and some neighborhoods burned to the ground in the post-earthquake fires.

The earthquake disrupted the lives of residents and affected the economy in innumerable ways. It damaged 85 percent of the region's schools, many hospitals, and other public facilities. Extensive damage to rail, road, and port facilities took up to seven months to repair.

The volume of cargo traffic in the Port of Kobe—Japan's leading shipping container port—declined by 30 percent and Kobe permanently lost some of its business to other ports. The chemical and steel industries were shut down for several months. About half of the region's famous sake breweries were seriously damaged, as were a third of its shopping districts and most neighborhood markets.

The failure of many of Kobe's small businesses led to an increase in unemployment. Some of the lower income neighborhoods still have empty shops, although the city center is fully occupied and vibrant.

Housing losses—and gains

Of the thousands of families displaced by the earthquake, some found shelter with relatives or moved into rental housing elsewhere. But for about a third of the displaced households, the only option was government-supplied temporary housing. By August 1995, 48,300 prefabricated units had been constructed at the edge of the city. Some residents stayed in temporary housing for up to four years.

The widespread destruction required a reconstruction effort more massive than anything experienced in any other post-World War II industrialized society. Japan's central government provided most of the funds, allocating over $58 billion in the first three years to reconstruct basic infrastructure, public facilities, and housing.

Immediately after the earthquake, the central government imposed a two-month moratorium on rebuilding to allow local governments to prepare plans. Hyogo Prefecture and the city of Kobe adopted complementary plans in March 1995, setting the highest priority on projects that aimed at stabilizing the economy and attracting new business.

Urban redevelopment

Local governments eventually created a total of 30 "priority restoration districts." Some of those involved land readjustment and urban redevelopment, which Japan had used extensively in the past in order to modernize land ownership patterns and facilitate development.

Land readjustment projects used central government funds to widen roads, add parks, and construct public facilities. Each property owner in the project area received a new parcel that was proportionately smaller than the original parcel. Property rights issues were complex and required considerable time to negotiate.

Urban redevelopment projects involved large-scale construction and transfer of existing property rights into the new buildings. (The process somewhat resembles the transfer of development rights in the U.S., but it is complicated by the fact that in Japan land and building ownership are separate.)

These projects were designed to create new urban subcenters. This wide-scale rebuilding took time to accomplish. The rebuilding moratorium was extended for up to two years in the land readjustment and urban redevelopment project areas to allow for planning and land negotiations. Today, all of the projects have been built, although some are not fully occupied.

Several programs helped to construct permanent housing. The city built nearly 15,000 public housing units and provided low-interest loans for homeowners to rebuild. Other programs helped to subsidize the costs of joint housing (projects involving adjacent property owners) and condominiums, and to lower rents.

In the end, the private sector built far more units than were lost, resulting in an unintended housing surplus that will take years to absorb, at least in part of the city. Developers overbuilt in the eastern, more affluent, section and underbuilt in the western neighborhoods, where most of the earthquake damage occurred. In all, new public and private units totaled 50 percent more than the 80,000 units that were permanently lost in the city of Kobe.

Neighborhood power

Neighborhood planning organizations, called *machizukuri kyogikai*, played an important role in the reconstruction process, particularly in the land readjustment and redevelopment areas. Even before the earthquake, Kobe had been a leader in Japan in its support of these local organizations. After the earthquake, they blossomed. Planning consultants paid by the city played a vital role as communication links between the city government and neighborhood residents.

At the time of the earthquake, Japan was in the midst of a recession and Kobe's economic base was changing from heavy industry to information technology, medical industry, service, and retail. In addition, as in the U.S., the population was moving from the city center to the suburbs. All these trends were accelerated in the wake of the earthquake, which severely damaged central city areas and industrial facilities.

The good news is that, by 1999, Kobe's economy had recovered 75 to 90 percent of pre-earthquake capacity. Ten years later, most of the city has been rebuilt—although some of the more complicated projects are still under construction—and the new buildings are better and safer than those they replaced. Urban redevelopment has created homes and businesses in efficient, transit-accessible locations.

Good and bad

Not all the changes have been positive, however. The older, central city neighborhoods—hardest hit by the earthquake—had been convenient places to live, especially for elderly residents, and the proportion of older and low-income renters affected by the disaster was relatively high in this area. The housing built to replace the old wooden rowhouses and small apartments was often located far from residents' original neighborhoods. Thus, their social networks were broken and their quality of life declined.

Reconstruction policies emphasized construction rather than repair, buildings rather than social networks, and housing units rather than accessible communities. While the new buildings were far safer, they also had higher rents. And in some places, the new, larger buildings impinged on open space. Still, to its credit, the city of Kobe supported the *machizukuri*, which were an effective means of maintaining a sense of community during the planning and reconstruction process.

The recovery of Kobe and its neighboring cities over the past 10 years has been impressive. We hope that Japan and other nations will use the lessons of this disaster to develop more comprehensive post-disaster reconstruction plans. There's no doubt that another large earthquake lies in the future.

Robert Olshansky, Ikuo Kobayashi, and Kazuyoshi Ohnish

前ページの論文（文責：大西一嘉）は、上記の英文の論文の日本語版です。

これは、ＡＰＡ(American Planning Association)の機関誌「PLANNING」（前頁右下写真）の 2005 年 10 月号に、Robert Olshansky, Ikuo Kobayashi, and Kazuyoshi Ohnishi の連名で掲載されたものです（36 頁）。全体としては、シカゴのイリノイ大学教授の Rob さんが京都大学防災研究所客員教授として神戸の六甲アイランドに一年間住まわれた感想「Island Paradise - A planner reports on his year in a Japanese new town」とともにとりあげられたものです。（小林郁雄）

■第３回　「51Ｃ型住戸からｎLDK住宅の展開」を学ぶ

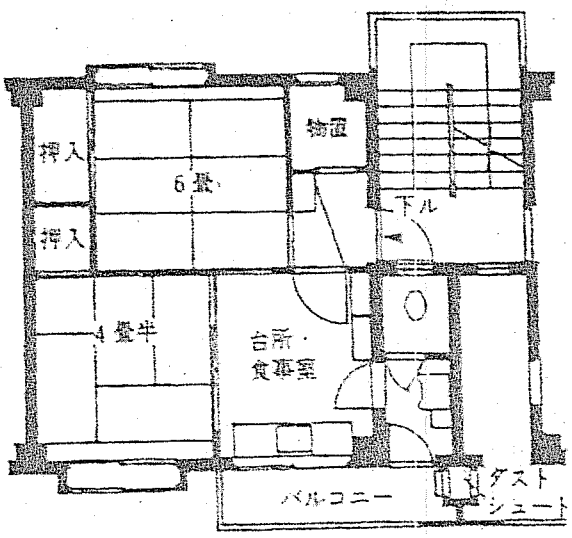
坂内　陽子（大阪市立大学大学院）

第３回くらし・すまい塾は2005年10月18日(火)に、「51Ｃ型住戸からｎLDK住宅の展開をみる」をテーマに話し合った。このテーマの背景には2004年６月に２回開催された「51Ｃは呪縛か-集合住宅の戦後～現代を探る」という連続シンポジウム（注）がある。これは51Ｃの生みの親とも言うべき建築計画学の鈴木成文先生、社会学者の上野千鶴子先生、建築家の山本理顕氏のバトルがあり、その中での興味深い議論に「ｎLDKの元祖は51Ｃ型だ」 vs 「ｎLDKと51Ｃ型はまったく別物だ」というのがある。

立場と認識の違いが、年月の経過によって昨今の住宅の形状についての議論を生んだひとつの事例のようだ。くらし・すまい塾には建築学と社会学の人が参加しているので、この点を軸に話し合い、戦後の住宅供給の流れを学んだ。（注）シンポジウムの詳細記録（Ａ）とシンポの集大成図書（Ｂ）は末尾の文献参照）。

51Ｃ型とは

1951年度公営住宅設計のひとつの型の名称で、住戸面積は共用階段部分を含めてＡ／16坪、Ｂ／14坪、Ｃ／12坪の三つ型があり、その最も小さい型が51Ｃである。これは全国に数多く建てられて、その計画理念は５年後に設立された日本住宅公団にも引き継がれ、いわば公共住宅の原型となった。但し、60年代以降は建設されていない。その設計原案をつくったのが東京大学の吉武泰水研究室であり、当時大学院生だった鈴木先生が参加された＜（Ｂ）より引用＞。



５１Ｃ型公営住宅プラン（図書Ｂより）

ｎLDKとは

住宅の大きさ（タイプ）の表記で、ｎは居室の数、LDKはＬ＝Living、Ｄ＝Dinning、Ｋ＝Kitchenで１室を指す。鈴木先生は「この表記は住宅が商品化し、民間も住宅供給に参入してきて、特に住宅メーカーが市場調査に基づいて人々の需要を喚起し、それに迎合して売れる住宅をつくるようになった時、部屋の使い方や生活などを考えず、安易に部屋数だけを増やすといったプランで、世間がこれを揶揄して「ｎLDK」と呼んだ」と、（Ａ）で述べられている。

建築家の怠慢だ．．．？

上野先生の「ｎLDKというモデルは、誕生から半世紀もたった今もまだ耐用年数が尽きていない驚くべき長命なモデル。半世紀にわたってワンパターンなモデルが再生産されてきており、これに変わるべきモデルが登場していないのは建築家の怠慢ではないでしょうか」との意見に、鈴木先生は「確かにモノとしての住宅は、51Ｃ、2ＤＫ、ｎLDKと推移しているが、その計画理念はまったく異なる。51Ｃの計画理念は、わずか35㎡の中で生活空間の秩序化合理化を目指し、炊事と食事を重ねた空間（台所）と南の隣室を襖で仕切りつつ一体化した「機能の分離と重合」

にある。それにより食寝分離や就寝分離の可能となる合理的で衛生的な生活の目標像を示した。その後のｎLDK の出現の過程で、何とかそれを潰す新たな型ができないかと、考えもしたが、そういった「型」を指示する行為自体が多様化する家族に対して間違いなのかもしれないと思い、順応型へと進んでいった」と述べられている。（順応型とは住み手の要求に順応するプランで、住み手が必要に応じてプランをつくることができる、間取りの変更ができるという住宅のモデル的な提案）。

住宅と家族

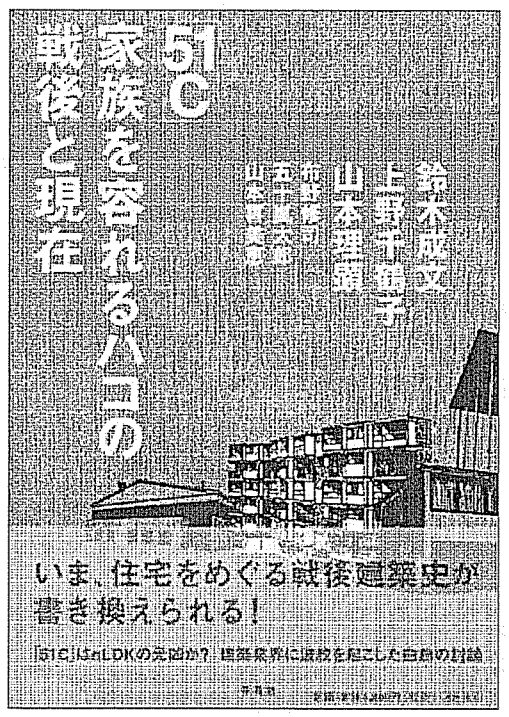
上野先生は「ｎLDK 住宅は近代家族の容れ物であった。しかし、もはや近代家族は終焉を迎えている。空間生成の理念と実際には大きな乖離がある」と。鈴木先生は「51Ｃ提案の時代からみると、現在は住戸規模が２倍に、世帯人数は半分になったから、住戸計画は楽勝の時代だ。住み手に任せてもいい、むしろ近隣・まちとの関係こそが問題だ」と。そこで建築家の山本理顕氏は「具体的な住宅団地設計で、都市では働く場所と住む場所が一緒になっている住み方を選択するだろうと思い、オフィスのようなのがついた住宅を提案した。．．．省略．．．地域全体と住宅内部が深く関わっているという意識を持っている」と、述べられた。これに対して、上野先生は「社会学者は空間を開くのではなく機能を開くことを考える。閉じた家族の中でのケアの機能はもはや充足できない」と。「住宅を開く」という視点に対して、シンポジウムの司会のひとり、建築学の五十嵐太郎先生は「鈴木先生は住居を内部から開こうとし、山本氏は外から開こうとしている」と述べられた。

くらし・すまい塾の討議

上述のような先生方の意見について、塾では議論にまで到らず、知らなかったことをたくさん吸収した、勉強になったという感想が多かった。ただ、神戸芸術工科大学の塾生からは同学が開催した鈴木先生の公開講義で既に一度聴いているので、余裕を持って補足説明をしてくれた。また、塾生からは次のような意見がでた。

「51Ｃ提案以降、建設省や中央にある東大が時代と家族の変容に伴って、それに相応しい住宅を推進する住宅政策や提案をすすめなかったことは責務の怠慢ではないかと思う」「私は家族社会学を専攻するものとして、建築学者や中央政府の責務の怠慢と同様に、家族社会学者の住宅提案に対する過去の関心の低さ（怠慢）ということも挙げたい」と。

紙幅の制限と筆者の理解の不十分さもあり、十分な報告に到っていない点は、下記の資料をご参照いただきたい。



●シンポジウムの詳細（Ａ）は、「JUTAKU-KENCHIKU 200406」、シンポの集大成図書（Ｂ）は「51Ｃ・家族を容れるハコの戦後と現在／鈴木成文・上野千鶴子・山本理顕他著／平凡社」、その他関連図書に「家族を容れるハコ家族を超えるハコ／上野千鶴子著／平凡社」がある。

■神戸のみどり・その３『21 世紀都市林“こうべの森”をめざして』

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

１．序にかえて

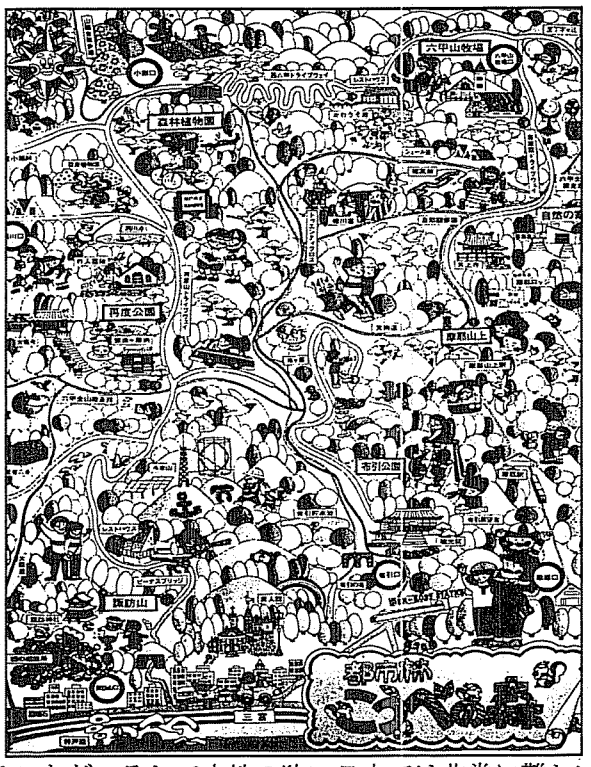
「明日までに今検討している“こうべの森”計画の参考になるヨーロッパの都市林を調査するなら、どこへ行きたいか？　調査項目も含めて企画書を書いてこい」

1982 年(S57)、私は当時の神戸市公園課長から言われた。もしかしたら、ヨーロッパへ行かしてくれるのかもしれない。そんな淡い期待を抱いて徹夜で企画書を作った。

私は企画書を創りながら、印象派の画家マネとモネの同名の絵画『草上の昼食』を思い出していた。マネの絵にはなぜか裸婦が描かれており、モネの絵はマネの作品に構想を得て描かれたと言われている。林相は異なるものの両方とも平地の深い森林の中でピクニックを楽しむ男女が描かれている。ヨーロッパの主要都市の近郊には都市を抱くように広大な平地林が人の手による植林によって創られていた。それをぜひ見たい。神戸市も六甲山系を背山として都市の背後に広大な人工林を持っている。平地林と山岳林の違いがあるにせよ、都市における豊かな自然環境保全や都市民のレクレーション資源としてヨーロッパではどんな思想で都市林が創造され、管理運営され、利用されているか？を知りたかった。一晩かかってフランスの“ブローニューの森”、オーストリアの“ウィーンの森”、オランダの“アムステルダムの森”、西ドイツ（統一前）の“フランクフルトの森”を調査したい旨、企画書をでっち上げた。

何日かして兵庫県の自治体職員研修団（団体で移動し、それぞれの国、都市で共通視察と個々にテーマ別調査を行う研修団。テーマ別調査の予約・承認、交通手段の確保、通訳の手配等は各自でリザベーションを行うシステム）に参加してヨーロッパ行きの決裁が下りた。しかし私が一番行きたかったオーストリアの“ウィーンの森”は他のメンバーの移動の関係から断念せざるを得なかった。

私がヨーロッパの都市林で学んだことは「市民の理解と協力を得ながら、今、何をなすべきか？　立ち止まってはだめだ。着実な毎日の積み重ねが子孫にかけがいのない豊かな緑を残す」と彼らが考えていることだった。言い換えれば、ヨーロッパの都市民は私たちより多くの緑の享受を受けながらもさらに市民の身近に緑を増やし、それを子孫に残そうと常に緑の必要性を市民に訴えながら日夜努力していることだ。そして土地の狭い日本では非常に難しいが、緑の管理はできるかぎり自然のままにするというのが彼らの基本的な考え方であった。もちろんただ放置するというのでなく、一定の管理をしながら森を自然へ返すことを考えていた。



２．都市林とは？―都市林“こうべの森”計画策定のいきさつ―

神戸のみどり・その 1『六甲山植樹 100 年』で述べたように、明治の初頭の草木のなかった荒廃した六甲山は幾多の先人の努力によって神戸の特色ある背山として豊かな緑を市民のみならず近畿圏の人々に提供している。

1967 年（S42）の災害のあと策定された中央森林公園計画は、15 年経過した 1982 年(S57)には市民の理解と協力を得て、先人たちの努力を継承しながら大きな成果をあげていた。しかし、日本経済は高度成長から安定期へ移るとともに、高齢化社会も進み市民のライフサイクルやライフスタイルも時代の流れに沿って大きく変化していった。余暇時間の増大のみならず、人々の活動やレクレーション動向も多様化しつつあった。また緑の問題も 1971 年(S46)から始められたグリーンコウベ作戦は 13 年目を迎

え、無剪定街路樹や交通安全や死角による犯罪など市民生活との軋轢も生じ、“みどり”も量から質への転換を迫られていた。

そんな時代的背景と今までの成果のもとに新しい世紀 21 世紀をにらんだ新計画の策定が急務とされた。それが 1967 年(S42)に策定された六甲山の西側(主として神戸市有林 約 2,300ha)の森林の利用と保全の計画である『中央森林公園計画』をベースに 1983 年(S58)策定された『新・中央森林公園計画』いわゆる『都市林“こうべの森”計画』である。もちろんこの計画は六甲山植樹 100 周年も 21 世紀初頭に迎えることも十分念頭に置くものであり、貴重な“みどり”をどう守り育て、子孫に引き継いでいくかも重要な課題であった。

そろそろ都市林とは？ に答える必要があろう。私たちはその定義として「都市近郊にあって、都市の圏域に位置し、環境保全やレクレーション機能を通じて市民生活に深い関わりを持つ森林をいう」とした。ただし、下線の文言は当時の定義には書かれていないが、都市林“こうべの森”の計画内容・趣旨から当然想定していたことであり、現時点で私が文言を追加し、誤解のないものとした。

3．計画の概要

計画区域は六甲山系でも最もよく自然が保全された区域のひとつであることを踏まえつつ都市の“みどり”としていかに利用も考えるかだ。それには都市林“こうべの森”が市民の心に深く根ざしている必要がある。すなわちふるさとの山として捉えられることが大切なのだ。そのためには神戸の“風土”に根ざした都市林を考えていく必要があり、21 世紀をめざす長期的な視野に立った森林形成に引き継がれる。

ある市民は毎日登山という利用形態でこの都市林を“裏山”として、ある市民はうさぎ追いしかの山、すなわち“里山”として、あるいは“ふるさとの山”として捉えられるようとする。また広域的には都市近郊のレクレーションの場や観光資源として考えていく必要があろう。そして利用のための交通アクセスの改善に努め、誰でも手軽に都市の雑踏から離れてハイキング・自然観察・歴史散策などすべての分野の楽しみを都市林“こうべの森”のふところの中でできる、かつ人と人のふれあいや生き甲斐を再発見できる場の創造も大切 ✓
であると考えた。また高齢者と若者の役割分担を考え、積極的にジェネレーションギャプを解消していく試みも推し進めるべきだと議論した。そのためには都市林“こうべの森に”誰でも誘い合って参加できる雰囲気づくりのみならず、誰でも参加できる都市林“こうべの森”の中での活動には「都市林作法」ともいうべき利用のためのルールづくりが必要になってくる。

(1) 計画策定の基本方針

①目的：すべての市民始め広域的にも気軽にいつでも利用できる市街地近郊のレクリエーションの場の創造をめざす。

②みどりの施策：神戸市民にとってかけがいのない“みどり”を利用だけでなく守り育てる施策を神戸市だけでなく関係行政機関とともに協力して進める。

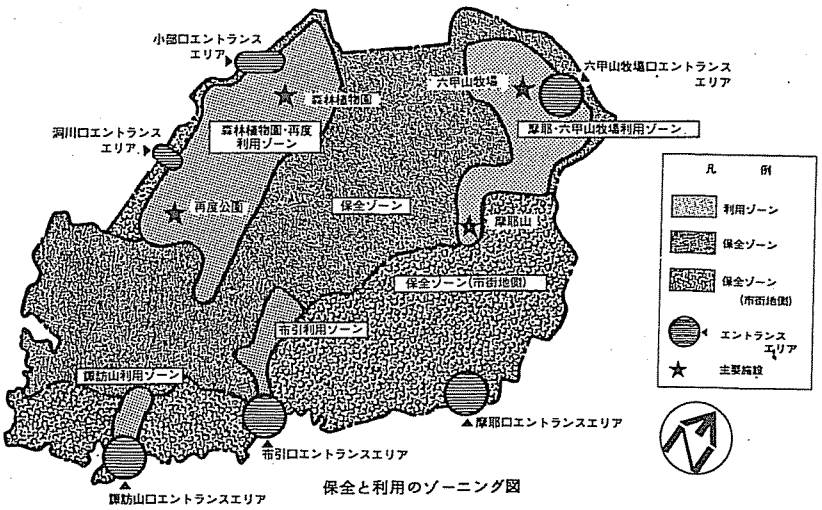
③施設計画と交通計画：森林植物園、布引公園などエントランスエリアに位置付けられた核となる公園を整備するとともに、利用のための交通アクセスの整備、改善を推進する。

④管理・運営：総合インフォメーション体型の整備やイベントの開催など森林と親しくふれあう雰囲気づくりを行い、利用者が四季を通じて森林浴等が楽しめるよう総合的な管理・運営を進める。

(2) 利用者・関係団体の責任と市民参加

関係団体は“みどり”の保全と利用を図るため、相互に緊密な連絡・調整・協力し、それぞれの責任において総合的に整備し、管理運営する。そして利用者も自らの責任を自覚し、都市林利用の作法を高めていく必要がある。利用者と市始め関係機関は責任と分担を明確にする必要がある。

(3) 計画区域及び利用と保全ゾーン等の設定



保全と利用のゾーニング図

計画区域は約2,300haで土地所有者は大部分が市有地（注：1995年の阪神・淡路大震災後、一部国有地となるも土地利用は変化なし）である。

(4) 実現するための施策

計画区域内には学術的にも貴重な森林や森林レクリエーションに適した森林がある。都市林“こうべの森”として好ましい森林形態と具体的施策を提案し、積極的に保全と利用の調和を図る。

① 好ましい森林形態

・景観重視型森林

明治初期の植樹計画から計画されていた市街地からの景観林。市街地から見える森林は神戸の風土にねざす常緑広葉樹と落葉広葉樹及び花木林による四季楽しめる森林を形成する。視点として三宮市街地、北野地区、ポートアイランドを考える。

・自然重視型森林

内陸部の良好な自然植生は学術上も貴重で自然重視型で保全する。特に再度山永久植生地、摩耶山のアカガシ群落、穂高湖周辺のウラジロガシ群落、かわうそ池周辺のコナラ林は積極的に保全する。

・利用ゾーンの森林

再度利用ゾーンの周辺では林間レクリエーションの場として快適な疎林を維持・創造する。また利用ゾーンには花木林や松など特徴ある針葉樹林の保全・維持・創造により積極的に森林景観を保育していく必要がある。なお、利用ゾーンは森林植物園・再度利用ゾーン、摩耶・六甲山牧場利用ゾーン、布引利用ゾーン、諏訪山利用ゾーンの4地区を設定する。

② 具体的施策

①の好ましい森林を保全・創造していくためには計画地内の森林景観の評価、その具体的修景実施計画を策定・実施する。また貴重な森林の調査・評価、自然保護区の設定、その調査・評価のための専門部会の設置が急務である。

(5) 利用のための施策

施設整備にはそれぞれの利用者層のニーズや利用動向を調査し、利用ゾーンの設定・施設の連携・連絡を図る必要がある。また国立公園計画との整合を図りながら、六甲山系の良好な自然を保全しつつ、豊かな自然と調和の取れた施設整備を進める。施設整備の具体的計画は6つのエントランス（諏訪山口、布引口、摩耶口、六甲山牧場口、小部口、洞川口）を入り口にふさわしい景観的整備を行う。またそれらの施設を結ぶ交通アクセスの整備は急務だ。一方、交通アクセスの拠点となる連絡拠点（かわうそ池、穂高湖、洞川、市が原）の整備も急がれる。ハイキングコースも重点的に整備管理する。その他ドライブウエイやハイキングコースのところどころに不法投棄がなされ、景観を害している。ここは沿道スポットの整備や沿道緑化を強力に推し進める。

(6) 管理運営計画

計画区域内にはほとんどが国立公園区域であり、その制約を受ける。また種々の管理者がおり、都市林“こうべの森”の管理運営は各管理者の立場を尊重しながら相互に協力し、利用者の立場に立った管理運営が必要だ。問題点と現状は単一管理者でないため、施設整備、ＰＲ，イベント、サイン、インフォメーション、統計などいずれも統一されていないのが問題点であり、現状だ。そのためには総合管理の可能性を探り、そこまでできないとしても総合インフォメーション、統一イメージによるＰＲ、共同推薦ルートの提供、総合あるいは提携イベントの開催など緊密な連携が肝要である。一方、市民参加による管理運営を強力に推進する必要がある。

(7) 今後の課題

都市林“こうべの森”計画は当初からその実施の困難性が指摘されていたため、計画に多くの課題が記されている。例えば、計画の再評価、各機関の協調、具体的実施計画の困難さ、ミニバスなど交通アクセス改善の困難さ、自家用車の入園制限、水資源の枯渇などをあげ、こうした課題に取り組み人間環境都市神戸において西暦2001年に、都市林“こうべの森”が市民生活の一部として機能していることを期待しているとした。

4．都市林“こうべの森”計画の検証

この計画は1982年(S57)の実務段階の六甲山特に西半分の市有林部分の問題点を浮き彫りしているため、現在でも六甲山管理運営に当たる担当者のバイブルとして利用されている。この計画における施設整備はほとんどが実施され、特に森林施業は地道に進められていると思う。また震災で市有林のうち約500haが国有林となった。しかし六甲山観光ポテンシャルの低下や私たちの努力不足せいか、交通アクセスや総合的管理運営は20年前とあまり変わっていない。そしてこの計画で欠如していた市民参画による森林管理の議論は2002年(H14)の六甲山植樹100年目に『六甲山植樹100周年市民懇話会』に引き継がれたと思うし、都市林“こうべの森”計画の思いは脈々と『六甲山植樹100周年市民懇話会』の提言の中に息づいていと確信している。都市林“こうべの森”計画も六甲山植樹と同じようにこれからの100年が大切である。私たちはこの時代を生きた証として、「今、何をすべきか？」を忘れてはならないと思う。

坂のオムニバス1

声のトンネル

中川　紺

トンネルの中に何かが住んでいるというウワサをたよりに、起伏の多いこの町に男がやってきたのは十二月半ば過ぎのことだった。

駅から続く緩やかな坂を上っていくと、上りきる少し手前で道がYの字に分かれ、左の道の先にそのトンネルはあった。天井の高さが子どもの背丈ほどしかないのは、坂の上を走る大きな幹線道路の下を小学生が安全に通るためにつくられた通学路だったから、ということを男は駅前の小さな果物屋の主人から聞いていた。しかしずいぶん昔の小学校の統廃合で、その通学路を使う必要がなくなり、今ではただ土管のようなトンネルが口を開けているだけになっている。

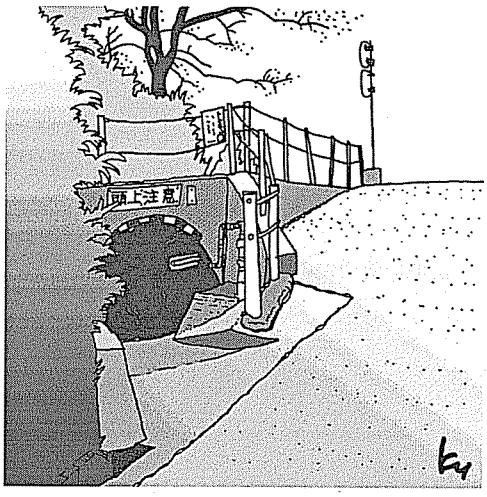
さて、何はともあれ聞き込み開始だな、と男は仕事に使うペンと手帳を取り出した。フリーライターになった頃から、使い続けているせいで皮の表紙がすっかり変色していた。

幹線道路を見ながら、男が想像したのは「昔、車に撥ねられた小学生の霊がトンネルに出る」といった類いのもので、そういうネタは子ども向けのホラー雑誌に売れた。ウワサから隠れた名店まで、巷の小さな情報を書くことを得意としていた。

●●

「地元のもんは『声のトンネル』と言うとるよ。ワシもあんまり詳しくは知らんがな」

取材に応じてくれた近所の老人はそう言った。どうやらウワサには少しズレがあったらしく、「何かが住んでいる」のではなく「何かの声が聞こえる」だけらしかった。



「で、それはやっぱり霊の声とかそういう話になってるんですかね」

男が尋ねると、老人は首をあいまいにかしげた。

「何ていうかな。坂を上って来て一人であそこの前に立つと、自分にとって大事な人の声が聞ける、と言われとる。たまたま恋人を亡くした若い女性があそこで声を聞いたと言い出して、それから話が静かに広がっていったらしい」

他の何人かに聞いてみても、だいたいこんな答えが返って来た。

これをどうネタとして調理するか、と男は考えた。本当は実際に『自分の大事な人の声』を聞いた人を取材したかったが、なかなかそういう人物に行き当たらなかった。とはいえ、ウワサの取材というのは一概にしてそんなものだった。

●●

夕方が近くなって、男はもう一度トンネルを見に坂を上った。帰宅ラッシュ前の静けさといった感じで、周囲に歩いている人は他に見当たらず、幹線道路を通る車もまばらだった。ただ、坂から吹き上げてくる強い風だけが、びゅうびゅうと音を立て、トンネルの中に高い音を響かせていた。

その音はどう聞いても人の話し声、とはとれなかった。まあ百歩譲って赤ん坊の泣き声というくらいだな、と男はつぶやいて、踵を返して駅に向かった。

●●

男の妻が「妊娠したみたい」と告げたのは、その日の夕食の時だった。

あのトンネルで聞いた泣き声を思い出して、男はゆっくりとグラスを傾けた。（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク・第４７回連絡会報告

今回のテーマは「景観法と景観行政の新たな展開」で、12月2日（金）、こうべまちづくり会館ホールで行われました（こうべまちづくりセンターとの共催の特別講演）。まず、神戸大学建設学科の三輪康一さんからテーマ解説が行われたのち、次の方々から報告（講演）がありました。

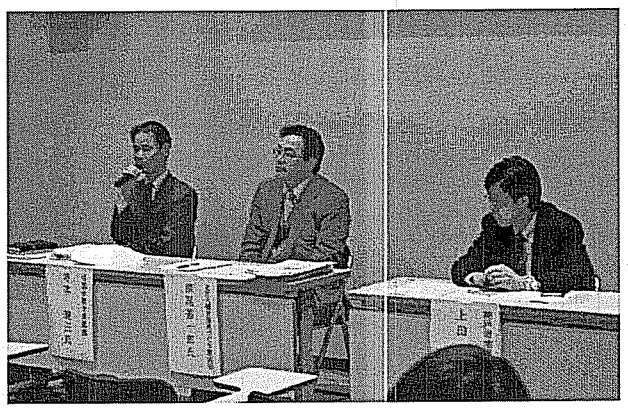
●京都市の取り組み／寺本健三（京都市都市景観課）
●近江八幡市の取り組み／深尾甚一郎（近江八幡市風景づくり推進室）
●神戸市の対応／上田真己（神戸市地域支援室）

寺本さんからは、景観条例や風致地区等に基づく長年の景観行政の取り組みについての解説があった後に、これらの規制に対して景観法としてどう対応させているかについての詳細な報告がありました。もともと数値基準が少ない規定であることから、役所内での議論を繰り返しながら対応していることや、今後数値基準に関する検討を行うことなどが語られました。

深尾さんからは、近江八幡での景観づくりに関する７０年代からのとりくみの歴史が語られた後に、景観法を活用したとりくみについての報告がありました。地域策定委員会等での住民参加による基準づくりの取り組み（モンタージュの活用など）や、実際の建物での景観基準の運用例の紹介などが紹介されました。

上田さんからは、まず北野や旧居留地といった神戸を代表する地域での景観形成地域指定や震災後活発になった景観形成市民協定の取り組みなど、神戸市におけるこれまでの景観形成の豊富な実践についての報告がありありました。その上で、景観法に関しては、条例との役割分担について検討して対応していることや、景観区域の拡大など今後の課題について語っていただきました。

（中井都市研究室　中井　豊）



報告（講演）者の皆さん。左から、寺下さん、深尾さん、上田さん。

■ 情報コーナー

●災害メモリアルー未来へ語ろう！わたしたちの体験
・日時：１月15日(日)10:00～14:30
・場所：人と防災未来センター
・内容：新潟・豊岡の子どもたちからの作文発表（中間：黒坂黒太郎のコカリナコンサート）、昼休憩／非常食を食べよう！炊き出し大会、聞いてみよう！大人たちに（貝原俊民・室崎益輝）、一緒に考えよう！絆の大切さ（渚中学心のケア担当教諭，「しあわせ運べるように」合唱）
・参加費：無料
・問合せ：実行委員会 078-262-5060

●みなとのもり公園つくり始め第１歩（記念植樹、花の種まきなど）
日時：１月17日(火)10:00～12:00
場所：公園予定地

●世界語り継ぎネットワーク(TeLL-Net)設立記念フォーラム～大災害を語り継ぐ
・日時：１月20日(金)9:30～12:30
・場所：JICA兵庫国際センター２階
・参加費：無料

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年1月31日発行

月刊 きんもくせい

06年1月号
(50+36+NO. 34)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■阪神大震災１１年目の朝

小林　郁雄（非認証NPOきんもくせい）

2006年の1月17日も、静かに寒い朝であった。

昨年の阪神大震災から10年目は、細かい雨に三宮・東遊園地はぬかるみ、竹筒に浮かぶろうそく「希望の灯り」も次々に消えていた。台湾からの921地震被災市民とその復興を支えるNPOの人たちと早朝5時46分に祈った。前年2004年9月21日は震災5周年を迎える霧峰郷の震災記念公園921教育園区開園式に、長田区の被災市民（野田北部、真野、御菅などのまちづくり協議会関係者など）と参加した。その市民交流会の一環であった（神戸まちづくり六甲アイランド基金の助成を受けて「台湾－神戸　震災被災地市民交流会報告書」を作成しているので、詳細が興味のある方に、さしあげます。送料：切手で３９０円）。

10周年ということで喧噪と混雑の1月であった昨年に比べ、今年はずいぶんと人出も少なく、例年顔を合わせる人たちとも、すぐに出会うことができた。寒い朝といっても、あの1995年の刺すような厳しい冷たさではなかった。何ものも失ってしまったことに吹きすさむ心のもちかたの違いかもしれない。11年目からまた新たな年月が始まったかのような気もする。

1996年1月から始まったメモリアルコンファランスinKOBEも昨年10回目の総集編を終え、今年からは「災害メモリアルKOBE」と装いを新たに、次世代に教訓を語り継ぐ会としてスタートし、1月15日に人と防災センターで第1回が行われた。また、国際防災・人道支援フォーラム2004の提言を受け、2005年1月の国連世界防災会議の時に設立準備委員会を立ち上げ、トルコ・アダパザリ地震5周年（８／１７）などで集まり、進めてきた世界災害語り継ぎネットワーク（TeLL-Net）も1月19日に設立会議を開き、20日に記念フォーラム－大災害を語り継ぐ－をJICAホールで行った（本紙05年6月号表紙参照）。2月にスリランカ・コロンボで、8月にトルコ・アダパザリで、また台湾921教育園区でも、震災・津波の語り継ぎ（学校教育、社会教育、映画・絵本・歌なども含め）の活動に各国からの参加が予定されている。

阪神の１１年目2006年は、また、サンフランシスコ大地震の100年目でもある。ニューオルリンズ大洪水の跡（まだ復興端緒らしいが）も含め、４月に訪問する予定である。



2006年希望の灯りの夜明け

■『コンパクトシティ』を考える17

－コンパクトシティ（COMPACT CITY）の３つの概念②

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

１．持続可能性を考えるヒント

20 世紀には驚くほどのスピードで生命科学が進展した。地球上の全生物が共通の物質でできていること、その物質の中でもＤＮＡが生命現象の基本を支えていることが明らかになった。人間やほかの生物は、遺伝子の単なる乗り物、あるいは遺伝子が創り出した機械に過ぎない。遺伝子が生き延びるための道具が、人間や動物などの生命体であるという。「利己的遺伝子」という考え方も登場し、生命の進化の主体は遺伝子にほかならず、機械としての生き物の構造と機能が、ＤＮＡという物質の構造と機能により解き明かされてきた。

生き物の目立った特徴の一つは、多様な生物がが一つの生命圏を形成していることである。つまり、生物は単体や単一の種として存在することができず、必ず他の個体や種と何らかの関係を持ち、多数の相互作用によって結合されたネットワークを作ることで生存を維持している。これらのネットワークは様々な階層で構成され、いわゆる生態系をなし、全ての生態系が最終的にはただ一つの生命圏の中に統合されている。

生命の持続可能性は、全てが多様なる他者との関係によって達成されてきたのである。成長し子孫を残すために、遺伝子・細胞・個体などのレベルでの自己複製により、自己が非自己を生産し、一が多を生成するダイナミクスが生命に不可欠である。自己の生命の維持を可能にする代謝で、内外におけるエネルギーや物質の交換が行われる。進化（変異と適応）は環境との相互作用である。環境の大きな変化に対応するために、外発的な命令や法則ではなく、内発的なルールの生成（自己組織化）により、多くの要素が絡み合った中から、ある種の秩序を生成する（突然変異）現象が生まれ、生き延びてきたのである。

２．工業社会の落とし穴

生き物に見る人間の目は、常にその多様性と共通性に向けられてきた。しかし、ニュートンにより完成した近代科学は、複雑で多様な自然界から、単純で普遍的な共通性（法則性）を見いだすことで、自然を単純明快に機械的な物理現象として説明し、数学的公式と科学的観察によって確かめることを可能にした。これを基に諸現象が見事に説明できるようになった。流体力学や動力学の研究が進み、水車や風車、滑車などの機械の原理の解明によって、革新的な技術を発展させることができた。こうした技術革新によって、英国に端を発した産業革命は瞬く間に世界中に広がった。

さらに、共通の言語、民族、宗教を持つ「国民国家」の成立が、一元的な統合を図らせ、産業革命後のナショナリズムによる工業化を後押した。20 世紀には経済成長による国富の増大化に成功し、工業社会のパラダイムが定着した。

しかし、数世紀にわたり、自然の持つ複雑性と多様性を軽視し、人間に都合のよいものだけを資源として取り出し、大量に消費し、そして廃棄物を大量に生み出してきた。こうした機械論的に効率性を追求した工業社会は、人間を含む生物の生命圏である地球の環境を破壊し、生命の持続可能性に警鐘が鳴らされ、パラダイムの転換が必要になったのである。

３．複雑・多様な多元化社会へ

1970 年代から脱工業社会への潮流が大きくなってきた。科学の分野では、人間の脳や生物社会のように、込み入った構造と体系を持つ一般に「複雑系」を解析する理論が進展した。生命科学もその一端である。これら複雑系の特性は、開放性であり、非線形性であり、自己組織性といわれている。つまり、要素間の相互作用という秩序的でも無秩序的でもない「カオス（混沌）」という状態が対象である。情報技術・コンピューターの進歩が解析の担い手になり、人工生命の誕生や、生命の遺伝に似たプログラム

などが開発され、社会現象の解明にまで発展してきている。まだ現在の諸矛盾を複雑系の科学が解決するまでには時間がかかるだろうが、ファジーを取り入れた製品や、省エネを目的とする製品への応用が進んでいる。

また、次元は大きく異なるが、人間社会の政治システムにおいても、擬態化した国民国家からの脱皮の模索が始まっている。

ヨーロッパの各国は「一つのヨーロッパ」を求め、ヨーロッパ統合（ＥＵ）の道を歩み始めた。その方向は、サスティナビリティを合い言葉に、国境を無くし、国をいくつかの地域に分割し、各々の地域が権限を持ち、国家という枠を超えて地域と地域が交流・連携を促進させようとしている。その際の地域の分割は、単なる地理的な分割だけではなく、これまで少数派として無視あるいは差別されてきた価値観を多元的に認めていくことを前提とした地域のあり方を考えようとしている。これは決して地域ナショナリズムではなく、多様な価値を認め合う多元化と様々な形態のコミュニティが活動する地域の主権が問われるものである。すなわち、グローバル化による市場メカニズムに依拠した無個性な地域や都市に埋没するのではなく、地域やコミュニティが意識を持ち、独自の風土や自然、文化、景観、歴史などを大切にしながら世界に発信することである。標語として定着したのが、“Think Global, Act Locally（地球的に考え、地域的に活動せよ）”である。

多元化社会の典型は、アメリカ合衆国である。広大な地域で多様な言語が日常的に語られ、多様な民族、多様な宗教が共存している。多元化社会の成立は、そもそもが建国の歴史に遡る。

アメリカ植民地の形成時に、新たに入植した人々は「社会契約」を結び、共同体としての政治社会である「タウン」を各地に作った。タウンでは人々が直接政治に参加し、全会一致により政策等を決定した。そのためには、対立する考えを持つ人はタウンから出なければならない単一性と排他性が宿命であった。

しかし、タウンは発展し、人口が増加していくと、構成員に多様な考え方が顕在化し、全会一致による意見形成が困難となった。そのための現実的な解決策は、タウンの中に個別の価値観を持つグループを独立した共同体として認め、それぞれで幅のある緩やかなコンセンサスを達成する道が、妥協の結果として採られることとなった。ただし、対立が生じる場合には、個々が訴訟によって、解決するに任せ、その判例をコモン・ロー（慣習法）として、その後の解決の基準とした。この社会に価値の多元化を認める道を採ったことが、アメリカを多元化社会としてまとめ上げる方向性を与えることとなった。（本誌04年1月号参照）

4．コミュニティ活動の活発なコンパクトシティ

これからの社会は、これまで以上に情報化・グローバル化が大きく進んでいく。多元化し多様な価値観を認め合うことが必要となる都市社会では、全ての人は独立した存在となる。一方で、個人として何ら力を持たない市民は、自分一人では何もできない。それを補完するのが、共通の価値観で結ぶ「人の絆」すなわちコミュニティ(Common＋Unity)の存在である。市民の自由に任意に参加できるコミュニティ活動を通じて、都市社会に住む一人ひとりの人間に対して、自己実現し、貢献し、意味ある存在となりうる機会を作る。コミュニティ同士も何らかの関係を持ち、多数の活動が相互作用できるネットワークを作ることが重要である。また、コミュニティの組織そのものが、外部環境に適応できるように、自律的に制御しながら多様に変化し組織化できることも欠かせない。コミュニティそのものの活動の多様性が、都市の活動を単なるコミュニティの数の作用の総和の効果ではなく、いわゆる非線形的な相乗効果で、より活発化させることが可能となる。それが持続可能な都市を形作るのである。

研究会で議論してきたコンパクトシティの概念の第２は“COMPACT CITY”＝“Communities Positively Act in the City"といえる。「都市内で多様なコミュニティが活発に活動している都市」である。

〈参考文献〉 吉永良正『「複雑系」とは何か』講談社現代新書

■震災の“風化”防ぐといいつつも

山口　一史（ひょうご・まち・くらし研究所）

阪神・淡路大震災から11年目を迎えた。05年は丸10年という節目の年であったため、国連防災会議の神戸開催誘致をはじめ、多くの記念事業が行われた。それと比較すると、11年はなにやらさびしい気分が感じられる。さびしいかどうかもさることながら「風化」に向けて気懸かりな動きもあった。

◆「私」越える語り部の語り

11年目の「1.17」で実際に見聞きしたことをいくつか挙げてみたい。

06年1月に「大震災を語り継ぐ―Tell－Net設立記念フォーラム」という催しがあった。Tell－Netとは、世界の大災害被災地が手を結んで、被災の記憶を語り続け、次の災害に備えるための教訓を発信し続けようという国際的ネットワークだ。神戸市のＨＡＴ神戸に立地している防災、人道などの関係機関でつくっている国際防災・人道支援協議会（ＤＲＡ）が中心となって、インドネシア、スリランカ、タイなど大きな災害にあった地域からの参加者を得て設立調印が行われたという。その記念のフォーラムの話だ。

このフォーラムで東京女子大の広瀬弘忠教授（災害心理学）は基調講演「災害に出会うとき」で、こんな話をした。



大きな災害で受けたナマの被災体験が語られることによって、聞き手はその災害を知らなくても疑似体験をし、同じ悲劇を繰り返したくないと強く感じる。その疑似体験を通じて、防災への動機付けが生まれる。また、「伝えること」は原体験を言語化し、整理していくこととなって原体験が客体化する。語り部が生まれるとは、語りが様式化するのであり、語りが普遍化していく道筋となる。さらにそれが進めば、詩や小説、絵画、音楽へと広がっていくのだ。

「語り」と「場」の広がりは災害体験が「私的体験」から「社会的価値」へと変化し、「私のための語り」だったのが、社会が語りの価値を認めるように進展していくことになる。

講演は、語ることの大切さを強調する内容だった。

神戸の経験は実は、詩や音楽、絵画の分野で早くから作品となって発表され、多くの被災者の心を慰め癒してきた。

◆鷹取東にあわせ地蔵

芸術として震災体験の表現は、アートエイド・神戸が行った震災詩集の発刊や詩と音楽のコラボレーション、演劇、絵画など様々な分野で積極的な試み行われた。このスピードは芸術家にも震災が大きなショックと与えたことと、芸術には復旧や復興について何ができるのか、といった根源的な問いかけを芸術家が自らに発したことが背景にある。

震災が生んだ作品のひとつに朗読劇「50年目の戦場・神戸」がある。車木蓉子さんの原案を朗読劇にしたもので、全国各地で公演され、大きな反響を呼んだものだ。

「見たもの、聞いたこと。見えてきたもの、聞こえてきたもの。見つからなかったもの、聞きに行ったこと…」という声明（しょうみよう）のようなリフレーンは聞く人の心をつかんで離さなかった。題名からも明らかなように、震災によって壊滅的な打撃を受けた神戸を第2次世界大戦で焦土となった記憶と重ね合わせたものだ。

この朗読劇が想を新たに「60年目の戦場・神戸」として公開されることになった。

これもまた、震災体験を語り継ごうというものなのだ。

いわゆる芸術だけでなく暮らしの文化にも大きな影響を与えた。神戸市長田区の鷹取東地区。表通りから少し入った角地に、こじんまりとした空地があって、その一角に3尊の地蔵を一緒に祀った小さなお社＝右頁上写真＝がある。

元々、町内に2尊の地蔵があって、それぞれ個人がお



守りしていた。震災後、まち一帯は焼失し、かろうじて焼け残った地蔵も、持ち主自身が家を失ってしまって祀りきれなくなった。これを町内の自治会や婦人会などの地縁組織が引き受け、２尊を一緒にし、さらに大阪の仏教団体から寄贈を受けた新しい１尊を合わせた３尊を同じ社に「あわせ地蔵」と名付けて祀っている。毎年、１月 17 日に近い日曜日に地蔵の前で、町内の慰霊祭を行っている。06 年も１月 15 日、朝早くから婦人会の人たちが地蔵の前に張られたテントの下で、食事の用意をしていた。

震災の体験を忘れない、子どもたちに伝えていく試みがこうした形で繰り返されてきているのだ。

「市民による追悼行事を考える会」という集まりがある。特別の主義や主張は持たず、震災に関係する追悼の行事や復興を考える催しの情報を収集し、まとめる作業をこつこつと続けている。なんてことのない活動のように見えるが、いまは被災地の中で、民間が行う震災関連の行事・事業の情報を持っている唯一の団体となってしまった。行政は自分たちが主催したり共催する事業については知っていても、ＮＰＯや市民が行う事業については知るすべがない。

その「市民による追悼行事を考える会」がまとめた 06 年の「1･17」前後の行事の数は、昨年に比べてかなり減っている。とくにシンポジウムや音楽イベントなど大掛かりなものが減っているようだ。その一方で、学校や幼稚園など教育機関での黙祷や防災訓練などは定着してきているという。

大きなイベントが少なくなっているのは、必ずしもその必要がなくなったり、担い手がいなくなったからではない。実施するに当たってのお金の手当がつかないという事情が強いのではなかろうか。そのあたりは、何とかならないものかと強く思う。

◆献花の予算削って

お金といえば、西宮市が今年から震災で犠牲となった人の慰霊祭で捧げる花の予算を削ってしまったと、新聞は報道していた。

もう 10 年も続けたのだからいいのではないかと思う市民もゼロではないだろう。財政難であるので、できる限り出費は抑えたいといく底意もあろう。慰霊、追悼という「個人的な」分野にいつまでも公金をだすのはどうかという折からの新自由主義的発想も受け入れられやすいのだろうか。

うっかりすると、見過ごしてしまいそうな事柄かもしれない。しかし、「伝える」という私たち被災地と被災者が担うべき役割から考えるとき、果たして「金もないから仕方ないか」と割り切っていいものだろうか。

犠牲者を悼む慰霊祭（名称は問わないが）は何のために行われるんだろうか。ひとつは、文字通りなくなった人びとの霊を悼み、いつまでも忘れない気持ちを地下の人たちに伝えるものだ。そしてその死を無駄にしない誓いを新たにし、防災への備えを忘れないことも背景にある。

もうひとつは、遺族の人たちを地域のみんなで支えていく、なくなった人の分まで互いに愛を分かち合って、同じ地域で暮らしていく決意を遺族も含めて示しあう気持ちもあるはずだ。そこではまさに慰霊は「私」ではなく「公共」そのものではなかろうか。

◆忘れていいのもなのか

例えば、広島や長崎の原爆忌で市民が捧げる白い菊花は「私」的なものであって公金を支出するのは如何なものか、などを発想する人はどこにもいまい。その死はまさに「私」を越えて「公」へと移っているからだ。

花の金を惜しむことによって、その地域社会はもっと大きなものを失いつつあるのではなかろうか。

世界の災害被災地が恐れるのは、災害にあったという事実を他の社会から忘れ去られることだ。10 年前、メキシコから来たＮＧＯの男性がこう言ったのを思い出す。「被災地にとってもっとも恐ろしいのは忘れられるということだ」と。

阪神大震災の被災地はこれまでこぞって「風化」を防ごうという合言葉を共有していた。そのひとつの担い手である行政自らが、「風化」しようとしているのではなかろうか。

献花の花代を惜しむ社会を私たちは誇りに思えるだろうか。自分たちの税金が献花に使われたといって目くじらを立てる人をつくるような社会をうれしく思うだろうか。

■Dr.フランキーの街角たんけん 第19回 もう一つの新開地（その1）

中尾 嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

昨年は湊川付替後の河川敷が埋め立てられ「新開地」が出現して１００年、という節目の年であった。

戦前は、浅草六区、大阪新世界と並び称された繁華街、遊興の地であり、今日でも新開地を語るときは「エエトコ、ええとこ、シュウラッカン！」という掛け声とともに、映画、淀川長治、チャップリン、…という単語が連想ゲームのように沸いてくる。

たしかに、明治初年に鉄道建設で現在のハーバーランド付近から追い出された福原遊郭に近接し、明治19（1886）年に開業した川崎(神戸)造船所の従業員の通勤路に当たった旧湊川河川敷は、明治38（1905）年に埋立工事が完了。神戸駅前にあった相生座が火事で焼け落ちたのを契機に、明治40（1907）年に、旧湊川敷に移転。それ以降、市内各所から芝居小屋、活動写真館の開業が相次いだ。大正２（1913）年の聚楽館の落成で、「神戸の娯楽街」としての地位を固めた新開地であるからには、それはやむをえないところであろう。

然るに、チャップリンをかたどったゲートを眺めながら、新開地本通りを下っていくと、ＪＲの高架の手前に、鉄板貼外装のオフィスビルが鎮座している。大阪ガスの営業所となっているこのビル、地元の人は「ガスビル」と言い習わしている。おおらかなコーナーのカーブ、これ又たおやかなアールのついた正面玄関など見ていると、玄人には「これは只者じゃないぞ」というシグナルが伝わってくる。

このビル、かつては、「神戸瓦斯株式会社」の本社が置かれていた。若い人には想像するのが難しいと思うが、昭和20年に大阪瓦斯に統合されるまで、阪神間のガス供給を担ったのが神戸瓦斯なのである。

玄関脇の定礎には、「皇紀二五九七年」と刻まれている。警備の小父さんに会釈してトイレを拝借がてらエレベーターホールへ入ると、市松パターンの床タイル、アールデコの意匠が浮き彫りされたアルミ製のエレベーター扉、トラバーチン貼の螺旋状の階段など、一営業所に使っておくにはもったいないほどの雰囲気である。

さて、小父さんに謝意を伝えて、西日の本通に戻ると、ガスビルのはす向かいに、かなり年季の入ったＨ工務店施工のマンションがある。これがまたやたけたなスケールである。

これだけまとまった敷地は、バブルの頃なら地上げの成果だが、このマンションが分譲された1970年代半ばには、そこまで阿漕なやり方は幅を利かせていなかった。ということは、マンションが建つ以前は、この敷地には大きな施設があった可能性が非常に高いということになる。

ここに何があったのか。

ある土曜日の午後、私はいつものように大倉山の新館２階にいた。このフロアーは、郷土資料専用で、「近代建築画譜」などなど、見る者が見れば垂涎もののマニアックな資料が揃っている。

私は地図コーナーで、戦前の都市地図を修正した大型本を眺めていた。もちろん、昭和初期の神戸の部を。新開地のあたりに目をやったときに、私は、「神戸瓦斯株式会社」の敷地の、本通を挟んだ西側に、「神戸市電気局」とクレジットされているのを見つけた。

「瓦斯」と「電気」。新開地の外れで、二大ライフラインの揃い踏み、私は「もう一つの新開地の持つ顔」を見つけた気がした。

（この項続く）

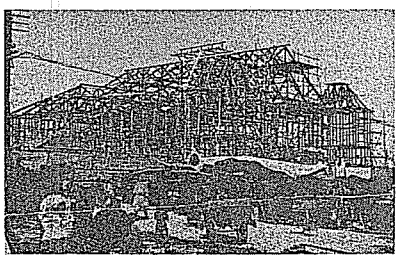


写真１「建設中の相生座」
（出典：写真集「神戸100年」



写真２「聚楽館（初代）」（設楽建築工務所設計、大正２年竣工）

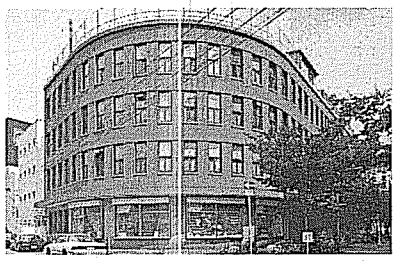


写真３ 現在のガスビル

坂のオムニバス2

守り坂

中川　紺

「いっそ辞めるか」

マキコは呟いて小石を足先で軽く蹴飛ばした。上り坂になっているために、石は大して飛ばず、音に驚いた野良猫が慌てて溝に逃げ込むのが見えた。

神社に隣接するその坂の両側には、二十以上のシャッターが並んでいてそれぞれにナンバーがつけられていた。月極のガレージ、あるいは倉庫らしいが、マキコはそこがひとつでも開いているところを目撃したことが無かった。下校途中の小学生のおしゃべりを聞きかじったところでは、ここは彼らの間でも「開かずのシャッター」と呼ばれているらしく、中にはお化けがいるだの、神社の守り神がいるだの、とにかく何か得体の知れないものが隠れていることになっていた。

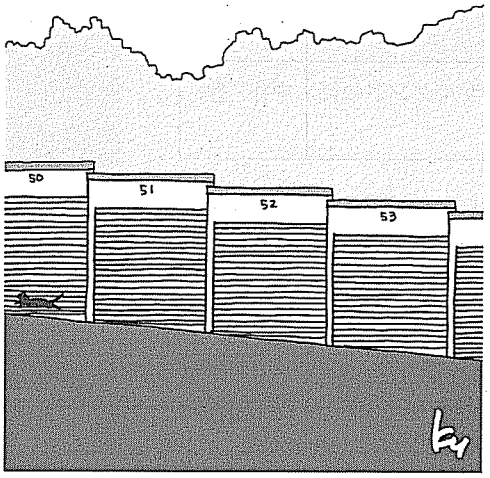
時々何かを唱えてこの坂を上る子どもを見かけることがあった。願いごとをしながら坂を上り切るとそれが叶うといった遊びでも流行っているのだろうな、と勝手に想像した。

帰り道になる坂をゆっくりとマキコは上っていく。昨晩、結婚まで考えていた恋人の二股が発覚した。今日は会社で朝から失敗続き。三つ下の後輩から「先輩、この仕事向いてないんじゃないですかぁ」とバカにしたように言われた。好きで選んだはずの仕事なのに、そう言われると途端に自信が喪失した。

坂の中腹で大きなため息をつくと、目眩に似た感覚が襲った。

●　●

正確には目眩ではなかった。目の前の光景が歪んだ。道がまるで生き物のようにうねり、マキコの目には大きな蛇が首をもたげたように映った。



まさか、地震？　しかし足下が揺れる感覚はまったく無く、三回目の瞬きをする間に風景はいつもと変わらないものに戻っていた。奇妙な思いに包まれたまま、坂を戻るのもどうかと考えてそのまま歩みを進めた。もうひとつ、ふたつ、次々と、次々と。

「つめたい……」

今年初めての、雪、だった。ゆっくりと空を見上げたマキコの脳裏に、もう七年以上戻っていない実家の秋田の様子がくっきりと浮かんで来た。どうしてもアパレルの仕事がしたくて十八で出た家だった。

「やっぱり辞められないよ」

マキコは自分に告げた。それから……今年こそは秋田に帰ってみようかなあ。そんな気持ちになった。

●　●

翌朝、通勤途中のマキコは開かずのシャッターが“開いている”のを目撃した。工具の倉庫として使っているらしい作業服を着た男性が坂の途中で黙々と何かを修理していた。

「それでも」

次に続く言葉をマキコはのみ込んだ。

……それでも、ここには「守り神」が本当に住んでいる……。

目が合った作業服男に小さく会釈をすると、不思議な顔で首をかしげる男の横をすり抜けてマキコは駅に向かった。　（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地まちづくり支援ネットワーク連絡会年間予定

年間テーマ／まちづくりの担い手の行くへ

日時		テーマ	担当
48	2月3日（金）	賃貸住宅経営者のいろいろ（不老さん、千葉さん、その他）	石東直子
49	4月7日（金）	大学の都市計画研究室は今（大阪市大、大阪大、神戸大）	小林郁雄
50	6月2日（金）	行政まちづくり支援制度の変節点（兵庫県、神戸市、三木市）	後藤祐介
51	8月4日（金）	阪神間における元気ＮＰＯ法人（ＣＳこうべ、その他）	野崎隆一
52	10月6日（金）	若手ネットのレパートリー（メンバー全員）	松原永季
53	12月1日（金）	まちづくりコンサルタントの行くへ（2）	中井　豊

●日時、内容が変更される場合があります、また、開催場所など詳細は事務局（GU計画研究所　078-435-6510）までご確認ください。
メールでの開催案内をご希望の方はgull@dorf-f.bb4u.ne.jp まで。

■震災語り継ぎ関連の催しの記録

●1/15 災害メモリアルKOBE



●1/17 みなとの森公園植樹



●1/19 世界災害語り継ぎネットワーク会議



■ 情報コーナー

●ＮＰＯ神戸の絆２００５被災地支援活動／新潟県十日町市・川口町

・日時：2 月 17 日(金)14:35 発～19 日(日)16:45 着

・内容：神戸空港から新潟へ。長岡市・川口町の仮設住宅訪問、十日町市の雪祭り参加

・問合せ：078-391-3207 神戸市民生協観光部

●美しい景観　神戸シンポジウム

・日時：2 月 20 日(月)13:30～16:30

・場所：神戸商工会議所神商ホール（神戸市中央区港島中町 6 丁目 1）

・内容：美しい景観を創る会からの呼びかけ／伊藤滋（早大教授）、基調講演「貴重な星 － ユニークな街」新宮晋（彫刻家）、パネルディスカッション「美しい景観創出と神戸の都市、地域づくり」

●第３回 HYOGON・ＮＰＯコミュニケーション祭

・日時：2 月 26 日(日)10:30～16:45

・場所：神戸山手大学３号館２階

・問合せ：078-230-8511 神戸まち研

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm

◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年2月59日発行

月刊 きんもくせい

06年2月号
(50+36+NO. 35)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■阪神大震災の教訓／安全な建物・危険な建物（前半）

林　春男（京都大学防災研究所・巨大災害研究センター長）

阪神大震災では多くの教訓を得ることができた。その中の重要なものの一つに、建物はしっかりと作れば壊れないことが分かったことがある。

地震に対する建築物の耐久力の基準としては、まず建築基準法が 1950 年にできて、71 年と 81 年の二回大きく改定されている。基準改定のたびに、すべての建物が一斉に建て替えられれば問題はないが、もちろんそんなことはなく、どの街にも、71 年以前に建てられた建物、71 年から 81 年の間に建てられた建物、81 年の新耐震基準に合致して建てられた建物が混在している。その中で、81 年以前に建てられた建物を「既存不適格」と呼ふ。この建物をどう改良して、耐震性を上げるかが、都市防災上の大きな課題になっている。

意図的に耐震強度を偽装した姉歯事件とは違う性格の課題だが、「法定の安全基準を満たしていない」という点では問題の本質は同じだ。防災の観点から言えば、既存不適格の建物に住んでいる人も、耐震強度偽装の新築不適格建物に住んでいる人も、同じように危険なのである。

余談だが、江戸時代は、地震で建物が潰れたら、その建物を建てた大工は、磔・獄門の刑だった。つまり非常に高いモラルを課していた。姉歯の事件は、日本の伝統である建物の安心感をくずした大変な事件であると言える。

阪神大震災では、市内の建物が激しく壊れている様子がマスコミで多く流れたが、実は新耐震基準に合致している建物はほとんど壊れなかった。

ではなぜ、6423 人も死んだのか。その原因の 85%は、個人の戸建て住宅の「層破壊」にある。逆に言えば、個人の戸建て住宅の一階部分が倒壊しなければ、犠牲者を減らすことができる。もっと言えば、一階に寝ていなければ、死者は半分になったはずである。

被害の詳細を明らかにするために、死亡者数 6423 人を、5505+1000 弱と考えるのがよいかもしれない。5505 人は地震発生から 24 時間以内に亡くなった人の数で、これを直接死という。このうち 85%が 15 分以内の即死というのが、監察医の報告であり、圧死と推測される。

震災後の建て替えでは、一棟も層破壊を起こさなかったプレハブ住宅、つまり工業化住宅が急増した。街の風情がなくなったと嘆いている人もいるが、個人住宅でも耐震性、耐災性が考慮され、規格化されているならば、そこへ住もうとするのは防災の観点からすれば当然のことである。（この項つづく）

【この文は、『中央公論』2006 年 3 月号特集●首都圏大地震に「防災マップが教えてくれる本当に危険な地域と建物」として発表されたものの一部を、筆者の了解を得て抄録したものである】

■くらし･すまい塾 第４回記録

若者がすなるルームシェアを中高年層もしてみんとす

橋本　大樹（神戸芸術工科大学大学院）

今回は「若者がしているルームシェアを中高年層もできないものか」というテーマで話し合った。現在わが国は全世帯の 1／３が単身世帯になり、一方で空き家戸数が総住宅戸数の１割強にもなり、既存家屋の利用としてルームシェアをすすめない手はないと思われる。最近、都会ではシェア生活をする若者がでてきたが、その背景には、海外留学した学生が当地で体験して帰国後もシェア生活を始めたり、若者の日常を描いた海外ドラマでシェア生活が出てくるような映画等の流行がルームシェアの後押しをしているようだ。しかし中高年層の事例がなかなか出てこない。欧米では若者に限定されず中年層の単身男女に住宅やフラットがシェア居住に使われている事例は少なくない。中高年層がルームシェアをするにはどのような条件整備が必要なのか、またシェア居住のメリットは何か、さらにルームシェアの定義などについて議論した。

■シェア居住の定義

複数人でひとつの場所に共同で住むことを「○○シェア」または「シェアリング○○」と呼び、○○はその場所の形態に応じて厳密には「ハウスシェア」「フラットシェア」「ルームシェア」「ドミトリーシェア」と呼ばれるが、ルームシェアが全てを含めた意味で知名度があるようだが、和製英語で研究社新英和・和英中辞典には載っていない。

シェア居住の定義については、さまざまな意見が出た。各部屋にトイレ、バスやキッチンなどの水回り等の設備がなく、その建物の中の水回り等の設備を共用するのがシェアで、各部屋に水回り設備があるワンルームマンションとの違いはそこにある。食事を提供してくれる人がつくとドミトリーシェアになる。ドミトリーにシェアがつくのはおかしい。金銭的な事を均等にするとルームシェアにみえる。どのように住んでいても対等な関係で暮せばシェアではないか等々の意見が出た。

■シェア居住のメリットと居住ルール

一般的なメリットとしては、経済的で、生活に安心感があり、一人の生活では得られないもの（空間的なもの、同居人からの刺激）を得ることができるなどが指摘されている。

くらし･すまい塾のメンバーにもルームシェアをしている者がおり、彼女の話では、特にルールというものは作ってなくて、光熱水費を半分ずつ負担し、食事はほとんど一緒にしないと言う。大家さんにルームシェアをしたいと言うと了承されたが、友人が出て行くことになると私も経済的負担増などで出て行かざるを得ないと思う。

最低限のルールを決める必要があるのではないか、生活レベルが同じでないと難しいのではないか、ルールはなくても気づいたらやるという方がいいのではないか等々の意見が出た。親切すぎて「よけいなお節介」になるとシェア居住がしにくくなるので、素敵な個人主義を育む必要がありそうである。

■シェア居住は中高年層にも受け入れられるか

老若男女のシェアードハウスの事例として、東京世田谷の「松陰コモンズ」がある。築 150 年の民家で、26 歳から 63 歳までの性別も年齢も職業も異なる７人が共に暮らす。７人はそれぞれ６畳から 10 畳の部屋を個人の空間として利用、台所、風呂、3 つのトイレ、30 畳の座敷などは共用する。「適度な距離感がいい」、「あいさつする相手がいる豊かさ」「多人数が暮す楽しさがある」と住民たちは言う。なお、松陰コモンズはＮＰＯコレクティブハウジング社の賃貸事業で、所有者から母屋を一括借り上げし、入居者に個別転賃貸するサブリース事業である。

もうひとつの事例は「都市再生機構のハウスシェアリング制度」で空き家対策として全国 304 団地 15 万戸を対象 04 年 10 月に開始された。現在のところ想定した単身高齢者同士の同居は少なく、申し込みは若年層に集中しているという。

これらの先進事例について出された意見はかなり現実味を帯びていた。

中高年層がシェア居住に魅力を感じるのは経済性よりも人とのふれあいの楽しさではないか。単身赴任者にシェアは向いていると思う。高齢者はシェア居住を終の住処として考えられるのか。終の住処としてとらえるとシェア居住ではなくコレクティブ居住の志向になるのではないか。最近、高齢者同士が一緒に住む事例はわが国でも少なくないが、若者と中高年層は生活の考え方が違うのでシェア居住は難しいと思う。特に中高年層は自分の生活スタイルを曲げない人が多いので、同年代の人たち同士でも難しいのではないか。友人同士で気の合う人としかシェア居住はできないと思っていたが老若男女でできそうだということが分かった。以上のようなさまざまな意見が出た。

■シェア居住の可能性

まずシェア居住を普及していくには、シェア居住のサイトなども必要である。現在もあることはあるが、若者対象のものである。シェア居住の課題のひとつに複数人の住人のうち誰かが出ていくとその部屋の賃料をどう負担するのかという点があるので、ＮＰＯコレクティブ社のようなシェア居住を推進したり、サポートする組織やシステムが必要である。また、家具付の賃貸住宅が増えるとルームシェアなどはしやすくなり、広がりそうだ。経済的余裕のある人はシェア居住をしようとは思わないのではないかと思っていたが、シェアで住む面白さ、楽しさを求める人もいるようだ。高齢者がシェア居住を終の住処として考えられるような条件が整えば、むしろ孤住よりは安心居住なので受け入れられると思う。新しい住まい方への発想の転換も必要だと感じた。

若者は次のライフスタイルの展開があり、一時的な住まい方として捉えるので、シェア居住はしやすいが、高齢者が終の住処として考えると難しいのではないかという考えが多いが、シェア居住のメリットやわが国の単独世帯の増加、少子高齢化、膨大な空き家数などの状況をみると、中高層にはまだ馴染みのない住まい方ではあるが、今後の住まい方のひとつとしてシェア居住をもっと推進していく必要があると思ったし、その可能性はあると思った。

なお、欧米の多くの国は 18 歳を過ぎれば親元を離れて自活するのが当然だが、ひとりで住むためのアパートは大都市以外にはほとんど存在しない。日本のようにワンルーム形態の物件はないので、経済的理由から必然的にシェア居住が誕生し、他人と住む訓練がなされている。日本ではなぜワンルームマンションがポピュラーなの？

でも地域からは歓迎されていない．．．。

参考資料／ ①The Big ISSUE 05.10.15 の「特集・シェアする人々」 ② 男女 7 人古民家暮らし／松陰コモンズ ③ SAHS no. 5 「特集・新しい住まい方／ハウスシェアリングってどうですか？」インタビュー記事 ④ 毎日新聞 05.8.11.「都市再生機構のハウスシェアリング制度」の記事 ⑤ ルームシェアする生活／akky 著／二見書房



参考資料④



参考資料②

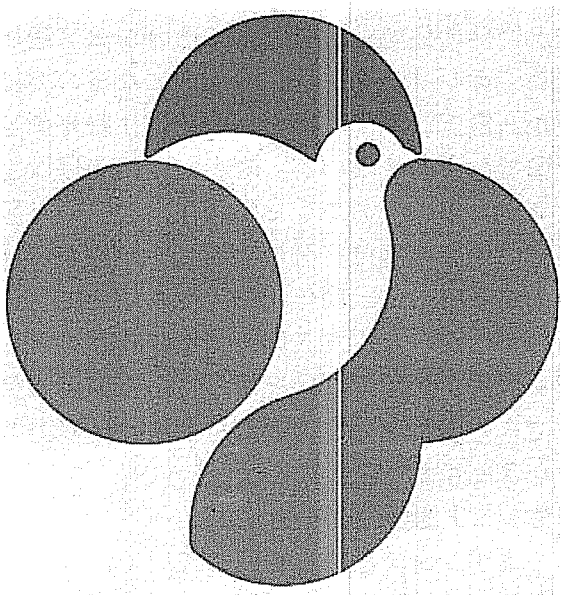


参考資料①

■神戸のみどり・その４『しあわせの村誕生異聞』（前半）

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

１．村のはじまり



今(2006年)から36年前、相楽園の大会議室でのことだった。昭和46年度の神戸市の予算査定のとき、老人医療の公費負担などが議論されたあとのブレークタイム、ほっとした空気が会議室に流れていた。

「そうだなあ……、障害者だとか高齢者、つまり心身に何らかのハンディキャップを持った人たちが、そこへ行けばよけいな気を遣わず過ごせる、心が和む、そんな場所『しあわせの村』とでもいうのかなあ？そんなものを今すぐというわけではないが、ぜひ創りたい」故宮崎辰雄市長が財務課の担当者たちに呟くように言ったという。私はこの話をその当時財務課で、開村のとき上司だったある人から聞いた。おそらくこれが『しあわせの村』構想がスタートした始まりだと思う。

２．計画立案　――構想から着工まで10年――

そんな発想が語られたあと、昭和46年度から『しあわせの村』構想が着手された。当時故宮崎市長の構想がどのような理想をもとに出されたのか誰も分からなかった。とにかく基本構想（案）策定が当時の民政局から外部コンサルタントＡ設計に委託された。その構想の概要は昭和51年(1976)10月に公表された『新・神戸市総合基本計画（第2次神戸市マスタープラン）』によると、「老人・児童・身体障害者を中心に市民一般に開かれた施設であり、相談・指導施設・通所・短期滞在施設・教育・研究施設等を備えた福祉医療、教育の専門的な福祉サービスから、さらに文化・レクリエーション・コミニュティ活動が行われるしあわせの村を構想する。村は一般社会から隔離したものでなく、身近で、開かれた環境のもとの、中核的福祉地区であり、実験的福祉都市建設の核として位置づけられる」とある。

ここに至って故宮崎市長の構想は具体性を帯びてくる。この構想の考え方はまさに「ノーマライゼーション」の実現にあった。ともすると世の中から隔離・分断されてきた福祉施設を、本来のあるべき姿に復活させる考え方だ。「ノーマライゼーション」はデンマークで最初に提唱された。その意味は高齢者や障害者を隔離・分断するような社会はアブノーマルであり、高齢者も若者も、障害者も健常者も、すべて人間としてノーマル（普通）な生活を送るため、ともに暮らし、ともに生きることのできる社会こそ、ノーマルだ、という考え方だ。現在ではかなり社会に浸透しているが、当時はまだそんなに知られていなかった。

そして、昭和52年(1977)，『しあわせの村』計画地は現在地に決定した。決定要因はまず、①谷部の棚田の民地を除いて大部分が市有林であり用地の確保が進めやすいこと、②神戸市のほぼ中央にあ

ることだった。神戸市域は正方形に近い。地図を広げると、『しあわせの村』は確かに市域の“へそ”にある。このことはこの施設が神戸市の総合福祉ゾーンとして全市民の中心施設であることを象徴している。

当時、長田箕谷線沿いには墓園、拘置所、特別老人ホーム、軽費老人ホーム、消防学校、ひよどり住宅があるだけで、道路から西は約 1,000ha に及ぶ広大な森林が続いていた。それは今も村西側に広がっている。そして私たちは計画立案と用地買収の調査のため、白川村から濃いみどりと木漏れ日と清らかな水が岩に踊る白川沿いに村予定地に入っていった。民地は谷沿いの棚田だ。小さな田に稲が実り始めていた。所どころに小さな池があった。池の周りの木立が涼しげに水面に影を揺らしている。棚田の畦で食べた弁当の味が忘れられない。

昭和 54 年(1979)、基本構想をもとにした基本計画（案）の策定が B コンサルタントに委託され、翌年(昭和 55 年(1980))「しあわせの村研究会」が設置され、基本計画（案）について福祉、医療、教育、建築、土木など各方面からの意見を聴取し、基本計画（案）のオーソライズを進めた。全体面積約 205ha、全体事業費約 520 億円の基本計画（案）が固まるにつれて、もともと大きな問題であった財源確保が急務となってきた。当時、福祉関係の国庫補助金は微々たるものだった。そこで前々から考えられていた社会福祉施設と都市公園の複合施設構想がにわかに現実味を帯び、同年(昭和 55 年(1980))、『しあわせの村』を社会福祉施設（民生ゾーン）と都市計画公園（広域公園）の 2 ゾーンに都市計画決定し、同時に環境アセスメントを環境アセスメント審査会に上程した。

３．建設　――着工から開村まで８年――

昭和 56 年(1981)、ポートピア ’81(神戸ポートピア博覧会)で賑わっていた年、『しあわせの村』は着工した。造成工事にかかりながら社会情勢や福祉施策の進展にともない、昭和 56 年(1981)～58 年(1983)にかけて都市計画研究所に委託することによって「しあわせの村施設総合研究会」が設置され、基本計画の施設内容や配置計画の再検討や施設の総合的な管理運営が模索され、神戸市の福祉の核となるにふさわしい新しい手法の開発をめざした。「ノーマライゼーション」の実現が前面に出た。そのため、基本計画の見直しが進められ、昭和 62 年(1987)、身障者のみならず、子どもからお年寄りまで誰でも快適に過ごせる健常者も楽しめる施設の目玉である「温泉健康センター懇談会」を設置し、伊香保温泉で実際にホテルを経営し、温泉の権威である（クワハウスの創始者）木暮金太夫氏を中心に整備内容と管理運営について意見を聞いた。昭和 63 年(1988)、村の統一的管理運営主体を（財）こうべ市民福祉振興協会が担うことになった。

そして平成元年(1989)4 月 23 日開村記念式典、同 26 日村は正式に開村した。実に構想から 18 年の歳月が過ぎていた。

４．新しい発想　――制度の枠を超えて――

『しあわせの村』の素晴らしさは既成の考え方に囚われず、新しいものを開拓していったことにあると思う。これはなかなかできない。どうしてもしがらみや制度の枠に囚われてしまう。『しあわせの村』はそれができた。故宮崎市長やその考え方を推進したふたりの故人（山下彰啓氏と加藤春樹氏）の業績は計り知れない。彼らは市民のためになるのであれば、国や市の制度にこだわらず柔軟に対応すべきだという考えですべてを進めた。当時、都市公園と社会福祉施設の複合施設など考えられないことだった。当初、都市公園整備を福祉施設と一体的に整備することを建設省（現在の国土交通

省）に相談したとき、苦悩する担当官の顔を私は覚えている。しかし当時建設省も新しい都市公園のあり方を模索していた。「やってみよう」そう言った補佐の顔は輝いて見えた。少なくても都市公園ゾーンの国庫補助金とその関連事業の起債が容易になる……と。

「でも、福祉ゾーンも計画決定することが条件です」彼は言った。そして『しあわせの村』は全国で初めて社会福祉施設を都市計画決定した施設となった。同じ意味でその当時補助対象でなかった温泉関連施設も建設省がちょうど推進しようとしていた「健康増進施設」の補助対象施設の拡大による「健康増進施設」のモデルとすることで交渉がまとまった。私たちは東京から神戸に帰る新幹線の車窓に缶ビールの空き缶を何個ならべたか覚えていない。

それから何年かして福祉施設のみならず他省庁関連の他施設との複合施設補助は都市公園国庫補助の正式なメニューとなった。

５．温泉と夕焼け

『しあわせの村』は隠れた夕焼けの名所だ。北ゲートに近い丘の上に造成工事を担当していた神戸市整備公社の現地事務所があった。今は禁止されているが、仕事が終わったあと、私たちは疲れた身体を癒すため、みんなで食材を持ち寄ってバーベキューをした。夕焼けは遠く森林や空を真っ赤にしていた。ビールが腹に滲みる。みんなの顔も夕焼けに染まって赤い。笑いが溢れる。

「ノーマライゼーションってさ、一般市民もこなくちゃなあ？」、「ああそうや。何かいいアイデアないか？」、「今の計画だと目玉がないぞ」、「客寄せパンダがほしい」誰かが酔って舌の廻らない感じで言った。「俺、温泉に入って、冷たいビールが飲みたいんや」、「それや！　温泉を掘ってみようや。一般市民だけでなく誰でも喜んでもらえるしなあ」。現在はクワハウスとかスパとか大衆風呂とか○○温泉とか人気が高いが、その当時はまだそれほどでもなく、民間の施設も少なかった。

早速、調査が始まった。「総合福祉ゾーン（しあわせの村）建設事業＜造成工事の記録 1＞よると、まず温泉工学研究所の調査で村区域の西中央下の堂防調整池附近が有望と出たので、兵庫県温泉審議会に「温泉掘さく許可申請」を出した。しかし工事工程や地形上二次揚水が必須であったため断念。別のコンサルタントに地表地質調査と弾性波調査を依頼した。その結果、温泉が湧出する可能性の高い、花崗岩と神戸層群の境目で比較的深度が浅い（約 400m）２ヶ所が候補になった。そして土地利用計画等を勘案して、現在の神戸リハビリテーション病院の東にある駐車場の山裾をボーリングすることとなった。

このボーリング結果に基づいて本掘削を行いようやく温泉を掘り当てた。しかしこの掘削はあくまで井戸の掘削であったため手続き上問題が生じたが、最終的には温泉として認定された。泉質等は以下のとおりだった。この温泉を掘り当てたことにより健常者誘致施設、すなわち温泉と健康を結びつけた健康運動施設「温泉健康センター」の計画は一気に進んだ。

不謹慎かもしれないが、夕焼けを眺めながら飲んだビールが肩から力を抜き、柔軟な心が素晴らしいアイデアを生んだように思う。昨今、このような息抜きがすべてだめだという風潮だが、節操のある催しは時として有意義な場合が多い気がする。（この項つづく）

『しあわせの村』の温泉概要

●泉質　単純弱放射能冷鉱泉（単純ラドン泉）

●泉温　18.3℃

●湧出量　235 L/MIN

●効能　①浴用…1)神経痛 2)筋肉痛 3)関節痛 4)五十肩 5)運動麻痺 6)痛風ほか 15 項目、②飲用…1) 痛風 2)慢性消化器病 3)慢性胆嚢炎 4)胆石症 5)神経痛 6)筋肉痛 7)関節痛

坂のオムニバス3

ひび割れ

中川　紺

北野坂にさしかかった所で急に無言になった。不思議に思い、どうしたの、と聞いた。

「坂が少し怖い」

大の男が言う。四十過ぎて何言うてるん、と冗談めかして言うつもりが、男があまりに真剣な顔つきをしているので、何も言えなくなってしまった。

坂を見下ろしながら、男が語ったのは次のような話だった。

●　●

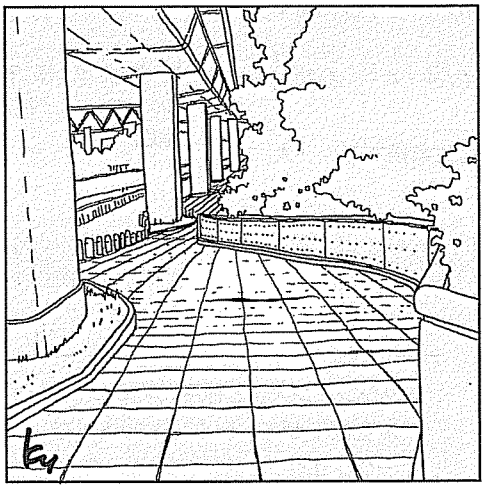
男がまだ小学生だった頃。自転車のブレーキをかけずに坂をどこまで下りれるか、というゲームが密かに流行っていた。少年たちは毎日のようにこの遊びに興じていた。見つけた親や近所の人が注意することもしばしばあったが、このスリリングなゲームをやめられる訳もなく、親や教師の目を盗んでは行われていた。大きな事故も起こっていなかった。

男がいつも遊ぶ坂は、川沿いの公園にある遊歩道だった。公園は南北に細長く、そこに隣接して整備されている遊歩道は川上から川下に、ゆるやかに蛇行しながら続いていた。

ある日、ゲームの最中に遊んでいた一人の少年が坂の下で転倒した。自転車が倒れた音を聞いて残りの子どもたちは慌てて駆けつけた。しかし、その子どもは姿を消していた。ライトが割れた自転車だけが残されていた。

石畳には二十センチ程度の亀裂が走っており、小さな段差が出来ていた。どうやらそこに引っかかって転倒したらしかった。

子どもの失踪事件ということになって、



警察が動き出した。転倒した拍子にどこかに落ちたのではないかと辺り一帯が捜索されたが、何も見つからず、誘拐のセンでも捜査は進められた。男を含め子どもたちは何度も事情を聞かれ、「少年が消えた」ことを主張したが、その話を大人は信じようとしなかった。

子どもたちの間で「あいつは坂に食われた」というウワサが広まり、ゲームは自然消滅していった。

何の進展もないまま、一週間が経過した頃、消えた少年は突然家に帰ってきた。

少年は「坂」と話をしていた、と言った。見えないけれど、坂の雰囲気を放つ、気配、みたいなものと話していたのだと説明した。しかもその時間は小一時間程度だと。

大人は困惑し、医者は誘拐されていた恐怖感のせいで、こういった比喩が生まれたという説明をつけた。しかし、子どもたちの中には、その少年が本当に「坂」に会ったのだと信じ、どんな話をしたのかを聞きたがる子も多かった。だが少年は、会話の内容は言葉で説明できない、と言った。

ほどなく少年は転校していった。周りの目を気にした家族が手続きをしたらしかった。

坂のひび割れは、きれいに補修され、誰もがこの事件を忘れていった。

●　●

「帰りもタクシーにすればよかった」と私はポツリと言った。坂に消えた少年は、本当は男のような気がしてしょうがない。

少し先の、工事の跡の割れ目を見つめる男の瞳の中には、「消える恐怖」と「もう一度『坂』に会いに行きたいという気持ち」が錯綜していた。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第４８回連絡会報告

今回のテーマは、「関西における賃貸住宅経営の今」で、２月３日（金）、神戸勤労会館で行われました（写真下は会場受付の様子）。まず、コーディネータの石東直子さん（石東・都市環境研究室）からテーマ解説があった後に、次の四方から講演がありました。

①萩原恭一さん（ＪＡ兵庫六甲）「神戸地域郊外における賃貸住宅経営の状況」

・・・・JA 兵庫六甲（旧神戸西農協）における昭和４０年代後半からの賃貸住宅建設や管理の変遷、現在取り組んでいる賃貸住宅建設の考え方など

②不老嘉彦さん（有限会社 不老）「神戸市北区におけるコミュニティハウスの実践」

・・・・神戸市北区で建設した民間賃貸のコレクティブハウス「悠遊館」について―総戸数１５戸（36～46 ㎡）で広い共用スペース、管理人常駐、など

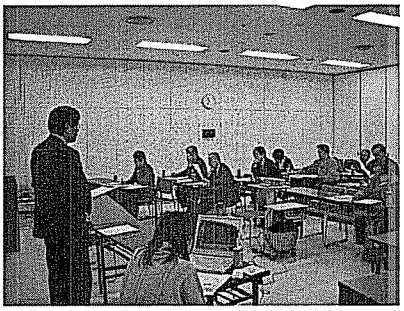
③古田義弘さん（アトリエフルタ建築研究所）「阪神間で展開するペットと住める賃貸住宅」

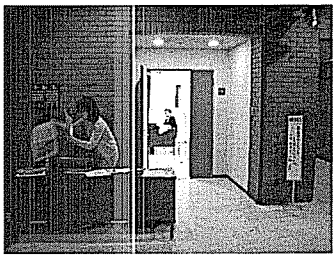
・・・・住棟でペット可能ゾーンとそうでないゾーンを区別した賃貸住宅について、その他

④千葉桂司さん（㈱ＵＲサポート都市再生業務本部）「大阪都心における賃貸住宅の展開」

・・・・人口減に悩む大阪都心を再生するため、都市再生機構としての主に船場での取り組み、その他

（中井都市研究室　中井　豊）





連絡会の様子、2006.2/3、於：神戸市勤労会館

■ 情報コーナー

●第８０回・水谷ゼミナール

・日時：３月３日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室
・会費：1,000 円
・内容：テーマ／「六甲道の再開発を振り返って」、報告／①「なぜ六甲道駅南地区再開発事業は１０年間で完成したか」有光友興（当時・環境開発研究所）②「都市計画決定からまちづくり提案まで」倉橋正己（当時・神戸市六甲道駅南再開発事務所長）、③「施工後から始まった新しいコミュニティの運営・管理」安元美帆子（コー・プラン）、進行／小林郁雄（非認証NPO きんもくせい）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL. 078-435-6510）

●ワシントン大学と神戸大学による都市空間デザイン・シャレット・ワークショップ

・日時：３月 20 日(月)～24 日(金)
・場所：神戸大学・神戸フィールドスタジオ
・内容：神戸市長田区の３地区（高取山地区、御蔵地区、真陽地区）を対象に、神戸大学とワシントン大学の大学院生や若手研究者が、地域活性化のための都市空間デザインの提案を行い、広く公開する。

●多文化と共生社会を育むワークショップ～Kick-off 講演会・音楽会～

・日時：３月 31 日(金)18:30～20:30
・場所：（財）神戸学生センターホール（阪急六甲駅より山側へ徒歩２分）
・内容：第１部 ワークショップの結成と今後の活動／飛田一雄、小林郁雄、澤井宏二、藤井英映、第２部 講演／「アジアの中の人的交流のありかた～日韓関係を中心に～」小針進（静岡大学国際関係学部助教授）、第３部 音楽会～日本の歌・韓国の歌～
・参加費：600 円（高校生以下 300 円）
・問合せ：多文化と共生社会を育むワークショップ代表 山地久美子（tabunkakyouseiws@yahoo.co.jp）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年3月31日発行

月刊 きんもくせい

06年3月号
(50+36+NO. 36)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■阪神大震災がもたらした変化（後半）

林　春男（京都大学防災研究所・巨大災害研究センター長）

それでは、直接死以外の1000人もの死者はどのようにして出たのか。長い間ライフラインが止まったり、避難所で病気になったりして亡くなったのだが、これを阪神大震災以降、「震災関連死」と名付けた。日本の防災史上初めて震災に関連して亡くなったと認めたわけである。“認めた”とは、世帯主は500万円、世帯主以外は250万円の災害弔慰金の受給資格を認めたということだ。阪神大震災の被害の甚大さと、震災後の社会の混乱の中で、震災関連死という新しいジャンルが生まれたのである。そして現在、その認定基準の曖昧さのために難しい問題に発展している。

また、阪神大震災を境に、避難所に対する考え方が変わった。これまでの地震避難と言えば、関東大震災で多くの人が亡くなった延焼火災からの避難を意味し、延焼火災がこないような広域の空き地への避難をさしていた。つまり火災からの避難なので、基本的に短い時間の避難であり、多くの人が、何日も公共施設に泊まるような「収容避難」は考えられていなかった。火山の噴火での長期避難が唯一の経験だったが、それでも77年の有珠山で22日。86年の伊豆大島の避難で1万5000人を一カ月避難させたのか最大最長だった。

それが阪神大震災では、最大で32万人が最長7ヵ月の避難を余儀なくされた。避難所は1000ヵ所にも上り、弁当代も何百億円にのぼった。避難民だけの30万人都市ができた。マルクスではないが、規模の変化は質の変化を生む。今までの災害では経験したことがないスケールの避難者対応を、どのようにマネージするかという新しい課題が出てきた。

そのほか「心のケア」がクローズアップされたのも、今では被災地ではあたりまえの光景となった「ボランティア」が、社会的に認知されたのも阪神大震災がきっかけとなった。

また、阪神大震災は、防災に対する大きな思想的変化ももたらした。

日本では、防災というと、戦国時代以来、治山・治水を中心に、台風と集中豪雨を原因として起こる水害に対してのものだった。

だから防災の思想は「復旧」だった。例えば堤防を考えると、切れたところだけを倍の高さに盛っても有効な対策とはならない。“元に戻すこと“がすべてだったのだ。

では、地震の場合は。元に戻せばいいかと言えば、それは違う。例えば、木造住宅の密集地が壊れたとする。壊れたからと言って、次も同じように作れば問題解決にはならない。今は法律も許さない。もとに戻す「復旧」ではなくて、災害をきっかけとして新たに街を作るという「復興」が目指されることになった。これは大きな変化である。

【この文は、『中央公論』2006年3月号特集◉首都圏大地震に「防災マップが教えてくれる本当に危険な地域と建物」として発表されたものの一部を、筆者の了解を得て抄録したものである】

■『コンパクトシティ』を考える 18

－コンパクトシティ（COMPACT CITY）の３つの概念③

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

１．“compact”のもう一つの意味

コンパクトシティの概念を考える３回目は、コンパクト(compact)の単語の意味からである。"compact"を英和辞典で引くと、形容詞で「質の密な、ぎっしり詰まった」という本来の「コンパクト」シティの概念の意味と、もう一つは名詞で、「契約、誓約」という意味が出てくる。今回は、この『契約、誓約』の意味から、コンパクトシティの概念を考えていきたい。

２．中世城壁都市＝コンミューン（誓約）都市

話をヨーロッパ中世時代に戻そう。ローマ帝国が東西に分裂し(395)、西ローマ帝国がゲルマン民族の大移動により滅んだ(476)。7 世紀にはイスラム教徒であるサラセン人の西方進出で、かつてのローマ繁栄の経済を支えてきた地中海交易を奪われた。こうして、西ヨーロッパは地中海から封鎖され、貨幣経済は崩壊し、純然たる内陸国家、農業国家に変貌した。中世時代の始まりである。

中世社会の特徴の第１は、民族移動したゲルマン諸部族が各地に王国を誕生させ、農業を中心とした土地を介した封建社会となった。第２は、ローマ帝国の国教となった(392)キリスト教が、各民族を改宗させ、教義が政治や社会に浸透・定着し、教会や修道院が村落の中心となった。第３は、封建領主である「戦う人」（貴族や世俗騎士）と、「祈る人」（聖職者）を支配者とし、「働く人」（農民・手工業者）を被支配者とする 3 つの階層からなる社会構造であった。第４は、異民族の来襲や戦争に備え、城壁を周囲に巡らし、その内外に集住する城砦都市が各地に展開した。

中世社会の転換は、9 世紀からの地球温暖化による農業生産増加、農業革命（三圃式農業）、農村の人口増加が起点となった。11 世紀末からの十字軍の遠征などで、数世紀間閉ざされてきた地中海交易権を奪い返えすと、遠隔地交易が復活し、西ヨーロッパの経済が活発化した。遠隔地商業の発展で、各地の市場を渡り歩く冒険商人が増え、商品生産を専門とする手工業者が現れてきた。

城砦によって安全が確約された都市では、定期的な市場が開催されるようになり、活動の活発化した商人たちは、城砦の外に商人定住区を形成した。封建制の下でも土地に拘束されない商人はどの階層に属さない「自由民」として、領主の干渉を避けることができた。商人居住区には、商品生産の手工業者や徒弟の移住も増え、商人と手工業者間にある種の自治的秩序ができ上がり、1 つの階層として合体し、新たに「市民層」が誕生した。

交易や商業活動が大きくなると、商工業者である市民層が都市の中核を形成し、経済活動を円滑にするための秩序・自治を強く求めるのが一つ流れとなった。新たな時代の流れを理解しない支配者の封建領主に対して、経済的な力を背景にして、市民層は『コンミューン（誓約）』を結び結束を強めた。実力で自治を勝ち取ろうとする市民層は領主と戦える軍事力を傭兵や市民層自身が身につけ、暴力的に戦う革命的運動へ発展した。

暴力的な行動を起こした背景は、中世の法の性格である。キリスト教が精神支配した時代では、生活上での法や規律の考え方は、人為的に定める法ではなく、「法は神の正義のあらわれである」という自然法的な考え方であった。問題解決の審判者は、常に神であり、個人間では申し出による決闘、組織間では戦争による決着であった。

ドイツ（神聖ローマ帝国）は、集権型の統治構造に至らず、多元化した封建領主に圧倒されていた国王は、都市の商工業者たちの利害と一致し、都市を味方につけようとして、商工業者たちの支持を約束し、援軍を送った。領主との戦いに勝利した都市には、国王から統一的な自由身分と自治権を保障する「コミューン特許状」が与えられ、国王に直属する「自治都市」に生まれ変わった。

『誓約』により市民が命懸けで自治を獲得した都市は、相互ネットワークによって結ばれ、経済的繁栄を獲得した。都市の成長にあわせて、外には堅固な城壁が拡張され、中心には自治権の誇りとしての荘厳な市庁舎や高い鐘楼が建設された。

これら中世城壁都市が、「コンパクト」シティのモデルといわれる所以である。

3．「社会契約」による近代民主主義の始まり

生活の規範の隅々を神（キリスト教）が支配してきた中世も、14 世紀のルネサンス、16 世紀のルターに始まる宗教改革で変革が起こった。17 世紀のニュートンによって完成した近代科学によって、人間は理性を働かせて努力すれば無限に進歩する楽観的進歩主義の思想が人々の世界観を変えた。17 世紀が近代への転換期となった。

つまり、中世の世界の一切の事象を支配していた全能の神は、「絶対的な力」によって天地創造をしたが、その衝撃とともに任務を終え、その後の世界は信仰によって左右されない自然法則に従って自動運動する思想（理神論）が広まった。人々は神が背後に退いたこの領域を「自然」と呼び、この自然こそ信仰を異にする人々が歩み寄ることができる共通の基盤であるとした。「自然的理性」によって接近可能な「自然科学」「自然法」などの観念が、新たな認識や社会秩序の基礎をなす「近代」の到来として17世紀の人々を捉えた。

政治社会観にもその考え方は適用された。人間は自然状態では、自由・平等であり、欲求を追求し、嫌悪を逃れながら自己保存のために行動する自然権を持つ。しかし、本能むき出しの自然状態では、利己心を増長させ、私有財産をめぐり「万人に対する万人の戦争」状態に転落する可能性がある。このため、人々は理性の教えるところにより、各人は自然権を公平に確保するために、各人の『契約』によって、政治社会を形成し、その執行権を主権者に信託する。すなわち、人々が自らの権利を起点として、自分たちの「社会契約」によって、新しい政治社会＝国家を作るべきであるとする「社会契約説」が展開された。それは、それまでの「王権神授説」による絶対主義王政をうち破る理念となった。イギリスでは、ピューリタン革命期のホッブスの「リヴァイアサン（神を除き地上で最強のもの＝政治共同体）」による国家絶対主義、名誉革命期のロックによる議会主権による立憲君主論であった。そしてフランスのアンシャン・レジーム期には、ルソーの説く国家の形成のため、人民こそ主権者として、その「社会契約」による人民主権論と法の支配が、近代民主主義の２大原理となった。米国独立革命やフランス革命による国家原理の聖典ともなった。

4．市民・コミュニティ「契約」都市の時代へ

近代に入ると、近代科学の応用による産業革命、国家の形態は国民国家(nation state)が、新たに展開した。19 世紀から 20 世紀は国家主導型中央集権構造の「工業社会」を謳歌した。しかし、地球環境問題による成長型構造は終焉を迎え、21 世紀は地域主権、ネットワーク型の「持続可能な社会」をめざすことが課題となった。

その主役は、市民であり、かつコミュニティである。それぞれが多様な価値観を持ち、互いに尊重しながら、多元化した社会を構築する。さもなくば、ナショナリズムの後退による新たな自然状態下で、様々な衝突・紛争が勃発することになる。

必要となるのが、市民ーコミュニティー都市（自治体）の新しい意味での『社会契約』を考えたい。つまり、地方に中央から権限が委譲され、法の枠内で市民と都市自らが制定する米国型の『都市憲章』に基づき行政の運営を行う。市民は個人の価値を共有するコミュニティ活動に『誓約』して直接参加する。様々なコミュニティは都市と『契約』をして、行政の事務の一部を受託し、執行する。それにより、都市行政は小さな政府を目指す。市民は選挙で選んだ議会を通じて間接的に、また、住民投票等により直接的に、信託した行政事務をチェックする。

３回にわたった「コンパクトシティの概念」をまとめると、『地方が権限を持ち、生活の質を維持するために必要なものが適度に詰まった地域の中で、市民や多様なコミュニティが、社会契約によって自主的な活動が活発に行われる自治都市』といえよう。

■２度目の春待つ中越の人々

山口　一史（ひょうご・まち・くらし研究所）

まもなく、新潟県中越地震から１年半を迎える。被災者と被災地は１日も早い雪解けを待ち、「この春こそは」と心に期すものが大きいように見受けられる。しかし、被害の大きかった山間部はまだ道路の復旧すら終わっていないところも多く、時計の針が止まったままの状況が続いている。

■どうなるコミュニティ

新潟県長岡市と小千谷市を訪れた前日の３月 13、14 日は大荒れの天候となり３月には珍しく大雪が降り続いた。30～60 センチぐらいの雪が新たに積もったと報道されていた。

タクシーの運転員も調査で会う人もみんな口をそろえたかのように「昨日は大変だった。気の早い人が車のタイヤをスタッドレスから普通タイヤに換えた人が困っていた」という。普通タイヤ車の車が橋の欄干にぶつかったり、歩道に乗り上げたりと、さすがの雪国も「春の雪」に大騒ぎだったようだ。

いたるところ道路わきに新雪、旧雪が入り混じって積み上げてあり、視界をさえぎる壁になっているのは雪国共通の風景だ。

そうした雪の壁に埋もれたように仮設住宅が建っている。仮設住宅はなぜか淡いクリーム色やベージュ色が多い。雪の中に入ると“保護色”となって、周りの景色と見分けがつかないぐらいだ。その上、屋根高が低いので文字通り隠れてしまっている。

小千谷市でそうした仮設住宅の集会室をいくつか見せてもらってきた。

ある集会室には、大きく立派な羽子板が飾ってあった。押絵の絵柄はあでやかな娘道成寺と、地元の特産・養鯉業にちなんで大きな鯉がはねている羽子板が対になって飾ってある。どこかの企業の社長がこれを土産に訪問してくれたということだ。

折りたたみ式の長テーブルがあって、多いところで 20 人、少ない集会所で 5 人ぐらいが、お茶を前に座談に興じている。どこの集会所でもお菓子が皿や小鉢に盛ってあり、たくあんや野沢菜漬が小皿に入っている。これらの“お茶うけ”は小千谷市社会福祉協議会からの差し入れという。お菓子や漬物をつまみ、お茶を飲みながらおしゃべりに興じる。

シルバー人材センターから派遣の女性がお茶を沸かしたり、部屋をしょっちゅう片づけたりして清潔に保っている。

最近の中心的話題はやはり復興住宅のこと。複数箇所に建設が決まっているのでどこを選ぶか、条件はどうか、家賃はいくらかが気懸かりだ。60 歳代の男性が「神戸では復興住宅の家賃はどうなったか」と尋ねた。収入と家族構成によってはじかれたが、一番安いケースは６千円ぐらいだった、と答えると、大いに関心を示して「小千谷もそうなるのか」と重ねての質問。社協の職員が「小千谷では１万６千円ぐらいかな」と話を引き取る。「うむ―」と、その男性は納得がいかない様子だ。

中越では阪神大震災被災地の経験を生かして、仮設住宅は抽選でばらばらに入居するのではなく、基本的に集落単位でまとまって暮らせるようになっている。だから、同じ仮設住宅の人はみんな顔見知りだし、地震前の近隣関係が大きく変わらないように図られている。生活相談員の女性は「そのことがいい影響を見せて仮設住宅で大きなトラブルはない」という。

復興住宅になると、復興感を強く求める人は、早く復興住宅に移り住みたいと願うだろうし、そのための行動を実際に行う。

ある仮設住宅で 60 代の女性が「おれはもう申し込んだよ」とけろりと言って、話し相手を驚かせていた。復興住宅を巡って判断のできた人が早く申し込む。人気のない団地もあって無抽選で入居できそうなところもあって、結果として折角守ってきたコミュニティがばらばら申し込みによって崩れる心配が出ている。

■雪消えは例年より 10 日も遅い

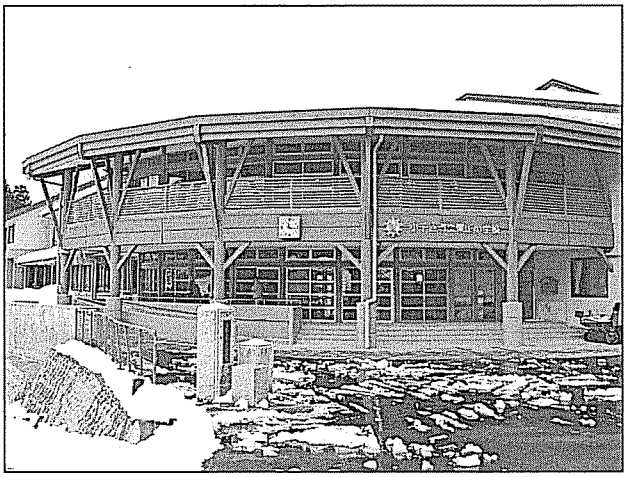
小千谷市社協の人に山間部を案内してもらった。積雪がすごい。人影は少ない。「ここから向こうは道路がまだ崩落したままなので行けない」という場所がずい分あった。山間部から平場に避難し、仮設住宅などにはいっている人たちは、雪解けを首を長くして待っている。

去年の春もそうだったが、今年はその思いがいっそう強いのだろう。自宅の補修は可能なのか、この大雪によって大きなダメージを受けていないか、地盤がさらに動

いていないか―など不安の種も多い。もう山には帰られないと覚悟を決めた人もいる半面、やっぱり山でくらしが一番と、春の訪れを楽しみにしている人もいる。

春を待ちきれず、長岡市の旧山古志村の640世帯のうち、63 世帯が仮設住宅から元の山に戻り、この冬場を過ごしていると長岡市役所では言う。

話を戻して、小千谷市の東山地区の一角に、木造のきれいな小学校があった。小千谷市立東山小学校＝写真＝だ。工事業者が入って内装の手入れをしていた。春からこの学校も再開する予定で仕上げの作業中という。



写真：小千谷市立東山小学校

地域の小学校が統合し、東山小として発足したのが2002年4月、2004年10月の地震で校舎も壊れた。ホームページによると全校児童は 51 人、いまは平場の仮校舎で勉強しているが、まもなくこの山間の校庭に歓声が聞かれるのだ。

それもこれも雪解け如何に左右される。

新潟地方気象台は 3 月 10 日に「今春の雪消えの見通し（第2報）」を発表した。

それによると、中越地方の山間部の雪消えは例年よりも５～10 日ほど遅いという。一日でも早く、と願っている身からすれば情けない気持ちになるだろう。その後の降雪によって、もっと遅れるかもしれないのだ。

山間部からの帰途、ところどころでヘルメットをかぶった人たちが測量しているのを何件も目にした。雪解けを待ちきれず、晴れ間を利用して準備を進めておこうということなのだろう。

■高い求人倍率

作業する人を見ながら、地震後の雇用について考えた。阪神の復興で一番、進捗が遅れたのが経済復興と雇用の確保だったからだ。

新潟県で新潟市に次ぐ人口の多い長岡市を中心とするエリアを所管するハローワーク長岡（職安）で聞くと、最新データである今年 1 月の有効求人倍率はなんと1.44 倍の高い水準とあって驚いた。ちなみに兵庫県内の有効求人倍率は昨年3月から、ようやく0.8倍に乗って、この 1 月は 0.89 倍なのだから、ずい分水準は高いわけだ。

これは「公共工事など復興関連が後押ししているもの事実」とハローワーク長岡では話してくれた。だが求人の3割は工作機械、一般機械、自動車関連などの製造業からというから、必ずしも復興関連ばかりではなさそうだ。

大雪続きで、しかも例年と違って 12 月から積雪が多く、復旧工事も早くから中断している。しかし、それが理由と思われる解雇は少なく、雇用保険の失業給付の受給者は昨年1月に比べて26%も減っている。

雪で仕事ができなくとも、仕事の量がしっかりとあることが分かっている、雪が消えればすぐに忙しくなる、いま労働者を手放すと、他の産業が人をほしがっているので、そちらに移ってしまう心配がある、などの背景から、離職者が少ないのだろう。

ここでも春を待つ空気が感じられた。

もう一点。ハローワーク長岡によると、地震の被災者の就業希望の状況は以下のようになっているという。

(2 月 28 日現在)

求職者は517人いたが、うち387人が就職した。（さらにそのうち130人はハローワークの紹介によっての就職）求職の申し込みをしたものの、自分から取り消したのが130人あって、就職できた387人に130人を加えると、最初の求職者517人となり、今現在有効求職者はゼロという結果となる。

これは求職の仕組みの問題があって、求職申し込みをして3か月たつと、もう一度申し込まないといけないことになっている。就職先が決まらなくとも、これを放置していると、求職申し込み自体が消えてしまうのだ。

ただ、自分の家が雪の中にあって、一体どうなるか分からないという状況では、気持ちが落ち着かず、仕事探しどころではない、というのも本音かもしれない。

その意味からも、雪が消えて、次へのステップに本当に乗り出せることが大切だ。被災者はもちろん、中越地域のすべての市民が、それを待っているのだろう。

六甲アイランド基金と多文化ワークショップ

小林　郁雄（非認証ＮＰＯきんもくせい）

公益信託神戸まちづくり六甲アイランド基金は、神戸市における国際的かつ文化的なコミュニティづくりに資する事業や活動を助成するために、1996 年７月、震災のため予定より１年遅れてスタートした。約８億円の基金は、六甲アイランドの開発（ＲＩＣ）にたずさわってきた積水ハウスと立地企業として地域のことを大切にするＰ＆Ｇ社の共同委託（受託：住友信託銀行）によるものである。

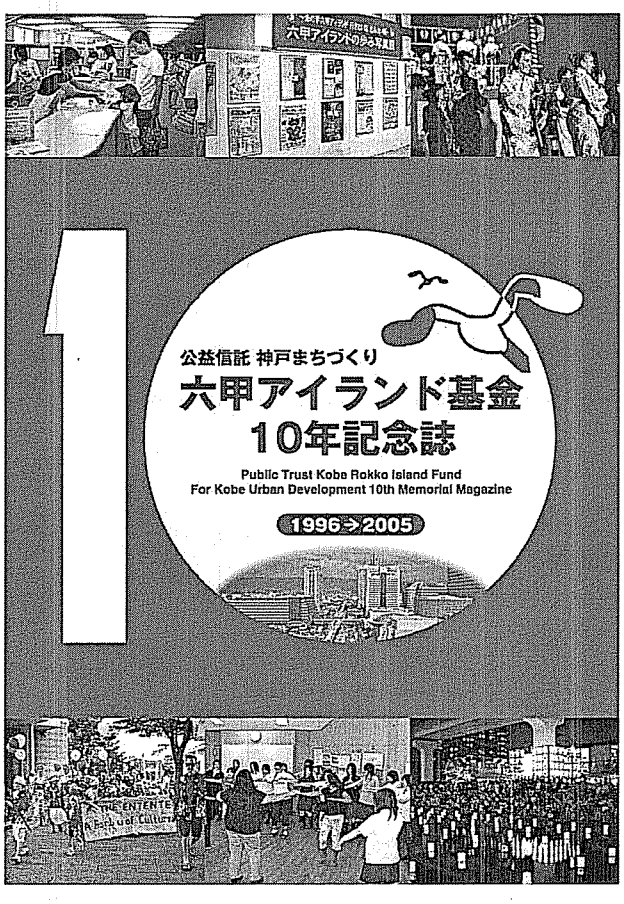
その目的ははっきりしたもので、ＲＩＣ開発において特徴的な街の性格の維持運営への支援である。すなわち、かなり大きなシェアを占める外国人居住者への便宜提供と交流のための「国際コミュニティづくり事業」と、私有地ではあるが公開公共利用されるスペース整備の「都市環境づくり事業」、および、それらに関する「広報，調査，研究活動事業」への助成である。

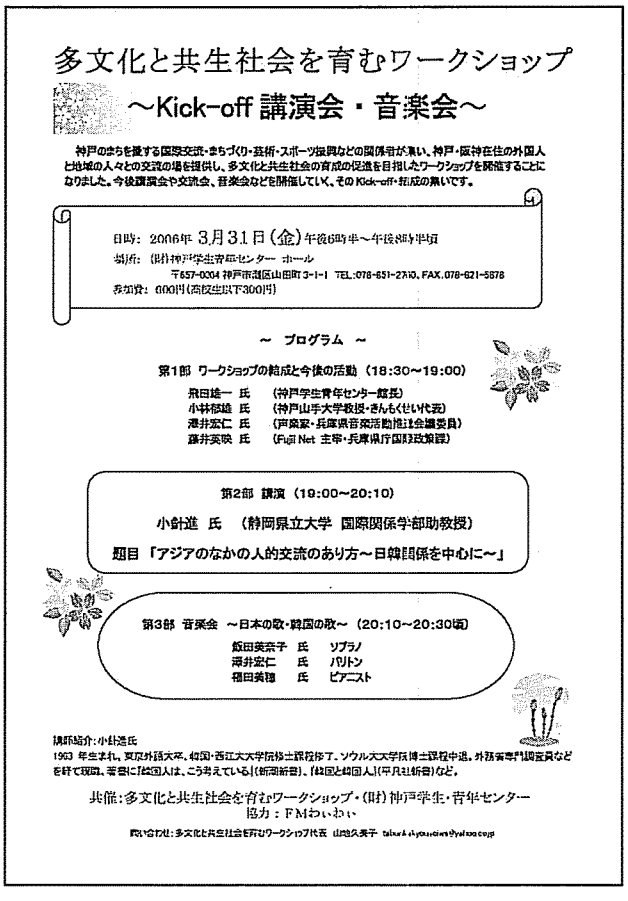
できあがった街へ、デベロッパーや立地企業がその街の営み、活動に対して継続的に支援するという、日本では希有な基金である。

私は、当初から基金運営委員の一員として新野幸次郎委員長を支え、助成審査に参加してきた。この１０年間で延べ２３５件、２億４１３万円が助成された。もちろん、ＲＩＣ内の活動が多くを占めるが、東灘区を主に、広く神戸市内の諸活動にも対応している。

今後は、この１０年の経験を活かしより広範で柔軟な運用を図り、国際コミュニティ育成から多文化共生社会活動へ、文化的都市環境維持からその空間を活用した市民社会・ＮＰＯ支援へと、より高次で、神戸の街との連帯を含めた市民活動活性化に取り組んで行くことをめざしたい。

その先駆けともいうべき申請が 2006 年度事業で登場した。私も参加しているが「多文化と共生社会を育むワークショップ（山地久美子代表）」という、国際交流ではなく多方面の文化と共生コミュニティへの取り組みである。




多文化と共生社会を育むワークショップ

～Kick-off 講演会・音楽会～

神戸のまちを援する国際交流・まちづくり・芸術・スポーツ振興などの関係者が集い、神戸・阪神在住の外国人と地域の人々との交流の場を提供し、多文化と共生社会の育成の促進を目指したワークショップを開催することになりました。今後講演会や交流会、音楽会などを開催していく、そのKick-off・祝成の集いです。

日時：2006年 3月31日（金）午後6時半～午後8時半頃
場所：（財）神戸学生青年センター ホール
〒657-0034 神戸市灘区山田町 3-1-1 TEL.078-651-2310, FAX.078-621-5578
参加費：600円（高校生以下300円）

～ プログラム ～

第1部 ワークショップの紹成と今後の活動（18:30～19:00）
飛田雄一 氏 （神戸学生青年センター館長）
小林郁雄 氏 （神戸山手大学教授・きんもくせい代表）
澤井宏仁 氏 （声楽家・兵庫県音楽活動推進企画委員）
藤井英映 氏 （Fujii Net 主宰・兵庫県庁国際政策課）

第2部 講演（19:00～20:10）
小針進 氏 （静岡県立大学 国際関係学部助教授）
題目「アジアのなかの人的交流のあり方～日韓関係を中心に～」

第3部 音楽会 ～日本の歌・韓国の歌～（20:10～20:30頃）
飯田美奈子 氏 ソプラノ
澤井宏仁 氏 バリトン
福田美穂 氏 ピアニスト

講師紹介：小針進氏
1963 年生まれ。東京外語大卒、韓国・西江大大学院修士課程修了、ソウル大大学院博士課程中退。外務省専門調査員などを経て現職。著書に『韓国人は、こう考えている』（新潮新書）、『韓国と韓国人』（平凡社新書）など。

共催：多文化と共生社会を育むワークショップ・（財）神戸学生・青年センター
協力：FMわいわい
問い合わせ：多文化と共生社会を育むワークショップ代表 山地久美子 takumi-yoyo-clover@yahoo.co.jp

坂のオムニバス4

葉

中川 紺

ちゃりん、と音がした。しまった、またやった。地面に落ちたコインはそのまま坂を転がり、脇の空き地に突っ込んでいった。私はどうもおつりの小銭を財布に入れるのがヘタクソだ。やれやれ、と思い雑草が生い茂る中に足を入れる。一円か十円なら諦めてもよかったが、落としたのは五百円玉だったのだ。

ほどなく私の貴重な生活費は見つかり、今度はしっかりと財布に納めた。そばに置いたトートバッグを持ち上げると、大人の爪ほどの大きさの葉っぱがいくつもくっついて、まるで模様のようになっていた。払い落とそうとした私の手は、すぐに止まった。

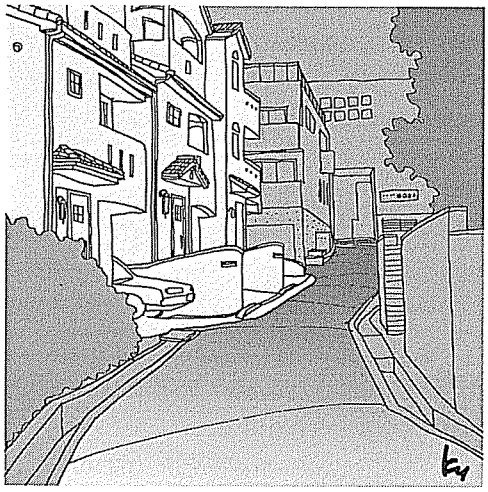
「つれてって、つれてって」

どうやら葉っぱには意思が存在するようだ。一瞬躊躇したものの、別に迷惑になりそうでもないので、そのまま家に連れて帰ってしまった。途中で落ちるかと思ったら、意外としっかりとカバンにしがみついているみたいだった。

●●

次の日、同じ空き地の前を通ると、黄色いショベルカーが入り、何かの工事が始まっていた。なるほど、と思う。これを予見して私のところにくっついてきたらしい。あるいは五百円玉を落としたことにも何か関係しているのかもしれない。植物とはいえあなどれない。動かないだけにいろいろな力を秘めている気がする。

葉っぱたちは私のトートバッグに居座り続けた。少しいびつなハートの形をしていて、



まるで元からあった飾りボタンのようにも見えた。何ヶ月もの間、葉はカバンに根を下ろしたかのように、暮らし続けていた。

「みずちょうだい、みずちょうだい」

乾燥した日が続くと、時々こんな意思を発してくる。空気中の水蒸気だけでは足りないらしい。私は水の入った小皿をカバンの近くに置いてやる。じっと見ていても変化はないが、ふと目を離したすきに、見事に平らげていた。

もうすっかり葉っぱとの生活に慣れてしまった頃、彼ら（あるいは彼女ら）はこつ然と姿を消した。朝出かけるときには確かにいたのだが、帰り道のどこで消えたのか（あるいは落ちたのか）は定かではない。送別会で飲み過ぎたせいで、記憶があやふやなのだ。目覚めたら、単なる白いカバンに戻っていた。

●●

春になって、あの空き地はクリーム色の小さな三つの家に変わっていた。一番左の家のガレージには白い車が止まり、もう誰かが引っ越して来たようだ。ヨーロッパ風の門灯、家と道の境には低いレンガの塀があった。どれも似たようなデザインの三つ子の家だ。

その塀の足下のわずかな隙間が、ほんの少し緑色になっていることに気がついた。よくよく見れば、それはまだ米粒ほどの大きさの葉っぱで、隙間に沿っていくつも顔を出していた。小さくても確かにハートの形をしていて、あのときの葉っぱと同じ種類だとすぐに気がついた。前よりはずいぶん窮屈になったようだけれど、やっぱりここが好きらしい。

「引っ越しおめでとう」

私はつぶやいた。もう彼らの声は聞こえなかったけれど。

（完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第８０回・水谷ゼミナール報告

日時：３月３日(金) 会場:こうべまちづくりセンター
テーマ：「六甲道の再開発を振り返って」

阪神・淡路大震災から約 10 年を経て、昨年秋に完了した六甲道駅南地区第二種市街地再開発事業を、今回、一区切りとして振り返ってみようという企画。小林郁雄さん(非認証 NPO きんもくせい)のテーマ解説の後、異なる時期・立場で関わった次の 3 名から報告がありました。

●「なぜ六甲道駅南地区再開発事業は 10 年間で完成したか」／有光友興（当時：環境開発研究所）

●「都市計画決定からまちづくり提案まで」／倉橋正己（当時：神戸市六甲道駅南再開発事務所長）

●「施工後からはじまった新しいコミュニティの運営、管理」／安元美帆子（コー・プラン）

コンサルタントとして六甲道南に深く関わった有光さんは、10 年間で完成した要因と、住民の合意形成過程、地区全体のまちづくりの基本方針を策定する「基本計画会議」等について述べられました。再開発事務所の初代所長である倉橋さんは、再開発前半の、住民の意見を反映しながら事業に取組んだプロセスを、行政の立場として報告されました。私・安元からは、再開発地区中央に完成した公園の管理団体の活動と、その公園で開催したまちびらき行事について、ご報告いたしました。

※有光さん、倉橋さんはじめ、六甲道駅南地区の再開発に尽力された専門家によるレポートがまとめられ、今年1月に発行されました。「建築と社会」2006 年 1 月号／(社) 日本建築協会 1,200 円

※六甲道についてきんもくせい紙上での有光さんによる報告は 13、27、47 号を参照ください。 (コー・プラン 安元美帆子)



完成した六甲道駅南地再開発事業とまちびらきイベントの様子 (05.9/17)

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第４９回連絡会

・日時：４月７日(金)18:30～20:50
・場所：神戸市勤労会館 406 号室（神戸市中央区雲井通 5-1-2、TEL.078-232-1881、三宮駅より東へ徒歩３分）
・内容：テーマ「大学の都市計画研究室は今」、パネラー：①「大阪市立大学工学部環境工学科」／嘉名光市（大阪市立大学大学院工学研究科都市計画専攻）、②「神戸大学工学部建設学科（建築系）」／三輪康一（神戸大学大学院自然科学研究科建設学専攻）、③「大阪大学工学部環境・エネルギー工学科」／澤木昌典（大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻）、コーディネータ：小林郁雄（非認証ＮＰＯきんもくせい）
・会費：５００円
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●六甲道駅北地区まちびらき《いま甦る郷　そして未来へ》

・日時：４月２日(日)10:30～15:00
・場所：六甲道駅北公園（神戸市灘区六甲町１、２丁目）
・内容：まちびらき式典、モニュメント除幕、公園愛称発表、屋台、みんなでつくろう・ゲーム、その他
・問合せ：コー・プラン（細野、TEL.078-842-2311）

●新潟県中越大震災から１年半　復興支援シンポジウム

・日時：４月 22 日(土)13:00～18:00
・場所：長岡造形大学
・内容：行政からの報告（小千谷市、長岡市、川口町）、支援組織からの報告（中越復興市民会議、日本都市計画家協会中越ﾌﾟﾗﾆﾝｸﾞｾﾝﾀｰ、山古志村再生計画作業部会、芒種庵を作る会、中越ひまわり基金公設事務所、阪神・淡路まちづくり支援機構、震災復興まちづくり支援機構）、現地からの報告（小千谷市塩谷、旧小国町法末、旧山古志村三ケ地区）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年4月90日発行

月刊 きんもくせい

06年4月号
(50+36+NO. 37)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■サンフランシスコ大地震１００周年

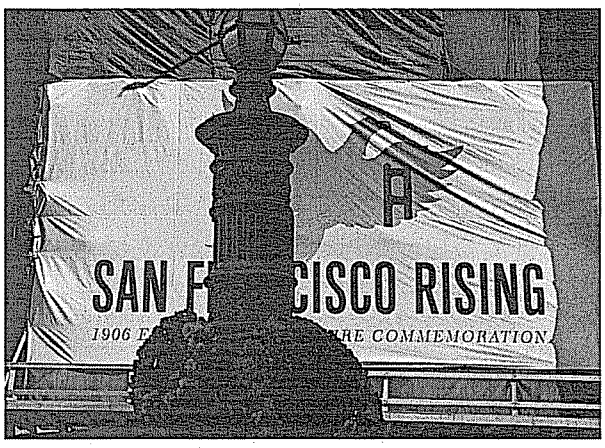
小林　郁雄（非認証NPOきんもくせい代表）

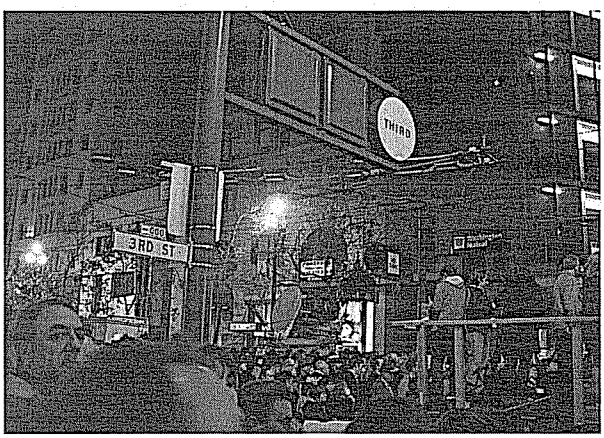
2006年4月18日5時12分、サンフランシスコのマーケットストリートの真ん中にいた。シスコ一番の繁華街は早朝なのに、黒山の人だかりで凄い人出だ。もちろん、いつもそうであるわけではない。今日が、特別の日 1906 年サンフランシスコ大地震100周年目で、記念式典をしているからだ。

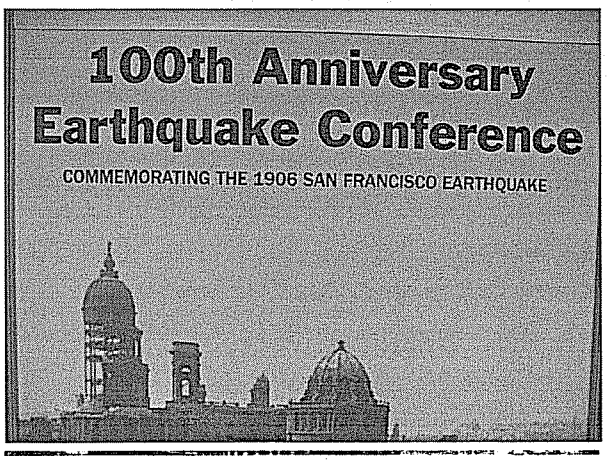
100 年前 48 秒の揺れによって、約 2 万8000の建物が破壊され、497街区4.11平方マイル（10.52平方km）ほぼサンフランシスコ市街地の半分近くが大火によって焼失した。約3000人が死亡したと書き残されているが、実際には1万人以上であったらしい。（Courtesy San Francisco History Center, San Francisco Public Library）

式典で最も印象的であったのは、市長が震災後 100 年を迎え我がサンフランシスコは、もはや燃えない都市になっているという自信に満ちたコメントであった。17年後2023年に東京都知事は、果たしてどのような演説をすることができるのだろうか？

その日から 22 日までの5日間、モスコンーンセンターで、震災 100 周年記念会議が多くの記念行事のメインイベントとして開催され、日本からも多くの防災関係者が参加していた。サンフランシスコに関係している多くの友人たちとも再会し（一日はナパバレ-観光にも行きましたが）、災害に向けての不断の取り組みへの覚悟を新たにしました。







くらし･すまい塾 第８回記録（2006年4月12日開催）

戦後・国レベルの住宅政策から地域の課題を踏まえた神戸のまちづくりへ（前編）

藤本　真里（人と自然の博物館）

今回の「くらし・すまい塾」のテーマは「戦後の住宅政策」でした。1987年国際居住年に神戸市住宅局住宅部計画課が発行した「こうべハウジングレポート’87」をもとに、その作成に関わられた小林さんからレクチャーを受けました。以下、1986年の「コー・プラン」や「石東・都市環境室」の設立までは戦後の住宅政策の主要な流れを抑え、その後のお話では、小林さんや石東さんが神戸市とともに進めた計画の内容や意義を簡単ですが示しています。

短い時間でしたが、現在のまちづくりにつながるシナリオを感じることができました。淡々とした事実の記載や思い、質問など交錯して全体としてまとまりがありませんがご容赦ください。なお、「戦災復興」「建設」等は前述のレポート中、「神戸のすまい・まちづくりの系譜」で示されている時代を示すキーワードです。

＜戦後の住宅政策＞

○1945-55　「戦災復興」

・「公営住宅法」「日本住宅公団法」「住宅金融公庫法」は戦災復興の3本柱である。

・所得下位1/3に対して公営住宅を供給、中位1/3に対して住宅公団、上位1/3に対して公庫というような住宅建設･供給の支援策

・公営住宅は福祉政策という位置づけであるが、多くの自治体の住宅行政は「国または上部自治体から割り当てられた公営住宅建設戸数の建設供給」ということを主としていた。

・公団は大量の賃貸住宅を建設･供給し、世界一の大家ともいえる。

・公庫は、その当時、住宅購入に際して個人を対象に金を貸してくれる唯一の機関であった。長い間にわたって、金利5.5%で民間よりも低く一定だったので、資金計画等の計算も単純であった。

・ちなみに、金融公庫は、平成19年4月1日に廃止され、独立行政法人住宅金融支援機構にかわる。直接の融資は原則しないで一般金融機関を支援するような形になる。例えば、災害時の融資など一般では困難な融資を行なうなど。

○1955-65　「建設」

・大量の住宅建設により戦災で住宅が激減した市街地に人口が再集中する。

・世帯数が住宅数を上回るという「1世帯1住宅」が数値上達成できたのは、統計上は1968年の住宅統計調査であり、1973年には全都道府県で住宅数が世帯数を上回り、量の確保から質の向上に力点が移行した。

○1965-75　「開発」

・ニュータウン開発など面的整備実施。

・「安価で良質な住宅の取得を促す」ため地方住宅供給公社法ができ、宅地分譲、賃貸住宅を供給する。公社は都道府県や政令指定都市にあり、神戸市にも設立される。

・ちなみに、こちらも経営が行き詰っており、解散を希望する自治体も多いが、現行法では解散を認められていないため、国土交通省は来年にも公社が自主的に解散できるよう地方住宅供給公社法を改正する方針で、使命を終えた住宅公社は次第に姿を消していく。

・住宅建設計画5カ年計画は1966年に制定された住宅建設計画法に基づきスタート。第1期「1世帯1住宅」→第2期「1人1部屋」‥‥→第8期で平成17年終了した。住宅政策は今年から新しい展開がはじまることになる。2年くらい前から国での議論がはじまっている。

○1975-85　「環境」

・それまでの開発志向から環境や景観を重視すること、住民が主体的に参加するまちづくりなどの方向へ転換した。国では開発志向が継続していた。都市景観条例、まちづくり条例、ＨＯＰＥ計画が始まった。このような蓄積はバブル崩壊後、あるいは震災後に役立っている。

・HOPE計画は「地域住宅計画」を意訳した「Housing with Proper Environment」〔地域固有の環境（自然環境、資源的環境、文化的環境

など）を活かした住まいづくり」の略称。平成6年度から地方公共団体が策定する「住宅マスタープラン」の中に整理・統合されている。

＜神戸のまちづくり　ー小林さん、石東さんが関わった計画を中心に＞

○バブル

・1986年から1989年に起こったバブル、そして1990年以降のバブル崩壊の影響が大きかった。小林さん曰く、「バブルが起こった当初、東京だけの問題だと感じていた。金利引下げ、地上げ‥で大量に出回ったお金で京都の土地が多く買われ、”対岸の火事”でなくなった。この頃から経済学者と付き合うようになった。」

・さらに「バブルによって、何もかもが狂ってしまい、10年くらいは空白時期ともいえる。」

○「環境」の時代の蓄積

・小林さん曰く、「1995年の震災後、神戸においてまちづくり協議会を核とした住民による議論や計画、実践があったことは、「環境」の時代にまちづくり条例を制定するなどすでに下地があったことが大きい。それがなかった地域では個人の利害を主張するだけの動きが横行していた。その様をみて、「環境」の時代の蓄積の大きさを感じている。」

○1978年　「環境カルテ」策定

・「環境カルテ」：これからの市街地整備は「根幹的公共施設の整備だけではなく、生活環境整備も必要でしょう」「市全体の計画を作ったけれど地区ごとの計画も必要でしょう」「それからスクラップアンドビルド方式のまちづくりばかりではなく、その地域に合わせた改善を含めた多様な方法が必要しょう」。「そのためにはまず地域の診断をする必要がある」ということで始めたものです。出典：垂水英司「80年前後の動き」（市民まちづくりブックレットNO.6「まちづくりの系譜と展開」）

- 具体的には、住宅過密地区、住工混在地区、道路の整備、公園の整備、中心核について調査し、その結果を地図上で示している。その頃、
- 現在ほどコンピューターの作業はできず、計算や作図作業は膨大であった。
- 小林さん曰く、「このカルテの最大の功績は結果の概要をパンフにして市民に配布したことである。その中で、地区の課題の結果だけでなく、『じゃあどうすることができるか』ということで整備手法を示し、そのためには住民のみなさんで話し合いましょうということを示している。これができたことで神戸市における住民の発意に基づく“住民参加型のまちづくり”の流れができたといえる。」

○1986年「地域高齢者住宅計画」策定

・1986年「地域高齢者住宅計画」が策定され、1987年シルバーハウジング制度が創設されて全国初のシルバーハウジングとしてケアハイツ菊水が計画された。石東さんが計画に関わり、当時、全国から実に多くの視察があった。その後、神戸市は毎年1箇所ずつシルバーハウジングを計画し、全国の自治体の中ではシルバーハウジング先進都市のひとつといえる。小林さん、石東さんそろって曰く、「神戸市役所と横浜市役所は新しいモデル事業に取り組むことが多かった。そういう気質が職員にあったといえる。」小林さん曰く、「適正な人口と財政の規模があったことも要因だろう。また、国の監視・干渉といったことがうすいこともあったのではないか。」　石東さん曰く、「神戸市も横浜市も港湾があり外部に開き、新しいものを取り入れる風土のようなものがあったのではないか。」

・石東さん曰く、「このような新しいことに取り組もうとする職員の気質は戦後の住宅政策において非常に大きかった。＜全国初の公営コレクティブハウジング／ふれあい住宅＞といった試みも、他の地域で同じようにできたかというと疑問である。」小林さん曰く、「コンサルタントに対する要求も実質的なもので、よく議論し、国などに出かける機会も多かった。市とコンサルタントの間に本来のパートナーシップが築けていたと感じる。」

（　追記：神戸市のシルバーハウジングは、阪神大震災の復興公営住宅にも大量に導入され、その戸数は一挙に増え、現在、神戸市内で約2400戸に及び全国一の供給戸数である。）

後編：質疑部分は次号（06年5月号）に続く

■神戸のみどり・その５『しあわせの村誕生異聞』（後半）

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

６．基本理念を生かすための基本計画と管理運営計画

しあわせの村の基本理念はノーマライゼーションの実現をめざし、「こうべ市民の福祉をまもる条例」の精神である“自立と連帯”を基本に市民福祉を進めていくことである。また一方でともすると、閉鎖的で暗いイメージ（コロニー）になりやすい社会福祉施設を緑豊かな自然のもと、明るく開放的な空間で障害者はもちろんのことすべての人々が、健康・スポーツレクリェーション・芸術・社会活動・授産・ボランティア活動等に参加できるようにすることを目標に基本計画及び管理運営計画を立案した。

①ウエルネスパークとして、生涯を通じてすべての市民がリフレッシュできる場を提供できるようにする。

②高齢者や障害者等ハンディキャップのある人々に、必要な訓練・介護・指導・など総合的なサービスを提供し、自立や社会参加を促進、支援する。

③高齢者、障害者、児童、女性、勤労者など広く交流・ふれあい事業を行う。

■基本計画

1）制度による境界を設けない

したがって村は社会福祉施設と都市公園が何処で区分されているか利用者は知る必要もない。全体が公園として整備され、広大な芝生の中に赤い瓦屋根に白い壁（カサ・ブランカ＝白い家）の、スパニッシュミッション風の建物が点在する明るいイメージを展開させることとした。

2)魅力ある施設

上記の基本理念を生かし、ノーマライゼーションを実現するためには、村は障害者だけの村になってはならない。そこには日常的に多くの健常者が訪れる村でなければならない。したがって基本計画は健常者が絶え間なく訪れる魅力ある施設を考え出すこととそれをどう動かしていくかのソフトウエアの整備がポイントだった。温泉の湧出は「温泉」と計画時点での総理府（現在は内閣府）調査で国民の関心の高かった「健康」を結びつけた「温泉健康センター」を計画にのせた。

3)なじみのある空間

村は谷を埋め、森林を切り開いて創られた。新しい町がそこに出現する。しかし人々はたとえば地蔵尊のある路地裏の町や鎮守の森など自分が生まれ育った原風景にいるとき、説明できない安堵感をもつという。そこで村の中央に昔の山をそのまま鎮守の森として残した。私たちはそれを「なじみのある空間」と呼んだ。このことはあの阪神・淡路大震災のとき証明されたと思う。人々は一次避難地として日常的に慣れ親しんでいた公園に逃げた。心の支えに厳然と存在する六甲山にも励まされた。

4)バリア・フリー

村はその性格上、基本計画の段階からバリア・フリーはそのコンセプトの中に生かされてきたと思う。あのころは今のように「ユニバーサル・デザイン」の考え方はなかったけれど、もともと公園計画の基本の中には弱い者や自然を大切にするコンセプトは生きている。「ユニバーサル・デザイン」は意識されていなかったにせよ、新しい村を創るプロジェクトであったからバリア・フリーの意識は超えていたと思う。すなわち、

▼フェンス・柵・石積み・擁壁など視覚的、心理的バリアはできるかぎり持ち込まない。
▼村の建物は囲まない。
▼神戸市民の福祉をまもる条例の実現と都市施設の障害者等に配慮した施設基準のアップを試みる。それは「ユニバーサル・デザイン」の考え方に近く次の目標などまさに「ユニバーサル・デザイン」だ。
▼障害者の、障害者のための施設というより、さり気なく健常者も気兼ねなく気軽に使える施設基準を創っていく。施設にもよるが、専用施設にせずへだたりなく使用できる施設をめざす。

■管理運営計画

1)　もてなしの心・心のふれあい・交流――ソフトの充実

もてなしの心は、障害者・高齢者・健常者に関係なく村を訪れる人々すべてに対し平等に対応されるものでなければならない。ただそれぞれの立場でどう感じるかの違いがある。例えば、障害者をもてなすとき、かれらも我々と同じように普通の生活を過ごす権利がある。したがって介護や支援が押しつけにならないよう考えて行動し、彼らのできないこと（人によってそれぞれ違う）のみ支援していく、さり気ないもてなしが必要である。もてなしの心で問題になるのは、表面的には理解を示しても、心のなかでは偏見を持っていることが多い。その心の垣根を自然に取り除いていく仕掛けづくりが管理運営でもっとも大切なことである。また、福祉を全面に出したい気持ちが管理運営に出すぎると、健常者が我々の村と違うと思うようになり、村から離れていくことになる。村はバランスのある管理運営をするため、健常者にも障害者にも違和感を持たせないソフトが必要である。

2)　縁づくり

基本計画のなかで提案された「リボンプラン」を受けて、この村を媒介として新しい縁を作っていけるような仕掛けが、縁づくりの希薄な現代において必要となってきつつある。

3)　雇用の促進　―　社会参加　―　自立と連帯

社会参加―自立と連帯の理念を実現するために、村に必要な仕事はできるかぎり障害者や高齢者が雇用の機会が得られるよう考える。例えば、村全体は広大な公園のなかにあるようなものだから、緑地の除草・灌水・清掃など園地管理の仕事は限りなくある。それを村の障害者授産施設や授産株式会社に発注するよう計画した。また、村の宿泊館用歯磨き・石鹸・タオル等のシール貼りも福祉施設に仕事を出すことにした。村の売店もできるだけ障害者団体と契約する。ビニールのゴミ袋は、村の需要が多い。すべて村の授産施設から供給してもらうこととした。その他村のイベントのとき、村を飾るバナーは障害者の手作りを考えるなどした。

4)　相乗効果

村には、リハビリテーション病院や認知症保護施設などがあるが、入院入所者は緑豊かな圏内をゆったりした気持ちで散歩できる。また、これらの施設へ家族などの見舞いが増えるという効果がある。遊びに来たのか、見舞いに来たのか、本心は定かでないが、現実的には健常者が、しかも家族連れで入院患者や認知症患者を見舞う率が増えている。さりげない気持ちで訪れる見舞いの方が、悲壮感の漂う見舞いと比べて見舞う方も見舞われる方もどんなに心静かであることか。

5)　基本理念を生かした環境デザイン―しあわせの村景観形成計画の考え方と実施方法―

しあわせの村の景観形成は、村のコンセプトである基本理念と切っても切れない相互作用を及ぼす、と計画当初から認識され位置づけられていた。したがって、基本計画に対する何回かの見直しにもかかわらず、常に重要な項目として留意されてきた。

このような経緯のなかで「しあわせの村景観形成懇談会」が開催され、ウェルネスパークとして明るく開放的で、かつ安らぎと魅力を持ち合わせた良好な景観が形成されるよう留意すべき基本的事項や方針について検討した。

●景観形成基本方針

①　高齢者・障害者をはじめ村に生活する人々にとって安らぎを感じさせる「なじみのある空間」と、村を訪れる市民にとって魅力ある「非日常的景観」とが織りなす、変化に富んだ景観を形成する。

② 豊かな緑を保全するとともに、四季折々の自然の変化を楽しめる緑化景観をめざす。
③ 建築デザインは、神戸らしい明るいイメージを持ったものとする。
④ 個々の具体的な計画に際しては、個性を尊重しながら、統一感のある一体的な景観をめざす。
⑤ 村全体としては、わかりやすくかつ親しみのある景観形成をめざす。

●実現のための方策

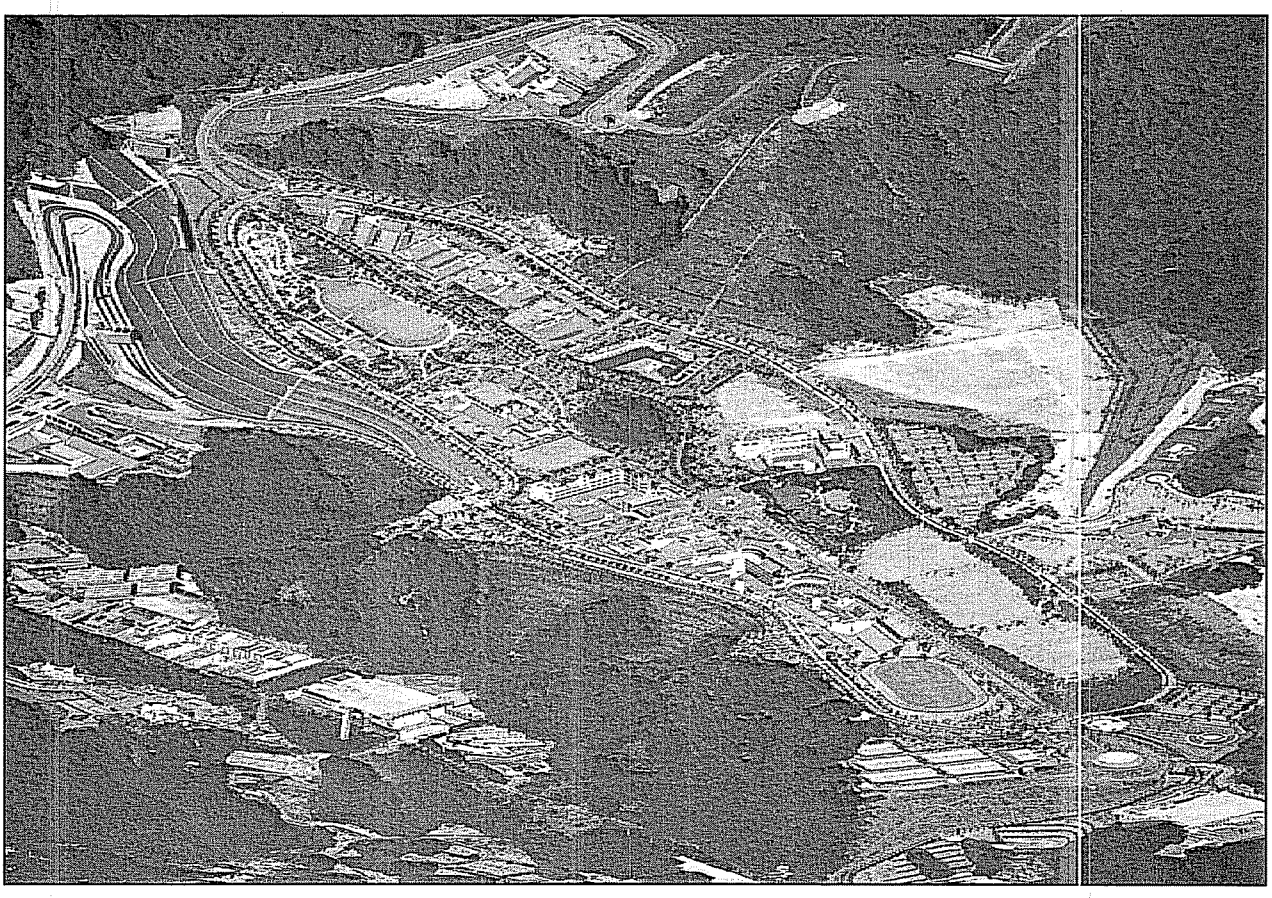
① デザインブリーフの作成
(デザインブリーフ：景観形成基本方針、基本ゾーニング、イメージ等の要点をまとめた要約書。（個々の施設基本計画に先立って事業主及び設計者に手渡し、協力をあおぐ資料である。）
② 緑化計画の策定
③ 景観形成基準等の策定
④ 実施プログラムの作成

７．まとめ

『しあわせの村』も開村して 18 年目を迎えようとしている。開村以来、たくさんの人たちの努力によって村は今も多くの人が訪れ、人気のある施設である。しかし長い年月の間に当初のコンセプトが忘れられていることもある。悪いものは淘汰されるのが当然だが、当初の理想が末永く継承されることを願ってやまない。私は計画・建設・管理と当初の段階でたずさわらせていただいたひとりとして、計画当初にどんなことを考えていたのか、この小論が参考になれば、と思っている。

『しあわせの村』のプロジェクトは現在も私の人生の大きな糧になっている。

■『しあわせの村』航空写真



水の情景一●ワタシの旅

蛇口

中川 紺

ぽたん、ぽたん……ぽたん…ぽたん…。

どこから聞こえてくるのだろう。ワタシの耳は、水に敏感なのだ。いや、耳だけでなく、鼻も目も、すべてが水を求めている。どうしてなのかは分からない。ワタシには探すべき水があるという確信だけが、あった。

●●

水音は、数軒先の古い小さな一軒家の方向からだ。猫の額のような庭のすみに、ひょろりと立っている水道の蛇口。道路から遮るものが何も無いので、思わず近づいた。蛇口の下に置いてある小さなバケツに水が少し溜まっていて、水滴が波紋をつくっていた。

深く息を吸い込む。水は澄んだ色をしていたが、それはワタシが探している水ではなかった。どこにあるのだろう。小さなため息をつくと、背後に人の気配を感じた。

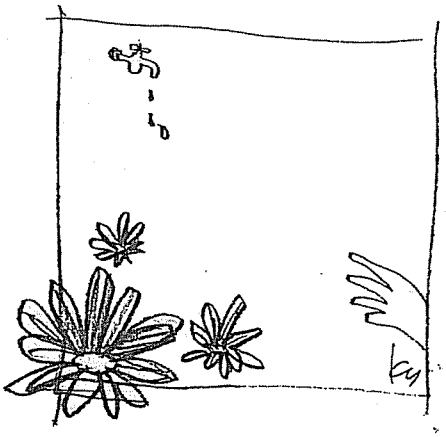
「人の庭で何をしているのかね」

振り向くと、ニットのベストを着た初老の男が怪訝そうにこちらを伺っている。怒っているというよりは不審に思っているような顔つきだった。

「すみません。蛇口がゆるんで水が出たままだったので思わず」

老人は、ああ、と声に出して言い「わざわざ気にしてもらってあれなんだが、それはどうかそのままにお願いします」と続けた。

水がもったいないのでは、と言ってみたが、老人は意見を変える様子は無い。今度はこちらが怪訝な顔をする番だった。それを見て老人はこんなことを話した。



●●

老人には妻がいた。三ヶ月前に心臓の病で倒れ、一命をとりとめたものの、容態が回復しないまま一週間後に息を引き取った。亡くなる直前まで、昨年の秋に植えた花の種を気にしていた。小さな庭に、毎年いろいろな花を咲かせることが、妻の楽しみだった。

「あなた、水やりをお願いしますね」

病室で繰り返された妻の言葉。退院する日のために老人は世話を欠かさなかった。しかし妻は芽を見ること無くこの世を去り、その日から彼は庭に立つことを止めてしまった。

ところがある日、小さな双葉が顔を出した。同じ頃、使っていない庭の水道の締まりが、時々ゆるくなっていることに気がついた。

老人は感じた。妻が水やりに来ているのだと。妻は蛇口を少しゆるめ、水滴を落とすことで、夫に存在を知らせているようだった。

双葉が次々と顔を出した。そして彼も交代で花の世話を始めた。

●●

この音は二人にとって、見えない手紙だと、老人は言った。

「この花……和名はひなぎくって言うそうなんだがね、あいつはデージーって名前の方を気に入って使ってたよ」

ナマエ！……ワタシは、ワタシ自身の名前というものを知らないことに気がついた。ワタシは一体誰……しかし老人の言葉でその考えは遮られた。

「でも最近、水やりの間隔が長くなってきた。花も咲いたし、そろそろあいつもあっちの世界に行くのかもしれないな」

老人は、妻と咲かせたデージーの花を、少し寂しそうに見つめた。（第一話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第４９回連絡会報告
－「大学の都市計画研究室は今」－

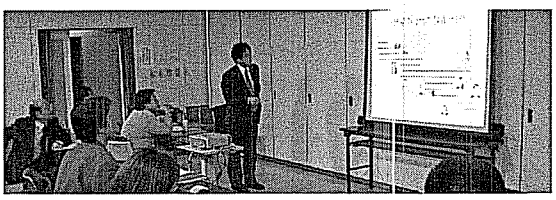
４月７日(金)　神戸市勤労会館で開催された標記の勉強会を聴講した。内容は「大阪市立大学工学部環境工学科」のカリキュラムを嘉名光市先生、「神戸大学工学部建設学科（建築系）」を三輪康一先生、「大阪大学工学部環境・エネルギー工学科」を澤木昌典先生が説明されたのだが、いくつか印象的なことがあった。

私が大学を出て 30 年を越えるのだが、当時、都市計画を都市計画らしく教えられた覚えがなく、都市計画法の機微、土木と建築のコラボレーション、産業と土地利用の関係などは on-the-job training で身についたように思う。３人の先生方のプレゼンからは、同じ都市計画を対象としながら、そのアプローチやフィールドの異なる教育がされており、それが都市計画なのだと思う。私の恩師、佐々木嘉彦先生から「大学は学問自体より、その方法を学ぶところだ」という教えを受け、これを真に受けた私はあまり勉強せずに卒業したため、後々後悔することもあった。それで卒業できた時代に比べ、今の大学では空間論、コミュニティ論からＣＧといった技術に至るまで大変な学び草があるようで、これらを全部マスターすればスーパー都市計画家が生まれると思われるが、私が接してきたいわゆる新人にスーパーマンはおらず、むしろ、10 年過ぎて都市計画やまちづくりに対して意欲を失っている例には事欠かない。やはり大学より社会でのＯＪＴによって職能が形成され、わが師の教えは誤っていなかったと思う。

都市計画学会関西支部では「都市計画教育と都市計画にかかわる人材育成」をテーマに議論が進められており、都市計画家を育てるためのカリキュラムの話があったが、環境、建築、土木それぞれの都市計画で力点は異なるし、そもそも一律の都市計画家というのはないということも言われた。

大学で教えられたことが世の中にどのように生きていくのかを、行政、コンサル、ゼネコン、その他金融などの現場でどう役にたったかを世代別に聞いてみるといった企画はどうであろうか、非常に興味があるテーマである。

（北摂コミュニティ開発センター　　難波　健）



■ 情報コーナー

●第８１回・水谷ゼミナール
- 日時：４月28日(金)18:30～21:00
- 場所：こうべまちづくり会館６階
- 会費：1,000円
- 内容：テーマ／「行政の４０年勤務を振り返って」、発表／①「西宮市に４０年勤め上げて」猿渡彬順（現・アサヒビール大山崎山荘美術館顧問）②「神戸市の４０年間を振り返って」西川靖一（現・神戸市住宅供給公社調査役）、テーマ解説／後藤祐介（GU計画研究所）
- 問合せ：GU計画研究所（TEL.078-435-6510）

●第４９回 COE 連続講演会
- 日時：５月26日(金)17:00～18:30
- 場所：神戸大学工学部１Ｆ 創造工学スタジオ（C3-101）
- 内容：**Noise abatement planning in Germany in combination with clean air plans**（ドイツにおける大気浄化計画と連携した騒音防止計画）
- 講師 **Juergen Baumueller(Office for Environmental Protection,city of Stuttgart)**、司会／森山正和（神戸大学工学部建設学科教授）
- 問合せ：田中貴宏（神戸大学大学院自然科学研究科 COE 研究員、TEL.078-803-6344）

●まちづくりコンサルタント成果報告会
- 日時：５月11日(木)13:00～17:30
- 場所：こうべまちづくり会館２階ホール
- 内容：各地域のまちづくりを支援しているコンサルタントによるまちづくりや建物共同化など、まちづくりの現場からの報告会。計２７地区から報告の予定。
- 問合せ：こうべまちづくりセンター（TEL.078-361-4523）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
- ◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
- ◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年5月60日発行

月刊 きんもくせい

06年5月号
(50+36+NO. 38)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■六甲山のふもとから見えること

中川和之（時事通信社、日本地震学会普及行事委員長）

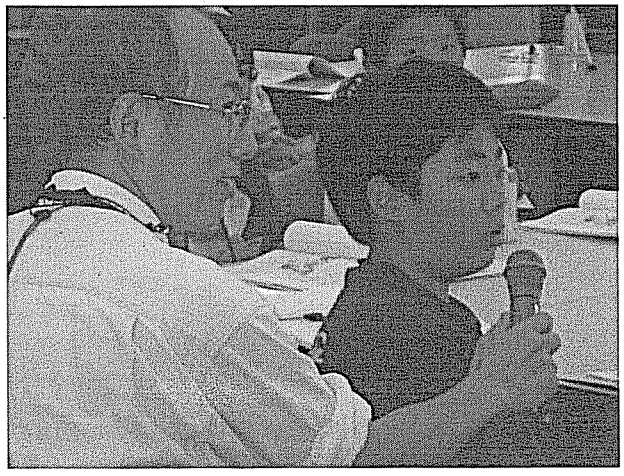
2年前の8月7日、人と防災未来センターの5階にたくさんの子どもたちがいた。第5回地震火山こどもサマースクール「Mt. Rokkoのナゾ」のオープニングである。六甲山が一望できる窓の前で、「この風景に何が見えるかな」と投げかけたところ、「山並みが崖っぽい」「標高が急に高くなっている」「海と山が並行」などという声が上がった。いずれも、断層の活動でずれ上がった六甲山の成り立ちを表すにふさわしい言葉であり、私たちが準備したプログラムが子どもたちの感性に届き、二日間が成功裏に終わることをここで確信した。

阪神大震災をきっかけに、専門家の言葉が地元に届いていなかった反省から、地震と火山の学会が一緒に次世代を担う子どもたちに直接働きかけるサマースクールを 1999 年から始めた。「『六甲山は地震でできた山』なのに、地元にその意識がなかった事をくり返さないために」と、丹那断層や有珠山、伊豆大島、木津川断層、富士山、六甲山、霧島と、地震や火山の現場を舞台に開催。子どもたちと専門家が野外観察や実験を一緒に行いながら、対話を重ねてきた。

そのポリシーの一つが「脅しの防災から、納得の防災へ」だ。防災教育や防災意識の啓発では、ほとんどが「災いがやってくるぞ」と脅すことから始まる。もちろん災害は怖い。でも、私は六甲山を嫌いにはなれない。子供の頃から、ボーイスカウトでハイキングやキャンプをしたし、ドライブも楽しく、夜景も最高だ。灘の宮水で美味しいお酒も飲める。



●人と防災未来センター5階の窓から六甲山



●参加した子どもにインタビュー（筆者）

住宅におあつらえ向きの南向きの斜面を作ってくれているし、何より、常に緑の潤いを眼にすることができる。上京後は、新大阪に着く前の新幹線の車窓から六甲山が見えるだけでホッとした。4 年前までの神戸勤務時代も、最初のうちは通勤の電車で北側のドアの前に立って毎日、ニマニマしていた。要は、地震の山と分かってどう付き合うかだ。

ハードと行政、専門家に頼り切って、自然災害など知らなかったことにして忘れ去る。そのことの無謀さを教えてくれたのが阪神大震災だ。その地の一人一人が、毎日の暮らしの中で、自然とどうつきあうか。「ただ怖いだけ」の場所を愛しんで暮らすことは出来ない。地域を形づくる身近な自然が、日頃は豊かな恵みをもたらしつつ、ごくまれに災害を引き起こす。その地に親しみ、特性を知り、いま生きている自分だけでなく、これからもこの地に暮らし続ける人たちのために、専門家が分かっていることを子どもたちにダイレクトに伝え、自然災害の本質を理解する次世代を育てること。それが、私たちの願いだ。

伝えることは、子どもたちの素朴な質問の「なぜ」、「どうして」をサイエンスで解き明かすセンスオブワンダーの世界だけではない。2 年前には、コー・プランの小林さんと天川さんに手伝っていただき、子どもたちに対して、一時はげ山になった六甲を緑の山に戻したことや、外国人たちが六甲山の楽しみ方を教えてくれたことなど人の働きも伝えた。もちろん、震災からの復興の過程も。災害が間近なこの地以外でも、過去の災害からの復興に立ち向かった先祖たちがいる。その苦労と勇気を、少しでもいまに伝えることができれば、明日への備えの気持ちにつながるのではないか。



●100 均ショップ入手材料を駆使した振動実験



●最後の記念写真（人と防災未来センター前）

今年も 8 月 12-13 日には、大磯丘陵などを舞台に「湘南ひらつかプレートサイド物語（ストーリー）」としてこどもサマースクールを行う。彼らの言葉からどんな発見があるか、とても楽しみだ。各地の自然の風景の観察と共に、子どもたちとのやりとりを重ねてきて感じることは、災害列島日本に生きてきた私たちの感性の中に「災害文化」は元から根付いているのではないかということだ。日本人の自然哲学や宗教観にある災害観を、身近なところから再発見し、そこに新たな知見を付け加えることで、自然災害と上手に付き合う現代の災害文化を育むことが出来ないか。何かの専門性をバックグラウンドにしない私だからこその長期的な課題だと考えている。（了）

■くらし･すまい塾 第８回記録（2006 年 4 月 12 日開催）

戦後・国レベルの住宅政策から地域の課題を踏まえた神戸のまちづくりへ（後編）

藤本　真里（人と自然の博物館）

前号の続き。質疑部分です。

質問：市長の政治力

・原口氏(20 年)、宮崎氏(20 年)、笹山氏(12 年)と続く歴代市長の意向というものは大きく影響している。原口市長は、阪神、四国、南九州を直結する南日本国道建設といった構想を出し、沿道市町に呼びかけていた。

質問：計画の基礎となる統計調査

住宅統計調査の重要性

・国による住宅統計調査は悉皆調査である国勢調査についで、調査対象抽出率が高く、国が住宅政策を策定するための重要なデータとなっている。（なお、住宅統計調査は 1948 年から 5 年ごとに実施されてきたが、1998 年に「住宅･土地統計調査」と改名された。98 年調査は、95 年の国勢調査区から全国平均で約 1／5.5 の調査区を抽出して実施された）。

地籍調査の重要性

・地籍調査は主に市町村が主体となって、一筆ごとの土地所有者、地番、地目を調査し、境界の位置と面積を測量するものである。土地に関する記録として広く利用されている登記所の地図はその半分ほどがいまだに明治時代の地租改正時につくられた地図をもとにしたものである。実際とは異なる場合もあるのが実態である。

・明治 6 年の地租改正で、年貢（米）といった物納が廃止され土地評価額の一定率の現金で納税するようになった。

・土地の広さが納税額に直結しており、できるだけ少なく申告する傾向があり、実際と整合しないことも多く、正しく計測し登記することもたいへんな作業となることが予想される。

・しかし、正確な面積、境界線等を把握することは、公共事業の測量作業の簡素化、位置情報・登記情報の統一により事業調整のスムーズ化、防災対策活用、災害時の迅速な復旧などに不可欠であり、現在も推進に力をいれている。

＜今後の展開…国レベルの計画から地域の課題を見据えた計画づくりへ＞

○国レベルの計画　ナンセンス

・全国総合開発計画(全総)は 1962 年池田内閣で第一次全総がスタートし、1998 年の策定の 5 全総で終了している。この「5 全総」は計画名が「21 世紀の国土のグランドデザイン」で、開発中心であった第４次までの計画とは方向性が異なるものであったが、国レベルで計画することの限界を示している。開発志向の終焉、多様化する地域の課題、地方分権‥といった流れを象徴している。そんな中でも全総に替わる「国土形成計画」が平成 17 年（2005 年）から策定がはじまった。この計画の意味がよくわからない。

・地域の課題に取り組むべき、同様の傾向が住宅政策についてもいえる。

・国の機関で、中央ではなく地方に優秀な人材を配置することなど重要ではないか。

○安心して住めるを目的とした住宅政策へ

・1985 年コミュニティ公営住宅制度というものができているが、公営住宅法制定当初と何が違うのか、調べてみることは現在のありようをみる上で重要である。

以上、勉強会の記録をもとに少し藤本が編集いたしました。勉強会の最後の方で小林さんが「1980 年から 10 年間の国による応急処置的施策をもっと大局的にできていたらまちづくりは変わっていた」とおっしゃっていました。市街地整備事業手法のことなのか、神戸市が「環境」の時代を標榜する一方で国は開発志向であったことなのか、最低居住水準をクリアしようとした「住宅建設計画 5 カ年計画」のことなのか…詳しくはお聞きできませんでした。またの機会に伺いたいと思います。「環境」の時代の蓄積、神戸市職員とのパートナーシップ、神戸市のまちづくりスタンスの基礎となった「環境カルテ」…、長い時間をかけたシナリオを感じ、自分の仕事を振り返る機会となりました。

■『コンパクトシティ』を考える19

日本における持続可能な社会再構築への期待

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．「持続可能な社会」であった江戸時代

江戸時代は徳川将軍家を大名同盟の盟主とする世界に類のない「幕藩国家」であった。徳川家が天皇からもらう『征夷大将軍』という職によって、盟主としての国家の統治権を確立し、『幕府』という政府を持った。しかし、日本中の人間からまんべんなく税金を取ったのではなく、徳川家が支配する地域から米にして 4 百万石と、直轄領（江戸、大坂、博多などの都市）の商業地からの運上金という税金が主な収入であった。徳川家の支配しない地域は、約 270 の藩に分かれて、藩が百姓からの租税（年貢）の全て取り、政治的自治を保った。ただ、藩は年貢だけで財政のやりくりができず、領国の気候風土に適した特産物を開発し、生産から市場、流通の全てを管理した。

幕藩体制のもう一つの特徴は、『キリシタン禁止令』、『日本人の海外渡航禁止』、『海外貿易の制限』の一連の法令による、17 世紀初頭から 19 世紀中頃まで 2 世紀以上の「国家の閉鎖（鎖国）」であった。国の通商相手をプロテスタント国オランダに、場所も長崎出島に限定し、カトリックを排除しつつ、西日本の大名の活発な貿易による多額な利益を禁止し、幕府が貿易による利益を独占し、幕府の地位を維持するためのものであった。

2 世紀以上鎖国できた背景には、国内での生産に必要となる鉄器や銅器の基礎的な物資を自給できたからであった。江戸時代の日本は世界三大砂鉄産出国で、安価で豊富な鉄の供給ができた。銅もオランダが日本で買い込むほど安価で良質であった。さらに、米・麦・魚などの食料、綿・絹・麻などの衣料原料、住のための木材の全てが、当時の人口 3 千万人の生活の自給自足を可能にした。要するに、貿易の必要がなかったのである。

また、日本は物質循環のシステムが、都市、里山、農業、漁業間に形成されていた。例えば、夜なべの仕事のため鰯等の魚油が使われたが、残る干鰯は、漁民から農民に売られ、田に肥料として投入された。田んぼが豊かになると、小魚や虫が発生し、それを鳥が食べて、山に帰り、鳥の糞で里山の雑木林の生態系が豊かになった。雨が降れば、養分豊かな水は、川から海に注がれ、プランクトンが増殖し、漁業量を増加させたのである。

あるいは、江戸には百万人を超える人口が集中したが、彼等の消費による大量の糞尿は、市場メカニズムにより見事に処理された。長屋の家主や武家屋敷、神社などの多量に糞尿を排出するところには、特定の農家や問屋が有償で引き取り、都市周辺の農家に販売された。糞尿は田や畑に肥料として供給され、野菜や米となって都市に戻ったのである。欧米の都市には下水道が整備されたが、無処理で河川や湾に放流されたため、悪臭ばかりか、水を不潔にし、水道水に流れ込んで、赤痢やコレラの発生が絶えず、死亡率が高かった。明治になり、東京に来た米国人が、欧米に比べ江戸の死亡率が低かったことと、糞尿処理の循環経済システムに驚き感心したと書き残されている。

豊富な鉄による農機具の改良、循環経済システム、幕府や藩による新田開発で、米作物は増産となり、余剰となった作物と農村の人口は各城下町だけではなく、大きな都市に集まり、17 世紀後半から都市化現象が起こった。都市人口の増加は、大衆消費を拡大したため、新たな産業で収入を増やしたい藩の奨励で手工業が振興していった。それは、藩の財政を豊かにしただけではなく、地方経済を活発化させ、民富の蓄積を高めた。経済力を持った職人や商人は「町人」と呼ばれた。ドイツ語で「（城壁）都市に住む市民」を「ビュルガー」と呼び、フランス語で「ブルジョア」と呼ぶが、日本の「町人」と見事に対応する。

江戸時代は封建社会で、階級社会と言われたが、形式は別にして、実質は平等化が進んだ。幕府や藩は家臣の教育を熱心に行ったが、1300

校あった私塾、1 万校を下らない寺子屋でも庶民の教育が行われた。寺子屋では、男女共学、私塾では士庶共学で、裕福な町人と貧しい武士の間の尊卑の心理は逆転していたと言われるくらいである。数学は独自の高度な発展を遂げ、18 世紀前半には、無限級数の展開、微積分学が現れている。

江戸時代は、国家を閉鎖したことで、国自体がコンパクトになり、日本の自然風土を活用した文化や生産活動で、持続可能な社会が 2 世紀を越えて展開したのであった。しかも、その間に新しい時代へ持続できる蓄積も着実に進んでいた。

2．一気に進んだ近代工業社会

幕末から明治維新の時代は、政治的には「革命期」すなわち「断続の時代」であり、経済的には「民の活力」が「持続した時代」でもあった。

1867 年 10 月の『大政奉還』、同年 12 月の『王政復古の大号令』で、幕府政治は終焉し、政権は朝廷に戻り、68 年『明治維新』を迎えた。69 年の『版籍奉還』、71 年の『廃藩置県』によって、藩はなくなり、同時に、幕府や藩が所有してきた全ての土地は、「上げ地」として中央政府に召し上げられ、ここに分権型の幕藩体制が終焉した。士農工商の身分を廃止し、徴兵制を採用し、四民平等による「国民」の意識を高めた。さらに、政府の財政基盤の安定化のために、73 年に地租改正し、それまでの石高制による年貢制度を廃止し、土地の私的所有（売買の自由）を前提にした定額金納地租を課すこととした。これらによって、天皇を中心とする中央集権体制が成立し、近代化の道を走り始めた。

近代化に最も必要なことは工業化であった。幸い江戸時代に、幕府や藩が奨励してきた直営工場という遺産があったので、それを官営工場として強力な育成策が採られた。外国人顧問と国家資金を集中し、採算を無視して進められた。鉄道と鉱山の 2 大産業部門が中心となった。さらなる発展のために、資本主義化が必要である。しかし、外国資本の介入には植民地化という危険があったが、幕末までに民富を高めたブルジョアすなわち町人層が、主役に躍り出た。加えて、国民の学習意欲と勤勉さが、新たな技術に迅速に対応し、生産性の向上させ、国際競争力を獲得した。

鉱山等の官営工場は経済的自立が可能となった段階で、豪商と呼ばれた人たちに払い下げられた。鉄道は、官営事業から、民間資本の株式会社による事業が許可され、一気に進んだ。72 年の新橋－横浜間の開業以来、89 年には東海道線が、91 年に東北線、1901 年には山陽線の開通で本州の青森から下関まで鉄道で繋がった。

こうして、20 世紀までに産業革命を達成し、世界的にも模範となる「工業化」を進めることとなった。すなわち、「国家が主導的に、絶え間ない技術革新によって、国民一人あたりの生産額を持続的に増大する過程」である。20 世紀の初期には先進工業国の仲間入りを果たし、第 2 次大戦の敗戦後も、国家主導型の工業化によって、米国に次ぐ近代工業社会の地位を獲得したのである。

しかし、明治維新から百年後の 1970 年代に、「オイル・ショック」と「ドル・ショック」をきっかけに工業社会は終焉を迎えた。

3．持続可能な社会の再構築のために

ポスト工業社会として持続可能な社会がテーマである。欧米ではそのモデルの模索が続いている。日本には江戸時代という生きた教材がある。グローバル化やネットワーク化は、自然の持つ多様性がモデルであり、江戸時代の自然の多様性をうまく活用した芸の細かい知恵の組み合わせと探求心がヒントになる。これまでに、地球環境に優しい技術や省資源技術の開発の面に現れている。

大きな課題は、東京中心の中央集権体制から脱皮し、各地域が藩のように自立できる分権化と自治能力の保持である。分権の法制度の改革や道州制の議論が進められているが、上からの改革ではなく、地方や地域からの革新が重要である。そのためには、前回まで 3 回にわたり述べた「コンパクトシティの概念」と、江戸時代の生きた教材を組み合わせ、都市のコンパクト性を達成することで、日本独自の持続可能な社会に到達できるであろう。それには、江戸時代の人々の DNA を持続する我々自身の知恵と活動に期待したい。

■Dr.フランキーの街角たんけん　第20回　もう一つの新開地（その２）

神戸の電気事業ことはじめ

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

「神戸市電気局」といっても、こちらも若い人にはぴんと来ないだろう。直接的には、現在の神戸市交通局がその直接の後身に当たる。しかし、現在と違うのは、その名が表わすように電力事業も手がけていたことで、その歩みは幾多の変遷を経ている。

神戸における電気事業は、明治16（1883）年に、神戸区長の村野山人が、公営での電気事業を企図したことを嚆矢とする。赤松啓介は「神戸財界開拓者伝」で、その前年の東京電燈設立に、村野が刺激を受けたからではないか、と推測している。ただ、区の財政が脆弱であったこともあって、実現はしなかった。

明治20（1887）年11月、東京電燈社長の矢島作郎自らが、神戸に発電機を持ち込み、県議会議事堂で試験点灯を行った。そのインパクトは強烈であったようで、翌21（1888）年１月、佐畑信之、池田貫兵衛らによって有限責任神戸電灯会社が設立された。全国で２番目の電力会社の誕生である。

神戸電灯会社は、早々にエジソン社製発電機を輸入、栄町六丁目に発電所を設け、同年９月に相生橋と楠公前で試験点灯を挙行。支配人の田中胖の手腕もあって、折からの日清戦争後の起業熱とともに業績を伸ばしていった（会社設立から５年後、田中は激務がたたり、風邪をこじらせて帰らぬ人となった。享年36歳）。

一方、人口が増加し、市街地の範囲が拡張するなかで、院線（現ＪＲ）以外の市街地電車建設を求める声が次第に高まっていった。明治26（1893）年には、複数の資本家グループが市街地電車事業を県庁に出願したが、県側は事業者の一本化を要請。その調整がまとまらず、最終的に村野山人らを中心に神戸電気鉄道株式会社が設立されたのは同39（1906）年であった。明治43（1910）年４月、春日野道～兵庫駅の区間が開通、以後数次に亘る延伸が行われた。

神戸電気鉄道株式会社と神戸電灯株式会社は大正２年（1913）年に合併、神戸電気株式会社となった。

大正６（1917）年、神戸市が同社を買収、電気局とした。先に述べたとおり、もともと神戸電灯会社設立準備の段階で、行政主体で設立しようとしていた経緯があり、市による買収はある意味では当然の帰結といえた。しかし、市の買収計画に対し、営業成績抜群の優良株を譲り渡しを渋る大株主たちを、自らも株主であった瀧川儀作が、株を市に譲渡した上で、一人一人説得にあたった、という逸話が残されている。

こうして誕生した電気局が、拡大する電力需要を背景に莫大な収益を市にもたらし、それらは神戸港の施設拡充などの重要な財源となった。

ところで、神戸電燈会社の本社は創業以来元町通４丁目に置かれていたが、事業拡大とともに手狭となり、明治45（1912）年に新開地へ社屋を新築、移転した。

煉瓦造２階建で、角にはドームを戴く塔屋が立ち上げられるなど、新開地本通の一大ランドマークとなった。設計は、工手学校（現工学院大学）出身の設楽貞雄率いる設楽建築工務所（神戸・下山手）。

村野藤吾が、初代通天閣や初代聚楽館など話題性のある娯楽施設も手がけたこの設計事務所の作品の持つある種の自由さにひかれ、早稲田を卒業後、関西へ赴くきっかけとなったというエピソードがある（ちなみに、京都電燈会社本社屋（明治43（1910）年竣工）も設楽建築工務所の作品である）。

（この項、つづく）



●神戸電燈株式会社本社（出典「近代建築画譜」）

水の情景二●ワタシの旅

猫の散歩道

中川 紺

その家と隣の家に挟まれた空間には、水の入ったペットボトルが、それこそ猫の歩く隙間も無いほどに、3列×9列で立て並べてあった。一番手前の列の一本が、他とは違う空気を放っていることを感じた。

玄関前にも五本が等間隔に置かれている。こちらはつい今しがたこの家の主婦に置かれたばかりで、「ノラ猫がねえ、入ってきて困るのよ」と、聞いてもいないのにワタシに話かけながら、抱えてきたペットボトルを順に下ろして、また家の中へと戻って行った。

●●

人影が無くなった途端、隣家との境界から、するりと出てきたものがあった。まだらとキジトラの猫。彼ら（オスだった）は背後のペットボトルを一瞥して、伸びをひとつ。

（こんなもんで追い払えると思ってるらしいけど、まあ、効果はゼロに等しいね）

（まったく。でも俺たちにとってはいい抜け道だけどな）

表情と声から、ほぼそういうことを話しているということが分かった。

（あんた、そんな格好してるけど、人間じゃないだろ）

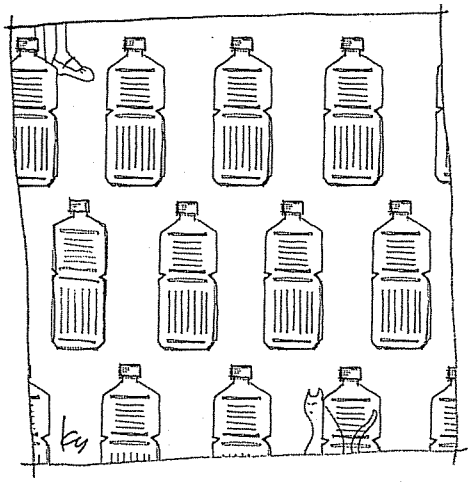
と、まだらがワタシに言う。

（人間の気配しないもんな）

キジトラはしっぽを意味ありげに振る。

そのまま向かいの路地にすたすたと入っていく。やはりそうか、と妙に納得した。

●●



しばらくして、すごい勢いで一匹の白猫が溝から飛び出してきた。ワタシのいる場所の少し手前で急ブレーキをかけると、並べてあるペットボトルに突進して、そしてなんと、吸い込まれるようにボトルに消えていった。

十秒も経たないうちに、追手の猫が現れ、見当違いの方へ走り去った。

なるほど、先の二匹が言っていた『抜け道』とはこういうことか。ペットボトルの猫よけのいくつかは、猫の移動手段になっているらしい。おそらくまだらとキジトラも、別のボトルからこのボトルにワープ（という言葉が適切なのかは分からないが）してきたのだ。どうりでこの一本だけが変な感じがしたわけで、でもそうなるとやはりこの水はワタシが求める水ではないのだ。

しかし猫がそんなことの出来る生き物だったとは。それとも最近の住宅事情に対応して生み出された力なのだろうか。猫ではないワタシに真相は分かるはずもない。そして『人』でも無いらしいのだ、どうやら。今の姿は単なる容れ物、ということか。まるでこのペットボルトみたいだ。

きゅっ。キャップをはずしてみる。斜めにすると中の水がごぼごぼと音を立てて流れていく。水は効力を無くしたらしく、もう特別な空気をまとっていなかった。

●●

「ちょっとあんた、何してんの！」

うわわっ。知らないうちに大半のペットボトルの水を抜いてしまっていた。抜け道が使えないワタシは、走って逃げるしかないようだ。背後で何か叫ぶオバサンの声を聞きながら、猛ダッシュで角を曲がった。息を切らして顔を上げると、塀の上をさっきの白猫が優雅に歩いていた。

（第二話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第８１回・水谷ゼミナール報告

日時：4月28日（金）、会場：こうべまちづくり会館
テーマ：行政の40年勤務を振り返って

西川靖一氏は、昭和40年に神戸市に奉職され平成15年3月に退職、その後務められた神戸市住宅供給公社を平成18年4月に退職された。猿渡彬順は、西宮市に昭和44年に入り平成17年3月に退職した。

両氏は、都市計画法(1968年)、都市再開発法(1969年)が制定された現代都市計画の黎明期から、バブル経済時の規制緩和の反都市計画期を経て、こんにちの住民主体、地方分権によるまちづくり期にかけて、行政マンとして長年に亘り都市計画・都市計画事業に携わってきた。

両氏に「行政の40年を振り返って」もらい、都市計画・まちづくりの来し方を懐い、行く末を案じようとの企画。

<報告者の題目>

●「神戸市の37年+3年」西川靖一（元神戸市住宅局長）

●「行政都市計画人として36年」猿渡彬順（元西宮市・現(株)アップ監査役、アサヒビール大山崎山荘美術館顧問

西川氏は、入庁時の大橋地区を皮切りに三宮、兵庫駅前地区、六甲地区、六甲駅前地区、東川崎地区と、平成元年までの24年間に従事された再開発事業(住環境事業等を含む)と、その後の営繕部長、建築部長、住宅局長時の13年間に携わったアーバンリゾートフェア、建築確認の民間開放等の業務概要及びこれらに取り組まれた姿勢・心意気を報告された。特に再開発への思いは強く、三宮地区に取り組んでいるときに「再開発は一生の仕事」との思いにいたったとの事。こういう思いを持ちつつ事業戦略を練り、権利者と交渉を重ねるなか得られた教訓・蓄積が披瀝された。これらは氏の深い洞察力と鋭い人間観察眼によるものであり、まちづくりに携わるものは以って肝に銘ずべきものと思われた。

西宮市在職の殆どを都市計画畑で過ごした猿渡からは、新入職員時代の初仕事で当時新たに制度化された線引き・用途地域の指定、その後の都市景観行政(アーバンデザイン)の導入、さらには退職までの10年間ずっと携わることとなった震災復興の一環である震災復興計画の策定、震災復興事業の都市計画決定など、36年間に従事したなかでエネルギーを費やし、印象深かかった計画業務の紹介をした。またこれらの業務を通して感じた行政プランナーとしての役割、限界、悲哀、大いなる反省とちょっとした矜持について述べた。最後に、中曽根内閣の「アーバンルネッサンス」から現在の「都市再生政策」に続き、その基本となっている理念なき計画規制の緩和を危惧しているとの付言をもって報告を終えた。（猿渡彬順）

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第５０回連絡会

・日時：6月2日(金)18:30～20:50
・場所：神戸市勤労会館404号室
・内容：テーマ「行政の住民参加型まちづくり支援制度の今」、パネラー：①「神戸市まちづくり条例に基づく支援制度」／金川裕一（神戸市地域支援室）、②「兵庫県まちづくり基本条例に基づく支援制度」／佐藤庸正（兵庫県都市政策課）、③「市民主体・行政参加型のまちづくり」／大西勇一郎（豊中市まちづくり支援課）
・会費：５００円
・問合せ：GU計画研究所（TEL.078-435-6510）

●「子どもたちに夢を」ﾛｯｸﾌｨｰﾙﾄﾞ元気の木保育室開設記念フォーラム

・日時：6月3日(土)13:30～16:00
・場所：ﾛｯｸﾌｨｰﾙﾄﾞ神戸ﾍｯﾄﾞｵﾌｨｽ・ﾎｰﾙ
・内容：基調講演／安藤忠雄、ﾄｰｸｾｯｼｮﾝ／竹中ナミ(ﾌﾟﾛｯﾌﾟｼﾃｰｼｮﾝ)、谷口真美(早稲田大学助教授)、矢田立郎(神戸市長)、岩田弘三(ﾛｯｸﾌｨｰﾙﾄﾞ社長)、安藤忠雄
・問合せ：㈱ﾛｯｸﾌｨｰﾙﾄﾞ（神戸市東灘区魚崎浜町15-2、TEL.078-435-2802）

●多文化と共生社会を育むﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ

「韓国料理ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ」ｰｸｼﾞｮﾙﾊﾟﾝをつくって食べるｰ
・参加費：1,500円（小学生500円）
・講師：金恩受(韓国料理・文化研究家)
「ポシャギ展」ｰ金恩受先生と生徒さんの作品展ｰ
・日時：6月17日(土)～25（日）9:00～22:00
・場所：神戸学生青年ｾﾝﾀｰ
「ﾎﾟｼｬｷﾞ・ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟｺｰｽﾀｰをつくってみるｰ」
・日時：6月21日(水)18:30～21:00
・場所：神戸学生青年ｾﾝﾀｰ
・参加費：1,500円（材料費込み）
・問合せ：多文化と共生社会を育むﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ 代表山地久美子（TEL.078-851-2760）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興 市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024 神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311 FAX.078-842-2203 Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327 郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄 担当：天川佳美、中井 豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年6月30日発行

月刊 きんもくせい

06年6月号
(50+36+NO. 39)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■鎖瀾閣復元が現実のものとなって

たつみ都志（武庫川女子大学文学部教授）

新聞報道でご承知のように、谷崎潤一郎の旧邸の一つ「鎖瀾閣（さらんかく）」が、近年中に復元されることになりました。鎖瀾閣とは、阪神大震災で全壊した阪神間で唯一の谷崎潤一郎の自邸で、自分の思うがままにデザインした書斎＆迎賓館でした。

阪神大震災で全壊して以来１１年間、この建物の谷崎文学の中での重要性を唱え、谷崎が自作の中で使った名をそのまま使って鎖瀾閣と名づけ、復元運動を続けてきました。

それが、今回「縁」あって、則岡宏牟という建築実業家の援助で急転直下、復元が現実のものとして目の前に見えてきました。しかし５６００万といわれている復元資金のうち、まだ１２００万が不足しています。寄付控除も受けられますので、是非皆様のご協力をお願いします。寄付は郵便振替で、神戸００９９０－６－７３９９６　特定非営利活動法人谷崎文学友の会へお願いします。

鎖瀾閣は岡本公園拡張予定地に建設予定ですが、先日、移築を目標として解体された、通称「ナオミの家」も併設するための嘆願書名簿も配布しています。ご協力いただける方は０７２－７５４－２１１６にお電話ください。

さて、この鎖瀾閣復元運動について、新聞やテレビでは伝えられなかった、舞台裏を、お話しましょう。



（右の写真は鎖瀾閣ホームページより）

■復元物語その１

震災後私は、岡本にあった谷崎の自邸の重要性を地元の方たちに説いてまわった。そして地元の方々が中心となって復元運動が始まった。岡本界隈のマスコミ人も含めた「鎖瀾閣復元委員会」というものが発足し、私は「顧問」という立場にすえられた。最初こそ寄付はぞくぞく集まり、マスコミも連日取り上げてくれて、運動は順調に見えた。しかしその後は、構造不況と震災不況のあおりを受け、当初の予定の２０００年復元の夢はもろくも崩れ去った。当初から、月に千円、年間１万２千円積み立ててくださったメンバーには約束の５年が過ぎようとする２０００年、実現が不可能な現状を伝えた。しかし５年間でたまった一人６万をそのまま預からせてもらえないか、と申し出るとほとんどの人が賛同してくれた。

それからの中盤が苦しかった。街頭に立ち、声をからし、地元商店街の夏祭りに出店を出し

たり、出前講義をして資金をためた。そして運動に協力してくれるマスコミ友達の変わらぬ援護射撃に助けられながら数年が経っても、年間５０万も集まらなかった。

初代会長が急逝したあと、一流会社の役員をして、法人の理事長まで勤めた人が鳴り物入りで、運動の会長職についた。が、何もなさず、運動の遅々として進まぬことにいらだって去っていった。そのように運動仲間は一人二人と遠ざかっていった中で、副会長の一人である地元の廣岡倭氏だけは、降りずに運動を続けてきてくれた。

形も何もない中で寄付を集め「その金、鎖瀾閣ができなかったらどうなるねん、返してくれるんか」と満座の中で罵倒され、悔しい思いをしたのも一度や二度ではなかった、と氏は当時を振り返る。

私自身、志を遂げず不慮の死を遂げたら、鎖瀾閣は建たなくなるのでは、と思い「生命保険に入ろう」と思った。２０１５年に死んでも３０００万円、今死んだら５０００万円、生命保険が下りるようにしたい、そう思って鎖瀾閣復元運動の会議の席で提案した。

結果は「先生にはもっと長生きしてもらいたい」というわけのわからぬ情緒的意見が通って、提案は却下。

この時点で鎖瀾閣復元委員会という任意団体の限界を感じ始めていた。そんな折しも、同じ矛盾を感じていた仲間の一人・芝崎氏が「先生が中心となる独自の団体を作られることをお勧めします」と提案してくれた。この声に押されて作ったのが「谷崎文学友の会」である。社会性を持たせようと、ＮＰＯ認可の申請をして、２００３年１２月１日、特定非営利活動法人（ＮＰＯ）としての兵庫県の認可を受けた。

昔から「長」と付くのが嫌いだった私だが、理事長に就任して、すべて自分の差配一つにかかる重責とやりがいを覚えた。西宮、梅田、池田など数箇所で谷崎に関わる文学講座を開き、それを核として２００人の会員ができ、年間会費１００万がコンスタントに入るようになった。つどごとの受講料はＮＰＯの運転資金だ。事務処理能力に欠ける私を補佐してくれたのは湯浅あかね、という優秀な右腕。彼女がいなかったら私とＮＰＯはとうに空中分解していただろう。

２００５年、ようやく資金は１０００万に到達した。集まった１０００万には企業からの資金は皆無だった。１０円１００円１０００円の、まさに神社仏閣の賽銭箱のお金、浄財だ。

兵庫県文化財課の友人が、「昔は寄付を２割集めたら、あとは行政が動いた」と言う。しかし今や２割集まっても何も動かない。それどころか箱もの行政のあと始末を、国が推進する「指定管理者制度」の名のもとにまことしやかに始めた。

震災１０年のお祭り騒ぎが続く中、私は決意した。予定を早めて２００６年、どんな形でもいいから建てる、と。

そう決意して行動を開始して戦略を立てるのに夢中になって、自分の体の変調に気付かなかった。目の異常と名状しがたい頭痛。手に負えないから、と町医者の紹介文を手に兵庫医大に検査に行ったその日、「原田病。失明寸前。即入院」といわれた。

（続く）



（右の写真は鎖瀾閣ホームページより）

■中越ガレキ隊、山古志へ行く

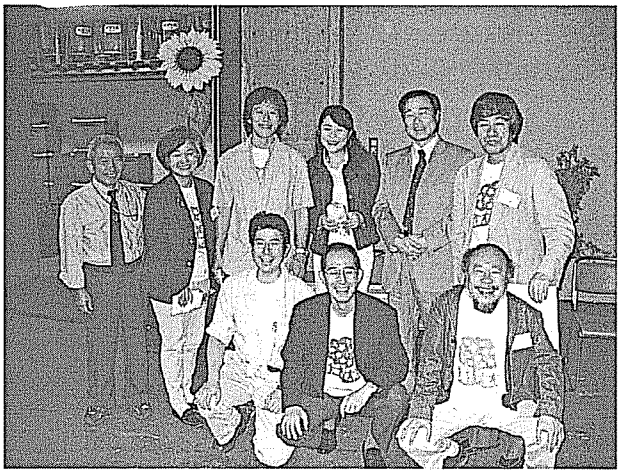
天川佳美（阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク）

2006年5月27日（土）28日（日）に新潟県長岡市にて「第49回　全日本花いっぱい長岡大会」が開催され、去年（2005年）、「長岡花いっぱいフェア」に参加し仮設住宅にコスモスやヒマワリの種をまいた中越ガレキ隊が今年も10人で行ってきました。

初日、27日（土）は全国で花いっぱいに貢献されておられる方々83団体への表彰や大会宣言、次期開催市へのリレーなど全国からの参加で賑わいました。

また、翌28日（日）午後はＮＨＫの「趣味の園芸」という番組の公開録画が行われ、柳生慎吾、目加田頼子アナウンサー目当てのお客さんが多数集まりました。その公開録画の後で開催されました「花いっぱいの輪 2006 交流会」は、新潟県花いっぱい連盟常任理事の小林正夫さん、山本中学校の伊藤彩香さん、森民夫長岡市長に、柳生さん・目加田さんを加え、神戸メンバー10人も参加し、長岡との交流を語りました。司会は小川浩司さんとおっしゃる長岡の相互タクシー代表取締役というまるで神戸の森崎清登さんを思わせる「花いっぱいおじさん」でした。

なかでも中学生の伊藤彩香さんは大の大人たちに交じって堂々と原稿なしで当時の活動を話され、「神戸のはるかのひまわりを学校の校庭に咲かせています」という嬉しいお話をして下さいました。残念ながら撮影禁止だったので交流会の終了後に写した写真でお許し下さい。



翌5月29日（月）、5人残ったメンバーは長岡市公園緑地課のご尽力で長岡市役所山古志支所産業課の星野光夫さんと関貴史さんにご案内いただき復旧が始まったばかりの旧山古志村をくまなく見せていただきました。

山古志村は虫亀、竹沢、東竹沢、南平、種苧原（たねすはら）などという地区がありますが、道路が至る所で寸断されたままで今はまだそれぞれの村の行き来もままならない状況です。私たちはボンネットの上に前後を向いたスピーカー付きの役場の車で通行証明書を提示しながら被災地を廻りましたが、行き交うトラックや同じような復旧工事車両の運転手は皆さん穏やかで静かなことに驚きました。そう言えば、我々神戸も震災直後の１ー２日は静かでしたが、復旧工事のトラックが行き交う頃は殺気立ったような街の様子だったことを思い出します。

虫亀と竹沢の峠にある旧山古志役場の隣に建っている村民会館が再開した役場で今は長岡市山古志支所です。その１室で簡単な説明をお聞きする間も早々に山の中へと車を走らせて下さり、道なき道を廻りました。それぞれの村に住民が帰られ生活が始まっているところもありますが、あちこちで行われている圃場整備や法面砂防工事を見て「本当にこれでいいのかと思ってしまう」と野島断層近くで実家が被災された星川雅子さんの言葉が重く聞こえましたし、東竹沢の峠で新しい畑を耕しておられた二人の姿に心が残りました。



報道によく登場した木篭（こごみ）地区の水没したままの集落で何台ものユンボや浚渫機械が音もなく動くさまを遠くに見下ろしましたが、今も２階、３階まで水に埋もれた様子は先月訪れたばかりのニューオリンズの被災現場と同じく、胸に迫るものがありました。

１年の半分を雪に閉ざされて工事もままならない地域での復旧・復興を私たちはどのように見守るのかを考えさせられた一日でした。

■災害ＮＰＯの市民資源性とは何か

山口　一史（ひょうご・まち・くらし研究所）

大きな災害が起こると、災害ボランティアと呼ばれる人たちが、災害被災地に駆けつける。阪神大震災以来、各地で地震や水害などが頻発し、災害ボランティアセンターも比較的すばやく設置されるようになった。しかし、それに伴った新たな課題も出てきている。

■民主党が災害ボランティア調査

ここ数年では、2004 年に全国的にいろいろな災害が発生した。7 月に新潟、福井などで豪雨災害がおこり、10 月には台風 23 号による水害も各地を襲った。

兵庫県もこの 23 号台風によって淡路、但馬をはじめ県域のほぼすべてで被害をこうむったことは記憶に新しい。新潟県三条市から「7 月の豪雨水害の救援のお返し」といって、ボランティアが豊岡市を目指していた、そのさなかに今度は新潟県中越地震が発災した。豊岡に向かっていたボランティアの一行は、このまま豊岡に行くべきか、それとも地元の中越に戻るべきか、大いに迷ったという。

いずれ必ずやってくる東海、東南海、南海地震のような広域大規模災害が、本当に同時、もしくは日を経ずして発災すれば、消防、自衛隊など公的組織も、ボランティアのパワーもとてもまかないきれないことは想像できる。災害ボランティアや防災ボランティアの力を積み上げないといけないのだろう。

こんな課題があるとき、民主党がこのほど、「災害におけるボランティア組織（ＮＰＯ等）と“市民資源”に関する調査」をまとめた。

表題の「市民資源」という言葉は、新鮮で魅力的である。しかし、この調査の中では十分な定義づけや具体的なイメージが乏しく、やや不満が残るが、さまざまな分野の異なる団体・グループがネットワークを強化し、災害救援や防災活動に力を出していこうということを強調している。

紙幅の関係があるので、調査をごく簡単に紹介してみよう。アンケートをもとにまとめているが、ＮＰＯ法人の中で定款に「災害救援活動」を記入しているところを中心に、過去、最近に大きな災害に見舞われた兵庫、新潟、今後、大きな災害が予測される静岡などについては「災害救援活動」を目標としていないＮＰＯも調査対象としている。しかし、1517 団体の対象に対して回答はわずか 226 団体と、回答率は 14.9%にとどまっている。

回答ＮＰＯのうち、「災害救援」を主な活動分野としているのは 44 団体、19.5%だ。比率だけ見ると 5 団体に 1 つであるから、かなり多いという印象だ。災害救援を“本務”として活動している団体が、本当に災害が起こったときには、他の分野で活動している団体に呼びかけて、あるいはリードして被災地に入るケースが普通だろうと思われる。

ところがやや意外だったのは、災害救援などの活動で、「他のＮＰＯ・ＮＧＯなどと連携、協力をしたか」の問いに対して「ない」と答えた団体が 51.3%と半数を超えていることだ。あまり他団体との連携を好まない傾向があるのだろうか。災害救援を“本務”とせず、しかも災害時にも連携を取らないというのはどういうことなのだろうか。

■意外に少ない連携実績

同じく「地域住民組織と連携、協力」も実績があるのは 32%、「なし」が 56.6%となっている。「平常時での防災や減災に関する活動」をもっぱら行っている団体でも回答 72 団体のうち、連携、協力しているのは約 39%だ。これは連携する意思がないのではなく、地域住民組織の方が窓口を閉ざしたり、窓口が明らかでないことも背景にあるのかもしれない。自治体との連携のほぼ同様の数字があがっていて、「連携、協力なし」が 50%強となっている。

調査結果はまだ続くが、災害ボランティア団体もしくは、このことに関心のある団体が思った以上に、「孤立」化しているのはどうしたことだろう。

大災害にとどまらず、災害時には被災地はもとより、近隣の、あるいは全国の資源を速やかに、適切に投入することによって、被災者の直後の深刻な状況が改善されることは、災害が起こった都度、叫ばれてきただけに、まだまだ課題は多いと実感した。

もう一点、内閣府の防災ボランティア活動検討会でも指摘され、経験豊かな災害ボランティアネットワークのメンバーも首をひねっていることに、災害ボランティアセンター運営の画一化がある。中越地震で明らかになったうそのような本当の話だが、センターに登録していないボランティア団体が救援活動していると、「登録もせ

ずに活動するのはもぐりだ」と、指弾されたケースがあったという。いったんマニュアルをつくると、本来の目的ではなく、その規律の方が上位概念になってしまう人間の性（さが）の不思議さではないか。

災害ボランティアセンターにはさまざまな問題もあるが、民主党の調査から、災害ボランティアについてもう少し考えを延ばしてみよう。

■ボランタリープラザの調査

ちょっとデータは古くなってしまったが、ひょうごボランタリーセンターが 2005 年 3 月にまとめた「県民ボランタリー活動実態調査」から気になっている事柄があるのだ。

この調査は兵庫県が行う 4 年に 1 度のボランタリー活動の定点観測だ。県内の 8785 団体にアンケートを発送し、回答にあった中から、ボランタリー活動をしていると答えた 4997 団体について分析している。

この調査の中で、阪神大震災時の活動を振り替えて尋ねている項目がある。この中で面白いのは、現在の活動分野と、震災時の救援活動の分野を重ね合わせた分析だ。震災時とその 2～3 年間に行った活動の分野を聞いている。分野は「友愛訪問」「炊き出し」「救援物資の提供」「義捐金の寄付」「イベント活動」「ふれあい喫茶などの交流事業」「救援物資の仕分け」「避難場所の運営」「被災者の受入、招待活動」「その他」の 10 分野だ。グラフで見ていただこうとすると、あまり分野がたくさんあると煩わしいので、5 分野に絞って表記してみた。

さらに調査結果は行った活動をパーセントで示しているが、差異をしっかりと見るため、高率のパーセントから順位をつけたものをグラフ化し、横軸に現在の活動分野をおいて、その対比をした。

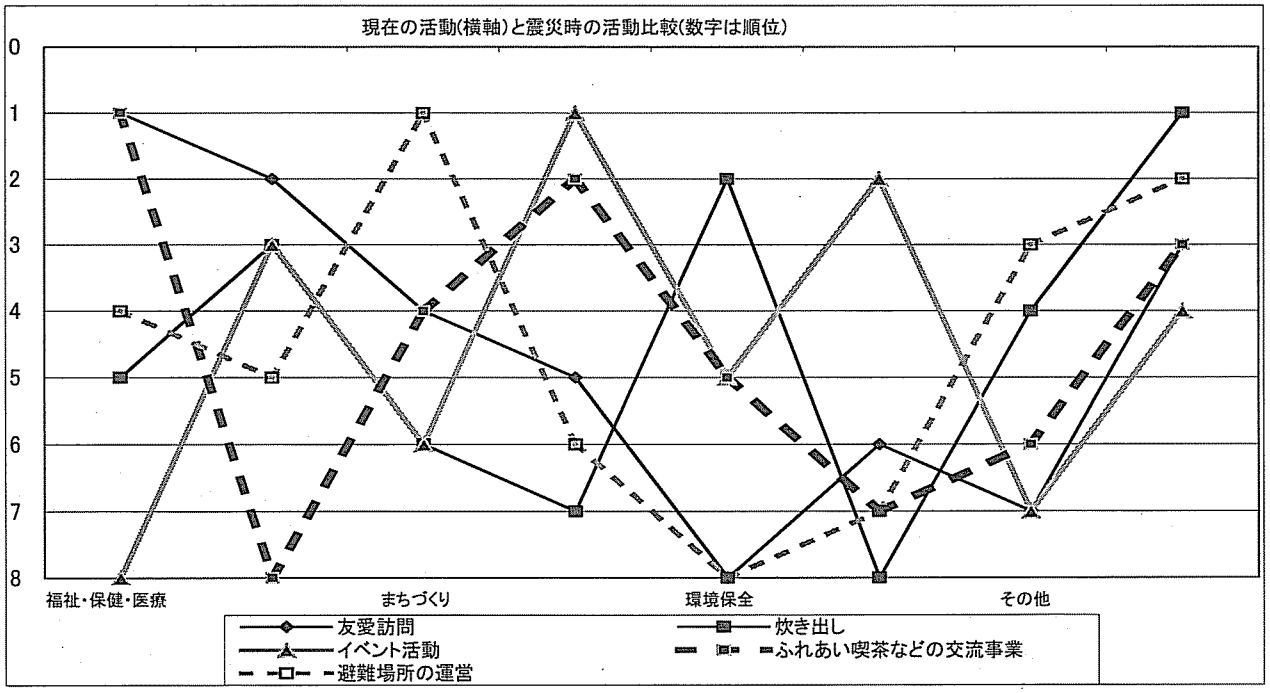
これを見ると明確な差異があるように受け止められる。

左から順番に見ていくと、まず「福祉・保健・医療」の活動をしているグループは震災後、「炊き出し」や「ふれあい喫茶」などに力を入れていたことが分かる。次の「社会教育」分野のグループは「炊き出し」「イベント活動」が多い、「まちづくり」分野は「避難場所の運営」にエネルギーを注いでいたのだ。「文化・スポーツ」の団体は、「イベント活動」と「ふれあい喫茶」が他の支援分野を引き離している。「環境保全」は「炊き出し」だ。また「子ども」分野の活動グループは「イベント活動」に、「ボランティア支援」（中間支援組織）は「友愛訪問」と「避難場所の運営」が多かった。

■“得意技”を生かす仕組みを

この結果は偶然の要素があるかもしれないが、むしろ、今後の災害時に、いま行っている活動を生かしながら、こうした支援活動との組み合わせが可能であるならば、そしてその分野が“得意技”であるならば、万一の災害時にそれをうまくつないでいく仕組みをつくっていくことが有効ではなかろうか。それが可能であれば、まさに「市民資源」として、具体的なイメージもつくりやすいであろう。

抽象的なネットワークをめざすよりも、こうした分野間のネットワーク、または異分野が何通りか集合したネットワークを組んでいく面白さもあるように思える。



■Dr.フランキーの街角たんけん　第21回　もう一つの新開地（その3）

瓦斯事業創成記

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

東京とほぼ同時期に神戸で興った電気事業は、日本人主導の動きであった。そして電気の永遠のライバル・瓦斯事業は、というと、それは居留地からもたらされた。

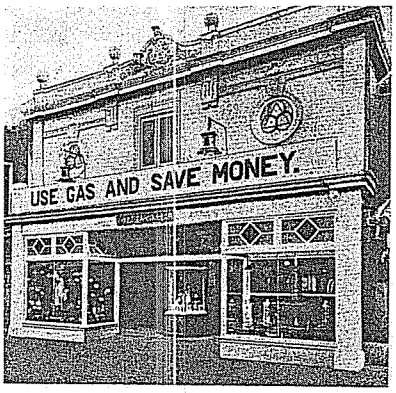
●手元の「神戸瓦斯四十年史」（1940（昭和14）年刊）によれば、神戸での瓦斯事業は、1872（明治5）年、居留地のボーンセン、フローンらにより設立された「兵庫瓦斯商会」を嚆矢とする。兵庫瓦斯商会は、小野浜の外国人仮墓地東側の土地を貸借して瓦斯工場を建設。1874（明治7）年11月には、居留地に瓦斯灯がともった。東京や横浜と同時期というのだから、神戸という街の動きの早さに驚かされる。

●兵庫瓦斯商会は、翌1875（明治8）年、居留地外の地域へも瓦斯供給を計画したがエネルギー供給の根幹を外国人に掌握されることを好まなかった当局はこれを認めなかった。しかし、居留地周辺の雑居地でヤミでガス管を引き込んで使用する者が後を絶たず、「条約違反だ」と紛糾たびたびであったことから、神戸区長の村野山人らが、日本人による兵庫瓦斯商会買収を企図したものの、当時の神戸経済の基盤が脆弱だったこともあり、実現しなかった。

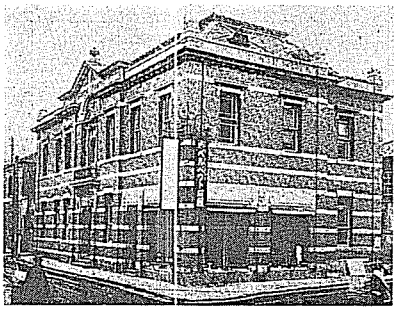
●1897（明治29）年、川崎造船所が株式会社に組織変更されたのと同じ年、神戸財界人による瓦斯事業起業の動きがにわかに活発となった。東京の新聞記者・永江為政と大阪の高橋熊太郎が瓦斯事業の有望性を講演したところ、まず神田兵右衛門、八尾善四郎、瀧川辨三らを中心とするグループが、ついで山本繁造、杉山利介らのグループ、そして藤田松太郎、室谷藤七、専崎弥五平らのグループが、瓦斯事業の特許を兵庫県を通じて内務省に申請した。内務省は、県と市に対し、出願の一本化を要請。最終的には、出願者が大同団結し、発起人総代に横田孝史、杉山利介、上田榮次郎を立てて同年10月出願、翌5月の県の認可を受けて、農商務省への会社設立認可申請が進められ、同年7月これも認められた。

●工場は芦原通（現兵庫区）に約1千坪の敷地を確保し、英国製の機器を輸入し、建設された。また導管（ガス管）の敷設も現在の兵庫区南部と居留地を除いた元町通・栄町通・海岸通一帯で行われた（導管の接合部のシールは、神戸市水道の建設に従事した職工により鉛で行われた）。1900（明治33）年2月に瓦斯の供給は始まったが、電燈が先行して普及していたため、瓦斯事業は苦闘を強いられた。が、ガス器具の使用実演（この営業スタイルの基調は、21世紀となった今日にも引き継がれている）など地道な営業が徐々に実を結び、6年後には、先行する兵庫瓦斯を買収するなど供給範囲を広げた。1910（明治43）年の葺合港沖の輸送船爆発事故で葺合工場（（1906（明治39）年建設）の瓦斯タンクが傾斜沈降するなどの障害もあったが、明治の終わりには西宮まで供給範囲が広がった。

●神戸瓦斯は本社を栄町通5丁目の瓦斯館（ショールーム）に併設していたが手狭となり、1909（明治42）年に相生町5丁目に680坪の用地を確保し、煉瓦造2階建の社屋を建設。翌年7月に移転した。小さいながらビクトリアン調の気品ある建物であったことが写真から窺がわれる。（この項、続く）



写真●栄町通5丁目にあった「瓦斯館」（「瓦斯を使ってお金を節約しよう」という英文のコピーが時代を感じさせる。2階の丸窓のモチーフは神戸瓦斯の社章）。



写真●相生町に新築された本社屋（明治43年竣工）。

以上写真2点（出典：「神戸瓦斯四十年史」1940（昭和15年）刊）

水の情景三●ワタシの旅

脱出

中川 紺

表札には『池永』とあった。

先に出かけたのが父親、今出ていったのが息子。「いってきまあす」と背中に持て余す大きさのランドセルを背負って、元気に走って行った。二人を見送ったのが母親で、三十代半ばといった感じだ。息子の後ろ姿を見送る母親は、少し浮かない表情をしていた。

母親が家に入って行くのを確認したあと、ワタシは向かいのマンションにある小さな公園のベンチから腰を上げた。

●●

ワタシがここの家族をもう一度見に来たのは、前日の夜中に声を聞いたからだった。

最初は何を言っているのか分からないような、くぐもった低い声だったが、次第に言葉がはっきり聞き取れるようになってきた。

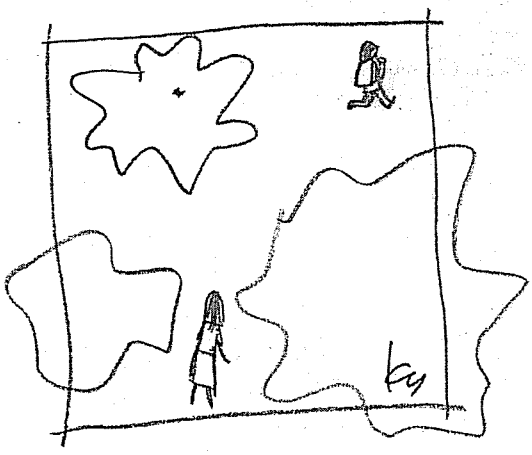
「出シテ！」

確かにそう言っていた。そして声は、直接ワタシの頭の中に響いてきた。口から発せられたものではないことは明らかだ。

同時に、濁った水の気配を感じた。不安と恐怖と疲労が混じったような気配だった。

これが探す水では無いことは分かっていたが、助けを求めるような声を放っておく気にはどうしてもなれなかった。日が昇ってくると同時に、足は自然に池永家に向いていた。

次の日の昼過ぎ、目の前を歩いていた男の携帯電話が鳴った。



「もしもし？　さわ子？　どうした？　えっ、ジュンを病院に？　おいおい大げさだろう。別に体調崩してるわけでもないんだし。え？　もう一週間だって？　でも怖い夢を見てうなされるくらい、小さい子供なら誰でもあるだろう？　だいたい本人も朝おぼえてないんだし。うん、うん、心配なのは分かるけどな、もう少し様子見てからにしろって」

偶然にもあの父親だった。

●●

その日の深夜、ワタシはもう一度、池永家に向かった。付近を歩く人は誰もいない。しかし、例の声は、やはり聞こえて来た。

子供が夢でうなされる、と父親が言っていた。ワタシには分かっていた。原因がこの声にあることを。そして。

そっと門の脇から手を差し入れると、庭先の蛇口につけられた真新しいブルーのホースではなく、横に放置されている古びた緑のホースをゆっくりとつかんだ。

慎重に、ホースを伸ばしながら傾けていく。中に溜まっていた水が、一気に流れ出た瞬間、泥はねが白いシャツに小さな染みをつくった。

濁った水の中に、緑色の小さな虫がいた。タイ米のような細長い体と堅い殻。外界の空気を感じ取って、庭木に向かって飛び立っていく。一週間も閉じ込められていたのに。

「さすが、すごい生命力」

思わずワタシはつぶやいていた。

そして、二階の窓をそっと見上げてみる。もう、うなされることも無いはずだ。

夢を見るのはどういう感じなんだろうか、と考えた。そして、ワタシはまた水を求めて歩きはじめる。ワタシは「眠る」ということを知っていても、「眠らない」。夜明けまではまだ時間がありそうだった。（第三話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第５０回連絡会報告

震災直後から始めた当会は、震災１１年を経て今回で節目の５０回を迎えることになりました。当初は、神戸西部・中部・東部、西宮と４つのエリアで発足し、その後神戸西部・東部、西宮となり、震災３年目ごろに現在のかたちになりました（「阪神白地」の第１回は 98 年４月３日、神戸 F ビルで行われ、テーマは「西宮市の環境整序型のまちづくり」でした）。

今回のテーマは「行政の住民参加型まちづくり支援制度の今」で、６月２日（金）、神戸勤労会館で行われました。まず、当会の世話人でもある後藤祐介さん（ジーユー計画研究所）によるテーマ解説があった後に、以下の３氏から報告がありました。

①「神戸市まちづくり条例に基づく支援制度」
／金川裕一（神戸市都市計画総局計画部地域支援室）
②「兵庫県まちづくり基本条例に基づく支援制度」
／佐藤庸正（兵庫県県土整備部まちづくり局都市政策課）
③「市民主体・行政参加型のまちづくり」
／大西勇一郎（豊中市政策推進部まちづくり支援課）

金川さんからは、震災前から行っており震災後活発化した神戸市におけるまちづくり支援について、現時点における課題として活動継続化のための支援のありかたや外部評価の必要性等を述べられたうえで、それへの対応としての制度の改正や現在取り組んでいることなどについて報告がありました。佐藤さんからは、都道府県レベルで初めて制定されたまちづくり基本条例の説明や、それに基づくまちづくり支援の概要及び震災直後から行われている復興まちづくり支援に関して述べられた後、現時点における課題ーまちづくり支援に関する県と市町の役割や、支援の選択と集中のあり方などーについて報告がありました。

大西さんからは、大阪府豊中市で震災前から行われている住民と行政の協働のまちづくりに関して、駅前などでの音楽あるまちづくりなどの総意あふれた取り組みや、今後のまちづくり課題等についての報告がありました。

（中井都市研究室　中井　豊）



５０回目を迎えた連絡会の様子

■ 情報コーナー

●第８２回・水谷ゼミナール
・日時：６月 23 日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室
・会費：1,000 円
・内容：テーマ／「神戸のニュータウン開発を振り返る」、発表／①「神戸市のニュータウン開発を振り返る」大海一雄（西神 N.T 開発研究会）、②「しあわせの村開発の当時とこれから」石東直子（石東・都市環境研究室）、③「藤原台等北神戸地域におけるニュータウン開発の反省点」後藤祐介（GU 計画研究所）、司会／朝平武文（朝平都市計画事務所）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●神戸・長田 たなばたまつり
「御菅地区わくわくたなばたまつり」
・日時：７月８日(土)10:00～12:00
・場所：御蔵すいせん公園
・内容：すいとんとぜんざい、かき氷、手品、他
「真野地区たなばたまつり」
・日時：７月９日(日)10:00～15:00
・場所：三ツ星ベルト神戸本社内
・内容：鮎山賊焼き、さぬきうどん、他
「長田神社夏越祭り」「夏越ゆかた祭」
・日時：７月 17 日(祝)～18 日(火)16:00～21:00
・場所：長田神社境内、長田神社前商店街
・内容：富くじ、占い横町、ゆかたでゲーム、他
「第13回 長田たなばたまつり」
・日時：７月 23 日(日)16:00～20:30
・場所：長田区役所東側区民広場
・内容：グルメコーナー、ステージ、他
「2006 長田潮汲み夏祭り」「盆踊り」
・日時：７月 30 日(日)13:00～21:00
・場所：新長田１番街商店街、大正筋商店街、本町筋商店街、西神戸センター街、新長田駅前広場
・内容：阿波踊りパレード、屋台、バザー、他
・主催：2006 神戸・長田たなばたまつり連絡協議会
・問合せ：長田区まちづくり推進課（TEL.078-579-2307）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年12月20日発行

月刊

きんもくせい

06年7月号

(50+36+ NO. 40)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■復興を科学する被災地「新潟」のこころみ

田村 圭子（新潟大学災害復興科学センター）

新潟はとにかく食べ物が旨い。米処としては全国的に有名だが、海のもの、山のものが豊富で、スーパーで買った何気ない食材に感動する。聞くところによれば新潟の食料自給率は6割を超えており、日々新鮮な品物が店頭にならぶ。

そんな「食材の宝庫」新潟が、近年「災害の百貨店」と呼ばれるようになった。2004年には15人の死者を出した新潟県豪雨水害にはじまり、中越地震、2005年から2006年にかけては豪雪と、自然災害の発生が頻発化した。また、2005年12月には新潟県内の下越地方を中心に約65万戸で停電が発生するなど、想定外の原因による危機も発生した。また新潟は拉致被害者が多いことから海の向こうの潜在的脅威についても敏感である。さまざまな原因による危機に対して、効果的な対応を考えるべき必要性を痛感する現実が新潟には在る。

2006年4月1日新潟大学が動いた。地元の危機意識の高まりをうけて、新組織「災害復興科学センター」を発足した。新センターは、旧・積雪災害研究センターを改組、豪雨水害の発生以降、活発に活動を続けてきた学内教員（専任13名、兼務53名）学外教員（客員2名）を4部門13分野に配置した。新潟県との連携を基軸とし、新潟県で起こった災害を事例にデータ収集、研究を進め、整理された知見を国内外へ発信・適用・支援することを目的としている。

センターが掲げる「災害からの復興」はまさに阪神・淡路大震災が残した大きな教訓である。被災と直後の対応を経て、それ以降の長きにわたる復興の過程を、被災地の人々は、ある時は自らの血を流しながら、ある時は力強くほほえみながら歩いてきた。その姿は多くの人々の共感を呼び、支援の和を広げた。災害・防災の専門家には、社会科学的な見地からの復興の科学的な解明に必要性が強く認識された。

私自身は、京都大学防災研究所に席をおき、研究者側の立場から、阪神・淡路大震災の復興の様子を側でみてきた。「復興過程の支援」が私の研究の使命として醸成された過程でもあった。縁あって、新潟大学災害復興科学センターに赴任した現在では、新潟の被災地に特徴としてみられる中山間地の復興を研究対象にしている。

復興は多くの問題をはらんでいる。災害の衝撃は社会のトレンドを加速する。災害以前に抱えていた地域の問題が顕在化するのが被災地の特徴である。地域の災害以前の宿題（課題）を片付けながら復興に取り組む力が要求される。

新潟は今も闘っている。みなさん、特に阪神・淡路大震災にかかわったみなさんに新潟への暖かいまなざしを期待している。

■鎖瀾閣復元が現実のものとなって　その２

たつみ 都志（武庫川女子大学文学部教授）

■復元物語その２

その日から病院のベッドに身を横たえなければならなかったもどかしさ。視界がどんどん暗くなっていくことより、運動のために何もできない暗さの方が辛かった。「谷崎ひまわりファンド」の構想は出来上がりつつある。なのに何も行動できない。病室にパソコンを持ち込んで、構想の仕上げを急いだ。

病室にマネージャーの湯浅あかね、弟子の栗田朋子、舎弟の小池義忠が頻繁に来てくれ、私の留守も構想を進めてくれた。

「呼びかけ人」になってもらうために、入院先から外出許可を取り、もと兵庫県知事の貝原俊民氏、もと神戸市長の笹山幸俊氏に会いにいった。能美晋氏は藤本義一氏を口説いてくれた。

１ヶ月ののち退院して、ようやく「谷崎ひまわりファンド」は動き始めた。

ＮＰＯ谷崎文学友の会と会員のチカラ

先に書いたように、友の会の会費が年間 100 万円ずつたまっていっても、5000 万には 50 年かかってしまう。しかも震災 10 年を経て、震災の記憶は風化してしまう、そういう焦りから「谷崎ひまわりファンド」を始めたのだ。

サポーター1 万、リーダー10 万、マスター50 万、スポンサー50 万の形で、「鎖瀾閣の建設が始まったら入金します」という約定書である。会員の多くの方々がご協力くださり、1 年足らずで 600 万の約定書が寄せられた。

会員のありがたみをひしひしと感じた。しかし、マスター候補を見込んで、関西のカルチャーの講師に働きかけたのは、ほとんど不毛に終わった。

当初の目論見がうまくいかなかった私は次なる手を真剣に考え始めた。2005 年も秋口にさしかかっていた。

あることで本山北町の家の前を通りかかった。ここは谷崎潤一郎が、関東大震災以来、阪神間に住むことを決意して真剣に家探しをして居住することにした家。『痴人の愛』を書いた家である。

1985 年『ここですやろ谷崎はん』という初めての著作を出したときにから知っていた懐かしい家。鎖瀾閣を初め、他の谷崎の家はことごとく阪神大震災で全壊したのに、ここだけは無傷で残っていた。無人のまま。10 年たった今、荒廃したこの家を見たとたん、何か名状しがたいインスピレーションを感じた。

地元の不動産業・白塚氏のところに行き法務局で家主を捜してもらい、手紙を書いた。内部調査させてほしい、と。運命はこの瞬間に動いた。

「ナオミの家」のチカラ

前号に書いたようにこの家は家主の許可を得た 2005 年 12 月 23 日に調査に入った。

古建築と和風建築の専門家である、澤良雄氏と、兵庫県の文化財課の村上裕道氏とともに。

そして中の保存状態がかなりよいことが判明した。だが家主は遺産相続の税金問題もあり、この家を取り壊し、空き地を利用して新しく借屋を建てる予定だという。ではせめて取り壊すまでの間、ＮＰＯ法人で借りれないものか、と家主に掛け合った。その後証書を交わして、夏までの間、家賃なしで調査のために借りることになったのだ。そして仔細に調査した結果、この家は単に谷崎が居住していたというだけではなく、ここで書いた『痴人の愛』の住居とその環境に大きなイメージを与えたことがわかった。

そこで数ヶ月後の解体される前に、研究者を初め、広く一般の人に知ってもらいたい、そしてまた地元岡本の人に谷崎と岡本の関係をもっと知ってもらいたい、と思い公開することにした。

近所の人ですら知らなかった谷崎の足跡。４月１日と２日の公開日には、近所の人はもとより、遠く東京、横浜、埼玉などからも新幹線や飛行機を使って来た人の数は２日で 1400 人を超えた。２日は豪雨だったにもかかわらず、である。

公開のニュースが流れ、いつかは解体されるのだというニュースが流れたせいで、3 人の篤志家が現れた。自分が費用を全額出すから、解体移築させてほしい、というのだ。

解体移築には 1000 万円はかかると言われていたので、驚いた。奈良県榛原町の建築業者、大阪市で自転車店を経営している自称「究極の骨董好き」、そして伊丹で木材、建築、不動産を経営している則岡宏牟氏だった。

この 3 人の中から、則岡氏にしよう、と思ったのは、氏の木材へのこだわりと古建築保存にかける情熱のゆえだった。

だが氏は、移築先は伊丹か和歌山県の母校に、と言う。「谷崎は阪神間が好きだったのです。阪神間でないと意味がない」という私の意見に対し、「わかりました。では阪神間で土地を探しましょう」と言った。

話し合って喫茶店を出ると、急に雷鳴と豪雨が降ってきた。その雷雨にはじかれたように私は、神戸市役所に向かった。「鎖瀾閣のために用意された敷地にもう一軒建てたい。それは公園規定に反しないか？」と聞いた。文化施設なら大丈夫との見解を聞き、伊丹に取って返して再び則岡氏と面会した。

「土地はこちらで用意します。土地の確保の資金が浮いた分で、鎖瀾閣を建てるお手伝いをしてほしい」「鎖瀾閣？」いぶかしがる則岡氏の会社のパソコンの画面に、いつも持ち歩いている鎖瀾閣の多くの写真をデータ入力した。

則岡氏の目がきらきら輝きはじめた。「すごい！」氏の美意識と古建築への情熱が燃え盛った。「やりましょう！いややりたい」そう氏は言った。

真っ暗なトンネルの出口が見えた、とその瞬間思った。（続く）

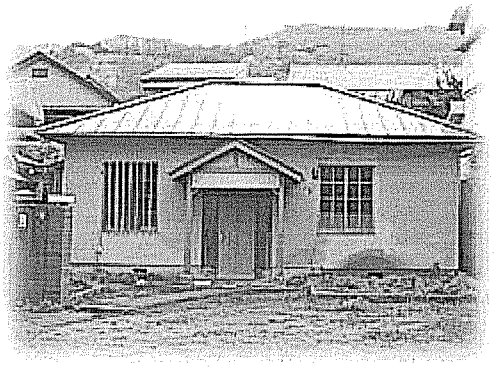


写真　ナオミの家（HP「あなたの街の材木屋さん」第26回・有限会社則岡木材／兵庫県伊丹市より）

注：この原稿は「谷崎文学友の会会報№９」と重複しています。

■Dr.フランキーの街角たんけん　第22回　もう一つの新開地（その４）

オフィスビルの寿命

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

ところで、明治期に建てられたオフィスビルはどの位の期間で建て替えられているのか。

以前、栄町通の項で紹介した横浜正金銀行神戸支店は、明治27(1894)年に山口半六の設計で初代が完成した後、大正８(1919)年に長野宇平治の設計で現地改築され、昭和 10(1935)年には、桜井小太郎の最終作品となる３代目が京町筋に完成、移転している。平均すると 20 年そこそこで改築を繰り返したことになる。３代目は比較的長く使われた方で、昭和 55（1980）年、後身の東京銀行神戸支店が京町筋北の村野森建築事務所設計の高層ビル「東銀綜合ビル」へ移転した後、神戸市立博物館に改修転用されているのは周知のとおりである。金融機関の場合は、都市の重心移動に反応して動いているところが多分にある。

とまれ、戦災とそれに続く高度成長期以前、20 世紀初頭においても、産業界の大きな変動と膨張が、都市建築の更新を結果的に加速させ、ひいては都市景観を短期間のうちに大きく変えていく要因にもなっていた。

因みに、大阪瓦斯は明治 38（1905）年完成の赤レンガビルで 23 年を過ごし、御堂筋拡幅で安井武雄のガスビルを新築した（昭和８（1933）年）。

京都電燈は設楽建築工務所設計の赤レンガ２階建の時代が 25 年近く続いた後、昭和 11(1936)年、武田五一設計のモダンビルに建て替わった。

神戸市電気局は、こちらも設楽事務所設計の煉瓦造２階建の本庁舎南側に鉄筋コンクリート造４階建を増築して業務量の増加をしのいだ。

そして神戸瓦斯は・・・、昭和 11(1936)年７月、本社屋改築に踏み切った。

設計は渡邊節の建築事務所が引き受けた。渡邊といえば大阪商船神戸支店ビルや旧乾邸など西洋建築様式を駆使したスタイリッシュで華麗な作品がまず思い浮かぶ。が、瓦斯を使った新しい生活を宣伝するショウルームとしての役割も担うことが期待された新社屋のデザインは、「中世復興（ルネッサンス）式」では似つかわしくない。

建築デザインはモダニズムスタルの時代へ移ろうとしていた。

（この項つづく）

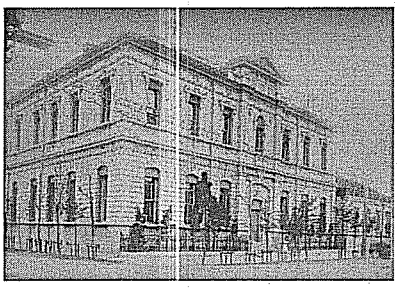


写真１　初代横浜正金銀行神戸支店
（1894 年, 山口半六設計、現存せず）

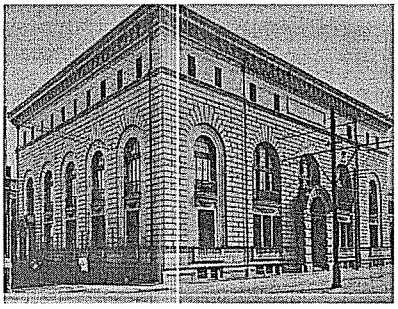


写真２　二代横浜正金銀行神戸支店
（1919 年, 長野宇平治設計、現存せず）

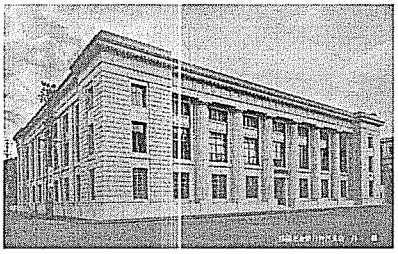


写真３　三代横浜正金銀行神戸支店
（1935 年, 桜井小太郎設計、現神戸市立博物館）

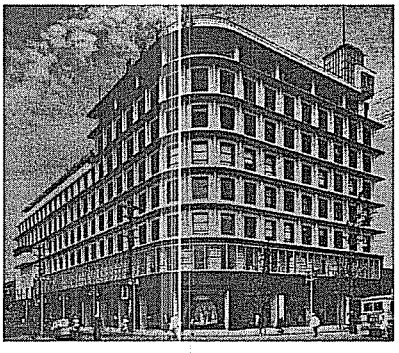


写真４　大阪ガスビル
（1933 年、安井武雄設計）

水の情景四●ワタシの旅

睡蓮

中川 紺

（これまでのあらすじ）
「水を探さなければ」との思いに突き動かされ、まちの中の様々な水を辿っている主人公ワタシ。しかし行く先々で出会う不思議な水たちは、探し求めるものではなかった。さらに自分が周囲の人間とは違うものであることを感じとっていく。

灰色の雲が立ち込めていた。体に湿った空気をまといながら、ワタシはある街を歩いていた。雨の気配とは少し違うものを感じて立ち止まると、鉢の傍らに座る少女と目があった。焼き物であるらしい。大人が両手で抱えられる程度の大きさで、土ではなく水が張られ、丸い葉と一輪の花が浮かんでいた。

「こんにちは。きれいな花だね」

声をかけたのは、水の気配のせいだけではない。ワタシと同じように肩甲骨のあたりで切り揃えた黒い髪に、不思議な親近感を持ったからだ。髪形以外にも似ている所があるような気がした。

●●

「スイレン。ヒツジグサとも言うんだよ」

小さな瞳でまっすぐにこちらを見ると、手に抱えていた図鑑を開いて差し出した。

……ヒツジグサ（未草／別名スイレン）未の刻（午後二時頃）に花を咲かせるのでこう呼ばれる。

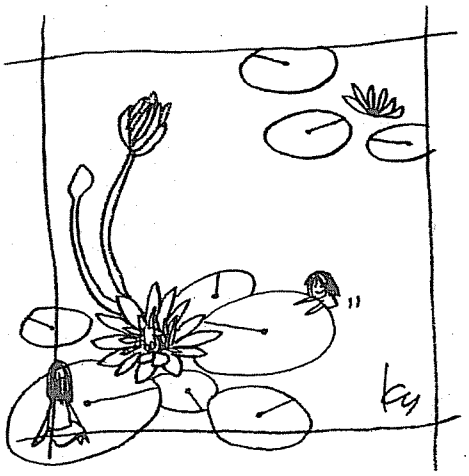
初めて知る内容だった。そもそもスイレンとハスの区別もあまり出来ないというのに。

「今日で七日目なの」

少女はじっと花を見つめている。小学校の高学年くらいだろうか。

「七日目って、なにが？」

「スイレンはね、普通は三日しか咲かないんだよ。ほら、ここに書いてあるでしょ。でもう七日も続けて花が咲いてるの。ちょっとヘンなんだ、これ。色も変わるんだよ」



かすかな機械音がして、花が写った液晶画面を見せてくれる。毎日デジタルカメラで撮影しているらしい。

たしかに、花は色を変化させていた。薄い桃色が次第にピンク味を帯び、四日目からは水色が混じったような不思議な色になっていた。そして、今、目の前に咲くスイレンは、鮮やかな青色。同一の花とは思えない。

「夏休みの観察日記にしてるの。明日は何色になるのか、楽しみ」

「明日も見に来ていい？」

ワタシも変化を見届けたい。

いいよ、と言った少女の髪が、湿った風でゆっくりと揺れていた。

●●

「終わっちゃったの」

次の日、もう花は咲かなかったのだ。水に浮かぶのは大小の葉ばかり。少女は、これじゃあ観察日記にできないかなあ、と笑っている。歯がやけに白く見えて、彼女が日焼けしていることに改めて気がついた。そういえばワタシ、全然日に焼けないな、と白いままの自分の手をじっと見た。

おねえさんって近所の人？　と聞かれ、首を横に振って少女に告げた。

「この辺に住んでるわけじゃないの。ずっと旅をしてる。探している物があるから」

空を見上げた。昨日とは打って変わって、真っ青な空が広がり、巨大な入道雲が立ち上がっていた。

梅雨明けを告げるスイレン。

あれはそういう花だったような、そんな気がした。

（第四話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第８２回・水谷ゼミナール報告

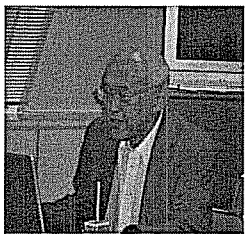
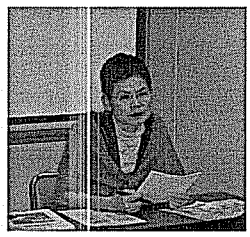
日時：６月 23 日（金）18:30～21:00
会場：こうべまちづくり会館
テーマ：「神戸のニュータウン開発を振り返って」
発表：①「神戸市のニュータウン開発を振り返る」大海一雄（西神 N.T 開発研究会）、②「しあわせの村開発の当時とこれから」石東直子（石東・都市環境研究室）、③「藤原台等北神戸地域におけるニュータウン開発の反省点」後藤祐介（GU 計画研究所）、代表コメント／三谷幸司（三谷都市建築設計室）、司会／朝平武文（朝平都市計画事務所）

６０年代初頭から始まる神戸でのニュータウン開発は、「山、海へゆく」と言われる神戸の都市経営の代表的なものでした。現在では高齢化の進展や空家等の問題が様々に言われているなかで、今回は長らくニュータウン開発に携わってこれらたプランナーや地域で活動されている方々からお話を聞きました。

大海さんは、神戸市役所におられるときから西神ニュータウン開発に関わられ、退職後「西神 N.T 開発研究会」を立ち上げ、地域住民とともにニュータウンの将来像を模索するなどの活動を行っています。神戸市におけるニュータウン開発をマスタープランからおこしながら体系的に述べられるとともに、西神ニュータウンの特徴として職住近接型で造られていることなど、興味深いお話しが聞けました。

石東さんからは、ご自身のプランナーとしての“原点”である「総合福祉ゾーン『しあわせの村』」について、当時の計画に対する思い入れや、約２０年経過した現在においても常に更新ながらまちが築かれており年間 200 万人もの入村者があることなどのお話しがありました。

後藤さんからは、大学時代からご自身が携わったニュータウン開発を紹介するとともに、とくに現在においても関わっている北神ニュータウンについては、西神ニュータウンに対して北神ニュータウンはゆっくりと造り上げるまちであることや、スライドを交えた現状報告など、楽しく語っていただきました。（中井都市研究室　中井　豊）


発表者の皆さん。上左から、大海さん、石東さん、後藤さん

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第５１回連絡会
・日時：８月４日(金)18:30～20:50
・場所：神戸市勤労会館 404 号室
・内容：テーマ「地域とつながる元気 NPO」、パネラー：①「地域商業と学生 NPO」／伊達康一（甲南地域経営研究所）、②「修学旅行が地域に元気を！」／田中聡（神戸まちづくり研究所）、コーディネータ：野崎隆一（遊空間工房）
・会費：５００円
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●たんば田舎暮らしフォーラム
＜第１回＞
・日時：８月５日(土)13:00～16:40
・場所：エル・大阪
＜第２回＞
・日時：９月 16 日(土)13:00～16:40
・場所：兵庫県民会館
＜第３回＞
・日時：2007 年１月 14 日(日)13:00～16:40
・場所：ソリオホール
・内容：<基調講演>小森星児（神戸商科大学名誉教授）、<シンポジウム>ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀ／長澤彰彦、ﾊﾟﾈﾘｽﾄ／丹波への移住者たち、<田舎暮らし体験者との交流会>
・問合せ：（財）兵庫丹波の森協会たんば・田舎暮らしフォーラム実行委員会（TEL.FAX.0795-73-0933）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年12月20日発行

月刊 きんもくせい

06年8月号
(50+36+ NO.41)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■ジョグジャカルタからの報告

木村 玲欧（名古屋大学大学院環境学研究科/災害対策室）

2006年5月27日、インドネシアをマグニチュード6.3の内陸直下型地震が襲いました。ジャワ島の古都ジョグジャカルタの南方にあるバントゥル県付近で発生した地震で、約5700人が亡くなりました。

名古屋大学では、6月3日～11日にかけて自然科学研究者を中心とする第1次調査団が、7月4日～10日にかけて社会科学研究者を中心とする第2次調査団が現地で調査をしました。私は防災心理学の観点から被災者へのインタビューを行い、被災者の生活再建の現状と課題について見てきました。以下に簡単に述べていきます。

■震度6弱程度でも全壊率80%以上

第1次調査団によって、震度はせいぜい6弱であることがわかりました。現地に入ると、電柱が倒れたり、道路が壊れていることはないのに、集落の家はほとんどが全壊しました。被災者の話を総合すると、レンガをつみあげただけの壁が崩れてきて下敷きになったとのこと。ちなみに屋根は軽い（スカスカの）瓦をふいているだけなので、落ちてきても大きな問題はなかったそうです。ジャワ島は、過去100年のあいだ大きな地震はほとんどなく、そのため住民は誰も「地震」のことなど考えもしなかったそうです。



写真1　テント暮らしをしながらガレキを片づける

■災害ユートピアの世界のなかで共助による片づけが続く

震災後数日～2ヶ月のあいだは、一般的に「災害ユートピア」の状態といわれます。災害によって一変した新しい環境のなかで毎日を精一杯生きるために、みんなでルールを作って、避難所などで炊き出しをしたり、支援物資を分配しながら生活をする。いわゆる阪神・淡路大震災での「がんばろう神戸」の世界です。被災地はまさにそういう状態でした。

国内外のＮＧＯから支給されたテントで生活し、「ゴトン・ロヨン」と呼ばれるジャワ農村の相互扶助（共助）によって、住民の手で家屋の解体や後かたづけを行っていました。被災地は農村部のため、水や食糧には特に困っておらず、ある種の穏やかな雰囲気のなかで着々と作業が続けられている感じでした。またボランティアは、国内のイスラム教系が多くはたらいていました。

■国際的な支援が望めず、今後の自立再建には大きな壁

災害当初こそ大きな注目を集めましたが、日本でも10日を過ぎると新聞記事に載らなくなりました。国際社会からの注目そして支援の低下が懸念されます。「片づけまではできるけど、家を建て直すお金がないので、これから自分たちがどうなるかわからない」というのが住民の正直な感想です。国連もインドネシア政府も「自立再建の意欲を削ぐ」という理由で、仮設住宅を建設しないことを決定しています。とりあえず死者1人に対して30万ルピア（約4000円）が支給されていますが、もちろん現地の貨幣価値でも雀の涙です。また多くの住民が「副大統領が支援を約束した。だから何とかなると思う」と述べますが、その口約束だけを生活再建の支えにするのは、あまりにも弱くそして危険です。今後、災害の影響はじわじわとボディーブローのように被災者たちを襲い、長く困難な生活再建になる可能性があることを感じました。今後も、定期的に被災者の動きを追っていきたいと思います。

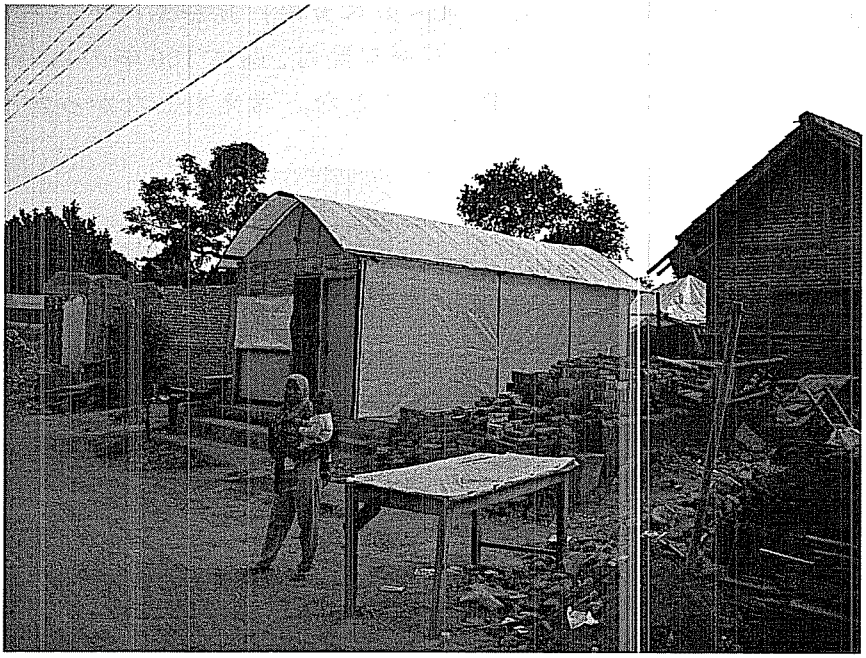


写真２　仮のすまいを建てたところもある

■『コンパクトシティ』を考える 20

阪神・淡路大震災とコンパクトシティ（前編）

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1．神戸の地形の特徴と天然の良港の誕生の歴史

神戸の地形の特徴は、大阪湾という海のすぐ近くに最高峰 931m の六甲山系が連なり、海と山に挟まれた平坦部が 3～5km しかない点である。

この特異な地形は、1960 年代の地球科学の革命である「プレート・テクトニクス」の理論で説明できるようになった。今から 170 万年前からと言われる地殻変動（第４紀の地質時代）の過程で日本列島は誕生した。日本列島は、地球を構成する 20 枚程度のプレートのうちの北米プレートとアジアプレートに、その下に潜り込もうとする東からの太平洋プレートと、南からのフィリピン海プレートによって、強い圧力を受けている。東からの力で、日本列島は糸魚川－静岡構造線で折れ曲がり、近畿地方は東からの力と、フィリピン海プレートによる南からの力を同時に受ける。そのため、敦賀湾－伊勢湾を結ぶ間の（逆）断層で隆起した山地は南北方向に、紀伊半島－四国を結ぶ中央構造線は東西方向に、そして淡路島、六甲山系、琵琶湖西の比良山系は斜め方向に連なる「近畿トライアングル」と呼ばれる特異な地形を形成している。三角形の内部の（正）断層で沈降してできたのが、琵琶湖であり、大阪湾である。そのため、プレート内部の活断層が千年に 1・2 度動き、大地震が発生する宿命を背負わされている。

六甲山系から流れ出す河川が運び出した土砂が間氷期の海面が高い時代に大阪湾に堆積してできたのが南北方向に狭い神戸の平坦部である。

六甲山系は東から西に向かって低くなっていくが、現在の兵庫区を流れる新湊川の上流の天王谷川と石井川は、六甲山系の北側になる鈴蘭台の丘陵地を流域に持ち、表六甲河川流域で最大の流域面積(30ｋ㎡)で、生田川の 2.1 倍、住吉川の 2.7 倍である。旧湊川は流れを変えながら他の河川より多くの土砂を運び出し堆積した。

さらに、明石海峡では大阪湾と播磨灘の海面潮位差により最大流速 9 ノット（時速 16km）の潮流が生じ、東向きの早い潮流が垂水、須磨、長田を流れる河川が運び出した砂を運び、現在の和田岬の周辺に砂嘴を形成した。

旧湊川と明石海峡の潮流で運ばれた土砂でできたのが、大阪湾に三角形の形で張り出した特異な地形である。この地形のおかげで、南西の風を防ぐことができ、古代・奈良時代から「大輪田の泊」は天然の港として、瀬戸内海の海運の中心となった。平清盛は天然の良港に眼をつけて、福原に都を移し、日宋貿易を独占しようと、港の大修築（経ヶ島埋立）に乗り出したが、平氏の滅亡によって野望は潰えた。しかし鎌倉時代に、東大寺の僧の重源によって修築は完了し、その後の中世から江戸時代末期まで「兵庫津」と呼ばれた港湾都市としての繁栄の時代を築いた。

幕末に幕府は日米通商条約等で５港の開港を約束した。条約調印の勅許を朝廷に求めたが、兵庫開港を巡り、京や大坂に近い理由で最後まで許されず、開港を要求する列強国の圧力に徳川幕府は統治能力を失い、1868 年の兵庫開港とともに王政復古となり、265 年間の幕藩体制が終焉した。

2．兵庫商人が担った神戸の近代化と工業化

兵庫開港は、実質的には居留地の建設地に人口希薄な神戸村が選ばれ神戸開港になった。政府は近代化及び産業の育成に力を注ぎ、欧米先進諸国に軍事的経済的に追いつくため、神戸は官による新しい港湾施設の建設と居留地の整備により国際的貿易港としての発展を遂げる。その影には、港湾機能が神戸に移行する中、兵庫津で財を築いた兵庫商人の手で近代化の基礎が築かれた。

兵庫区長であった神田兵右衛門は、県や民間の出資を得て「新川社」を設立し、1876 年には新川運河約 1km を完成させた。神田の後を引き継ぐ形で池本文太郎と八尾善四郎の二人が奔走し、1893 年に「兵庫運河株式会社」を設立し、1899 年に本線 1800m、支線 764m にわたる日本一の長さの兵庫運河を完成した。

1896 年に兵庫の小曽根喜一郎、大阪の藤田傳三郎、東京の大倉喜八郎ら 27 人の有力者が「湊川改修株式会社」を設立した。旧湊川の流れを長田の苅藻川まで 4.4km の新川を建設し、新湊川として長田の海に流れを変え、神戸港への土砂の堆積を避けることと、神戸駅周辺を水害から防ごうとした。途中の会下山の下に 600m のトンネルを掘る大工事もあったが、会社は工事費用を、旧河川と堤防の土地を入手し、掘削した土で川崎浜や河床を埋め立てて（新開地）売却することで回収した。1901 年に付け替え工事が完成した。

官営鉄道として東海道線が東京から神戸まで建設（全線開通は 1889 年）されたが、神戸から西は海上輸送しかなかった。このため、1886 年に神戸の有力者で神戸ー姫路間に民間鉄道として山陽鉄道を作る計画をした。政府は西に延ばすのは将来の仕事として計画に難色を示した。紆余曲折後、政府は事業区間を下関まで延長させ、将来は国が買収する条件で、民間鉄道事業として免許を与えた。1887 年に会社設立し、同年には姫路まで完成し、1894 年には広島、1901 年に下関まで開通し、山陽鉄道は西日本の大動脈になった。

明治以降、神戸は単なる港湾都市の機能だけではなく、民間の力に支えられた基盤整備を基礎に、20 世紀には日本の工業化の中心の重工業都市としても大きく変貌し発展した。

3．神戸の膨張的発展を阻んだ六甲山系

日本全体の近代化で港湾工業都市として確固たる地位を築いた神戸市は、貿易商社、保険金融業、鉄鋼業、重機械工業、食品工業、ゴム製造業等の企業本社が立地し、戦前には日本第 3 位の都市を築くまで発展した。東西に細長い市街地は、臨海部に工場が、山麓部には住宅が立地し、中間部は住商工が混在する三層構造を形成し、通常の生活は南北を歩いて移動ができた。東西の移動には、阪急電鉄、国鉄、阪神電鉄、山陽電鉄がほぼ 1km 以内を並行して運行し、その間を市電網が補完していた。まさにコンパクトな市街地であった。

第２次大戦で、市街地の大半が空襲を受け、産業と市民生活は壊滅的に破壊された。しかし、戦災からの復興をほぼ 10 年で達成した日本経済は、1960 年代以降に高度経済成長期に突入し、都市にはさらなる産業と人口が集中することとなり、市街地の拡大は郊外開発に求める時代を迎えた。

しかし、神戸市は市民に四季に織りなす景観や自然の恵みを与えてきた六甲山系と田園地域に阻まれることとなった。このため、人口増加の圧力には、背山の神戸電鉄沿線の開発や、表六甲に残された山麓部の土砂を取り、臨海部を埋め立てる方法で対処した。70 年代のマイホーム・郊外開発ブームの圧力には、須磨区や垂水区の六甲山系の北側の丘陵地の土砂を削り取り、新たに住宅団地を造るだけではなく、工業団地、流通団地、学園都市を併設する開発を行った。そして、削り取られた土砂で、神戸港の沖合を埋立、港湾機能の拡充を図るだけではなく、住宅等の都市機能も併せた人工島を産み出した。新たにできあがった新開発地や人工島と市街地は、地下鉄や新交通で結ばれ、発生集中する交通には、可能な限り自動車交通を抑制するネットワークを形成した。

六甲山系に成長を阻まれたことで、逆に計画的に開発をコントロールでき、市域を市街地、緑地、農地で概ね３等分し、都市の持続的発展のため「成長管理」できる都市構造ができたのであった。

4．工業社会の終焉とインナーシティ現象

1970 年代のドル・ショックとオイル・ショックによって、それまで重工業を支えてきた安価な石油の確保ができなくなったことと、工業生産は資源や労働コストの安い工業化の初期段階の国に移行するグローバル化の加速が避けられなくなった。先進工業国の工業社会の終焉であった。

80 年代には、神戸の工業化を支えてきた重厚長大・装置型の工場のコストの安い地方や海外への転出や廃業が続き、市内の産業構造の転換が課題となった。さらに、工場の転出や廃業は、雇用の減少、周辺の商業・サービスの衰退、更新されない老朽化した住宅に高齢者層が残される「インナーシティ現象」が市内各地で顕在化し始め、インナーシティ対策も都市の政策課題になった。　（続く）

水の情景五●ワタシの旅

雨どい

中川　紺

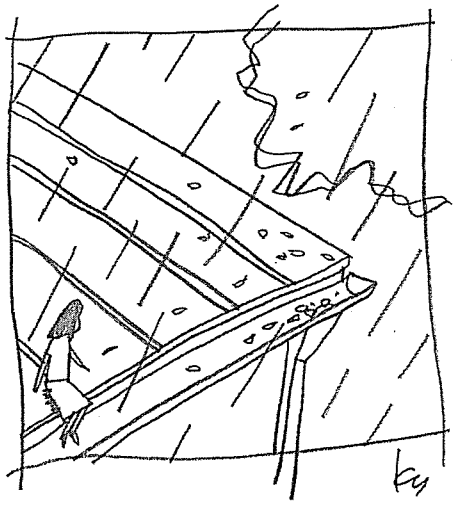
青かった空が突然薄暗い色に変化したかと思うと、間髪を入れずに大粒の雨が次々と地面にしみを作りはじめた。すぐそばの古いビルのらせん階段が目についたので迷わずにそこに駆け込んだ。たぶんすぐに止むだろうな。そう思いながらも、少し濡れた肩や髪を拭くものがないか、持っていた白い布製の手提げかばんを覗き込んだ。そういえばいつからこのかばんを持ち歩いていたのだろう。記憶はもやの中で、思い出せなかった。

●●

かばんの中は空っぽだった。そう思ったら、底に何か丸いものが転がっていた。取り出して見ると、それは緑色のカナブンで（知っているはずも無かったのに、なぜかこの名前がすぐに頭に浮かんできたのだ）、すでに生きてはいなかった。それでも硬い羽根の表面は艶を失っていない。

ちょうど隣接した木造アパートの敷地に大きな木が立っていた。二階の屋根のあたりに枝を広げて、その枝先がこちらのビルのらせん階段まで届いているのが見えた。ワタシは枝に届くところまで階段をあがると、そっと緑の虫を葉に乗せた。この高さからはアパートの屋根の上が見渡せた。木から落ちたらしいセミの死骸が無数にあり、それらは強い雨水に流され、落ち葉とともに雨どいにすると吸い込まれていた。

詰まってしまいそうな気がしたが、そんな気配は見せずに雨どいは水とセミと葉を呑み込んでいった。



雨がやんでから、ふと気になって雨どいの出口の部分を探した。外の溝につながったところには、いくらかの落ち葉が漂っていたが、あの大量のセミたちの姿は見えなかった。

「あんた、この街の人じゃないね」

しわがれた声に振り返ると、初老の男性が杖をついて立っていた。このアパートの管理人らしかった。

「その雨どいの先が気になるなら、明け方、この先の川に来るとええ」

言い残して一階の扉に消えていった。

●●

川面に朝日が反射している。川自体はそれほど大きくはないが、川底の石がとても色鮮やかだ。そして、朝日を受けて、川の流れの両岸に虹色の管が何本も現れた。初老の男が杖の先で差して言った。

「あれが、昨日の雨どいのもう一つの出口。この街で死んだ虫たちの多くがいろいろな水路を伝ってここまでやってくる」

管の先からは、大小様々な石が川に送り込まれている。地味なものもあるが、鮮やかな黄色い縞や、緑の斑点を持つものもあった。この街の虫たちは、自分自身の色を残した石に生まれ変わって川に帰るのだという。

カチン、と音をさせて緑色の物体が管から落ちた。見れば角が取れたガラス片だった。それは「違う土地のものが紛れ込んでしまった」時に起こる現象だと老人は言った。

あんたが持って行くといい、と手渡される。その鮮やかな緑色を眺めて、きっとあのカナブンだろうとワタシは思い、かばんの中にそっと入れて、立ち上がった。

新しい石たちはもうすっかりと馴染み、流れを受けて静かに輝いていた。（第五話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第５１回連絡会報告

NPO 法ができて今年は８年目を迎えます。兵庫県下でも法人認証が１０００を超えました。今回は、そのような状況をふまえて「地域とつながる元気 NPO」をテーマにしました。当初、まちづくりなどの場面で地域社会との連携を危ぶむ声も多かった中、まちづくりをテーマにした NPO が地域との連携のもとで活動している事例を集めました。

1．「地域商業と学生NPO」
　／甲南地域経営研究所　代表　伊達康一
2．「修学旅行が地域に元気を！」
　／神戸まちづくり研究所　事務局　田中　聡
3．「尼崎南部の歴史を生かしたまちづくり」
　／尼崎南部地域研究会　若狭健作

伊達さんからは、学生時代にボランティアとして関わりを持った甲南本通商店街との出会いから研究会の立ち上げまでの経過を語っていただきました。特に商店会のイベントへの参画を通じて、新しい人間関係を築けたことや、イベント企画の専門集団として、各地のまちづくりと連携を拡げていることが報告されました。田中さんからは、５年前より地域団体との連携で始めた修学旅行受け入れ事業の現況について報告をいただきました。対象地区は、長田区に始まり、中央区、灘区とエリアを拡大しながら今日に至っていること。来神する学校もリピーターが増え、受け入れ地域も楽しみにしてもらっている状態。なにより子供たちを受け入れることで地域の人々が元気をもらっていることなどが報告されました。若狭さんからは、「運河ツアー」「あまいも」「メイドイン尼崎カタログ」など、工場と煤煙の町、公害の町と言われている尼崎南部地域に新しい価値を見つけようとする多彩な活動の紹介がありました。

３人とも２０代の若者で、若手ネットの次世代が着実に育ってきていることを実感できる楽しい会になりました。

（遊空間工房　野崎隆一）

■ 情報コーナー

●第８３回・水谷ゼミナール

・日時：８月25日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室
・会費：1,000 円
・内容：テーマ「ランドスケープの仕事を振り返ってこれからを考える」、発表①「量の時代（1975～1985 頃）」／白井治（まち空間研究所）、松下慶浩（環境緑地設計研究所）、②「質の時代（1985～1995 頃）」／門上保雄（門上環境計画事務所）、山崎満（UR 大阪事務所）、③「住民参加の時代（1995～2005 頃）」／山地孝之（景観設計研究所）、辻信一（環境緑地設計研究所）、④「ランドスケープのこれから」（全員）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●１０月１日阪神・阪急の合併記念のシンポジウム「緊急提言／阪神・阪急の合併は何を生み出すのか」

・日時：10 月１日(日)14:00～16:00
・場所：芦屋市立美術館講義室（芦屋市伊勢町 12-25、TEL.0797-38-5432）
・内容：司会進行／土井勉（神戸国際大学教授）、パネリスト／角野幸博（関西学院大学教授）「阪神間文化の再構築のために」、北尻川不可止（歌人）「阪神間の歴史的景観の継承と発展を考える－甲子園筋のポプラ並木伐採問題をきっかけに」、河内厚郎（文化プロデューサー）「阪急阪神統合と沿線文化」、三宅正弘（武庫川女子大学助教授）「阪神間の域なき都市」
・資料代：500 円
・問合せ：阪神間倶楽部（まちづくり㈱コー・プラン、天川佳美 tel.078-842-2311）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email: ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年12月20日発行

月刊

きんもくせい

06年9月号

(50+36+ NO.42)

発行：阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク

■災害の月、９月に思う

小林 郁雄（非認証 NPO きんもくせい代表）

９月は災害の月だ。立春から「夏も近づく八十八夜」が茶摘みの初夏で、二百十日という台風の危険日は９月１日あたりである。

1999年集集大地震は９２１震災と台湾では呼ばれ、９月21日におこった。2001年９月11日はNine Eleven と呼ばれるアメリカ悔恨の日である。

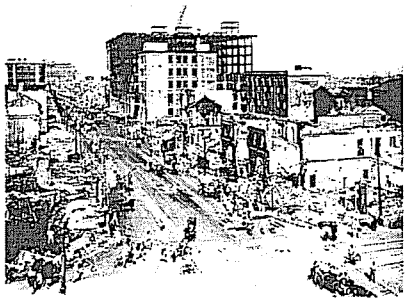
もちろん我が国でも1923年の関東大震災に因んで制定された防災の日は９月１日である。

中学時代の 1959 年名古屋で伊勢湾台風を経験した。あれは９月 26 日の夜と記憶している。夜半より風が強烈に吹き、木造２階建ての事務所兼住居の玄関のガラスが割れ、父と兄と３人で中から畳で押さえていたことを覚えている。瞬間最大風速 45m（だったかな？）を直に体験した。真夜中、突如風がおさまり、表に出てみると、ぽっかりと星が見えた。束の間、再び猛烈な風雨が始まった。あれが、台風の眼だった！と気づいた。死者行方不明者 5098 人、阪神・淡路大震災まで戦後自然災害で最多の犠牲者であった。


死傷、不明すでに五千余人
とくにひどい愛知、三重

中日新聞 1959 年 9 月 27 日夕刊

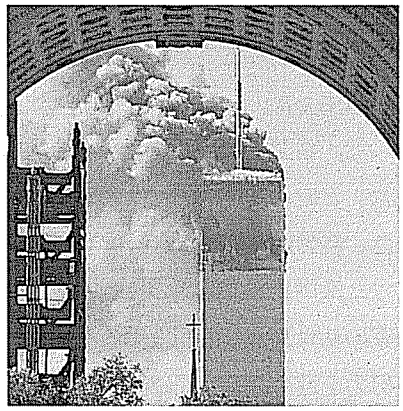
災害の月、９月に思うことは、復興とは何かということである。奇しくも36年後に神戸で阪神・淡路大震災に遭遇し、都市計画プランナーとしての50歳からの後半生は震災復興のみの人生となった。復興市民まちづくりへの模索はまだ続いている。



■関東大震災（銀座４丁目より日本橋方面）国立科学博物館地震資料室



■台湾 921 地震（霧峰鄉光復國中・921 地震教育園区）／小林郁雄撮影



■USA911 テロ（一本だけ残った WTC 北棟崩壊１分前）／青山公三

■Dr.フランキーの街角たんけん　第23回　もう一つの新開地（その５）

神戸のモダニズム建築

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

神戸瓦斯の新本社屋の外観は、どのような姿になるのか。

建築デザインの潮流はモダニズムへ向かっていた。大阪の町と比較して、保守的といわれる神戸の地にも、1930 年代後半にモダニズム建築が姿を現すようになる。

公共建築では、既に神戸市営繕課により、学校建築で機能主義デザインの作品が実現していた。新開地に近い松本通１丁目でも市立第一神戸高等女学校（現湊川中学校）、そのすぐ南側に同川池尋常小学校（統合を経て現会下山小学校）が端正なファサードを見せていた。

商業建築では、とりわけ交通機関と娯楽施設でランドマークとなる建物が出現をしている。その代表格は、東では阪急三ノ宮駅と阪神元町ビル、それでは西は何か。とどめをさすのは、やはり「エエトコ」聚楽館だろう。

娯楽の殿堂「聚楽館」にも紆余曲折があった。大正２（1913）年完成の初代聚楽館は、新開地という娯楽のメッカにあって、東京・帝国劇場の向うを張って「芸術の殿堂」として誕生した。しかし、庶民の「歓楽の巷」新開地に、翻訳劇などの「芸術」という花が根付くはずもなかった。経営は赤字続き。経営を引き受けた武岡豊太は館内の貴賓室を芸術家のサロンとして開放するなど経営努力を進め、その間には内外装の一部を改造するなど、施設のリニューアルも図られた（二代目聚楽館）。しかし事態は一向に改善をしなかった。

昭和２(1927)年、聚楽館は松竹に買収され、映画館として再出発した。が、もともと演劇専用ホールとして設計された聚楽館の施設は、陳腐化していた。同８（1933）年、松竹は聚楽館の現地改築に着手。松井須磨子らが喝采を浴びた「芸術の殿堂」は、完成から約 20 年で姿を消し、翌９（1934）年 12 月、跡地に大阪木村組の設計・施工で、鉄骨鉄筋コンクリート造５階建の映画館と屋内スケートリンクを備えた３代目聚楽館が出現した。

阪急会館はガラスシャフトの、そして阪神元町ビルはカーテンウォールの階段室が、それぞれデザインの見せ場の一つだった。劇場とスケートリンクという複合施設である「新生」聚楽館は、カーテンウォールのある大きなアールで仕上げたコーナー部に正面玄関を設けた。また、聚楽館北すぐの所にあるパチンコ店「メトロ」は、つい先ごろ現地改築されたが、その改築前の建物は松竹興業の「松竹劇場附属食堂」で、竣工当時は、やはりカーテンウォールを取り入れたアールのあるファサードが特徴だった。

ガラスを大胆に取り入れた大きなアールのコーナー部を持つ２つの娯楽施設が、ほぼ同時期に新開地本通りに出現したことは、一昔前のセセッションスタイルなどの「衣装」ならぬハリボテをまとった、その実、明治後期の木造劇場が少なくなかった、この界隈を通りかかる人々に、少なからぬインパクトを与えたに違いない。　　（この項つづく）

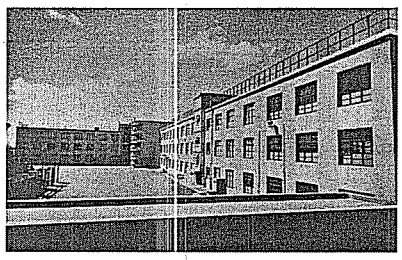


写真１　神戸市立川池尋常小学校
（出典「工事年鑑紀元二五九六年」清水組）



写真２　「三代目」聚楽館
（出典「近代建築畫譜」）



写真３　松竹劇場附属食堂
（設計・施工：白波瀬工務店、
出典「新建築」第１３輯９号）

■『コンパクトシティ』を考える21（最終回）

阪神・淡路大震災とコンパクトシティ（後編）

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

5．阪神・淡路大震災と復興事業

1995年1月17日午前5時46分に、淡路島北端の深さ16kmを震央とするマグニチュード(M)7.3の「兵庫県南部地震」が発生した。プレート内部に蓄積されたエネルギーが、淡路島から神戸、芦屋そして西宮の市街地の真下の活断層を動かしたのである。この地震で六甲山最高峰が12cm隆起した。神戸を襲った大地震は1596年の「伏見大地震」(M=7.1)以来399年ぶりであった。

近代化以降の初めての都市直下型の震度7の激震で、阪神間の都市では、高速道路、鉄道、港湾の都市施設に壊滅的な被害が発生し、24万棟の建物が全半壊し、6,434人という尊い命が一瞬にして奪われた。この震災は「阪神・淡路大震災」と呼ばれるが、「プレート・テクトニクス」の理論でも予知できなかった地球という自然の大きな力を見せつけた災害であった。

被害の特徴は、神戸市内の人的被害がインナーシティの老朽木造住宅密集市街地の地域に集中し、災害時の脆弱性を露呈させたことである。更新されず残った戦前あるいは戦後10年間に建設された建物が、倒壊・滅失の49%を占めた。死亡者の内、60歳以上の高齢者が59%を占めたのも、住んでいた老朽住宅が一瞬に倒壊し、家屋の下敷き等で圧死や窒息死で亡くなったからと報告されている。また、火災の被害も神戸市に集中し、焼損棟数7.386棟、焼損面積82万㎡（過去5年間平均の102倍）、5,000㎡以上の大規模火災が22地区を数えた。大規模火災の大きな原因は、消防水利に必要な水道配水管や配水池が地震で被災したことであるが、細街路が老朽建物の倒壊で塞がれ、ほとんど微風下であっても、延焼を免れなかったからでもあった。

被災者の生活を取り戻すための復興事業が急がれた。脆弱な密集市街地を再生せず、「安全で安心して暮らせるまち」へ復興するために、当面の建築規制と計画的な整備事業が課題となった。道路や公園の都市基盤や生活基盤の脆弱な被災地は、都市基盤は行政が公共事業で整備し、区画道路や住宅の生活基盤は、地域の実情に沿って地域住民の創意工夫で提案する方式がとられた。いわゆる「2段階都市計画」である。被災規模の大きかった6地区（実質11地区）で区画整理事業が、2地区で再開発事業が提案され、震災から2ヶ月後の3月17日に第1次の都市計画決定がなされた。

震災直後の混乱が続く中、前例のない2段階都市計画は理解されず、都市計画が定められた地域では、賛否を巡る意見の混乱が避けられなかった。現地相談所が設けられ、コンサルタント派遣などで復興事業の仕組みが説明される中、2段階都市計画の意義の理解も進み、被災地域の住民の意見をまとめるための「まちづくり協議会」が結成された。地域の歴史的背景や、地形の特徴、復興から新たなまちづくりへの思いが込められた「まちづくり提案」が提出され、「第2段階の都市計画」として計画決定され、事業計画に反映されたのであった。震災から11年が経過した今日、区画整理事業11地区の内9地区で、再開発の2地区の内1地区で事業が完了し、残る地区についてもほぼ復興事業の目処がついてきている。完成した地区の中には、1ha規模の（防災）公園が整備され、広幅員の歩道の中に「せせらぎ」が整備されるなど、平時は住民が主体となって維持管理し、災害時には避難所の機能を持ち、安全で安心して暮らせるまちづくりが実現している。

6．「コンパクトシティ構想」の提言

震災復興事業が実施段階に入った1997年に、笹山（前）市長が第3期目に入った市政方針の中で、震災で得た教訓を踏まえて、復興後の神戸市の21世紀の目指すべき都市の姿として、安心して住み続けられるまちづくりを目指す「コンパクトシティ構想」を提唱された。具体的には、歩いて暮らせる範囲に、鉄道駅や、商業施設、医療施設があり、公共公益施設はバリア・フリーで整備されている。安全で、安心な生活ができ、誰でもが住み続けたいまちになり、常に3世代が交流しながら持続性のあるコ

ミュニティを形成する。日常サービスは、できる範囲を市民自らが実施し、できないサービスは行政で実施する補完性の原理で運営される都市を目指す。

笹山前市長は、1993年の第2期目に、明治開港以来の神戸市の発展を支えてきた港湾工業都市からの産業構造の転換と、右肩上がりの人口を収容する公的な「都市開発」と同時に住民サービスの向上を目指した「都市経営」からの脱却を指向するため、「アーバン・リゾート都市」構想を打ち出した。六甲山系や田園地域の育んできた自然成長管理型政策で残し、分節型の都市構造を基本にし、ファッションや観光などの文化産業を基軸とする「住み続けたくなるまち、訪れたくなる都市」を目指す都市像であった。

ついで、「コンパクトシティ構想」の提起は、都市をコンパクト化するという、ある意味では、それまでの成長を目指す工業社会のパラダイムと全く逆行する思考の枠組みに迫る考え方である。

工業社会すなわち戦後の経済成長期では、ひたすら都市区域を拡大し、一点集中型で都市の機能を効率的に配置し、都市全体が集積のメリットを追求し、成長を達成してきた。国家・会社・核家族を優先する思考が基本であった。

集中型・効率型の都市のヒエラルキー構造から、都市自体を自立化・コンパクト化し、分散型ネットワークで連携する構造への転換を目指す。さらに、それまで軽視されてきた環境を大切にし、地域が重視され、コミュニティ、家族が中心となり、弱者への配慮を欠かさない仕組みへの再構築も必要である。しかも、決して欧米流のコンパクトシティ論や持続可能な社会論の輸入ではなく、日本の伝統や思考形態をベースにした独自のものでなければならない。それは、まさに震災から復興するまちづくりの姿や方向性であった。

7．まちづくり条例が示す地域重視の方向性

21世紀の神戸市が「コンパクトシティ」を目指すことができるのは、一つには既に述べたように都市構造が分節的で、成長管理型の政策を実現し、コンパクト性を保持していることである。

もう一つは、地域やコミュニティ重視の仕組みを既に作り、震災復興を通じて実践してきたからである。1981年に定められた「神戸市地区計画及びまちづくり協定に関する条例」は、形式的には前段が地区計画の委任条例であるが、後段が住民主体のまちづくりの方法を定めた当時としてはユニークな「まちづくり条例」の部分である。

重要な役割を担うのが「まちづくり協議会」である。協議会の構成員は地域住民に限定せず、まちづくりに関わりたい専門家や法人など、多様な主体に広く門戸を開けている。地域のまちづくりの方針を定めるにあたっては、地域住民の大多数の支持（積極的な反対がない）が条件である。日本古来からの「和をもって尊しとなす」の精神を重視し、反対者の声に耳を傾け、意見を採り入れ、説得できるまで続けることを前提にしている。これは、決定後のしこりを避ける方法であるだけではなく、まちづくりに対して、「地域限定型の公共性」の付与を可能にする。まちづくり協定において、法律以上の規制内容を定めた場合、規制遵守の事例を積み重ねることで、慣習法的性格を協定は持つことができる。ハードのまちづくりにおいては、地域住民の共同利用施設（区画道路や小公園）整備に、地域の無償負担割合や、行政の負担義務（予算措置・事業化）を課すことができる。

多数決の民主主義が明治維新後に、西欧から輸入された。自由・公平・公正・効率が法律制定の根拠となったのは、絶対主義権力から市民革命を経て、国民が主権者になるための基準であった。中央集権型国家主導の工業社会では、全国を画一的な価値判断で、金太郎飴型の政策を実現してきた。江戸時代の分権的で、多様性のある、個性豊かな社会が無くなった所以でもある。

まちづくり条例で制度化されたまちづくり協議会方式の仕組みが、今後のコミュニティ重視の方式として拡張されれば、多様な目的や人材で組織されるコミュニティによる、多様性のある個性豊かな地域の活性化を方向付ける。地域の人々が誓約し、地域と行政が契約する。地域のことは地域で行い、足りないことは行政が補完することができる。それは、本稿の16～18で述べた、3つの“COMPACT CITY”の概念を神戸市で実現できる日が来ることを意味しよう。（完）

水の情景六●ワタシの旅

流れるもの

中川　紺

朝と昼と夜。もうどのくらいの回数がワタシの頭上を過ぎていったことだろう。そしてどれだけの道のりを歩いてきたのだろう。

探している水はまだ見つからない。疲れも眠りも知らない体だけれど、時々、何かに寄り添いたい気分になった。

●●

風に揺れて、ざわざわさわさわ、鳴いているのは、あちらこちらに植えてある庭木の枝葉だった。家々はもう寝静まっている。月と街灯の光だけでは細かな形や色味までは分からないが、辺りにはずいぶんと多くの木々が立っているようだ。

見上げれば、丸い月が光っていた。今晩は満月らしい。

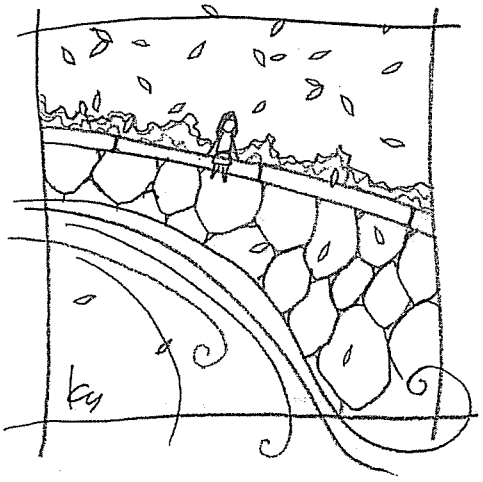
しばらく歩くと、鈍い照明に照らされた看板がいくつか見えてきた。

「○○造園」「□□□園芸」、そういったものが大半で、植木を生業にする家々が立ち並んでいることが段々と分かってきた。先ほどから風に揺られているものは、庭木であって商品でもあるのだろう。

家の造りも、よく見れば年季が入っているようで、月明かりに照らされた瓦屋根は深い色をしていた。道こそ、アスファルトになっているものの、石垣と生け垣がそこかしこに立ち並んでいた。

●●

木々の声と、香りは、不思議な心地よさをワタシにくれた。



ざあざあさあさあ。足下からその音は発していた。水の香りが薄暗闇に匂い立った。視線を落とした先には、垣根沿いにずっと続く溝があった。しゃがんでよく見れば、縁石もかなり古そうなものであった。

脇水なのか、川の支流なのかはよく分からなかったが、その水量はかなり豊かだった。決して大きな溝ではないけれど、どうしてずっと歩いていて気がつかなかったのか不思議に思えた。

●●

流れの中に、白く細い、光のすじのようなものが見えた。月明かりが反射しているようなものとは違う輝きだ。

ずっと見つめていると、きらきらしたすじは、どんどん数を増しはじめた。手を差し入れると、細く光沢のある糸が指に触れた。無数の糸が流れていた。

こんなものがどこから来て、どこへ流れていくのだろう。

ワタシは後をつけた。つまりは、溝と流れの方向に沿って歩いたのだ。しかし大した距離も行かないうちに、歩みは止まった。溝が道の下に隠れ、暗渠になってしまっていたのだ。暗渠の入り口には、糸と葉と枝が見事に絡まり、奇麗な糸玉となってひっかかっていた。そっと手を伸ばして、それを手に取ると、水はすぐに引き、さらさらの糸となった。そうなると同時に光も失せ、本当に真っ白なただの糸玉になった。

そばの電柱に、外れかけた迷子犬の看板があった。糸玉の糸で、それをそっと結わえるとワタシはその街を去った。

かばんの中には白い糸玉がひとつ、先客の緑のガラス片と寄り添うように入っている。

（第六話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第８３回・水谷ゼミナール報告

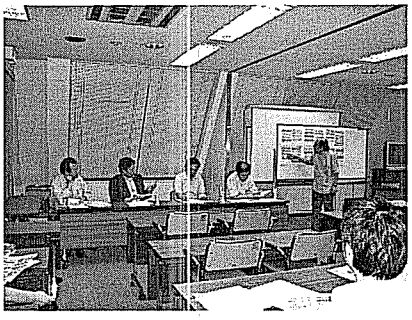
・日時：８月25日(金)18:30～21:00
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室
・テーマ：「ランドスケープの仕事を振り返ってこれからを考える」
・発表：①「量の時代（1975～1985 頃）」／白井治（まち空間研究所）、松下慶浩（環境緑地設計研究所）、②「質の時代（1985～1995 頃）」／門上保雄（門上環境計画事務所）、山崎満（UR 大阪事務所）、③「住民参加の時代（1995～2005 頃）」／山地孝之（景観設計研究所）、辻信一（環境緑地設計研究所）、④「ランドスケープのこれから」（全員）、コメント：三谷幸司（三谷建築研究所）

今回は、ランドスケープの仕事に携わるプランナー６人の方々が、自身のこれまでの仕事を振り返り、その変遷をたどりながら、これからのランドスケープを考えるという趣向。７５年から１０年ごとに“量の時代”→“質の時代”→“住民参加の時代”としたうえで（このような定義付けは今回初めての試みとのこと）、各氏の発表がなされていきました。

神戸ではすでに７０年代より北野や元町の景観整備にみられるように質の時代のシ仕事を行ってきたこと、住民参加の公園づくりについては、震災の直前に行われた上沢地区のワークショップが大きなきっかけになったこと、最近では大規模公園の住民参加による管理運営が行われることや

公園のイベント企画など、仕事の内容も多様化していること、育ちすぎた公園の樹木を切ることによる景観整備の具体的な手法の紹介、などが発表されました。

これからのランドスケープの課題として、様々なコラボレーションの必要性、都市の中の空間づくり（アーバンランドスケープ）、メンテナンスにおける住民参加の仕組み、などが出されました。（中井都市研究室　中井　豊）



発表者の皆さん。右から辻さん、白井さん、門上さん、山崎さん、山地さん。

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第５２回連絡会
・日時：10 月６日(金)18:30～20:50
・場所：神戸市勤労会館 403 号室
・内容：テーマ「中高生とまちづくり」、解題「（仮）まちづくりマージナル世代」／田中正人（都市調査計画事務所）、報告①「（仮）高校生と自転車マップづくり」／藤江徹（（財）公害地域再生センター（青空財団））、②「うちらのまちづくり大作戦！－中高生のためのまちづくりワークショップ」／大角玲子（こべっこランド）、東末真紀（神戸まちづくり研究所）、司会進行：松原永季（スタジオ・カタリスト）
・会費：５００円
・問合せ：GU 計画研究所（TEL. 078-435-6510）

●「世界をつなぐ音楽の花束　日本からアジア、そして世界へ～音楽めぐり～」
・日時：10 月９日(月・祝)13:00～16:00
・場所：三宮・元町 中華会館７階東亜ホール
・内容：第１部／芸術交流ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ「伝承される伝統芸能―韓国の仮面劇を中心に―」、第２部／交流音楽会－冬のソナタ、故郷の春、ｱﾘﾗﾝ、他
・入場料：５００円
・問合せ：多文化と共生社会を育むﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ 代表山地久美子（神戸青年学生ｾﾝﾀｰ TEL. 078-851-2760）

●「阪神間近代文化の発祥と継承―阪神間モダニズム。その危機と救済―」
・日時：10 月 21(金)14:00～15:30
・場所：武庫川女子大学中央キャンパス学術交流館１階大会議室
・内容：パネルディスカッション－ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀ／河内厚郎（文化ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）、ﾊﾟﾈﾘｽﾄ／小林郁雄（神戸山手大学教授・建築家）、河崎晃一（兵庫県立美術館）、たつみ都志（武庫川女子大学文学部教授）
・問合せ：武庫川女子大学関西文化研究ｾﾝﾀｰ（TEL. 0798-45-9992）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email：ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年12月20日発行

月刊 きんもくせい

06年10月号
(50+36+ NO. 43)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■ハリケーン・カトリーナ災害復興協力のための日米対話プロジェクトに携わって

立木　茂雄（同志社大学社会学部教授）

筆者は、これまで阪神・淡路大震災からの長期的な復興の過程について研究し、被災者や被災地はどのようにして復興していくのか、その折々には何が大切なのかについて考え、政策・施策の提言活動にも関わってきた。

阪神・淡路大震災の復興調査は、京都大学防災研究所の林春男教授と共同で進めてきたものである。その林教授は2005年8月末のハリケーン・カトリーナ災害の突発災害調査団の代表として12月に現地入りした。帰国後すぐに、筆者に連絡があり、甚大な被害を受けたニューオリンズ市の人たちに、神戸の復興調査から得た知見をもとに、大都市が巨大災害に見舞われた後、どのようにして復興していくのかについて、ニューオリンズ市民に語りかけることの必要性を訴え、筆者も趣旨に賛同した。

林教授、京大防災研の牧紀男助教授が、そのような機会の可能性やコンタクトを探る作業に奔走し、幸いなことに在ニューオリンズ日本国総領事館の協力を得て、2006年3月には、ワシントンDCおよびニューオリンズ市内で、林教授とともに神戸の復興の過程について講演する機会を得た。

帰国後、さらに深い対話や交流がニューオリンズと神戸との間に築けないか、林教授や牧助教授は模索を続けた。その結果、ニューオリンズ総領事館の仲介もあり、国際交流基金日米センターの主催により実現したのがハリケーン・カトリーナ災害復興協力のための日米対話プロジェクトであった。

2006年10月15日からの1週間のうち週の前半は、ニューオリンズ市の復興のキーパーソンとなる一行8名が神戸を訪れ、住宅・都市再建、コミュニティづくり、防災・減災対策の3つのテーマに分かれ、それぞれに神戸側のカウンターパートが仲介役となって関係者との交流・対話事業を実現させた。

復興まちづくりをテーマとした第1グループは、代表的な事例である野田北部や松本地区などのコミュニティ・リーダーとの対話を行った。オリバー・トーマス市議会議長は、社会基盤の復旧・復興と並んで市民・事業者・行政の連携体制づくりが復興の基礎であること、市民と行政の協働による地域再建の重要性が強く印象に残ったと語ってくれた。

ニューオリンズの地元紙タイムズ・ピキューン紙のゴードン・ラッセル記者は、来日するまでは神戸の復興計画は行政からトップダウンで下されたものだと思いこんでいたが、実際には

まちづくり協議会を通じた交渉によって双方が納得のいく形でまちづくりが行われていたことを学んだと語った。

市民主導の再建計画づくりを進める協議会の事務局長のネーザン・シュローヤー氏は復興を進める上で、計画づくりの当初の段階から住民が参画することの重要性を再認識したと語った。

長年にわたりニューオリンズ大学で都市計画を専門としてきたラルフ・テイヤー教授は、都市を直撃した巨大災害であり、復興が長期間にわたること、今後にわたって日米双方が互いを学びあえる関係にあるといった共通性と、災害から1年経っても災害前に比べて人口がほぼ半減したままで専門的な人材の不足、住民が戻ってこないことによるコミュニティづくりの遅れ、創造的な復興のための資金源は民間投資家に求めざるを得ない米国側の特異性についても言及した。

コミュニティづくりを通した心の復興、地域経済の復興をテーマとした第2グループは、大倉山復興公営住宅のコレクティブ住宅（複数戸の住戸と共用リビング・ダイニングがセットになっている）と、高齢入居者の生活支援や入居者同士の人間関係づくりを団地に常駐して支援するLSA（生活援助員）の視察を行った。その後、震災直後に鷹取カトリック教会に集まった複数のボランティア団体がゆるやかな連携体制を維持しながら、さまざまな多文化共生の活動を続けてきた鷹取コミュニティ・センターのメンバーと討議を行った。

第2グループに参加したカウンセラーの聖母聖十字架大学ヴェラ・トリプレット助教授は、被災者の心のケアの重要性を再認識するとともに、LSAによる住民相互の人間関係づくりが共助意識を醸成し、ストレスをうまく和らげている日本のやり方に共感を示した。

ベトナム人コミュニティで牧会に携わるヴィエン・テ・グェン神父は、神戸を訪れることによって「われわれも復興できる」という確信が持てたこと、多文化共生が将来のコミュニティの強みに変わり得るという指摘に勇気づけられたと語った。

防災・減災をテーマとした第3グループは、兵庫県の防災センター、神戸市消防局などで、震災を踏まえた県・市の危機管理体制や、神戸市みなと総局の担当者から震災後の港湾設備の復旧・復興状況について対話を行った。

ニューオリンズ市緊急事態準備局ジョセフ・マシューズ長官は、ニューオリンズ市は、19世紀から現在まで何度ものハリケーン災害に見舞われ、その都度立ち直ってきた点をあげ、災害からの回復力が両都市ともに備わっていることを実感できたこと、地域コミュニティとの連携・協働の重要性を再確認したこと、都市基盤整備の復旧・復興や仮設住宅から恒久住宅への移行を神戸はいかに迅速に進めたのかに驚かされたこと、そして生活の復興を視野に入れなければならないことを学んだと語った。

河川・海岸工学の専門家であるチューレーン大学/ザビエル大学生物環境研究所副所長ダグラス・マフェット教授は、復興は急ぎすぎてはいけない。急ぎ過ぎると、復興需要の受け皿は、大半が市外の開発業者の手に流れ、結果として資金が被災地内で循環しない。このような神戸の教訓を、われわれはこれからも学び続けていきたい、と語った。

最後に、神戸での対話・交流事業の総括としてトーマス・オリバー市議会議長のまとめを引用して、この小文の結びとしたい。

野田北部で語り合った時、ミスター・カワイがこのように話してくれた。「まちの復興については、もちろん行政が進めるべきところはある。けれども、行政がやった後の、最終的な責任は住民にある。まちの再建に住民が参画していくこと。これ以外に方法はない。」この思想を、われわれのまちでも実現させたいと思う。

■神戸のみどり・その6『布引ハーブ園誕生異聞』（前半）

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

1．発端

1967 年(S42)7 月の神戸大水害により、布引カントリークラブゴルフ場は崩壊し、隣接した「市が原」の市民 21 人の尊い生命が奪われた。18 ホールの無理なゴルフ場開発が原因と裁判になり、その補償が大きな社会問題となった。

最終的には神戸市が 5 億 6 千万円で買収し、ゴルフ倶楽部はその資金で補償した。したがって、初めからこの土地利用計画は災害に強く、豊かな自然環境を保全することが条件だった。現在の地形を保全したままの土地利用計画立案は困難を極めた。

> 神戸市行財政局の『神戸　災害と戦災　資料館』ホームページによると、＜神戸　昭和 42 年 7 月 9 日には、熱帯低気圧となった台風 7 号は西日本に停滞する梅雨前線を刺激し、集中豪雨を西日本にもたらした。総雨量は 371 ミリと昭和 13 年よりも少なかったものの、1 日当たり（9 日＝319 ミリ）や 1 時間当たり（1 時間最大 75.8 ミリ）の雨量は 13 年を上回るものであり、河川の氾濫により

2．発案

「ハーブをテーマにした公園を布引か北神地区に創りたい」

1983 年(S58)秋の公園緑地部政策懇談会の席上のことだったと思う。若手の造園技術職員の、故・伊藤可人君が熱心にハーブ園構想を提案した。そのころの神戸市政策懇談会は、懸案事項に近い重要案件だけを議論するだけなく、一般職員からの提案も故・宮崎辰雄市長・三役まで説明できる機会があった。公園緑地部としては、同じ年の 7 月に神戸市公園緑地審議会に「布引ゴルフ場跡地の公園整備方針について」諮問していた。しかし、現実の問題として簡単に整備計画が決定できるものではなかった。1972 年(S47)神戸市都市整備公社が神戸カントリークラブから先行買収後、1974 年(S49)神戸市企画局は跡地の土地利用計画として甲南大学や県立高等学校用地などを検討しながら、1973(S50)神戸大学の田中茂教授に依頼して地質調査を進めた。平行して 1976 年(S51)～1981 年(S56)防災工事が兵庫県及び神戸市の手によって進められた。1977 年(S52)跡地を都市公園にする含みで神戸市企画局（現企画調整局）から土木局(現建設局)に移管された。都市公園であれば、どうにか用地の買い戻しも含めてこの複雑な地形を利用した計画が立案できるだろうという結論だった。正直言って移管は公園側としてもかなり苦しかった。当時公社先行買収用地の買い戻し補助事業(公園用地)は、認められていなかった。起債も含めて事業化の目処がまったく立たない状況だったのだ。公園側の議論は「第一、どんな公園を整備するんや？」という意見を皮切りに空転し、当時かなりの不満があったことも事実である。一方、「市街地の中心地三宮に近い総合公園の整備は意義がある」「なんとかしょう」「既成概念とは違う公園はできないか？」などの積極的な意見も出されたが、暗中模索のスタートだった。

3．計画地の状況

都市公園整備含みで計画地が土木局に移管されたとき、地質調査や市が原側の山腹工事も終わり、南斜面

は基本的な防災工事が進行中だった。

地形・地質の概略について述べる。園内を有名な布引断層に代表される大小 4 本の断層が横断している。当時布引断層上には廃墟の旧ゴルフ場のクラブハウスが存在した。割れた黒い窓から破れかけたカーテンの切れ端が風に揺れていた。あの阪神・淡路大震災でよく目撃されたような光景だ。ゴルフコースも崩れていたがコースの跡地形はよくわかった。すでにハギ、ヒメヤシャブシなどの低木が進入していた。播種による砂防樹だろうか？　地形は六甲山系の取り付き部に当たる二つの尾根に囲まれた谷部で、今、香の資料館や香のレストランのある展望台は海抜約 400m の山頂だ。9 番ゴルフコースがそのまま広場になっている。地質は花崗岩で風化はかなり進んでいる。表層は約 1～2m の風化した表土で覆われていた。地質調査によると、かなり深い堆積もあるという。ところどころに岩も露出しているが、風化が進んでいる。土壌は弱酸性の砂質土で透水性が高いので、保水性と肥料の歩留まりが懸念された。

森林構成は一部にクス、ヤブニッケ、カゴノキ、ヤブツバキなど当地の自然潜在植生である良好な照葉樹林もあるが、大部分はニセアカシア群落を主体とする二次林である。ニセアカシアは砂防樹として早期緑化の価値があるとされた時期もあったが、材質は脆く、風にも弱く、他の樹種を排除する性質もあるところから良好な森林ではない。ニセアカシアを早急に伐採し、ウバメガシ、クス、モミジ、コブシなどを植栽する森林更新を必要としていた。なお、ニセアカシアは今日的見解ではさらに有害外来種とされ根絶すべきという意見もある。いずれにしても 1991 年(H3)の開園当初から森林更新は進められているが、林相の良好化はまだ道が遠いという感じだ。

4．布引ハーブ園の発想の原点

いま、なぜ？　ハーブなのか？

①　「ハーブのある生活」は、その原点である 42 年災害の教訓を生かした環境に優しく、災害に強い安全な公園づくりをめざすことによくなじむテーマだと思った。

②　1984 年(S59)9 月の神戸市公園緑地審議会答申「布引ゴルフ場跡地の公園整備方針について」の自動車、コンピューターなどが発達した現代社会において、人と自然、人と人のふれあいなど、ともすると現代人が忘れがちなことを思い出させるテーマだ。

③　それは自然、素朴、やさしさ、ぬくもり、あたたかさ、やすらぎ、手づくり、やわらかさ、いなか、ほんものなどの言葉で表現され、これらの言葉はすべて人とのかかわりの中で初めて意義を持つ概念だった。人間生活との深いかかわり、人と自然の共生、それにちょっとおしゃれなセンスを加味すれば、今までどこにもなかった新しい感覚の公園ができる。

④　①～③を考えていくなかで、ハーブこそ紀元前から人間の生活とともに生きてきたし、一つひとつは野草のように目立たないけれど、野辺の風に吹かれる風情は美しい。またハーブ園に訪れて感じ、かつ知って、ハーブの香りやキッチンハーブなど「ハーブのある生活」を家庭の生活に持ち込むことが出来る。

■その他計画に当たって意識したこと

- ●公園全体をハーブ中心とした都市公園は日本でも世界でも初めてであること。
- ●規模は全国スケールで整備すること。
- ●ハーブ専門家から見ても神戸しかないハーブ園であること。
- ●眺望留意、北野との連係重視の自然に囲まれた美しい花と香の公園であること。
- ●香の時代を予感できる新しい神戸の名所となること。

（この項続く）

水の情景七●ワタシの旅

アカネ

中川　紺

車一台通るのがやっとというくらいの道路の真ん中に、子どもが数人、輪になってしゃがんでいるのが見えた。通学の途中らしく、全員が黒いランドセルを背負った男の子だ。

なんだろう。

なんだかずいぶんと楽しそうなので近くで見学してみることにした。

そのあたりだけ水まきをしたらしく、地面がほどよく湿っている。子どもたちは、小さなくぼみに出来た水たまりに浮いた油を、枝でいじったり、息を吹きかけたりして、変化する虹色の模様に一喜一憂している。

「あーかーね！」

「おおー、すげー」

小さなどよめきが上がったので、思わず覗き込むと、虹色の油の中に少しいびつな「アカネ」の文字が浮かび上がっていた。

「アカネ…？」

好きな女の子の名前とか？

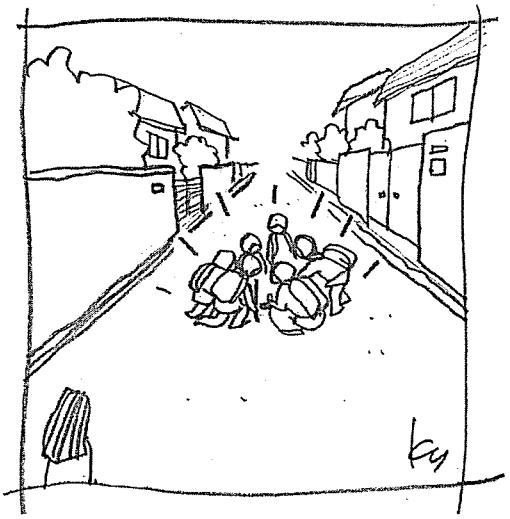
ワタシがつぶやくのと、「こら、はやく行かないと遅刻するわよ！」と、ホースを持ったおばさんが、低い柵越しに声をあげたのが、ほぼ同時だった。

子どもたちは一目散に駆けて行った。その人はやれやれといった顔で、また庭の芝生に水をまきはじめた。

●●

もう一度水たまりに視線を落とすと、もう油の模様は抽象画のようなものに変わっていた。あれは本当に一瞬の作品だったわけだ。

立ち去ろうとして少し動くと、太陽の光線が水に差し込み何かが光った。



なんだろう。

今日、二度目のなんだろう、だ。

先ほど子どもが使っていた枝で水の中をさぐると、すぐに手応えがあり、五百円硬貨ほどのコインが出てきた。

コインと言ったのは、明らかに日本のお金ではなかったから。片面には糸車の滑車を小さな恐竜のような生き物が回っている図柄、裏を返すと水紋が描かれていた。

外国のコイン？

しかし、アルファベットや数字がどこにも刻まれていない。

おもちゃかもしれない。何となく気になってしまい（気に入ってしまい、というのが本当のところかもしれない）、ワタシはそっとそのコインをかばんにしまった。

子どもたちがこれに気がつかなかったは少し不思議な気がした。水面の虹色が、わざと隠していたようにも思えた。

●●

どこかへ行くあては特に無かったので。子どもたちを追うように学校の方に歩いた。もう授業が始まったらしく、校庭のトラックを走る子どもたちの姿が見えた。

学校の裏にまわると、ずいぶんと広い公園があった。周囲に低い石垣と生け垣がしつらえてあり、古いお屋敷を思わせた。

もしかしたら、本当に元々誰かの大きな家があったのかもしれない。

お屋敷の門柱にあたる、入り口の石柱に丸い書体で公園の名前が刻まれていた。

あかね公園

女の子の名前よりもずっと、子どもたちにはおなじみのものだった。（第七話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

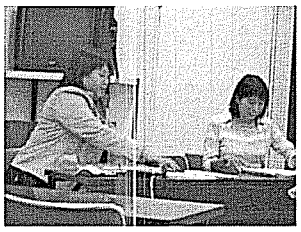
■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第５２回連絡会報告

ネットワークのまちづくり勉強会で中学生・高校生が関係するまちづくりをテーマに取り上げるのは、初めてであり、いろいろな分野で子供や中高生を対象とすることは少なくないであろうが、都市計画・まちづくりの分野ではめずらしいことだと思う。

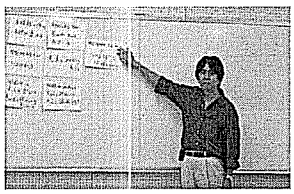
そのめずらしいテーマに取り組んだ 2 つの事例紹介と境界世代としての理解を田中さん解説し、そしてそこで語られたキーワードを松原さんが整理し、それをもとに討議が進められ、このテーマにとまどいながらも、思いの外、話が弾んだ。

テーマ「中高生とまちづくり」
○解題：まちづくりとマージナル世代／田中　正人氏
　：都市調査計画事務所
○報告：１.高校生と自転車マップづくり／藤江　徹氏
　：財)公害地域再生センター（青空財団）
　　２.うちらのまちづくり大作戦！中高生のため
のまちづくりワークショップ／大角玲子氏：こべっこランド、東末真紀氏：神戸まちづくり研究所
○司会進行：松原永季氏（スタヂオ・カタリスト）


藤江　徹氏


東末真紀氏と大角玲子氏


田中正人氏


松原永季氏

■ 情報コーナー

●HANSHINKAN NAVETTE- MUSEE
一日だけのうごく美術館
・日時：11 月 3 日(金・祝)9:30～17:30
・場所：阪急西宮北口／兵庫県立芸術文化センター、阪神西宮／西宮市役所、JR 芦屋駅／南口から出発
・資料代：500 円
・内容：ちょっとその街に降りたってみたくなる、街並み、街角をめぐる一日だけのうごく美術館。
地域文化を支える解説ドクトルが阪神間文化の見所を紹介しながら巡回運行。
・ルート：兵庫県立芸術文化センター－白鷹禄水苑・集古館－白鹿記念酒造博物館－西宮貝類館－西宮市民ギャラリー－西宮市大谷記念美術館－芦屋市立美術博物館・谷崎潤一郎記念館－ヨドコウ迎賓館（旧山邑邸）－堀江オルゴール館
・主催：兵庫県阪神南県民局・阪神南地域ループバス検討協議会
・協力：千里国際情報事業財団、阪神間倶楽部ほか

●NPO 日本都市計画家協会関西支部設立記念・関西まちづくり交流セミナー
交流委員会行事
・日時：11 月 18 日（土）13:00－18:00
・内容：神戸・旧居留地「景観誘導と企業防災」の見学と説明、大阪・空堀「長屋再生と路地まちづくり」の見学と説明（後、空堀にて懇親会）
関西支部設立記念行事
・日時：11 月 19 日（日）10:30－16:00
・内容：歴史的町並み・富田林寺内町の見学、関西支部設立記念シンポジウム／じないまち交流館
司会：正木啓子（JSURP 関西支部）
挨拶：黒川洸（JSURP 会長）、多田利喜（富田林市長）
講演：越澤明（北海道大学教授）
座談会：木口俊彦・佐藤康平（寺内町をまもりそだてる会）、黒川洸、越澤明（司会）
取り組み表明：小林郁雄（JSURP 関西支部長）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email：ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2006年12月20日発行

月刊 きんもくせい

06年11月号
(50+36+ NO.44)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■復興リベラリズムの旗を掲げよう

山中 茂樹（関西学院大学災害復興制度研究所）

そろそろ反撃の狼煙をあげなければいけない。「住宅再建支援は耐震化の意欲を削ぐ」「被災者支援よりまず防災。危険なところに家を建てれば自己責任だ」。こんな批判や非難が高名な学者、官僚、さらには防災熱心な「率先市民」と呼ばれる人たちの間から漏れ聞こえてくる。いっさいの妥協を許さないとでもいうような「防災」の大合唱に、戦前、「非国民」の烙印を押して回った人たちのヒステリックな叫びと通底する不気味さを感じるのは私だけだろうか。

「耐震化」や「自己責任」を葵の印籠のように振りかざす人たちを私は密かに「防災ファシスト」と呼んでいる。ファシストとは「結束した同盟者の集まり」。ファシズムとは「個々人の意思や思想を律し、型にはめるための権威」と定義されている。

そもそも命が危ないのに住宅再建の支援金がもらえるからと言って、家が壊れるまで放置しておく人がどこにいるだろうか。阪神・淡路大震災で一番、死亡率が高かったのは独り暮らしの高齢女性だ。月額１０万円足らずの年金で暮らしを立て、家賃１万そこそこの棟割り長屋に住む。家主も資力のない高齢者。この人たちを前にして「自分で自分の命を守る。自助こそ大震災の教訓だ」とだれがいえるのだろう。

いや、それより新耐震基準でも３割の木造住宅が壊れるという統計があり、２００５年の福岡県西方沖地震では新築マンションにも大きな被害が出た。「いや壊れるのは折り込みずみ。命さえ守られればよい設計になっている」と言ってのける専門家の無神経さに怒りさえ覚える。

「民でできることは民で」といえば聞こえがよいが、要するに安全・安心に責任を持つことを放棄した政府。２００１年の芸予地震の折、広島県呉市の被災地を視察した政府役人は「なんで、こんな危険なところに住んでいるのか」と眉をしかめたという。危険な急傾斜地の宅地は軍港建設という国策のもとに造成された鬼っ子だという認識もなく。

いや、とまれ。それらを今更責めても仕方がないだろう。「完全なる防災などない」と、防災ファシストたちも認めているではないか。ならば、被災者支援もあってしかるべきだろう。

それより驚くべきは「ムラの一般財源を上回る事業費を使ってまで復興させるのか」「過疎と高齢化のムラを再建する意味があるとは思えない」と復興にも市場原理主義者というファシトが登場してきたことだ。「復興」を生存権や基本的人権の成果物としてとらえるのではなく、コストで計るのが格差是認社会の流儀らしい。郵政民営化に反対する候補者たちの選挙区に刺客を送り込み、当選したチルドレンたちに「政治家は使い捨て」と言ってのけた前の宰相。その人気を支えた有権者たちは、イラクで人質になったボランティアたちを自己責任の名の下に袋だたきにした。

「災害対応」も時代の風潮から無縁ではいられない。だからこそ、私たちは復興リベラリズムの旗を大きく掲げようではないか。リベラリズムとは、機会平等と最小不幸、国や社会による富の再配分を是とする立場だ。

復興を人口の回復率や村民所得などでは計らない。一人ひとりの再生を集積したところから復興を測るべきだ。その指標には無機質な都市サイズの係数ではなく、豊かさ、楽しさ、懐かしさといった別次元の物差しを当てるべきだろう。災害時には往々にして復興バネが働く。平時なら緩慢なる過疎が進むところだが、「なぜ過疎なのか。これに歯止めをかけるにはどうしたらよいのか」。支援に入ったボランティアやアーティスト、学者らがこれまでの経済指標とはまた違った価値観を見つけ出すことに知恵を絞る。私たちはその作業を手助けし、同時に、復興リベラリズムに基づく再建支援のシステムを構築していかなければならない。防災ファシズム、復興ファシズムに打ち勝つための新たな指標創りをめざして。

■Dr.フランキーの街角たんけん　第26回　もう一つの新開地（その６/最終回）

神戸瓦斯新社屋

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

「神戸瓦斯四十年史」によると、昭和 11（1936）年４月に旧社屋の解体に着手。６月 19 日に地鎮祭を挙行、翌 12（1937）年７月末には外装までの工事がおわり、９月に竣工のお披露目をかねた落成祝賀会が行われた。

同社史によれば「新社屋は、近世式鉄筋混擬土造りで、地上五階、地階一階を主建物とし、別棟として、倉庫、自動車庫、自転車庫等あり、軒高十九米、垣屋二十一米、敷地面積二、〇一四平方米、建坪四、七二六平米あり、白亜の近代建築は神戸第一の繁華街たる新開地にその威容を誇ってい」た（写真１）

通常のオフィスビルの機能以外に、やはりショールームとしての役割が期待されていたためであろう、「四階には料理実習室、同講習室、集会室がある。（略）料理教室は一時に五十余名の実地講習をなすに充分なる設備を有し」ていた。それでも「一ヶ月三週間余の講習会を開いているが、毎回申込殺到して希望に応じきれぬ程の盛況を極めてい」たという（同四十年史より）。真新しい社屋を一目見ようという好奇心旺盛なご婦人方も多かったに違いあるまい。

建物の角を大きな曲面で表現するなど、聚楽館などの近隣のストリームライン系の建築に近い造形言語も採り入れながら、あえてベースメントを人造石研ぎ出しで仕上げ、二階以上は縦長プロポーションの窓を白タイル貼のファサードに割り付ける古典的な手法で仕上げて、「近世式」と施主に説明する渡邊節の姿勢は、無装飾の機能主義思想の意匠が建築界を席巻していく中で、まさしく「様式建築に殉ずる」ものであったといえよう。あるいは、そんな時代への挑戦としての意味を帯びた表現であったのかもしれない。

やがて、戦時体制下の物資統制によって建築行為が制限され、スタイリッシュな建築表現の展開は困難となった。その延長線上である戦後、渡邊節の活躍の場は失われていく。

そして、神戸の町を支えた２つの公共サービス事業体も、また戦時統制の中に埋没していくことになる。

神戸市電気局は、1941（昭和 16）年に入って改正された国家総動員法に基づき同年８月に公布された「配電統制令」などにより、新設された関西配電株式会社へ電気事業が引き継がれた。電気事業をもぎ取られた「電気局」は「神戸市交通局」への組織の衣替えを余儀なくされた（1942（昭和 17）年５月）。1917（大正６）年の市による買収から２５年後のことであった。1945（昭和 20）年３月と６月の二度の空襲で、交通局は、本局庁舎難を逃れたものの、市内電車・バスの車両、施設に甚大な被害を受け終戦を迎えた。その直後の９月には交通局は、新開地の事務所を引き払い、橘通１丁目の市庁舎へ転出した。

ガス事業は、電気事業とは対照的に事業統制の進捗は遅かった。しかし、終戦直前の４月１日、神戸瓦斯は大阪瓦斯に吸収合併。旧神戸瓦斯本社は、大阪瓦斯神戸支店に「格下げ」となった。

歓楽街として、浅草、新世界と対比されて語られることの多い新開地だが、電気・市内電車、水道という公共サービス事業の中枢が、本通りの押さえの位置に向かい合って置かれていた事実は、いままであまり語られてこなかった。これらの拠点が新開地へ拠点が移された 1910 年代は、旧湊川河川敷の開発の真っ最中の時期である。電気、瓦斯の何れの会社も、設立や運営に神戸の資本家が深く関わっている。そういた事情から見て、２つの公共サービス企業の本社が新開地で相まみえたのは、湊川改修株式会社が、財界に働きかけて、映画や芝居小屋が敬遠しそうな、鉄道敷に近い区画を２つの会社にそれぞれ引き受けてもらった、という単純な理由による結果と推測することは容易である。それにしては、そろいも揃って、というのも出来すぎた話で、偶然の産物と簡単に流す気にもなれない。やはり、何かしらの意思を、そこに感じるのである。

この謎解きは、機会を改めて取り組んでみようと思う。

（この項終わり）

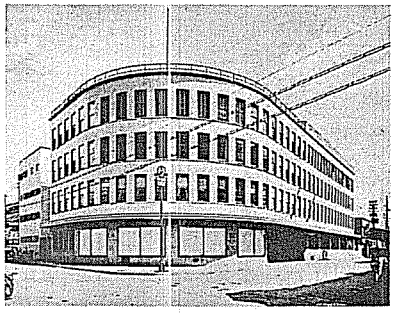


写真１　神戸瓦斯新本社屋（設計：渡邊節、出典「工事年鑑 昭和12年」清水組）

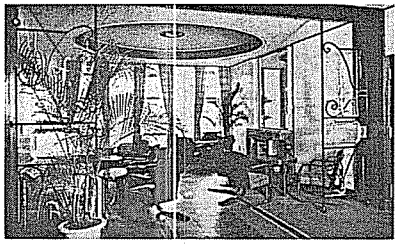


写真２　神戸瓦斯新社屋玄関（出典：「四十年史」同社）

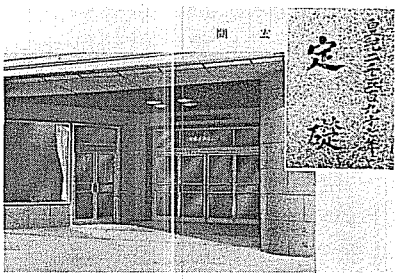


写真３　神戸瓦斯新社屋休憩室（出典：前出「四十年史」）

■神戸のみどり・その 7『布引ハーブ園誕生異聞』（後半）

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

5．ハーブ園とロープウェイ

1984 年(S59)9 月の神戸市公園緑地審議会答申「布引ゴルフ場跡地の公園整備方針について」を受けて、ようやくハーブ園ではない総合公園として次の段階へ進もうとしたときだった。

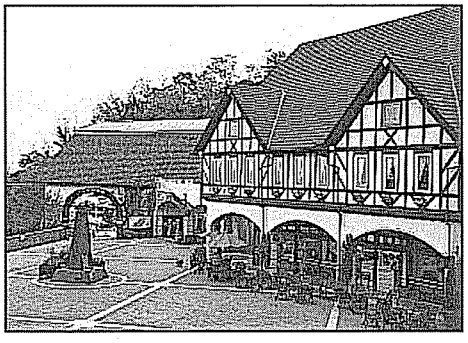
1985 年(S60)故・宮崎辰雄市長からロープウェイ構想が発表された。ロープウェイによるアクセスは市内部でずっとくすぶってきた問題であり、はっきりいって検討もしてきた。しかし採算面など種々の問題を抱えていた。布引大龍寺線の延伸や新神戸トンネルからのエレベーター建設なども検討された。だが、ここに至って市長の方針が出たわけだ。計画は大きく曲線を描くことになった。1984 年(S59)9 月答申は、徒歩によるアクセスだった。前提が違う。事務ベースは議論に議論を重ねた。「ロープウェイなら、利用者はもっと広域を考えなければ……」「ロープウェイなら全国ベースの神戸の新しい名所にしなければ、採算が心配や」「北野異人館との連係ももっと考えなければ……」「審議会答申をもらったばかりで委員の先生方の説明はどうするや？　納得してもらえるかな？」「神戸市政 100 年もにらんまなけりゃなあ」と。

そのとき、にわかに「ハーブ園構想」が浮上した。先の故・伊藤可人君の提案も公園砂防部としては留保していたし、新たな打開を模索して 1986 年(H61)、集客企画に強い阪急系コンサルタントに構想案の提案を依頼した。若い女性スタッフを主力とするこのコンサルタントはずばり「ハーブ園構想」を提案した。ここに来て内部保留案と外部案の偶然？　の一致をみた。そのあと「布引ハーブ園」と神戸市都市整備公社が進めていた「ロープウェイ構想」とのドッキングをはかり、「布引公園基本計画」（案）が完成し、1987 年(S62)秋、「布引ハーブ園」は故・宮崎辰雄市長の承認を得た。そして 1988 年(S63)2 月、「布引ハーブ園」「ロープウェイ」が記者発表され、一部防災工事に着手した。

なおこの変更劇はかなりの激務であったことを記しておきたい。

6．ヴァルトブルグ城をめざして

ハーブ園のコンセプトは全体をテーマのハーブに調和した中世ヨーロッパの古城とした。すべてをほんもの、自然素材志向で整備しようということになった。目標とする古城はドイツ（当時は東ドイツ領）チューリンゲン州アイゼナッハの郊外の山上にある世界遺産「ヴァルトブルグ城」だった。私たちは「ヴァルトブルグ城」の写真を事務所に貼り、コンサルタントと協議を重ねた。今も「布引ハーブ園」の香のレストラン、森のホール、香の資料館、グラスハウスの外壁を見ると、あの写真を思い出す。アイゼナッハはバロック音楽のバッハが生まれた町、宗教改革の指導者マルティン・ルターが少年時代を過ごした町だ。「ヴァルトブルグ城」での歌合戦も有名である。ワグナーの「歌劇タンホイザー」は正式には「タンホイザーとヴァルトブルグ城の歌合戦」といい、この古城で初めて上演された。また古城は「布引ハーブ園」と同じように小高い丘の上にあり、アイゼナッハの町を眺めることが出来る。しかし私たちは古色を出すために屋根瓦や石材など材料などの吟味で、費用の関係から新しいものしか使えなかったのは悔やまれる。



写真■香のレストラン

7．ハーブとは？

「布引ハーブ園」の計画や建設がスタートしたとき、恥ずかしいことにまだハーブとは？　何なのか私たちも全然知らなかった。それでハーブの初歩から、開聞山麓香料園園長の宮崎泰先生と NHK 趣味の園芸の講師でハーブ研究家の廣田先生の指導を仰いだ。そして廣田先生には計画・建設・管理運営に至るまでお付き合いをいただいた。先生方がおられなかったら今のハーブ園はないのではないかと思うのでここに記して感謝したい。

そして今、「布引ハーブ園」開園から 13 年が経とうとしている。市内いや全国にハーブは伝搬し、爽やかな香りと可憐な花を競い、人々の生活の中に定着している。その意味で「布引ハーブ園」の果たした役割は大きかったと自負している。

■ハーブとは？

簡単にいうと、主に温帯に生育し、料理の風味付けや薬用などのほか、さまざまな分野で人間の暮らしに役立つ香ある植物である。ハーブの歴史は古く、古代文明発祥の地ではハーブに関する神話や伝説が多く残されている。また、1931 年(S6)に出版された「A Modern Herbal」には約 2,600 種のハーブが紹介されている。ハーブは洋の東西を問わず各国の暮らしに根付き、その植物と利用法は代々子孫に受け継がれている。梅、ショウガ、ミョウガ、オオバ（シソノハ）、ネギなど日本でも日常生活の中に多くのハーブが使われている。



❀ローズマリー（シソの仲間）

８．布引ハーブ園とロープウェイ建設反対運動

「布引ハーブ園」と「ロープウェイ」建設は 42 年大水害の被害に発する自然保護の見地により構想段階「兵庫県勤労者山岳連盟」や「布引・市が原の自然を守る会」から厳しい反対にあった。ハーブ園やロープウェイを建設せず、ゴルフ場跡地をそのままにし、自然に戻せ、という主張だった。市は「六甲山が禿げ山から先人の努力により今日の緑が回復したが、人工によって創られた森はまだ道半ばであり、布引近辺の森も人工林であり、これから少なくても 100 年は人の手を入れていかねばならないし、また市は営々と森を守って来た。布引ハーブ園建設は災害防止や森林更新も含んでおり是非やらなければ」と。またロープウェイ建設は「子供から高齢者まで誰でも気軽にハーブが楽しめるようにするには是非必要だ」と説いた。相手のいろいろな運動に対応しながら、守る会との会合は開園後の平成 6 年まで都合 13 回に及んだ。現在年間 50 万人弱の入園者が「布引ハーブ園」を訪れている。

なお、工事道路は熊内からのルートしかなく、工事用自動車の通行制限などの協定を作って対応したが、追い込みに入ると、「おい、朝 6 時トラックが通って家内の額を落とした。どうしてくれる？」「壁が落ちたがどうしてくれる？」など苦情も多く、沿道市民に多大の迷惑をかけた。ここに記し、協力に感謝したい。

９．投げ込み式入場料徴収システム

2006 年(H18)から指定管理者制度が適用され、民間会社が「布引ハーブ園」「ロープウェイ」を一括管理することになったので解消したと思うが、当初、「布引ハーブ園」は（財）神戸市公園協会が神戸市より受託を受けて管理運営し、「ロープウェイ」は公園施設を設置・管理許可を受けた（財）神戸市整備公社が管理運営していた。そのため、料金体系が二重になり、利用者に高額感を感じさせる恐れがあった。料金統合は開園前から検討協議されたが、運輸サイドの指導から解決できなかった。そのためアメリカ・ワシントンのスミソアン博物館のように入園者の良心に訴える投げ込み式料金箱が設置された。数字はさし控えるが歩留まり良好であった。なお、この件について私はローマの「真実の門」をまねしてその口に料金を入れる案を提案したが、「馬鹿者」と上司に一蹴された。今でも苦い、残念な思い出である。

１０．今後のこと

先に書いたように指定管理者制度によって「布引ハーブ園」と「ロープウェイ」は民間会社が管理運営している。施設の生い立ちは誰が管理運営しても大切である。悪弊は改革したらよいが、いいものは踏襲してほしい。そために今、この小論が少しでも役立てば、と思う。

水の情景八●ワタシの旅

青い水

中川 紺

滑り台、砂場、ベンチ、動物の形の乗り物、ブランコ、花壇、そして、手押しポンプ。公園の中にはいろいろなものがあった。

古風な雰囲気の地下水をくみ上げる手押しポンプには、一枚の張り紙がしてある。

『使用禁止』

本来、くみ上げた水を流すための水路は、すっかりと乾いていて、コケなのか何なのか、表面は青みを帯びていた。

砂場や滑り台には、まだ学校には行っていない小さな子どもたちが遊んでいて、傍らのベンチでお母さんが数人、おしゃべりを楽しんでいた。

「どうして、あのポンプは使用禁止になっているんですか」

一人の母親が、わけを教えてくれた。

最近、青い水が出るようになったという。市の検査の結果、有害な成分は含まれていなかったけれど、当面使用を止めて様子を見る事になったらしい。

「変でしょう？　赤サビがでることはあるって聞くけど」

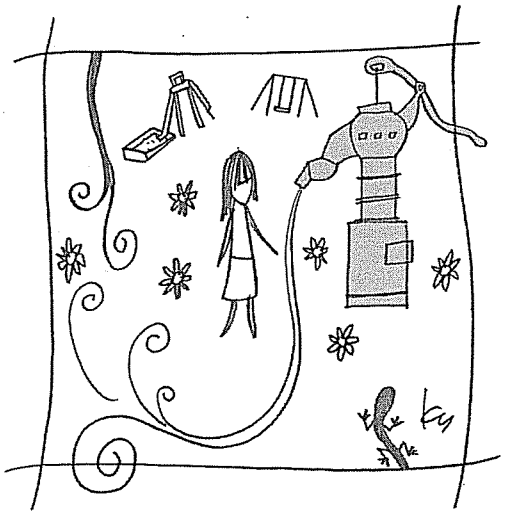
「ねえ。青い水なんて何となく気味悪いわ」

母親たちはそれ以上の詳しいことは知らないらしかった。

●●

なるほど、ポンプのまわりが青いのはそのせいなのだ。そしてこの青いものが、何かを発しているのがワタシには感じ取れた。

周りに人がいなくなってから、ワタシはポンプに手をかけた。



ぎぃ。ぎ。

しばらく動かしていなかったせいで、錆び付いたような悲鳴があがる。それでも力を込めていると、ざぁぁと、青い水が流れた。

何度か水を流すとまた、がくん、と何かに引っかかったように動かなくなった。

ワタシはかばんを地面に置いて、髪をまとめて、少し気合いを入れて、もう一度ポンプを押した。

すぽん

栓でも抜けたかのような音がした。

●●

きききき。か細い鳴き声。ポンプの口から滴る水の真下に、青緑の皮膚のトカゲのような生き物がいて、こちらを見上げていた。よたよたと歩く跡は青い線に染まった。青い水の原因はもしかしたらこれかもしれない。

その生き物は、置いてあったワタシのかばんの表面を器用にのぼると、中に潜り込んでしまった。

あれ、そういえば。

どこかで見たような気がすると思ったら、この前拾った異国のコインに描かれたものと、姿形がそっくりだと気がついた。

地下水の中に暮らしていたであろう、この生き物は、呆れた事に、かばんの中で白い糸玉を枕にすやすやと眠っていた。

「変な居候ができてしまって」

それでも、ずっと一人で水を探して旅をしていたワタシは、少しだけ暖かい気持ちになっていた。たとえそれが正体不明の生き物であっても。

もう一度ポンプを押してみた。水はすっかりと澄んだ色になっていた。

（第八話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■HANSHINKAN NAVETTE- MUSEE・一日だけのうごく美術館

昨年（2005 年）の文化の日に開催された「HANSHINKAN NAVETTE- MUSEE」は今年（2006 年）も同様に 11 月３日に開催されました。

昨年は阪神間クラブの主催で、芦屋市立美術博物館と西宮市大谷美術館、白鷹禄水苑を結ぶ美術館巡りのマイクロバスでの運行でしたが、今年は兵庫県阪神南県民局の主催で千里国際情報事業財団と阪神間倶楽部の共催で開催され、バスも阪神バス、阪急バス、神鉄バスから５台を使用しました。

兵庫県立芸術文化センター、西宮貝類館、白鷹禄水苑、白鹿記念酒造博物館、西宮市民ギャラリー、西宮市大谷美術館、芦屋市立美術博物館、谷崎潤一郎記念館、ヨドコウ迎賓館、堀江オルゴール博物館の１０カ所を一方方向の運行で、一巡に２時間を要する大がかりなことでした。

500 名の募集に 1,300 名の申し込みがあり、最終は当選者の６割、261 名の参加。有り難いことに一番遠くは九州からの参加者がおられました。(ラジオ放送での広報によります)

今年はじめて実施されたインターネットによる申し込みは予想通り多数を数えましたが、当日になってのキャンセルも多く、結果的に６割の参加でインターネットによる申し込み方法に改善の余地を見ました。

また、昨年同様ドクトルの人気は高く皆さん楽しまれましたが、２時間を一人で案内するのは大変ハードなことでしたので、ほぼ１時間ごとにドクトルは入れ替わりました。

この企画の言い出しっぺであります河内厚郎さんが今年は宝塚映画祭の主催者でこちらには来れず、初代ビデオによるドクトルの試運行となりました。しかし、この試運行も道路状況やバスの運行状況とビデオの連携に問題があり、今後の課題を残すこととなりました。

また、今回の参加者には昨年のアンケート結果をふまえ、参加料として 500 円を徴収いたしましたので、それぞれの美術館や博物館のガイドパンフレットに加えて、阪神館倶楽部監修の「HANSHINKAN QUIZ 50」という「おもしろクイズ」の冊子を配りました。この冊子は今後、阪神間文化の様々な知識や雑学を 50 問から増やしていくつもりです。

皆様も乞うご期待を！　　（きんもくせい　天川佳美）



写真　西宮北口の芸術文化センター前から出発

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第５３回連絡会

・日時：12 月６日(金)18:30～20:50
・場所：神戸市勤労会館 406 号室
・内容：テーマ「まちづくりコンサルタントの行くえ・part2」、パネラー：①「まちづくり派コンサルタントの現状・課題・展望」／岩崎俊延（プランまちさと）、②「アーキテクト派コンサルタントの現状・課題・展望」／森崎輝行（森崎建築設計事務所）、③「ランドスケープ派コンサルタントの現状・課題・展望」／辻信一（環境緑地設計研究所）、コーディネータ：中井豊（中井都市研究室）
・会費：５００円
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●第 85 回水谷ゼミナール(+忘年会)

・日時：12 月 26 日(土)18:00～19:30
　　忘年会　20:00～21:30
・場所：ﾋﾟﾊﾟ･ｱﾗﾝﾁｮ
・内容：テーマ「今年できた私達の作品」、発表者：①「甲陽園山地区集会所・やまびこの家と外構」／世儀　敦裕 氏（ジーユー計画研究所）、②「滋賀県栗東の診療所等」／安元　美帆子 氏（まちづくり会社コー・プラン）、③「共同建替えによる集合住宅」／渡辺 氏＋　三宅 氏（ＵＲ大阪事務所）、④「六甲道駅北地区集会所・〔風の家〕」／岩崎　俊延 氏（プランまちさと）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2007年3月31日発行

月刊 きんもくせい

06年12月号

(50+36+ NO. 45)

発行：阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク

■みなと町神戸とローマ

金芳　外城雄（神戸学院大学「防災・社会貢献ユニット」教授）

塩野七生著ローマ人の物語第15巻「ローマ世界の終焉」で十五年にわたった物語も表題どおり終わりになりました。なぜ、これほど日本人にこの物語が愛読されるのか。その長い歴史は、2000年にわたり今も続いているこの日本の国のありように関わるのかもしれません。また、私の生まれ育ったみなと町神戸にも通ずるところがあると感じています。

以下、防災と町づくりという視点から述べてみます。

ローマの災害対応と阪神大震災

ローマの災害対応の基本は、次の三つだと記されています（ローマ人の物語 XII）。

①軍隊の出動による復旧・復興
②義援金の支給
③属州税の凍結です。

これと対比して阪神大震災での対応で見ると、

①国・自治体の対応に加えて、地域力が発揮されたこと。それは旧来の災害対応の考えを変え、防災から減災へと視点が変わり、主人公は市民であることが認識された。中でも、150万人をこえるボランティアの活動が目覚しかったこと。
②義援金は多くの方々からの支援を受け、総額では約1800億円にのぼった。
③国からの大きな支援がなされたが、一国二制度となる租税の凍結は採用されず、減免措置がとられたに過ぎない。

ローマ人と日本人の相似点

ローマ人と日本人には、意外と共通点が多いように思います。それらは以下の5点です。

①温泉好き　②多神教（紀元313年にはキリスト教が国教に）③パスタと米食
④海洋文化　⑤創意工夫の技術力

これらが、今も日本人をローマに向けるのかもしれません。ローマが覇権国家として他国の優れた技術や考え方を取り入れて発展した姿は日本と同様です。文化や思考において優れたギリシャの文化もとりいれています。日本人は、創意工夫においては世界的に優れた技術を有していますが、独創性の点でノーベル賞受賞者が少ないのに似ています。

ローマを支えたもの

ローマは一日にしてならず…の言葉どおり、1300年も続いたローマには多くの優れた制度があります。水道、橋梁の建設などの土木技術や衛生管理などですが、中

でも以下の２点が極めて重要なものだと考えます。

その一つは、支線を含め15万キロにわたり敷設された「ローマ街道」です。その優れた土木技術とともに、これは軍隊の通行道路という意味合いに加えて、属州国との文化・経済交流の礎となっています。交流による平和の構築は現代にも必要なことです。

二つには、ローマが属州国の扱いに関して、その国の文化や宗教も含め認知して、ローマ市民権も与えていったその政治姿勢「寛容」です。1300年におよぶ帝国の基本であったように思います。

みなと町神戸

あの大震災で神戸の港も壊滅的打撃を受けました。東西20キロにわたる海岸線で、神戸港の岸壁が 116 キロにわたり損壊を受けました。公共施設の災害復旧事業は5,700億円に達しました。しかし、国による財政支援も受け、復旧工事を２年で完了しています。神戸港の復興計画では、二十一世紀のアジアのマザーポートを目指すことを基本に、産業復興に資することを掲げて魅力の再生に取り組んできました。神戸の歴史はみなとの歴史でもあり、世界への情報交流拠点でもありました。神戸の生き残りにはこの世界に向けた交流が極めて重要です。

神戸空港も平成十八年二月に開港しました。その採算性や事業投資に関して多くの意見が出されましたが、ローマの基盤が交流にあったように、神戸も交流機能の整備には全力をあげて取り組んできました。歴史的にも長いスパンで考えていくことが重要です。

これからの人口減社会においては、その都市のもつ魅力に磨きをかけ、交流人口を増やしていくことが求められています。神戸は、みなと町として世界に誇ってきました。震災から12年、陸・海・空の交流機能を備えた神戸が息長く発展していくことを願ってやみません。

最後に、「きんもくせい」がこれまで果たしてきた発信事業は大変意義深いものと考えますが、今後もそこで培われた交流精神が長く続くことをお祈りしています。



金芳外城雄さんの現職は表題に明記されておりますが、元神戸市収入役であらせられたことは皆さまご周知のとおりです。2005年11月に阪神大震災を経験された神戸市職員OBによるNPO法人「神戸の絆2005」を立ち上げられ、震災の体験と教訓を次世代に語り継ぐ活動を続けておられます。写真は2006年2月に新潟県十日町市、川口町を被災地交流事業として「神戸の絆」のメンバーなど総勢２３名で訪問されたときの一枚で、左は副代表の岩本しず子さんです。また、以前に「きんもくせい」で紹介いたしました「台湾ー神戸震災被災地市民交流会」の開催準備でも大変ご尽力されました。　（天川佳美）

■「市民と庭師との語らい」で、あいたのしむ(相楽)園を目指す

本位田 有恒（神戸市立相楽園園長）

現在、私が仕事をしております「神戸市立相楽園」は、指定管理者として、昨年４月より神戸市造園協力会(契約母体：神戸市造園共同企業体)が管理運営を行っています。神戸市の造園会社 59 社からなる団体であり、神戸のまちに憩いの場を提供し、活き活きとした季節の風を感じてもらえるようにすることを大きな目標としています。さらに自然災害発生時など不測の事態に善処する神戸市の協力機関として、必要時に緊急出動及びフレキシブルな対応ができるようにしています。12 年前の阪神・淡路大震災の時には、会員一丸となって、神戸のまち、みどりの復興に寄与してまいりました。また、造園緑化技術の向上研鑽のため教育研修及び会員および市民にとっても安全安心な現場にするためにパトロールの実施などを行っています。

このような私たちが、神戸市の都市公園としては唯一で、かつ文化的価値の高い日本庭園「相楽園」の管理運営に応募したのは、我々が持っている技能・技術を活かせるということと新たな分野へ進出できる絶好の機会と考えたからです。しかし指定管理者という立場は、今までの経験だけでなく、効果的・効率的な管理運営が必要とされます。

まず、公の施設の管理者としての立場を常に認識しなければなりません。入園者(有料)の管理、行為の許可、安全安心な場の提供、さらに情報の提供など公平で迅速な対応が求められます。

次に、入園者に満足していただける庭園管理があげられます。維持管理全般にわたっては、会員の協力のもと実施しておりますが、日々の管理において様々な視点が必要です。例えば、毎日行う必要不可欠な作業として掃除があります。落ち葉はもちろん、あらゆる植物、いきものに目を配りながら、庭園の魅力を倍増するという視点で作業を行っています。庭園にとって雑草といわれるスミレやネジバナ、各地の庭園でも問題となっている実生木や大きくなりすぎた樹木の手入れも重要な管理のひとつです。

もうひとつ、利用の活性化があります。この１年間、試行錯誤しながら入園者向けのイベント等を実施してきました。ＮＰＯ(Ｃ．Ａ．Ｐ)との共催で行ったアート遊山、近隣の神戸山手短期大学との共催パフォーマンスをはじめ、七夕イベントや「松の手入れ」庭園講座など出来る限り我々が関わり実施してきました。しかし一番大切と思われるのは入園者への語り掛け、コミュニケーションです。掃除や作業をしている時も必ず挨拶をし、向うから訊ねていただけるように心掛けています。服装も重要なポイントです。私たちは、造園職人の昔からの服装である半纏を着ています。入園者の皆さんはその姿を見て気軽に植木のことや庭の手入れのことなどを聞いていただけ、逆にこちらからは庭園の魅力などをお話しするきっかけができます。庭には必ず庭師や主の思いがあり、それらを想像しながら庭をまわる楽しみをお話しながら、ここ「相楽園」のファンを地道に増やす努力をしています。

今後はさらに「相楽園」の伝統を大事にしながら、市民にとって身近でかつ魅力ある庭園になるよう努力していきたいと思っています。来年度からは、市民が参画し協働をするための企画も増やしていく予定です。そして市民自らが、関わりたいと思える「あいたのしむ(相楽)園」を目指していきます。



◆指定管理者制度とは？・・平成 15 年 9 月の地方自治法改正により、公の施設の管理運営について、設置の目的を効果的に達成するため必要があると認めるとき、条例の定めるところにより、法人その他の団体であって当該普通地方公共団体が指定するもの(指定管理者)に、公の施設の管理を行わせることができる(地方自治法第 244 条の２　第３項)。

■Dr.フランキーの街角たんけん　第25回

須磨離宮道界隈（その１）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

昨年 12 月末、新聞の神戸地域版にのった１篇の記事が、人々を震撼させた。神戸市須磨区離宮前町の旧室谷邸（ヴォーリズ建築事務所設計、昭和９年竣工、写真１）が、倒壊の可能性ありという理由から現所有者の姫路の不動産業者により解体の方針決定がされた、というニュースである。ヴォーリズのチューダー系住宅作品の白眉であり、神戸市内で初の国有形文化財の登録をされた栄えある建物であっただけに、報道直後から兵庫県建築士会など建築関係団体や、地元自治会、神戸をほんまの文化都市にする会などの市民団体が行政機関に同邸の現地保存を求める要望書を提出し、行政機関も手立てを尽くしたが、その甲斐なく１月末から主要建物の解体作業が始まり、現在は更地となっている。今回は、この問題にも触れつつ、離宮公園の南側に広がる御屋敷街の表情をご紹介したい。

須磨の地は、万葉の世から景勝地として知られ、数々の歌にも詠まれてきた。明治以降、特に明治 21（1888）年 11 月の山陽鉄道兵庫～明石間の開通を境に、須磨海岸から一の谷、塩屋、舞子にかけた一帯が別荘の適地として注目されるようになる。

居留地の外国人は一の谷周辺の高台に木造洋館で別荘を建てた。明治 33（1900）年には住友友純が野口孫市に命じて、須磨浦の松林に住友須磨別邸を建設した。同邸は木造２階建ながら華麗なビクトリアンスタイルの意匠による本格的な別荘建築であったが、昭和 20（1945）年の空襲で建物が焼失、現在は石造の門柱の一部と外構のみが残っている。（写真２）

明治 30 年代、浄土真宗本願寺派第二十二世法主・大谷光瑞は、西国街道の北側、旧跡・村雨松風堂があるほかは、一面田畑の広がる地域であった西須磨の高台に地所を求め、別荘を造営した。実は、この大谷家の別荘に隣接する山林は明治 23（1890）年に離宮予定地として官有林から皇宮地附属地に所管替えされていた。明治 40（1907）年、宮内省は大谷家別荘の地所を買収し、かねてからの離宮建設構想を現実のものとするべく建設計画の具体化を進めた。

実は、神戸における天皇家の施設は、明治 19（1886）年に弁天浜（現ハーバーランド宇治川河口西岸一帯）にあった専崎弥五平（文久３年の政変で、都落ちした三條実美ら七卿を匿った）の家屋敷を買い上げて神戸御用邸としたのを嚆矢とする。明治 24（1891）年５月の大津事件の際、神戸港内に停泊する軍艦アゾヴァ号で静養する露国皇太子ニコライ三世を見舞うため、明治天皇がこの御用邸の桟橋からランチに乗って同号へ向かったという記録が残っている。鈴木博之編「皇室建築」（建築画報社）によると、その後、旧専崎邸時代からの御用邸建物を改築する計画が進行していたが、明治 30（1897）年に基礎工事が終了した段階で工事は中止されていた、という。　　（この項つづく）

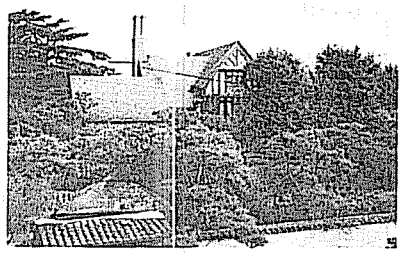


写真１　旧室谷邸（昭和９（1934）年、ヴォーリズ建築事務所設計、現存せず））



写真２　住友須磨別邸（明治 36（1903）年、住友総本店臨時建築部　野口孫市+日高胖設計、現存せず）
※出典：「野口博士建築図集」

水の情景九●ワタシの旅

水田

中川 紺

〈これまでのあらすじ〉自分が探し求める水を辿って旅を続けるワタシは、人間に似ているが人間ではない何かである。行く先々で不思議な水や現象に出会い、途中で拾ったガラス片と糸玉、コイン、そして正体不明の生き物をかばんに入れて、いろいろな町を訪ね続ける。

家がまばらになり、見渡せば見事に紅葉した山に囲まれていた。都会、といわれるところからは、ずいぶんと離れた土地に来てしまったらしい。

相変わらず、ワタシは一人で旅を続けている。いや、正確には一人と一匹で。かばんの中のトカゲに似た不思議な生き物は、先客の白い糸玉がずいぶんとお気に入りのようで、手足と口を器用に使って、糸をほどいたり編んだりすることを、もう何日も続けている。元々の出会いが奇妙だったせいか、こんなことをすると分かっても別段驚きはしなかった。

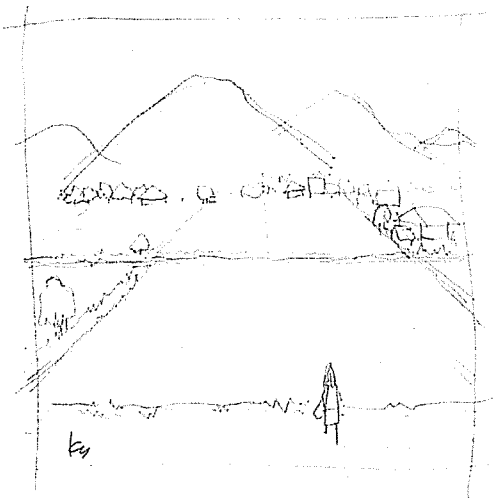
●●

人も車もまばらで、飛んでいる鳥の方がずっと多いように思える。明らかに使っていない田や畑、空き地が広がる中に、白い看板が立っていた。傍らには、家が建ち並んだ明るいタッチの絵が添えられていた。

「平成□□年、○○○線延伸！」「自然に囲まれた住宅地を」「都心まで△△分」「○月□日、分譲開始」……。

ここに新たにまちをつくるのだ、と思った。そういえばバスは見かけたけれど、鉄道の線路は近くに見当たらなかった。でも来年末にはきっと駅が出来ているに違いない。

そして将来、この、雑草が茂る空き地や、



水が枯れてヒビが入った田んぼが小ぎれいな家々に変化するのだ。

きゅう、とかばんの生き物が鳴いた。

ワタシが覗き込むと、そっと白い布を差し出した。どうやら、編みあがったらしい。

小さく見えたそれは、広げるとずいぶんな大きさで、体もかばんもすっぽりと包み込めるくらいだった。そして薄いのに風を通さずにあたたかい。ワタシは頭からすっぽりとその布を被ってみた。

びゅう。と強い風が一吹きして、にわかに空が曇る。瞬く間に暗くなり、雷とともに強い雨が降り始めた。

辺りにいた人は皆、蜘蛛の子を散らすようにどこかへ行ってしまったが、ワタシはまだ田んぼのそばを離れられずにいた。布は水を一滴も通さず、雨具代わりになっていた。

●●

ほどなく、他の音が何も聞こえないほどに、そして視界が遮られるほどに、激しい一降りが来た。枯れた田んぼにもみるみるうちに水がたまっていく。

ところが、それだけではなかった。

緑の苗がいくつもいくつも顔を出し始めたのだ。さらにそれらはぐんぐんと成長して、緑の立派な稲穂となった。やがて黄金色に色づく。たまっていたはずの水も引いていて、そこにはまさに秋の収穫直前といった景色が広がっていた。

そして。大きな雷鳴が轟いて、辺り一帯が光に包まれた瞬間、また元の荒れた土地に戻っていた。雨も小雨に変わっていた。

一瞬の間に過ぎた一年の風景にワタシは見とれていた。もう二度と稲穂を揺らすことのない田んぼに、雨が見せた幻想だったのかもしれない。

（第九話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第５３回連絡会報告

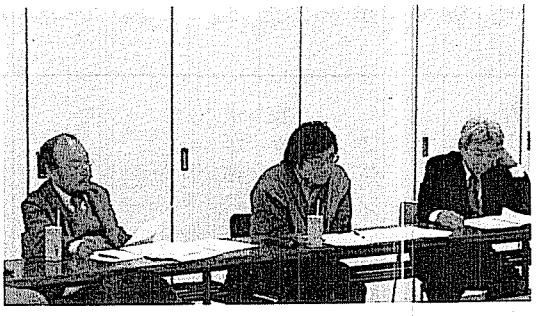
今回のテーマは「まちづくり系コンサルタントの行くへ・Ｐａｒｔ２」で、昨年に引き続き今年も行うことになりました。昨年は 10 名もの方々に報告していただいたのですが、今回はベテランのコンサルタント３氏に登場してもらい、議論を深めていくことにしました。

1. 「まちづくり派コンサルタントの現状・課題・展望」／岩崎俊延（プランまちさと）
2. 「アーキテクト派コンサルタントの現状・課題・展望」／森崎輝行（森崎建築設計事務所）
3. 「ランドスケープ派コンサルタントの現状・課題・展望」／辻　信一（環境緑地設計研究所）

岩崎さんからは、まずご自身の多様な業務について説明していただいた後に、「協働のまちづくりを支える専門家としてのまちづくりコンサルタントの役割と可能性」、「まちづくりコンサルタントの経済的環境と今後の生存可能性」と題して、まちづくりコンサルタントがまちづくりのシステムの中で必要なこと、行政からの経済的な負担が必要なこと、などを説得力を持って語っていただきました。

森崎さんからは、今後の“アーキテクト派コンサルタント”が生きて行く上で大事なこととして、住民参加への関与、多様なコラボレーション、単体から地区への広がりを上げられました。辻さんからは、世の中に役立つことをすれば仕事になるという信念のもとに、様々な“すきま”をねらって多様な仕事ー公園ミーティング、カルタづくりーを行ってきたことなどを語っていただきました。

討論では、都市計画・まちづくりでは人材の育成が必要なこと（特に若い人）、スポンサーの問題（経済効果の証明！？）、行政内でのコンサルタントに関する情報不足の問題などが出されました。（中井都市研究室　中井　豊）



報告者の方々。左から辻さん、森崎さん、岩崎さん。

■ 情報コーナー

●第８５回・水谷ゼミナール

・日時：12 月 26 日(金)18:00～19:30
(忘年会20:00～21:30)
・場所：ﾋﾟﾊﾟ・ｱﾝﾁｮ
・会費：1,000 円
・内容：テーマ「今年できた私たちの作品」、発表①「甲陽園目神山地区集会所・やまびこの家と外構」／世儀敦裕（ジーユー計画研究所）、②「滋賀県栗東の診療所」／安元美帆子（まちづくり（株）コー・プラン）、③「共同建て替えによる集合住宅」／渡辺＋三宅（UR 大阪事務所）、④「六甲道駅北地区集会所」／岩崎俊延（プランまちさと）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL. 078-435-6510）

●日本災害復興学会準備ﾌｫｰﾗﾑ「脆弱な階層・脆弱な地域の復興支援」

＜被災地円卓会議＞
・日時：2007 年１月 13 日(土)14:00～17:00
・場所：関西学院大学学生会館新館３階・会議室９
・内容：議長団／
渥美公秀（阪大）
村井雅清（被災地 NGO 協働ｾﾝﾀｰ）
宮原浩二郎（関学）

＜連続シンポジウム＞
・日時：年１月 14 日(日)10:00～17:00
・場所：兵庫県公館大会議室
・内容：基調報告／井戸敏三（兵庫県知事）、山中茂樹（関学）、シンポ１部／北川フラム（ｱｰﾄﾃﾞｨﾚｸﾀｰ）、天川佳美（ｺｰ・ﾌﾟﾗﾝ）、中貝宗治（豊岡市長）、豊田利久（広島修道大）、林宣嗣（関学）、シンポ２部／柳田邦男（作家）、島本慈子（ﾙﾎﾟﾗｲﾀｰ）、永井幸寿（弁護士）、鈴木敏政（日本総研）、学会立ち上げ宣言／室崎益輝（総務省消防庁消防研究ｾﾝﾀｰ）
・問合せ：関西学院大学災害復興制度研究所（FAX. 0798-54-6997）

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http：//web. Kyoto-inet. or. jp/org/gakugei/kobe/index. htm
◆ http://www1. plala. or. jp/hos_a/kinmokusei_international. html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL. 078-842-2311　FAX. 078-842-2203　Email:mican@ca. mbn. or. jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2007年03月31日発行

月刊

きんもくせい

07年1月号

(50+36+ NO.46)

発行：阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク

■雨の朝、１２年目のさよなら

小林 郁雄（非認証NPOきんもくせい代表）

震災12年目は、雨の1.17であった。夜明け前、神戸市庁舎南の東遊園地に集う人々に、冷たい雨がかなり激しく降っていた。慰霊の竹筒のローソクは、何度、灯をつけても消えてしまった。5時46分、黙祷の時に、それでも半数ほどのローソクに火がついていただろうか、かろうじて1.17という形に見えただろうか。





7月から兵庫県の海外技術研修員としてコー・プランに来ていたアナさん（Ms. ANA LUIZA Yumie NISHIMURA）と、2004年4月新入社員（事務と建築設計担当）の安元美帆子さんの3人で、今年は参加した。アナちゃんはブラジル・クリチバ市からの新米建築家で、名前の通り日系3世である。恐るべきANDO建築ファンでこの2月に帰国するまでに京阪神の安藤忠雄設計のほとんどの建築を訪ねた。

昨年11月、荏本(えのもと)教授に依頼され、神奈川大学の学術フロンティア研究会で復興まちづくりの話をしたときに、池田邦昭さん、村上直子さんら防災塾・だるまの皆様とも知り合い、10人近い方が今年の「1.17のつどい」に参加してくれた。



例年、神戸市民にとって1.17が新年であるというか、1.17が過ぎないと新しい年は来ない。大震災から12年が経つ。被災は被覆され、復興は日常化し、時は静かに流れている。

4年間になる「月刊きんもくせい」をこの3月号（第48号）で終刊とします。「きんもくせ」50号、「報告きんもくせい」36号と合わせれば、1995年2月10日創刊以来12年間計134号になります。最終3月号は皆さんからの寄稿を全部収録したものとしたいと思ってます。2007年4月末までに事務局までメール、ファックス、郵便などでご寄稿をお寄せください。

また新たな「きんもくせい」で、お目にかかることがあるかもしれませんが、12年目のさよなら。

■Dr.フランキーの街角たんけん　第26回

須磨離宮道界隈（その２）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

鈴木博之編「皇室建築」（建築画報社）によれば、武庫離宮の計画は、既に明治天皇の採決を得ていた神戸御用邸改築のプランを生かす形で、練られたという。離宮の造営は明治44(1911)年11月に着手され、明治天皇の崩御による中断を挟んで、大正３（1914）年12月、電気工事を残して竣工を見た（写真１）。奇しくも同じ年、大谷光瑞は須磨の別荘買収にまつわる疑獄問題等が原因で、法主の座を追われている。

須磨離宮が完成する前後から、離宮周辺では神戸の財界人が邸宅を構えるようになっていた。離宮の東、皿池（現市立須磨高等学校敷地）北側には川崎造船所初代社長の川崎正蔵が明治期半ばに木造２階建の和風建築の別荘を営んだ。後に正蔵の養嗣子・芳太郎によって追加された洋館（山田醇設計）ともども改造を加えられながらも震災時まで残っており、最後は修道院として使われていた。

その西側、現在の離宮植物園の敷地に、大正７（1918）年、岡崎銀行の頭取・岡崎藤吉の邸宅が完成している。この岡崎邸の洋館は設楽建築工務所の設計である。岡崎家といえば、現在、木村拓哉主演でテレビドラマが放送中の山崎豊子原作「華麗なる一族」の萬俵家のモデルとなったことはあまりに有名である（写真２）。

離宮の東側ばかりでなく離宮道の西側に目を転じると、現在の桜木町３丁目には大正６（1917）年、船成金の内田信也が広大な邸宅を構えた。当初は宗兵蔵（幕臣出身、工部大学校卒、宮内省、藤田組を経て大阪で建築事務所を自営）設計の洋館（写真３）だけだったが、後年、洋館を曳家して設楽建築工務所の設計になる和風の御殿棟を増築した。洋館は昭和60年ごろ、解体され、ステンドグラスのみが敷地内の別の建物に移設。御殿棟は震災で大きなダメージを受け、解体撤去された。また離宮西側には、貿易商・西尾類蔵のセセッションスタイルの大きな煉瓦造構造の洋館が、やはり設楽建築工務所の設計、旗手組の施工で大正９（1920）年に完成している（現ヴィスカヤ・ガーデン翠風苑）。

こうしてみると、須磨には、明治後期から大正初期にかけて、離宮の建設を一つの契機にまず規模の大きな貴紳の住まいが点として展開したことがわかる。東の住吉村・御影町が大阪の財界人中心であったのに対し、須磨は神戸に根拠を置く実業家が多いのも特徴だ。

須磨の地に建った邸宅の設計を、設楽貞雄の事務所が多く手がけているのも目立つ。設楽貞雄（二本松の代官の子、工手学校卒。宮内省、山口半六事務所等を経て神戸で独立）の事務所は、名古屋高専や京都帝国大学出身の優秀な技術者を多く擁していた一方、支配人に宮大工出身の木村梅次郎を据えるなど、和風建築も器用にこなすレパートリーの幅の広さを誇った。設楽自身も昭和８年ごろまで西須磨上天神東町（現天神町５丁目）に自邸を構え、最晩年も桜木町に住まいした。

（この項つづく）

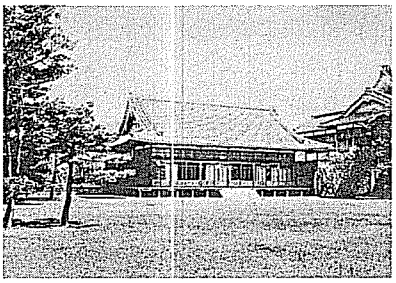


写真１　須磨離宮謁見所（大正３(1914)年竣工、宮内省内匠寮設計、現存せず　※出典「鳳闕」）



写真２　岡崎邸（大正７（1918）年竣工、設楽建築工務所設計、現存せず※出典「近代建築畫譜」）

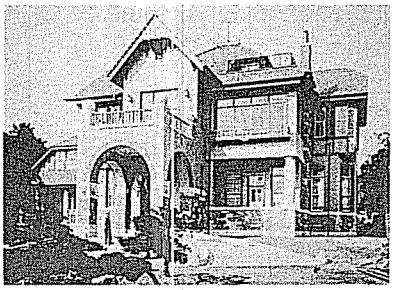


写真３　内田邸洋館（大正６（1917）年竣工、宗兵蔵設計、現存せず※出典「建築写真類聚・住宅の外観巻三」

■神戸のみどり・その８『相楽園異聞』（上）

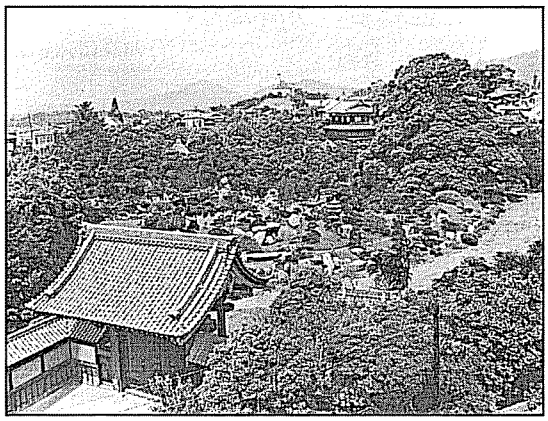
小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

１．海への熱い思い

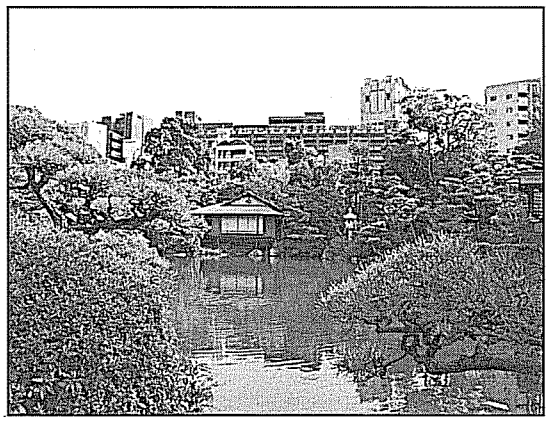
「相楽園」について書くには、その創始者小寺泰次郎が三田藩(九鬼家)藩士であったので、まず三田藩九鬼家の略歴から始めなければならない。それは小寺泰次郎がなぜこの地に「相楽園」の前身である小寺邸を営んだかということと大きな関わりがあるからだ。九鬼家はもともと紀州鳥羽の海賊出身で海の戦を得意とする家柄だ。しかし九鬼水軍は村上水軍ほど有名ではないかもしれない。天正５(1577)年ごろ、織田信長が石山本願寺(現在の大阪城あたり)を攻めあぐんでいた。ＮＰＯ法人ドラマ九鬼奔流で町おこしをする会が発行する『**水軍九鬼氏と三田藩の歴史**』によると、同族との抗争などから志摩を追われた紀州鳥羽の九鬼隆義（九鬼家藩祖）は信長に臣従を誓い、毛利方の村上水軍が海路を運んでくる糧食を絶つため、火矢、投げ炮烙、火桶攻めに耐える鉄張りの大安宅船（いわゆる鉄甲船）の建造を提案した。＜信長は「おもしろい。造れ、即座に造れ。費用は惜しまぬ」と、即座に応じた。＞　天正 6(1578)年三艘の巨大な鉄張りの船が建造され、ついに九鬼水軍は毛利の村上水軍を破り、名実ともに織田水軍といわれるようになった。

慶長５(1600)年関ヶ原の戦いが起った。九鬼家は戦国の習いとして家の存亡を賭けて、隆義は西軍の豊臣方に、息子守隆は東軍の徳川方に味方し、父子別れて戦う。関ヶ原に破れた隆義は、息子守隆の命乞いにもかかわらず許されなかった。隆義は九鬼家への影響を思い自刃した。家康は隆義が行った海上からの石山本願寺攻めなどの豊かな経験を恐れたという。その後、鳥羽城主（5 万 6 千石）守隆の四男久隆と三男隆季との間に家督争いが起きた。かねてから九鬼水軍の巨大化を恐れていた幕府は久隆の家督相続を認めたが、この機に乗じて摂津三田（3 万 6 千石）へ転封するとともに、新たに隆季を丹波綾部 2 万石に封じた。これは九鬼水軍を分割し、かつ海のない領地に配して「陸に上がった河童」にした幕府政策の勝利だった。

「陸に上がった河童」三田藩は海への憧れを捨てずに、事あれば対応できるように館周辺に志摩半島の地形になぞった池堀を掘り水練の場に、三田川畔に舟小屋を作り、川を堰き止めて操船の訓練に励み、水軍の備えを怠らなかった。しかし現実を見つめた政策として世の中の情勢を見極めるための実学的学問を推奨し、藩士の教育に力を注いだ。その結果、川本公民など幾多の有能な人材を輩出した。中でも最後の藩主九鬼隆義は疲弊した藩財政を立て直すため、藩儒学者白州退蔵や足軽小寺泰次郎などを家老格に抜擢し、有能な人材の登用を計った。二人の改革は門地を重んじる旧勢力や領民から「二たい」と呼ばれて嫌われるほど強力に進められた。先見性豊かで旧式を排し、欧化政策を推進するとともに完全な西欧式兵制を採用し、例えば鎧甲は全藩士に藩への拠出を命じ、火縄銃や古い大砲など旧式装備も含めてまだ目覚めていない他藩へ売却し、借財を返還して藩財政を二年で立て直した。



■戦前の相楽園(神戸市蔵)



■現在の相楽園

「これからの藩政の指針をお聞かせ願いたい」
隆義は川本幸民を通じて知り合った福沢諭吉に問うた。
「民間の手による商業に力を入れられたらいかがでしょう。これからは民の力です。官営は先が見えています」
隆義は、アメリカ的自由主義に心酔する福沢諭吉の提言を入れて近代資本主義的考え方に立つ帰農帰商策を三田藩の指針として藩士に示した。
「これからは海のある神戸だと思う。わが藩の長年の願いが叶うときぞ。海は世界に通じる。世界へ眼を向けようぞ」
隆義は諭吉の助言により発展の予測される開港間もない神戸に率先して移住し、花隈城址の東側に住んだ。そして隆義始め白州退蔵、小寺泰次郎以下藩士 15 人が役員の「志摩三商会」という西洋薬品が中心、食料品、雑貨などを扱う神戸初の輸入商社を設立した。志摩三とは、九鬼家出身地志摩と三田を意味する。この会社、実際は陸奥宗光と関係が深い豪商加納宗七が実施した生田川付け替え工事で生まれた埋立地の売買で得た資金で金融業を興し、経営基盤を固め、花隈周辺から海にかけての土地を安価で買い占めていった。
なお、隆義はこの他にも海運業、牧畜業、三田青磁の復興などに取り組んだが、事業拡大を急ぎすぎたため多くは失敗したが、その先進的な視野の広い考えは明治維新の中で世の中の発展に大きく寄与したことは特筆に値すると思う。しかし、隆義は明治 2(1869)年百姓一揆に見舞われる。藩外へ急速な事業拡大を図って領民を顧みなかった、というのがその理由で、現在でも地元の人に評判が悪いそうだ。
しかし、三田藩の海へ熱い思いが相楽園エリアとその直下の開港間もない元町の港を中心に神戸の発展に

も大きく影響したことは間違いないであろう。また相楽園周辺は海を通じて世界へ眼を向けていた人々の先進的な心を養う場所だったかもしれない。

2．小寺泰次郎と相楽園

小寺泰次郎は三田藩の足軽の子として足軽町に生まれた。特に理財の才があり、「そろばん侍」といわれ、隆義の人材登用により代官として辣腕を振るった。前述したように隆義の命により白州退蔵と一緒に藩政改革を断行し、わずかの間に藩債務を完済した。そして改革は門地、家柄、慣習などに囚われない自由な発想で断行されたことはすばらしい。鎧甲の話は一見すべてをかなぐり捨て、財政的視点からだけのように見えるが、彼らはその文化財的価値を知っていたからこそ藩財政立て直しの貴重な財源として計算できたのではないかと思われる。そして、抵抗勢力の強力な反対運動と抵抗も予想される中、すべての藩士から鎧甲を供出させた、妥協しない改革の断行はすごい。この目標に立ち向かう姿勢は当時としては極めて斬新だったといえよう。一方、現代ではただ闇雲にすべてを財政的見地からのみ見ているきらいがあり、財政がすべてに優先するような考え方が横行しすぎているように思えるのは悲しい。彼は投機師の活眼と時勢を洞察する卓越した才能を持ち合わせていた。前述の志摩三商会の事業に精を出したのも小寺泰次郎だ。藩侯の屋敷がある花隈に近い「相楽園」の地も隆義と他一名の所有だった。彼は藩侯の仕事をしながら、その土地を分けてもらい、小寺邸及び庭園の造営を始めたのは明治 19(1886)年から 20(1887)年にかけてのことだった。
陸に上がった三田藩が生き残りをかけて情熱を注いだ子弟の教育は、彼のなかにも生き続けていた。ずっと理想の学校建設に情熱を燃やして私学三田学園の基礎を確立し、息子の小寺謙吉が引き継いで建学された。小寺泰次郎は明治 38(1905)年に亡くなれたが、謙吉の時代の大正 2 年（1913）の地租番付によると、西の横綱小寺、東は九鬼。金持ち華族九鬼は白州、小寺両氏のお陰と世間ではいわれていたらしい。しかし小寺泰次郎はただの金持ちでなく、神戸 100 年の大計を考えていたという。例えば、道路幅員などは「もっと広くとれ」が持論だったが、「あれはな、自分の土地を売りたいからや」と人々が言うのを聞くと、道路に計画されている土地を元の地主に買値で買い戻させて意地を貫いたりした。また全国で災害が起きると、いつも皇室下賜金の 1/200 にあたる災害寄付をし続けた。

（この項続く）

水の情景十●ワタシの旅

冬のプール

中川　紺

きゅるるるる。

かばんの中が騒がしい。以前、公園の手押しポンプの中に住んでいたトカゲのような青緑の生き物が、今はワタシの旅に同行している。彼（彼女かもしれない）が最近よく鳴くようになった。周囲に誰もいなければ、かばんの縁から首を出してじっと遠くを見ている。

どっか行きたいところ、あるの？

そうだ、と言わんばかりに頭を振る。

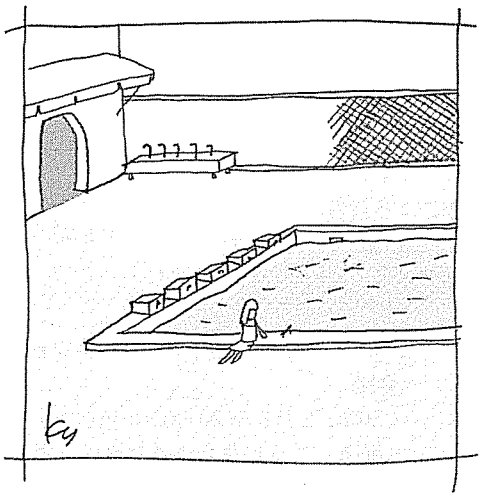
よく分からないけれど、こっち、と言っているであろう方向に、早朝の道を急いだ。ビル街の大きなカフェのガラス窓に白い人影が映っていた。生き物が編んだ白いストールに包まったワタシ。白いシャツ、白い手。黒く長い髪を除けば、本当に全身が白で包まれている、と改めて思った。

●●

たどり着いたところは、中学校のプールだった。もちろん門は閉ざされて部外者が入れるつくりにはなっていないのだが、フェンスの隅に子供一人が通れるくらいの穴が空いていたので、身体を小さくしてそこを抜けた。

かばんの中の生き物は、もう鳴くのをやめていた。そのかわり、恐ろしくそわそわしていることが伝わって来た。ここに連れて来て本当によかったのか、分からない。でももう来てしまったものは仕方なかった。

早朝、ということもあるし、冬休みのせいもあって、学校にも、もちろんプールにも人の気配は無かった。しかしプールには水が満たされていて、ただシーズン中とは違うことは、大量の藻が発生して水面を被っていることだった。水草特有の青臭さだけでなく、何か異様な臭いが、立ちこめていた。



するん。と、かばんの生き物が飛び出したのはあっという間だった。藻がまだらになった部分から水中に潜ると第一コースの飛び込み台の下あたりに顔を出した。

戻っておいで。その言葉が届かぬうちに、緑の水面が波打った。よく見れば、水が動いたのではなく、生き物が藻を吸い込んでいるのだ。あの小さな体と口で。

緑の絨毯の端を持って勢いよくたぐり寄せるように、プールを被っていた藻が片っ端から生き物に呑み込まれいった。そしてそれにつれて、お腹も手足もしっぽも太く長くなっていき、体はどんどん成長した。

五分もしないうちに、以前の面影はほとんど無くなった。特に体はずいぶんと長く立派になり、今やプールのほとんどを占拠して、さらには底でとぐろを巻けるほどである。

そして、最後のひとかけらが、その口に消えた。

●●

水面が、もう一度大きく波打った。

頭をもたげたその姿は、どこかの看板で見たことがある。二本の角、手に大きな爪、蛇のように長い体。立派な龍だった。

懐かしい瞳でこちらを一瞥すると、素早く音も立てずに水中に潜った。そしてそのままプールの底に消えていった。

我に返ったワタシは、あわててプールサイドにしゃがんだ。目を凝らして水底に龍の姿を探したけれど、後には少し濁った水が残るばかりだった。

（第十話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 第８５回・水谷ゼミナール報告

・日時：12 月 26 日(金)18:00～19:30 (忘年会20:00～21:30)
・場所：ﾋﾟﾊﾟ･ｱﾝﾁｮ(神戸市中央区北野)
・内容： テーマ「今年できた私たちの作品」、発表①「甲陽園目神山地区集会所・やまびこの家と外構」／世儀敦裕（ジーユー計画研究所）、②「滋賀県栗東の診療所」／安元美帆子（まちづくり（株）コー・プラン）、③「共同建て替えによる集合住宅」／渡辺＋三宅（UR 大阪事務所）、④「六甲道駅北地区集会所」／岩崎俊延（プランまちさと）

今回の水谷ゼミナールは、年末恒例の“作品シリーズ”で、４氏・組から発表がありました。世儀さんからは、まちづくり支援を行ってきている地域で、調整池の敷地を使ったユニークなデザインの集会所づくりについて報告がありました。安元さんからは、滋賀県栗東市の調整区域に建つ診療所と震災で傾いた昭和初期の木造住宅の改修について報告がありました。渡部さんと三宅さんからは、水道筋商店街（神戸市灘区）に面する敷地での共同化による集合住宅建設についての報告がありました。最後に岩崎さんからは、震災復興区画整理事業が行われている地区で、設計コンペによる集会所ができる経緯と地域による運営についての報告がありました。（中井都市研究室　中井　豊）



水谷ゼミナールの様子



ブラジル・クリチバから兵庫県の技術研修でコー・プランに来ているアナ・ルイザ・ニシムラさん、右は天川さん。

■ 情報コーナー

●阪神白地市民まちづくり支援ネットワーク・第５４回連絡会
・日時：２月２日(金)18:30～20:50
・場所：神戸市勤労会館 307 号室
・内容：テーマ「神戸都心ウォーターフロントのゆくえ」、テーマ解説：小林郁雄（コー・プラン）、報告：①「都心ウォーターフロントの景観形成」／白井治氏（まち空間研究所）、②「ポートアイランド(旧コンテナ埠頭)への大学立地」／中山久憲（神戸市都市計画総局）
・会費：５００円
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●第 18 回まちづくりコンサルタント会議
・日時：２月８日(木) 13:15～16:300
・場所：こうべまちづくり会館２階ホール
・内容：テーマ「『住民主体のまちづくり』支援施策、これからの展開～その１：現在の状況と住民主体のまちづくりの今後～」、会議の趣旨説明・基調報告／兵庫県都市政策課、市町の発表「施策の状況と課題」神戸市都市計画総局計画部地域支援室、西宮市都市局都市計画部都市政策グループ、コンサルタントからのコメント「住民・行政取り組みの実態ー派遣コンサルの視点から」、意見交換
・問合せ：ひょうごまちづくりセンター（TEL.078-367-1263 、 FAX.078-367-1264

●第 18 回「くらし・すまい塾」
・日時：２月 19 日(月)18:30～20:30
・場所：石東・都市環境研究室
・テーマ：「５１白書」の学び始め、①チューター／塚田由佳里、室崎生子
・参加費：５００円
・問合せ：石東・都市環境研究室 (TEL/FAX. 0797－35－5622)

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ
◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町 2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2007年4月10日発行

月刊 きんもくせい

07年2月号

(50+36+ NO. 47)

発行：阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク

Planning for Post-Disaster Rebuilding : An Update from New Orleans

Laurie Johnson (AICP, Consultant, San Francisco, CA, and disaster recovery and risk management consultant to UNOP)

Raphael Rabalais (planner with GCR & Associates, Inc., New Orleans, LA, and data management and district planning team coordinator for UNOP)

Hurricane Katrina's impact upon every facet of present day New Orleans cannot be overstated. Eighteen months after the storm's devastating landfall, virtually all of the headlines in the local newspapers are related in some way to Katrina's impact and the region's attempt to recover. Infrastructure remains a shambles; basic services that are essential to a high quality of life remain spotty; and pre-Katrina problems with the economy, public education, and crime all seem to have been exacerbated by the storm.

The Unified New Orleans Plan (UNOP), initiated in September 2006 and now awaiting approval from city government, attempts to provide a recovery roadmap for residents, businesses, investors, and all branches of government. At the plan's core is a suite of recovery projects totaling $14 billion that illuminates the gaps, to date, in both the public and private funds allocated toward New Orleans' recovery.[1] The projects touch upon nearly every urban system that must be jump-started following Katrina's devastating blow—from repairs to public facilities, infrastructure, and transportation to rebuilding neighborhoods and housing in a more sustainable fashion. The plan also provides a strategic recovery framework with priorities and phasing—to be finalized by city government as funding is secured and implementation is initiated—that can help guide future investment decisions.

UNOP is the latest in a series of planning efforts that have proceeded in fits and starts in the 18 months since Katrina struck.[2] In the storm's immediate aftermath, there was a widespread recognition that ambitious, long-range planning was necessary to address both the post-disaster recovery needs and the myriad, seemingly-intractable problems that had plagued New Orleans prior to the storm. Mayor Ray Nagin responded by convening an ad-hoc commission, called the Bring New Orleans Back (BNOB) Commission, that devised a series of high-level, subject-specific plans in January of 2006 that addressed a full spectrum of recovery and community improvement issues. By far, the most controversial of these was the Urban Planning Committee report, which endorsed the idea of shrinking the City's footprint and replacing certain low-lying neighborhoods with green space. The report also recommended that more detailed, neighborhood-based planning be conducted next to evaluate the long-term viability of heavily-damaged neighborhoods. This next phase of the BNOB process did not materialize as funding and

[1] Unified New Orleans Plan, "Draft Citywide Strategic Recovery and Rebuilding Plan, January 29, 2006," Available at www.unifiedneworleansplan.org.

[2] Horne, Jedidiah and Brendan Nee. "An Overview of Post-Katrina Planning in New Orleans," unpublished manuscript. October 18, 2006. Available at www.nolaplans.com.

political support for the controversial document faltered, but the concept of neighborhood-based planning endured.

In the spring of 2006, the New Orleans City Council stepped into the post-BNOB planning void, funding a neighborhood-based effort, called the New Orleans Neighborhoods Rebuilding Plan, which proceeded through the end of the summer. This process focused on the immediate needs of slightly more than half of the City's officially-recognized 73 neighborhoods – known as the "wet neighborhoods." Essential to the plan's recommendations was an assumption that 100-year flood protection would be provided expeditiously to the entire city and future flood risk would be reduced to a more acceptable level. In contrast to the BNOB plans, the New Orleans Neighborhoods Rebuilding Plan contained few recommendations for hazard mitigation and flood risk management and focused instead on restoring the neighborhood housing, infrastructure, and quality of life lost in Katrina.

By the early summer of 2006, it was becoming clear that these and other previous planning efforts lacked either the political support or comprehensiveness of other parish recovery plans that were being submitted to the Louisiana Recovery Authority, most of which had been prepared through the FEMA-led Emergency Support Function 14 (ESF-14) long-term recovery planning processes.[3] BNOB had produced a high-level (albeit controversial) framework for rebuilding and the Neighborhoods Rebuilding Plan provided a more detailed set of recovery plans for a portion of the city's neighborhoods. In addition, many neighborhoods were continuing to organize and undertake planning efforts of their own, with the assistance of universities and consultants throughout the country.

Finally, in the last week of August, 2006, New Orleans' Mayor, City Council and City Planning Commission and the Louisiana Recovery Authority signed a memorandum of understanding to support the development of the Unified New Orleans Plan. Funding for UNOP came mainly from the philanthropic community, largely through grants from the Rockefeller Foundation, the Greater New Orleans Foundation and the Bush-Clinton Katrina Fund.

Highlights of the UNOP Process

New Orleans' City Planning Commission staff helped design the 5-month UNOP process, using its Neighborhood (Recovery) Planning Guide (adopted by the City Planning Commission in June, 2006) as a partial guide. From the start, the process took a two-tiered approach to planning. A citywide planning team had 2 key charges: assessing the more systemic, citywide recovery needs, such as infrastructure recovery, and unifying the previous and ongoing planning efforts into one comprehensive Citywide Strategic Recovery and Rebuilding Plan. Another group of planning consultants worked at the "district-level," constructing District Recovery Plans for each of the City's 13 planning districts (administrative areas delineated by the City Planning Commission during the 1980s). All the consultants were selected through a national "request for qualifications" process, overseen by a panel of national planning experts. Citizens and neighborhood groups also had a say in selecting the district planning consultant teams that best matched their needs.

Both the citywide and district teams followed a similar 3-phase structure: first, conducting a comprehensive recovery assessment; next, developing and selecting recovery scenario preferences; and then, constructing the recovery plans and prioritized list of recovery projects. The UNOP process also had an extensive communications component, with more standard planning communications elements, such as the website (www.unifiedneworleansplan.org), newsletters, media relations, and neighborhood meetings, in combination with some innovative elements to address the unique conditions

[3] FEMA did conduct an ESF-14 planning process in Orleans parish from September 2005 until August 2006 but the resulting document has not been a major part of the city's planning debates.

of the project. District planners held 4 rounds of meetings in each planning district of the city over the course of 4 designated weekends. AmericaSpeaks – a nationally renowned non-profit focused on engaging citizens in public decision-making, joined forces with UNOP to design and conduct 3 "community congresses" that brought together 300 to 2,500 New Orleanians (both locally and those still displaced by the storm) to provide input into the citywide planning process. Community congresses II and III were conducted as simulcast meetings in New Orleans, Houston, Dallas, and Atlanta, with many others linked in through the web at libraries and other meeting sites across the country. In these congresses, residents from a variety of neighborhoods sat together and shared their views on what was best for the city "as a whole" and voted on their priorities for flood protection, neighborhood stabilization, housing, infrastructure, public facilities, and public services. Throughout the process, the planning teams maintained a top-down and bottom-up interaction that, coupled with the broad citizen input, helped establish the recovery scenario preferences and principles for the plan.

Risk-based Approach to Recovery Planning

The UNOP plans are developed around a strategic recovery framework that works to balance citizens' preferences with 2 key risks that could undermine the city's future and any recovery investments: the pace of repopulation and risk of future flooding. As of January, 2007, only half of the city's pre-Katrina population had returned, but forcibly shrinking the footprint to respond to a smaller population was not a politically palatable option. The plan proposes that the phasing of infrastructure and public facilities investment reflect post-Katrina population shifts. Through public investment decisions and direct financial assistance to residents and businesses, the plan seeks to "incentivize" the recovery of repopulating areas and the "clustering" of residents who reside in areas slow to repopulate.

Following Katrina, the U.S. Army Corps of Engineers (the Corps) set about repairing all the storm-damaged levees and floodwalls and making some enhancements; additional upgrades are also scheduled for completion by the end of 2007. The U.S. Congress also directed the Corps to develop a project report for providing a category 5 level of protection for coastal Louisiana that includes a full range of flood control, coastal restoration and hurricane protection measures.[4] The report is now scheduled for release in April 2007.

Throughout the UNOP process, district and citywide planners worked together to communicate the uncertainties in future protection plans and schedules as well as the future risks of flooding in different parts of the City. At both the district meetings and the community congresses, citizens strongly endorsed having a more redundant flood risk management system that combines enhanced levee protection with coastal wetlands restoration and more effective building practices. The citywide plan advocates for securing permanent funding to upgrade the external flood control system of levees, floodwalls, and a restored coast, and it also proposes some key voluntary incentives for rebuilding that give residents more options to protect themselves. A neighborhood stabilization program is proposed to encourage residents of areas of the city where less than a quarter of the population has returned (also the areas that experienced the most acute flooding) to rebuild in clusters at higher elevations to help ensure vibrant neighborhoods and more efficient infrastructure costs in the context of a smaller overall population. The plan also calls for substantial incentives to fill the funding "gaps" for homeowners to either elevate their structures or reconstruct slab-on-grade structures to (at a minimum) the latest FEMA advisory base flood elevations released in April 2006. As with the other proposed policies, programs, and projects, funding for these programs still needs to be secured as part of implementation, and the plan recommends that the state's hazard mitigation and CDBG funds be considered as potential sources.

[4] Boston, Bret and Vern Herr. February 13 – 14, 2006. Category 5: Louisiana Coastal Protection and Restoration (LACPR) Workshop Transcripts. For U.S. Army Corps of Engineers, New Orleans District. By Group Solutions, Inc., Alpharetta, GA, 133 pp.

Next Steps and Approval Process

As of mid-March, 2007, New Orleans' City Planning Commission (CPC) has held 4 public hearings on the draft citywide plan, and the UNOP consultants are now responding to the comments received and will submit a final draft to the CPC for a decision in April. Under New Orleans' Home Rule Charter, the CPC is charged with preparing and recommending post-disaster reconstruction plans to the City Council.[5] If the citywide plan is approved, the city can then submit it to the state and federal governments and any other investors it chooses to pursue. Citizens are also calling for updates to the city's Master Plan and Comprehensive Zoning Ordinance so that both documents better reflect the planning principles and policies, programs and projects proposed in both the citywide and district plans.

It is important that UNOP not be viewed as an end point. Rather, it is a critical milestone along the long road to recovery and, in the case of the recovery underway in New Orleans, most of the journey lies ahead. Leadership for the recovery has also now been transferred to the city's newly-designated Office of Recovery Management. In December, 2006, Mayor Nagin appointed Dr. Ed Blakely as the city's new Executive Director for Recovery Management to coordinate and direct recovery efforts. Dr. Blakely has now staffed the Office of Recovery Management and has already started developing action plans that are based, in part, on the UNOP plans. Dr. Blakely has also begun laying the groundwork to form a parish-wide recovery council—one of the principal implementation actions called for in the citywide plan. This council is to be comprised of representatives from all key city departments and other parish agencies with major recovery and rebuilding responsibilities, to help coordinate and facilitate the recovery effort.

■災害後の復興計画の策定をめぐって—ニューオリンズの現状—

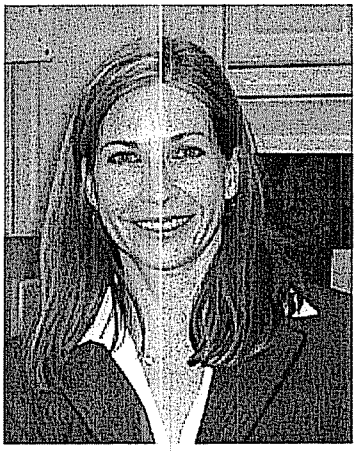
ローリー・ジョンソン

(米国都市計画家協会認定プランナー、コンサルタント、カリフォルニア州サンフランシスコ在住、UNOP の策定に災害復興・リスクマネージメントに関するコンサルタントとして関わる)

ラファエル・ラブラシス

(GCR & Associates, Inc. 所属のプランナー、ルイジアナ州ニューオリンズ在住、UNOP の策定にデータマネジメントと地区計画チームのコーディネータとして関わる)

翻訳：**牧紀男**（京都大学防災研究所巨大災害研究センター助教授）



ローリーさん・SF の自邸で／060418

ハリケーン・カトリーナの被害は、ニューオリンズの社会のあらゆる側面に及んでいるといっても過言ではない。甚大な被害を与えたハリケーンの上陸から一年半が経過した日の各地方紙の見出しは、軒並み、「インフラ、未だ完全に復旧せず」、「生活を行う上で不可欠な基本サービスの復旧、未だまだら模様」、「カトリーナ以前から問題の経済・公的な教育・犯罪が、より深刻に」といった、カトリーナの被害やその後の復興に関するものであった。

[5] City of New Orleans, Home Rule Charter, Sections 5-402 and 6-104, available at http://www.nocitycouncil.com/cityCodes.asp

統合ニューオリンズ計画 The Unified New Orleans Plan (以下、UNOP)は、住民、企業、投資家、市の全ての部局に対して、復興への道しるべを提供する事を目的とした計画であり、2006年9月に計画策定が開始され、現在、市の承認を待つ段階にある。計画の核となるのは、総額140億ドルにも及ぶ一連の復興プロジェクトであり、短期・中期・長期といった期間毎に、復興に必要な公的資金・民間資金のギャップを明らかにしている[6]。この復興プロジェクトは、カトリーナによる壊滅的な被害からの速やかな復興に必要な都市システムに関わるあらゆる分野にまたがり、公共施設、インフラ、交通機関の復旧から、持続的な地域や住宅の再建にまで及ぶ。この計画では、また、戦略的な復興の枠組みに基づき、将来の投資の意思決定のガイドラインとなるプロジェクトの優先順位や達成時期も明示している。ただし、予算の確保と、実際のプロジェクト開始時期については現在、市の最終決定待ちである。

UNOP は、災害発生以降、断続的に行われてきたいくつかの計画策定作業の中で、最新のものである[7]。災害直後、多くの人が、災害からの復興と同時に災害前からニューオリンズに存在した数多くの非常に難しい問題を解決するため、大がかりな長期計画を策定する必要があると考えていた。レイ・ニーギン・ニューオリンズ市長はそういった期待に応え、Bring New Orleans Back (BNOP) Commission と呼ばれる特別な委員会を設置し、2006年1月までにニューオリンズの復興と再生に関わる全ての課題に関する、個別課題毎の上位計画となる計画を策定した。この計画の中で最も大きな議論を巻き起こしたのは、市域を縮小し、低地に位置する地区を緑地化するという、都市計画委員会の報告書であった。その報告書では、大きな被害を受けた地区の再建可能性について長期的な視点から評価するために、次のステップとして、地区が主体となってより詳細な計画を策定する事も提案していた。地元が主体となった計画という考え方は認められたが、大議論を巻き起こした報告書の内容を予算化することや政治的に支援する事を尻込みし、地区が主体となったより詳細な計画策定は実施されなかった。

2006 年の春になると、ニューオリンズ市議会がポスト・BNOP の計画策定に参入し、The New Orleans Neighborhoods Rebuilding Plan と呼ばれる、地区が主体となった計画に予算をつけ、夏の終わりまでに計画策定を終えた。これは、市が公式に認める73ある地区の半数を少し超える“低地”の地区のニーズに焦点を当てたものであった。この計画提案の重要な前提となっていたのは、市域全体が100年確率の洪水に対して速やかに安全になり、将来の洪水リスクを受け入れ可能なレベルに軽減するということであった。この計画提案は、カトリーナによる災害により被害を受けた地区の住宅、インフラ、生活の質の回復に焦点を置いたもので、BNOP とは対照的に被害抑止や洪水のリスクマネージメントに関する提案はほとんど存在しなかった。

2006 年の夏の初めになると、これまでに策定された計画の問題点として、政治的な支援が得られない事、ルイジアナ復興局(The Louisiana Recovery Authority)に提出された他の郡 (Parish) の復興計画のような総合性が欠けている事が明らかになってきた。他の郡 (Parish) の復興計画は、連邦危機管理庁 (FEMA) の支援の枠組みである「緊急支援機能14／復興計画 (Emergency Support Functions 14＝ESF14)」の仕組みで策定されたものであった[8]。BNOP の計画は復興の上位の枠組みを提示するものであり (大きな議論を巻き起こしたが)、The New Orleans Neighborhoods Rebuilding Plan は市の各地区のより詳細な計画となるものであった。また、多くの地区において全米の大学やコンサルタントが支援して独自の計画策定作業が行われていた。

---

[6] Unified New Orleans Plan, “Draft Citywide Strategic Recovery and Rebuilding Plan, January 29, 2006,” www.unifiedneworleansplan.org.参照

[7] Horne, Jedidiah and Brendan Nee. “An Overview of Post-Katrina Planning in New Orleans,” unpublished manuscript. October 18, 2006. www.nolaplans.com.参照

[8] FEMA は2005年9月～2006年8月まで ESF14 に基づきニューオリンズ郡の計画を行ったが、その結果策定された文書はニューオリンズ市における計画に係わる議論ではほとんど取り上げられることが無かった。

2006年の8月の最終週にようやく、ニューオリンズ市長、ニューオリンズ市議会、ニューオリンズ市都市計画コミッション、ルイジアナ復興局の間で、統合ニューオリンズ計画（UNOP）を策定する事の協定書の調印が行われた。UNOP を策定するための予算は、主としてロックフェラー財団、大ニューオリンズ財団(The Greater New Orleans Foundation)、ブッシュ・クリントン・カトリーナ基金(The Bush-Clinton Katrina Fund)といった民間の助成金により賄われた。

UNOP 策定過程の特徴

ニューオリンズ市都市計画コミッションの職員が、地区計画（復旧）ガイドライン（ニューオリンズ市都市計画コミッション、2006年6月採択）を一部参照しながら、5ヶ月にわたるUNOPの策定プロセスの設定を行った。計画は当初から2層構造の策定プロセスとなっていた。全市計画に関わるチームには、インフラの復興といったより体系的で市全体に関わる復興のニーズの評価の実施と、総合的な「全市復旧・復興戦略計画」に以前の計画ならびに現在進行中の計画を統合するという課題が課せられていた。もう一つのグループの計画コンサルタントは、“地区レベル”で活動し、市内13の計画地区（1980年代に市の都市計画コミッションが決定した行政的な地区）の「地区復興計画」の策定支援を行った。全てのコンサルタントは、米国「資格認定基準」に基づいての選定が行われ、全米の計画専門家のパネル審査が行われた。さらに、市民や各地区のグループも自分たちのニーズに最も合った地区計画のコンサルタントを選択するために意見の表明を行った。

全市計画チーム、地区計画チーム共、以下の3ステップの計画プロセスに従って計画策定を行った。1）総合的な復興に関わる調査、2）復興シナリオの設定および選択、3）復興計画の策定およびプロジェクトの優先順位づけ。UNOP の計画策定プロセスにおいては、情報共有が重視され、ウエッブサイトの構築(www.unifiedneworleansplan.org)、ニューズレターの発行、記者発表、地区でのミーティングといった通常の方法に加え、このプロジェクトの独自性を考慮した先進的な方法も組み合わせられた。地区のプランナーは、各地区での4回のミーティングを実施したが、当初予定していた4回の週末だけでは終了できなかった。アメリカ・スピークスは全米的に有名な NPO で、市民を公的な意思決定に参画させることを中心として活動を行う。UNOP の計画策定においては、3回の「コミュニティー議会(Community Congress)」の計画と実施に参画した。「コミュニティー議会」には300人～2,500人のニューオリンズ人 New Orleanians（現在、ニューオリンズに住んでいる人、被災して未だに他のところに居る人を含めて）が参加し、全市計画に対して意見の表明を行った。第2、3回の「コミュニティー議会」はニューオリンズ、ヒューストン、ダラス、アトランタで同時開催され、また、インターネットを利用して図書館や他の場所からリンクし、それ以外にも多くの人が全米から参加した。「コミュニティー議会」では、様々な地区の住民が一同に会し、「市全体として」何が最良かというビジョンについて共有し、洪水防止・地区の安定・住宅・インフラ・公共施設・行政サービスの優先順位づけについての投票が行われた。このプロセスにより計画チームは、広く市民の意見を取り入れることができ、復興シナリオと計画の基本方針の決定に不可欠なトップ・ダウンとボトム・アップの双方向での意見交換を行う事が可能になった。

リスクを考慮した復興計画の策定

UNOP は、市民の要望と、市の将来と復興投資を脅かすことになる、人口の復旧ペースと将来の洪水リスクという2つの鍵となるリスクを調整するため、戦略的な復興の枠組みに従って策定された。2007年1月時点で、ニューオリンズ市の人口はカトリーナ以前の半分の水準までしか戻っていなかったが、人口減少に対応して市域を強制的に縮小するという決断は政治的に受け入れられる選択ではなかった。そのため計画では、カトリーナ後の人口の変化を反映し、インフラや公共施設に対して、段階的に投資していく事を提案している。公共投資に関する意思決定、住民・地域産業に対する直接的な金銭的な支援という手段で、人口が戻っている地区の復興にインセンティブを与える事で、人口が戻っていない地域に居住する人が「集住(clustering)」する事を目論んだ。

カトリーナ以降、陸軍工兵隊は、ハリケーンにより被害を受けたすべての堤防・洪水防御壁の復旧を行い、いくつかについては強化工事を行った。追加的な強化工事は2007年中には終了する予定である。また、連邦の下院議会は、工兵隊に、ルイジアナ州沿岸部がカテゴリー5のハリケーンに耐えうるような、洪水制御・沿岸部の回復・ハリケーンの防御対策から構成される総合的な防災対策に関する報告書の作成を求めた[9]。この報告書は2007年4月までに作成される予定である。

UNOPの策定においては、全市計画、地区計画に関わるプランナーは、共に、市の各地域における将来の洪水リスクと同時に将来の洪水予防計画ならびにその実施スケジュールは不確定である事を市民に伝えた。地区のミーティング「コミュニティー議会」において、市民は、沿岸部の低地の保全を含む堤防による洪水防止と、より効果的な建築物による洪水防止を組み合わせたより信頼性の高い洪水のリスクマネージメントシステムを構築する事を求めた。全市計画においては、堤防、洪水防御壁、沿岸保全を組み合わせた洪水防御システムを向上させるための恒常的な予算確保、さらに、住民が自分で洪水から身を守るための選択肢を増やす事を目的とした再建時のインセンティブに関する提案が行われている。地区の安定化プログラムでは、4分の1以下の住民しか戻っていない地区（より深刻な洪水被害を受けた地域でもある）の住民に、多くの人々が住む地区にするために、また全体の市の人口から見てより効率的なインフラ整備の費用とするために、標高の高い場所に集まって再建する事を提案している。さらに、2006年4月に公表されたFEMAによる最新の1階の床高指針（最低限度）に従って、高床にする、もしくは盛土をして住宅を建設する住宅所有者に対して予算の「不足」分を補填する実質的なインセンティブについての提案も行っている。こういった施策ついては、他の施策と同様、予算と施策の実行については確定されていないが、財源としては、州の防災予算やコミュニティー開発補助金Community Development Block Grant (CDBG)の予算を想定している。

次のステップと承認プロセス

2007年の3月中頃までに、ニューオリンズ市都市計画コミッションは、全市計画（案）に関する4回の公聴会を開催し、現在、UNOPの策定に関わるコンサルタントは、公聴会での意見への対応を行っており、4月には最終案を提出する予定である。ニューオリンズ市住宅規則綱領（New Orleans' Home Rule Charter）[10]では、都市計画コミッションは、市議会に対して、災害復興計画を策定・提案する事になっている。全市計画が承認されると、市はその計画を州政府、連邦政府、その他の実施機関に提出することになる。また、市民は、全市計画、地区計画で提案された内容を反映したより良いものに市の総合計画、土地利用規制条例の改正を行う事を求めている。

UNOPが目指したものは、最終到達地点ではないことが重要である。UNOPが目指したのは最終到達地点ではなく、長い復興の道のりの一つの重要なマイルストンを設定する事であった。現在も復興過程にあるニューオリンズにとって、復興は未だ途についたばかりである。復興のリーダーシップは、市が新たに設置した復興局（Office of Recovery Management）に移行した。2006年12月にニーギン市長は、エド・バークレー博士（Dr. Ed Blakey）を復興事業の推進と調整を実施する局の局長として任命した。バークレー博士は、現在、復興局の人員配置を行い、既に、UNOPに基づくアクションプランの策定に取りかかっている。彼はまた、全郡での復興議会（recovery council）を組織化するための基礎作業を開始しており、これは、全市計画で最も重要な事項として書かれていた事であった。復興議会には、主要な市の全ての部局、復旧・復興を担当する他の郡の機関の代表が参加し、ここで復興活動の調整・推進が行われる事になる予定である。

---

[9] Boston, Bret and Vern Herr. February 13 – 14, 2006. Category 5: Louisiana Coastal Protection and Restoration (LACPR) Workshop Transcripts. For U.S. Army Corps of Engineers, New Orleans District. By Group Solutions, Inc., Alpharetta, GA, 133 pp.

[10] City of New Orleans, Home Rule Charter, Sections 5-402 and 6-104, http://www.nocitycouncil.com/cityCodes.asp 参照

■神戸のみどり・その9『相楽園異聞』（中）

小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

3．相楽園の小寺謙吉と画家小磯良平

小寺謙吉は泰次郎の息子だ。神戸を代表するモダンリズムの詩人竹中郁はその生涯の親友小磯良平について、エッセイ集『消えゆく幻燈』編集工房ノア刊の「小磯良平」に書いている。

相楽園の二代目、戦後の初代公選神戸市長の小寺謙吉と日本を代表する洋画家小磯良平とどんな間柄なのか。小磯良平は旧姓を「岸上良平」という。竹中と小磯は大正 6(1917)年、旧制神戸二中で同級生となり、小磯が竹中に水彩画をやろうと、当時小磯が住んでいた神戸市平野梅元町(現・兵庫区梅元町)の家から近い祇園神社の裏山にふたりで写生に行ったりして生涯の親友になった。小磯の旧姓岸上家は旧三田藩士で小磯の祖父は三田から神戸花隈に出てきた藩侯九鬼隆義の祐筆だった。大正 11(1922)年小磯は上野にあった東京美術学校西洋画科(現・東京芸術大学)に入学した。その頃、小寺謙吉は衆議院議員で憲政会の領袖で、屋敷は東京青山南町にあった。謙吉は小磯の祖母の甥にあたる。謙吉が大伯父であることや旧三田藩士の子弟ということからか、小磯は東京の小寺邸から上野に通学し、そのさなか小磯は父文吉を失った。＜父の死後、小磯は学費も生活全般に渡っても、謙吉の庇護を受けた＞。関東大震災のあった大正 12(1923)年には、謙吉一族の経営する朝鮮の農場へスケッチ旅行をしたりした。彼が岸上から小磯姓になったのは大正 14(1925)年の秋の入選作の署名が「岸上」なので、その後の良平の養子縁組を渇望していた義父小磯吉人(こいそよしたり)が死の床にあったときだという。

このように相楽園と小磯良平の縁はとても深い。しかし相楽園には小磯良平の絵はない。少し残念な気がする。

■相楽園年表

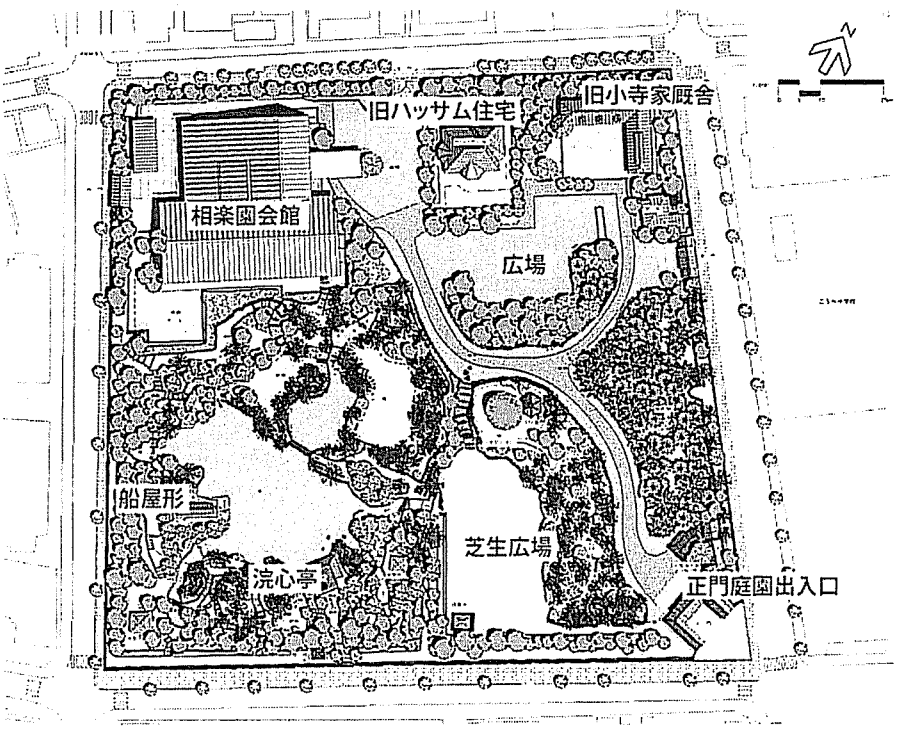
年　号	西　暦	相楽園年表	関連年表
明治 19	1886	小寺泰次郎、九鬼家等の土地買収、建築着手	
20	1887	庭園着手	
35	1902		ハッサム邸北野町で着手
38	1905	泰次郎死去、謙吉継ぐ	
43	1910	厩舎建造	
大正元	1912	庭園完成	
昭和 16	1941	小寺邸、神戸市へ売却	
24	1949	神戸市長小寺謙吉死去	
38	1963	相楽園会館完成、ハッサム邸移築完成	

４．相楽園と風水

相楽園の地相を風水論から見るとおもしろい。理想的な京都の平安京を思い浮かべながら論を進めてみよう。まず敷地の北背後、すなわち玄武に船岡山みたいな丘はあるのか？　諏訪山がある。今はマンション等が建って見えにくいが、諏訪山の結構かわいい丘がある。東すなわち青龍に賀茂川のような川はあるか？　これもある。東側の築地塀に沿って外側の歩道の地下に人が屈んで通れる煉瓦造の小川が流れている。では、昔、京都の朱雀にあったという巨椋池のような南すなわち朱雀を守る池はあるのか？　現在の相楽園の池は相楽園造営前、この土地のため池だった。庭園の池の南岸に沿って残る高台はため池の堤防の名残だといわれている。さて、京都の桂川や西大路のように西すなわち白虎に川か道があるのか？　これも道があったので凌ぐことが出来る。ここで少し苦しいのは、「水は青龍から出でて白虎に流る」である。相楽園は取水河川の関係から呑口は西にあり、吐口は東だ。風水のセオリーからいうと、逆だ。ただし抜け道があった。すなわち『作庭記』によれば、白虎から直で青龍に流さなければいいらしい。相楽園の水の流れは、庭園の西の滝口（船屋形の北）から流入、池の吐口から流出し、芝生広場手前で南へ下り、園外へ出ている。風水のタブーをクリアしていた。小寺泰次郎は相楽園の地を藩侯隆義の花隈の屋敷に近く、かつ風水を考えながら求めたのだろうか。

５．相楽園の水

かって庭園の水は再度山辺りを源流域とする再度谷川から取水していた。再度谷川とは宇治川の上流をそう呼んでいる。しかし昭和 40 年代になって上流域の開発などによって急速に水質が悪化し、相楽園の池も藻の異常発生などで悪臭が漂い、苦情が多かった。井戸の試掘などが行われたが、浅い鑿井では鉄分が多く、井戸からの取水を諦めざるを得なかった。最終的には平成 9(1997)から日量 96t/日工業用水の注水とバイオ浄化装置の併用による水質確保で今日に至っている。水は澄み、緋鯉の群れがゆったりと池を周遊している。　　（この項続く）



■相楽園案内マップ
（ホームページより）

■Dr.フランキーの街角たんけん　第27回

須磨離宮道界隈（その３）

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

明治後期から大正初期にかけて、須磨離宮の造営に前後して規模の大きな邸宅が築かれ、今日の離宮道界隈の住宅地の骨格が形成されたが、これに相前後する形で離宮までの行幸道路―離宮道界隈の一帯が順次宅地化され、中規模の住宅が建てられるようになった。

須磨離宮は、昭和20（1945）年の空襲で焼失し、跡地は進駐軍の接収を経て、昭和42（1967）年に須磨離宮公園として整備された。離宮道界隈の大正中期から昭和初期にかけて建てられた邸宅の多くは、改築や集合住宅で更新され、平成に入った頃までに姿を消し、阪神淡路大震災で命脈を事実上断ち切られた。今は離宮前町を中心に数軒が残るのみである。そうした中で、旧室谷邸は大震災で煉瓦造の煙突が損傷したが大きな被害は免れ、離宮道界隈の歴史の貴重な生き証人的存在であった。

旧室谷邸が完成した昭和９（1934）年といえば、離宮道界隈の住宅地の形成がひと段落着き、また幕末から続いてきた日本の近代建築も、円熟の段階に差し掛かった時期である。

ヴォーリズの住宅建築は、スタッコ仕上げの大壁造、住吉山手の小寺邸などに代表されるスパニッシュスタイル、真壁造のチューダースタイルに大別できる。旧室谷邸は、材木商である施主の好みを反映させたのであろう、太い柱梁を現しにした、附属屋、玄関、母屋の切妻を街路に面して連続して立上げる雄大な構成で、ヴォーリズのチューダー系の住宅作品では最高峰に位置するものであった（写真２）

今回の旧室谷邸にまつわる一連の動きは、旧室谷邸を買い取った現所有者の、例えば行政側からの解体工事に先立つ実測調査のための立ち入りを頑なに拒否するといった態度も、もちろん非難されるべきであるが、あの建物が離宮前から姿を消さざるを得なかった理由は何であったか、今一度考える必要がある。それは、歴史的建造物の所有者の「孤立」ではないか。今回の所有権移転にあたって、前所有者に適切な助言をできる立場の者が周辺に居なかったことが、旧室谷邸にとって最大の不幸であった。

ようやく日本でも、財団法人日本ナショナルトラストが受け皿となり、東京都文京区・旧安田邸（大正４年）、京都市北白川・旧駒井邸などが寄贈され保存活用の道が開けつつあるが、たとえば東京都文京区では、建築士、研究者、主婦といった多様な人々が「たてもの応援団」を結成し、地域に寄り添った形で、しなやかかつユニークな活動を通じて、歴史的建造物の保存活用のムーブメントを展開するなかで、旧安田邸の所有者との出会いが生まれ、日本ナショナルトラストへの橋渡しに繋がったという。こうした点は、わが身に照らしてまだまだ取組みが不足していると反省をしている。

兵庫県では、建築士を対象とした歴史遺産活用推進員（ヘリテージマネージャー）を全国に先駆けて創設し、歴史的建造物の保存活用に向けた技術的な助言のできる専門家の育成に熱心に取り組んでいる。彼らと、志ある地域住民が連携して活動を行っていく中で、歴史的建造物の、とりわけ住宅の所有者とのつながりを作っていくことが、時間はかかるが今後必要になってくるのであろう。

（筆者注：本稿は「神戸のまちスポット」（神戸をほんまの文化都市にする会報）「むこう」第86号所収）に加筆修正をしたものです。）



写真１　現在の離宮道界隈

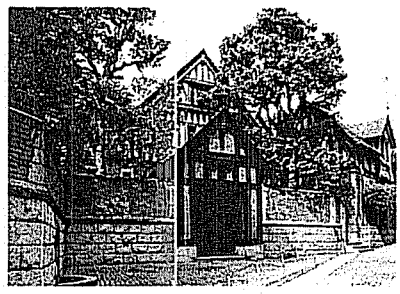


写真2　東側から見た旧室谷邸

水の情景十一●ワタシの旅

そこから見えたもの

中川　紺

まずワタシの目に飛び込んできたものは、ビルほどの高さがある巨大な車輪。その手前には風に揺れる無数のブランコ、視線を横に動かした先には人が入れるほどの大きなコーヒーカップ、そして辺りを縦横無尽に走る赤いレールと白いレール。

どれもが少しくたびれた色彩と錆びをまとっている。廃園になった遊園地というのは、何て寂しいのだろう、とワタシは思った。

●●

遊園地は小高い丘の上にあった。濃厚な水の気配に惹かれてここまで来たのだ。でもこの遊園地のどこに水があるのか、すぐには見当がつかなかった。足を進めると、アヒルのボートが散乱した人工池があった。しかしそこにはもう水は無い。

死んだように停止したアトラクションの数々を一つ一つ見ながら歩いていていると、目の端で動くものがあった。

ワタシに手を差し出しているのは、階段の脇に立っている兵隊姿の人形だった。

首から下げた看板には、『わたしよりちいさい人はのれません』と書かれていた。小さな子どものための注意書きのようだ。

「チケットを」

そう言いたいのだと分かった。

そんなもの、無いのに。困惑していると、兵隊人形は、ワタシの白いかばんと髪を交互に指差した。かばんには、以前手に入れた緑色のガラス片が入っていた。丸かった角がいつの間にか割れて尖り、光を反射していた。



ワタシは指を切らないように、そのガラス片を手に取ると、すっと髪に当てた。

これでいい？

一束の黒髪をチケット代わりに渡した。

兵隊はゆっくり頷いた。

●●

階段を上がってゲートをくぐったところに乗り場があった。『ウォーター・ドラゴン・コースター』という名のそのアトラクションは、水上を乗り物で走るものらしい。さっきのアヒル池には無かった水が、ここにはなぜか残っていた。でも探している水とは、少し違うのではないか、という気がした。

それでも何かが分かるかもしれないと、ワタシは龍の形のボートに乗った。

ボートは、ゆっくりと発進した。

園内の水路を一周すると、ハリボテの山に向かってゆっくり傾斜をのぼりはじめた。ボートとレールが軋む音が、静かな園内に響いた。ワタシはそっと目を閉じた。

がくん。ボートが止まった。

顔をあげると、山の上から、園内と周辺のまちが見渡せた。

そして、眼下には、太陽の光を受けて煌めく大きな水面が見える。

あれは……。

「う・み」

その言葉をワタシは知っていた。でも現実の海を見るのは、これが初めてだ。あんなにも大きな水を抱いた場所があるなんて。

静かに、深く、息を吸った。

これが、海の匂いなんだ。

そうか、あの水が探していた場所かもしれない。ボートはゆっくりと下りはじめた。

（第十一話・完）

（イラスト　やまもとかずよ）

■ 阪神白地 まちづくり支援ネットワーク・第５４回連絡会報告

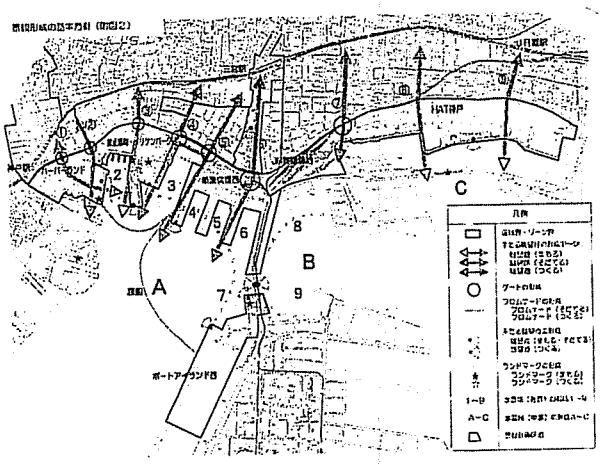
～テーマ「神戸都心ウォーターフロントのゆくえ」～

第54回連絡会は、2007年2月2日(金)、神戸市勤労会館において行われました。

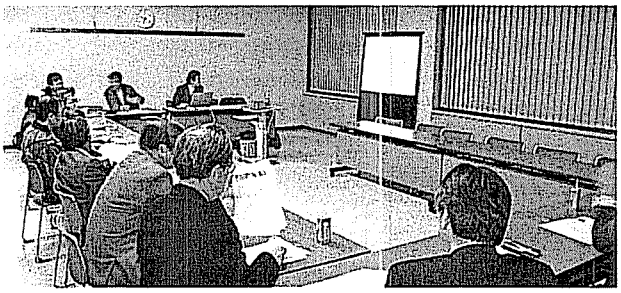
まず、長年神戸のウォーターフロント計画に携わってこられた**小林郁雄さん（コー・プラン）**から、これからの神戸のウォーターフロント開発には新港突堤やポートアイランド埠頭の再整備が極めて重要とのコメントがあり、これに関連する報告として、**①「都心ウォーターフロントの景観形成」、②「ポートアイランド(旧コンテナ埠頭）への大学立地」**と題してそれぞれ**白井治さん（まち空間研究所）**と**中山久憲さん（神戸市都市計画総局）**から行われました。

白井さんはこの間、神戸市の「都心ウォーターフロント」の景観形成基本方針や景観形成基準づくりにコンサルタントとして関わってこられており、現地調査等による都心ウォーターフロントエリアの景観特性についての詳しい報告や“まち”と“海”をつなぐ眺望型景観を大事にしていこうとする基本方針の説明がありました。

中山さんからは、「神戸『際都』物語～神戸海上新都心地区～」と称して、物語仕立てで楽しく発表が行われました。ポートアイランド西岸に位置する旧コンテナ埠頭は、その役割を終え、長らく広大な空地となっていましたが、神戸学院大学、兵庫医療大学、神戸夙川学院大学が今春開校することになった様々ないきさつや苦労などを語っていただきました。（中井都市研究室　中井　豊）



都心ウォーターフロントの景観形成基本方針（附図）



連絡会の様子

■ 情報コーナー

●第８６回・水谷ゼミナール

・日時：2月23日(金)18:00～19:30
・場所：こうべまちづくり会館６階会議室
・会費：1,000円
・内容：テーマ「町建築」論にからめて、司会：天川佳美（きんもくせい）、発表①「町建築としての住宅・水谷頴介の表現」／高月昭子（計画工房 INACHI）、②「集合住宅による街づくり」／三谷幸司（三谷都市建築設計室）
・問合せ：GU 計画研究所（TEL.078-435-6510）

●ひょうごまちづくりセンター「まちづくり現地視察セミナー」―「尼崎市武庫之荘４丁目地区のまち並みを観る」

・日時：３月19日(月)13:30～16:00
・場所：尼崎市女性センタートレピエ視聴覚室（武庫之荘駅南240m）
・内容：講演「武庫之荘４丁目地区のまちづくりについて」尼崎市都市計画課、堀田秀治（武庫之荘４丁目地区まちづくり協議会会長）、タウンウォッチング～武庫之荘４丁目地区～
・参加費：無料
・問合せ：ひょうごまちづくりセンター（TEL.078-367-1263、FAX.078-367-1264

● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm
◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク 事務局
〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内
TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp
銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129
編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎

月刊きんもくせいの読者の皆様へ。

4年間にわたってご愛読いただきましたが、次号07年3月第48号で終刊します。
最後のこの1年間はまともに期日に発行することも少なく、申し訳ありませんでした。
大震災後12年も過ぎ、きんもくせいも三期にわたり通巻134号となり、その役割も十二分に全うしたものと思ってます。
そこで、1月号表紙下部にも記しているように、終巻号に皆様からのお手紙、ご意見などをご寄稿いただき、原則その全部を掲載させていただこうと、思っています。
4月末日までにメール、ファックス、郵便などで、是非原稿をお送りください。
5月連休明けには、終巻号をお届けするつもりです。
どうか、よろしくお願いします。
第4期の「きんもくせい」で、また、いつかどこかで、おめにかかることが出来るかもしれません。それまで、さよなら。

月刊きんもくせい編集長：小林郁雄／070411

阪神大震災復興　市民まちづくりを支援するネットワークの機関誌　2007年5月10日発行

月刊 きんもくせい

07年3月終刊号
(50+36+ NO.48)

発行：阪神大震災復興
市民まちづくり支援ネットワーク

■「きんもくせい」終刊にあたって

矢田立郎（神戸市長）

今年1月17日で阪神・淡路大震災から12年が経過しました。

震災によって失われたものはあまりにも大きく、震災前の魅力あふれる神戸のまちは文字通りがれきの山へと一変し、将来の夢や希望どころか日々の暮らしさえ分からない、絶望的な状況となりました。

そのような中、「きんもくせい」は「阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク」の機関紙として1995年2月10日に創刊されました。復興のまちづくりの報告や論文を掲載し、まちづくりに立ち上がった地域の復興情報を共有することにより、地域での復興の取り組みを支え、被災地発の情報紙として市民に親しまれてこられました。そうした市民ネットワークが復興の起爆剤となり、被災し、途方にくれていた多くの市民に「自分たちの手で神戸を復興させなければならない」という気持ちを呼び起こし、私たち神戸市民の手探りでの復興への取り組みを始めるヒントを提供しました。現在、神戸は復興の聖地として、大規模災害で被災した世界各地の地域に夢と希望を与えられるまでになりました。ハリケーン「カトリーナ」で大きな被害を受けたアメリカニューオリンズではこの「きんもくせい」を模して作られた「Trumpet（トランペット）」が刊行され、復興への取り組みを続ける市民に夢と希望を与えていると伺っています。これまでの活動には一言では言い表すことの出来ないご苦労があったことと思います。まずは、関係者の皆様に対して、ありがとうございました、そしてお疲れ様でしたと、改めてお礼申し上げます。

私たちは震災と復興の中で多くの経験をしました。その中で気が付いた3つの大切なことがあります。

第一に「命」です。

神戸市内では4，571人の方が亡くなられ、負傷者も14，678人におよびました。亡くなられた方の多くは家屋倒壊によるものでした。亡くなられた方の思い、残された者の悲しみは12年が経った今でも全く変わることはありません。

私は万が一災害が起こったとき、この震災の悲劇を二度と繰り返さないため、いかに人の命を守り、被害を最小限にくい止めることができるかという「減災」に視点を置いたまちづくりへの取り組みが重要であると考えています。そのためには学校をはじめとする建物の耐震化率をより高めていく必要があります。市民の皆様にもその重要性をご理解いただき、住宅の無料の耐震診断、耐震改修工事などへの補助を活用し、ひとりでも多くの市民の命を救いたいと考えています。

第二に「絆」です。

災害時に特に力を発揮するのは地域の力、人の助け合いです。震災直後の混乱の中、がれ

きの下から多くの市民を救い、避難所での不安な生活を支えたのは、他でもない地域のつながり、人と人との絆でした。その絆はまちづくりを通じてよりいっそう強固なものとなりました。震災復興再開発事業・土地区画整理事業においても、従来の市の事業計画案について説明会などで地元の意見をいただきながら進めるというやり方ではなく、まちづくり協議会において地元のみなさまが自分のまちについて考え、地域の方同士が顔をあわせながら協議したうえで、まちづくり提案をいただき、それを生かしながら事業計画を作り、進めるようになりました。また、震災の教訓をもとに、日頃の地域福祉等のふれあい活動を通して培った市民相互の助け合いの絆を非常時に活かすため、おおむね小学校区単位で「防災福祉コミュニティ」が結成され、現在189地区で結成されています。

第三に「感謝の気持ち」です。

震災時、国内外から多くの支援を受け、心と物資両面から支えられたことが大きなはげみとなり、復興への大きな力となりました。私たちはそれに対する感謝の気持ちを忘れてはなりません。平成16年12月から平成17年12月にかけて、そうした国内外からの支援に対する感謝の意を込めて、震災の経験や教訓、復興への取り組みと課題・成果、これからの神戸づくりの方向を発信する「震災10年　神戸からの発信」事業を実施しました。世界中で大きな被害が続発し、国内でも大規模な地震が予想されているなか、神戸の取り組みを国内外に発信することにより多くの被災地を救い、被害の広がりを未然にくいとめることが私どもの責務であると考えています。

神戸で震災を経験されていないか、まだ生まれておらず、震災を知らない方が現在市内人口の1／4をしめています。震災の経験や教訓を次代へ継承し、今後も市民の皆様と手を携え、日本一安全な都市を目指し、皆さまとともに努力してまいりたいと考えています。

わが国は今、高齢化という大きな問題を抱えています。本市も震災により高齢化問題が顕在化し特徴的なものとなりました。そのため、神戸市では地域で見守りができるコミュニティづくりを支援する等、高齢者が元気に生きがいを持って暮らせるまちの実現に取り組んでいます。急速に進む超少子高齢化の時代において、高齢者対策は全ての都市が直面する問題です。高齢者がいきいきと自己の能力を発揮することのできるまちづくりを完成させ、モデル都市として全国に発信できればと考えています。

震災により激減した人口も平成16年11月に震災前の人口に戻りました。壊滅的な被害を受けた神戸港もコンテナ取扱い個数が震災前の8割程度に回復するなど、本市経済においても12年を経てようやく総じて拡大を続けるようになりました。昨年2月に神戸空港が開港し、神戸港も今年開港140年を迎えます。神戸は今未来への飛躍と持続的発展に向けて邁進する極めて重要な時期にきています。神戸は震災により他都市に比べ大きく遅れをとったことは事実です。しかし、震災での経験、教訓と震災により生まれた地域の力や郷土愛を活かし、全ての市民が幸せを感じられる、市民もまちもいきいきと輝く「豊かさ創造都市こうべ」の実現を目指し、皆様とともに市政の運営に努めてまいりたいと考えています。

まちづくりに終わりはありません。神戸の夢の実現が、他の多くの被災地に夢と希望を与えることになります。私は今後の都市戦略として、生活文化や生活スタイルを含めた広い意味での「デザイン」をキーワードに新しい視点でまちづくりを行うことにしました。みなさまとともにおおいに議論をしながら、美しく、魅力と活力に溢れ、誰もが住みたい、訪れたいと思う世界に先駆けた都市モデルとなるようなデザイン都市神戸の実現に全力で取り組んでまいりましょう。

「きんもくせい」は終刊となりますが、関係者の皆様によるこれまでの取り組みは今後の神戸のまちづくりに必ず引き継がれ、活かされることと確信しております。

■Ｄｒ．フランキーの街角たんけん　第 28 回(最終回)

埠頭を渡る風～新港突堤を歩く～

中尾　嘉孝（プランナーズネットワーク神戸）

最終回くらいは結言めいた話を書いてみようかとおもっていたが、やはり街角へ出たいと思う。春になったから、というわけでもないが久しぶりに港へ足を向けた。

鯉川筋から海岸通に出て、海際に出てみる。先ごろこの並びの水上警察署、合同庁舎を耐震性能等も考慮をして他所へ移転整備し、海岸通界隈から港への眺望を確保する構想が新聞で取り上げられていた。「ウォーターフロント・トゥ・パブリック」を唱える立場から言えば、こうした検討がなされるのも時代が変わった証拠と歓迎したいところではある。

「没個性な」携帯電話会社のビルができて久しい京橋北詰の一角に出る。早いもので旧神戸商工会議所ビルの取り壊しから 20 年が経過しようとしている。大丸神戸店の「旧ナショナルシティバンク神戸支店」の「リブラブウェスト」への再生活用と共に、神戸中心市街地の水際に市民の目を向けさせる契機となったことが、あの短くも熱い旧商工会議所ビル保存のお願い運動の成果であった、と書いても、やはり現場に立つと喪われたものの偉大さを感じずには居られない。これだけは、ほぼもとの位置に戻された旧神戸海軍操練所跡を顕彰する旧海軍軍艦のアンカーを用いたモニュメントと石碑が、この一画の空虚さを際立たせる。

欄干だけになった「京橋」を通って新港地区に入る。海軍操練所の中核施設にも位置づけられた船たて場を築造した網屋吉兵衛の顕彰碑が出迎える。

新港突堤に立つ。この突堤建設計画を指揮したのは豊岡出身の土木技師・森垣亀一郎（きいちろう、明治 7（1874）年～昭和 9（1934）年）である。同郷の先輩・沖野忠雄の後を追うように土木の道に進み大蔵省臨時建築技師となった森垣は欧州視察の際、世界で初めてロッテルダム港で施工されていた沈函（ケーソン）工法の技術を持ち帰り、神戸・新港突堤の建設に用いた。のちに森垣は、大蔵省から神戸市に転じ、港湾部長、都市計画部長、土木部長を歴任。昭和 9（1934）年 1 月、新年度予算査定の市長打ち合わせの席で倒れ、急逝している。なお、森垣の指導で設置されたケーソンは阪神・淡路大震災で崩れたものの、再び据え直されて突堤の復旧がなされた。

一昔前、ある建築史研究家から、「神戸の新港突堤には横浜のような大きな煉瓦造倉庫がないから寂しい」という言葉を聴いたことがある。しかし、どうだろうか。川西倉庫、住友、三菱、三井の旧財閥系倉庫各会社の倉庫群が見せる、1920 年代半ばの時期の建物とは思えない機能的な外観が連なる様は、これはこれで圧巻である。流石に渡邊節が設計した川西倉庫は、基壇部が切石積でデザインされているが。

神戸税関の東側に、２つのゴシック系の巨大な建物が建っている。今は農林水産消費安全技術センターが入居するこの施設は、元生糸検査所の建物である。「キーケン」というと横浜が思い浮かぶが、神戸の「キ



写真1　旧神戸商工会議所ビル(昭和4(1929)年竣工、原科準平、古宇田実設計)

ーケン」はレプリカではなく「ほんまもの」の近代建築だ。

神戸での生糸の輸出検査は、明治2（1869）年、新政府が各開港場に蚕卵紙生糸改所（検査所）を設置し、生糸の検査、生糸業者への鑑札交付等の事務を行った時が始まりとされている。

その後、生糸改所は、民営化を経て廃止され、貿易業者による自主検査の時代が続いたが、同28（1895）年2月の生糸検査所法の成立で、農商務省（現在の農林水産省、経済産業省の前身）の機関として生糸検査所が設置される事となった。検査所は横浜のみの開設が考えられていた所、但馬を中心とする関西の蚕糸産地の積出港となっていた神戸で、商業会議所を中心に神戸での検査所設置を国会へ建議した結果、横浜、神戸の2箇所の開設が法律に盛り込まれた。神戸生糸検査所は、翌29(1896)年、栄町に開設されたが、神戸での生糸輸出の衰退で、開設から僅か5年後の同34(1901)年に閉鎖に追い込まれている。

時代が大正に移って、関西の蚕糸業が関東に比肩するまでに成長を遂げたので、業界では関西に生糸取引の場を設けようという機運が高まった。神戸商業会議所でも、大正10(1921)年7月に生糸市場設置委員会を設け調査検討を行い、同年12月に神戸市営での生糸市場の開設を市に具申した。

この構想が動き出したのは、大正12(1923)年9月1日の関東大震災が契機であった。壊滅的被害を受けた横浜港に変わる生糸の積み出し基地が早急に必要であった。同月12日、全国の製糸業者が神戸で会議を開催し、神戸に生糸取引、その輸出を継承することを決議し、市に対して生糸検査所設置の要望を申し入れした。神戸市も臨時予算を組んでこれにこたえて、まずは元神戸税関監視所を臨時の検査所庁舎に当てて業務を開始した。しかし、木造平屋建の建物は手狭であり、すぐに元町通4丁目の元証券取引所の建物に移転した。この間、市は新港地区に用地を確保し、新庁舎を昭和2（1927）年3月に完成させた。その後、同6（1931）年、市から国に検査所は移管され、翌7（1932）年には本館東側に新館が置塩建築事務所の設計で増築されている。

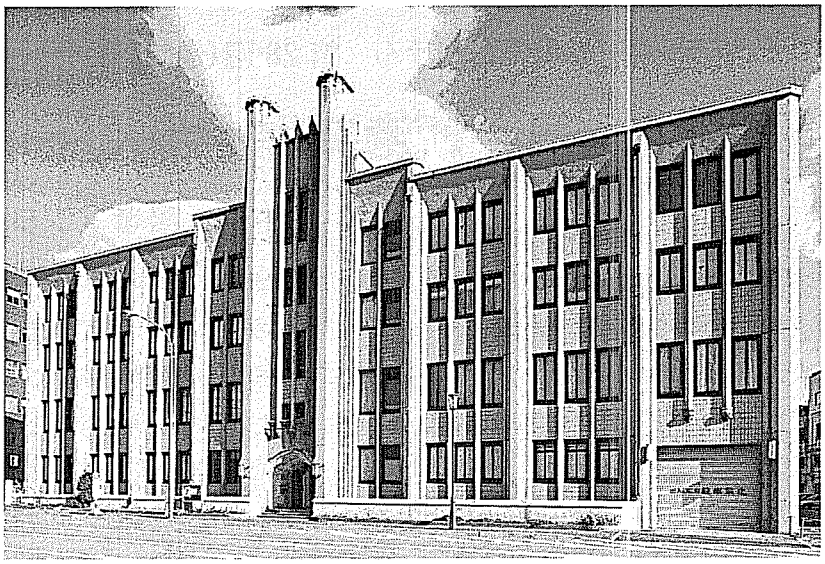


写真2 旧神戸生糸検査所本館(昭和2(1927)年竣工、神戸市営繕課設計)



写真3 同新館(昭和7(1932)年竣工、置塩建築事務所設計)

最初に建った本館庁舎と増築部分、何れも広義では同じネオゴシックであるが、趣を異にする。本館は、高さを強調する「垂直線」が印象的。玄関部のアーチはゴシックカーブである。中央部は上部が塔屋的な扱いでデザインされ、パラペットにはバトルメントを模した装飾が施されている。本館庁舎を手がけた神戸市営繕課は、初代課長を務めた清水榮二が退職する直前の時期にあたっていた。

一方、増築部は、柱型や塔屋デザインの扱いでゴシックさを演出しているが、東西に広がる雄大なファサードの連なりが印象的である。初代兵庫県営繕課長として、第三代県議会議事堂、県立第一及び第二神戸高等女学校（それぞれ、現県立神戸高校、同夢野台高校の前身）などを手がけた置塩章が得意とした、「スタイリッシュな」ファサードデザインの到達点がここには見られる。生糸検査所庁舎は、農林水産省農林規格検査所を経て、農業水産消費技術センター、肥飼料検査所と農薬検査所の三法人が統合されて発足した農業水産消費安全技術センターに引き継がれている。国の庁舎から独立行政

法人の事務所に変わったのは時代の流れだが、今後のこの建物の行方が気になるところではある。是非、現地で生かし続けていただきたいものである。

農業水産消費安全技術センター南側の交差点に面して建つ新港貿易会館は、元々は昭和６（1931）年に神港相互館という共同事務所ビルとして完成した建物だが、モンドリアンスタイルのフレームワークの丸窓やステンドグラスなどアールデコのデザインが各所にちりばめられた魅力的なクラシックビルである。税関、キーケン、新港貿易会館の３点セットがやはりこの場所には似つかわしい。

第四突堤へ出る。神戸大橋とハーバーハイウェイなどを連絡する高架橋でやや殺風景だが、竣工当時は第一突堤であり、海外航路の客船の接岸岸壁という、世界との窓口の役割を負って来た場所である。

大正７（1918）年に同突堤が完成した時は、大熊喜邦の設計による鉄骨造の「ザッハリッヒ」（即物的）なデザインの船客乗降場上屋が突堤の西側に建てられていた。この上屋は、昭和６(1931)年に第二期工事で拡張された突堤の東側部分に鉄筋コンクリート造で移転改築されたが、基本的な構造は踏襲されている。すなわち２階のデッキは、接岸している船舶のデッキから直接、船客が乗降できる構造となっており、１階部分に隣接する引込線には東灘駅（灘区）を基点とする臨港線を経由してポートトレインが入線し、旅客の利便を図っていた。現在は、みなと総局神戸港管理事務所としてごく一部が使われているにすぎないが、特に中央部の玄関から二階のデッキへいたる大階段室は、階段の親柱などが石造風に仕上げられるなど、見事な空間が広がっている。同種の施設は、管見ながら門司港に残されているだけであり、貴重な存在である。

管理事務所の近くから東側、小野浜岸壁は三井倉庫の専用施設である。この小野浜の三井倉庫も、やはり昭和７(1932)年完成のれっきとした現役の「近代化遺産」である。第三突堤の同じ三井倉庫の建物と比べると規模が飛躍的に大きくなっている。

新港埠頭界隈は、今後、商業施設の建設などが計画されているが、神戸港の近代の歩みの中で築かれたこうした近代化遺産を上手に活用して、新たな水際空間を生み出していって欲しいものである。

おわりに

2003 年から４年の永きにわたって拙い文章にお付き合いを頂いた読者の皆様、また私に執筆の機会の場を与えてくださり、最後は筆が遅くなってしまった筆者に粘り強くお付き合いくださった小林編集長、天川佳美様、吉川健一郎様のお陰で、なんとかここまで書き続けられることができたと感謝しています。皆様、ご愛読本当に有り難う御座いました。

（灘区内に限定して、近代建築とそこにまつわる人物の一代記を書き連ねるコラム「灘建築夜話」をグローカル・サイト「ナダタマ」（ http://www.nadatama.com/modules/wordpress3/）にて毎週１回木曜日更新で執筆しています。「街角探険」とは異なる、やや実験的な手法で書いていますが、よろしければ是非ご笑覧下さい）。

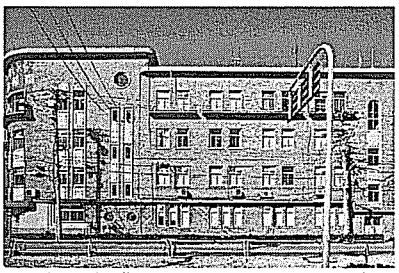


写真4 新港貿易会館(昭和6(1931)年竣工、神港相互館設計)

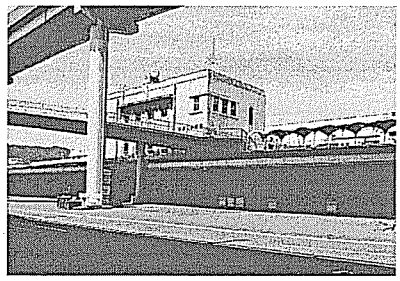


写真5 神戸市みなと総局神戸港管理事務所(昭和6(1931)年、設計者不詳)

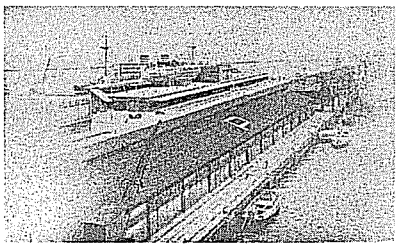


写真6 竣工した頃の神戸港第一突堤船客乗降場上屋(写真出典「神戸港大観」昭和7年)

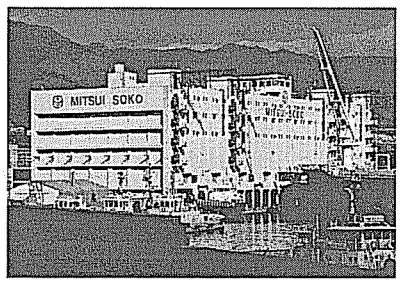


写真7 三井倉庫小野浜営業所(旧東神倉庫神戸支店小野浜倉庫、昭和7(1932)年竣工、東神倉庫建築課設計)

■鎖瀾閣復元運動の現状／2007年2月

たつみ 都志（武庫川女子大学文学部大学教授、ＮＰＯ法人谷崎文学友の会理事長）

「きんもくせい」06年2月号（№40）で、谷崎潤一郎の旧邸「鎖瀾閣」の復元が篤志の建築家の出現で急遽実現することになった経緯を詳しく述べた。

その後、どうなっているのか、いつ「ひまわりファンド」のお金を送金したらいいのか、とみなさまから問い合わせをいただいている。ありがたくて涙が出る。

この号では、その後の動きを報告する。

昨年9月、神戸市公園緑地課は庁内を調整しようやく、われわれの要求に応じて岡本六丁目の「岡本（梅林）公園」拡張予定地に、鎖瀾閣とナオミの家の建設を設置許可するかどうかを真剣に検討する、と答えてくれた。みなさまの署名運動のおかげである。

しかしながら都市公園法にのっとり、公園内に施設等の設置を許可するためには、いくつかのハードルがある。そのひとつに「近隣住民の了解」という事項がある。

そこで、9月4日（月）9月25日（月）10月23日（月）11月13日（月）11月27日（月）12月11日（月）1月9日（火）、3月8日（木）の合計8回、午後7時～10時まで、毎回延々3時間にわたって近隣住民と話し合いがもたれた。

近隣住民とは、拡張予定地を取り囲む形で隣接している住民たちで、神戸市公園緑地課が「説明会のお知らせ」を配布したのは、約20軒（うち３棟のマンションを含む）である。そのうち出席者は多いときで12軒、少ないときで5軒であった。回を重ねるごとに減っていっているというのが現状である。賛成または無関心は欠席する。出席するのは反対もしくは何らかの注文がある、という場合である。

何度も話し合い素案の修正を重ね、今なお話し合いを進めている。主に北側1軒、南側２軒が反対、北側１軒は条件付き賛成。

反対の理由または条件は大きく分けて５種類である。

1．　眺望がそこなわれる・・・これは鎖瀾閣北側住民２軒。
2．　圧迫感・・・これは南側２軒。
3．　見物客が来ることによる公害・・・騒音、プライバシー侵害、付近への駐車迷惑。
4．　鎖瀾閣管理運営への不安・・・夜間と休館日の警備問題
5．　将来への不安・・・建った後、経営不振で放っておかれること。

１の問題については、北側２軒の眺望を確保するために、今ある地盤から２メートル50センチ下げ、2階からの眺望を確保するよう提案し、12月24日にポール建てをして、シミュレーションした。この付近は山の斜面で、土地が段々畑のようになっていて、各戸一階からの眺望は望めないが、2階からは遠く海が望めるロケーションにある。その地域性を生かす必要がある、と判断したからである。

北東側の家は、現状でほぼ納得していただいているが、北西側の家は2階からの眺望が確保されるだけでは納得いかない、主たる生活空間である1階のリビングおよびダイニングキッチンからの眺望が確保されないと妥協できない、と言い張り、あと１メートル50センチ、つまり現状から４メートル地盤を落とすことを要求してきているのだ。理由は「平成10年にこの家を購入した

とき、前の空き地は公園になります。何も建ちません」と不動産屋が言ったから買った、というものである。

しかし専門家に言わせると「不動産の重要事項説明のとき、周囲の環境は変わらない、というのは絶対言ってはならないこと」であるという。

神戸市の予算では負担できない、追加の整地費用をわれわれが負担することも視座に入れて2007年に入ってから検討し始めた。その結果、追加の整地費用は1300万円以上かかり、しかも4メートル地盤を落とすと景観上、あるいは土地の強度、またバリアフリーの設置上、すべて不都合で、緑地を取れないため公園の機能すら果たせなくなる。そのため神戸市としては設置許可を出せない、ということになった。この調査結果が出たのは、2月中旬であった。

3月8日にこの結果を報告したが、まったく妥協してもらえなかった。その強弁さに、同じ近隣住民すらあきれて中座する始末。しかし彼らに理解、協力していただくために、われわれはこれからも誠意を見せ根気よくコツコツと説得を続けていく所存である。

ところで、倚松庵の建設に当たり、移築復元が決定してから建設まで2年の空白の年月があった。そのころ私は、倚松庵の移築復元運動を進めていて、神戸市に対して一刻も早く建設することを要求していた。しかし神戸市とともに歩んでいたわけではないので、その2年間の空白の意味がわからず、ただの神戸市の怠慢としか思えなかった。

しかし今ようやくその意味がわかる。神戸市の担当部局は、近隣住民を一生懸命説得してくれていたのだ、と。そのころ神戸市の担当部局で今は退職した人が、大きくうなずいて言ってくれた。

「そうですよ、先生。2年かけて住民はようやく納得してくれたのです」

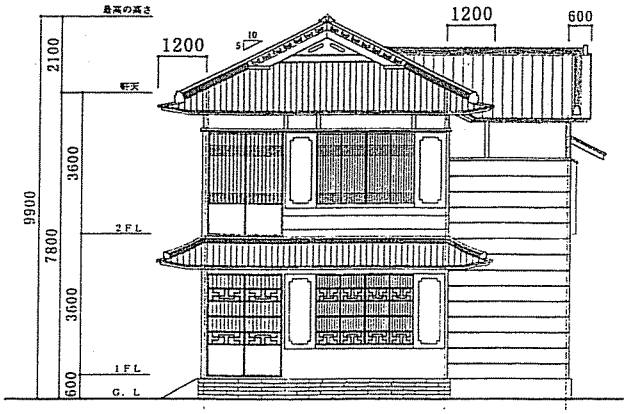
ああ、そんなことをもっと早く知っていたなら、住民感情との板ばさみで自己嫌悪にかられ、死にたくなるほど落ち込むこともなかったのに、とはがゆい。

そう、われわれは後世に文化の灯を残すために日々努力しているのだ、何もひるむことはない、自信を持って進もう、そう思えてきた。

どうかみなさまも暖かく見守っていってください。なお今、賛助会員を募集しています。詳しくは以下のホームページにて。（この原稿は「谷崎文学友の会会報No.10」と一部重複しています）。

http://sarankaku.cool.ne.jp/about.html）





■鎖瀾閣の建設検討地（左写真）と復元南立面図

■神戸のみどり・その１０『相楽園異聞』（下／最終回）

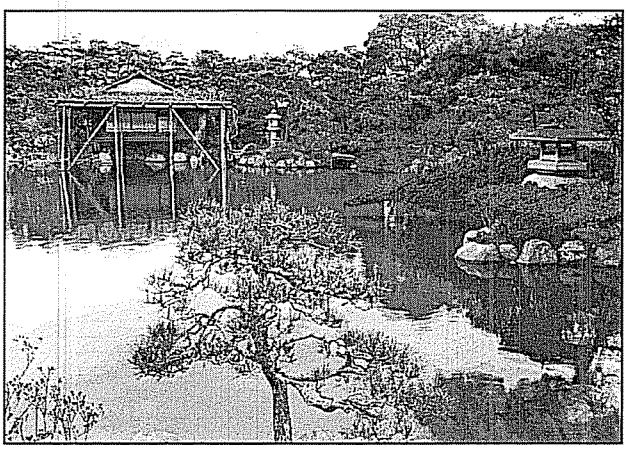
小森　正幹（元神戸市建設局公園砂防部長）

６．戦前の旧小寺邸庭園ついて

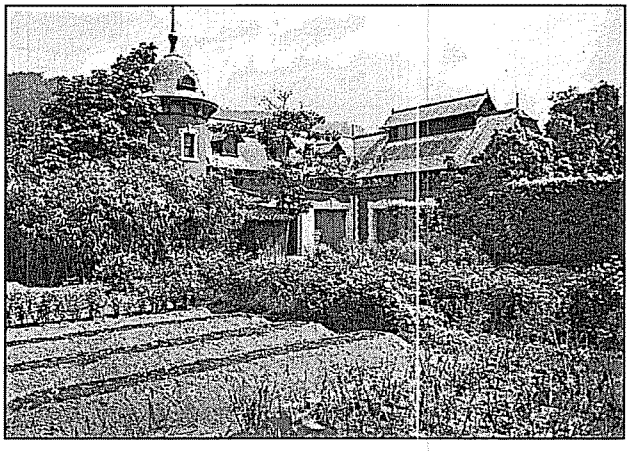
現在、相楽園は神戸の誇る本格的な日本庭園と 3 つの国指定重要文化財（旧ハッサム住宅、旧小寺家厩舎、船屋形）と神戸市の行事と外国からの賓客をお迎えする迎賓館がある施設だ。「相楽園」は昭和 16(1941)年、続く不況と貿易商社「小寺洋行」の経営不振などで小寺謙吉から神戸市へ売却され、その代金の半分は市へ寄付されたという。神戸市は中国の『易経』の一節「各得其願和悦相楽」（オノオノソノ願イヲ得テ和シテ悦ビ相楽シム）から、「相楽園」と名付けて昭和 16(1941)年 11 月、市民に公開することとした。初めは春秋の花の季節のみ開園されていた。

旧小寺邸当時の園内を概説すると、現在もほとんど当時と変わらないのは築地塀、正門、正門横門衛詰め所、東門、西門、蘇鉄園、池泉回遊式庭園の瓢箪池、池周辺を回遊する園路、明治時代作庭の特徴である洋風な芝生広場、荒木村重ゆかりの花隈城鬼門の樟、旧小寺厩舎などだ。戦災で焼失したのは、今の相楽園会館とほぼ同位置にあった本邸で、桃山風の破風屋根の車寄せをもつ「樟風館」、現在の旧ハッサム邸の女中部屋あたりにあった奉公人棟、戦後復元され茶室として使われているが、池に張り出した藤棚を持つ離れだった「浣心亭」、現在休憩所と滝と流れ手水がある庭園の西南角にあったという茶室「又新亭」（ゆうしんてい）、瓢箪池の上部の小広場にあった茅葺きの四阿、今は現代風の休憩所が建っている園内一番の高みにあった藁葺きの四阿などである。

なお「樟風館」付属の漆喰塗倉二棟は戦災を免れ、公園管理事務所等に使われていたが、相楽園会館建設時に取り壊された。さらに特筆すべきは旧小寺厩舎前が畑だったようだ。また旧小寺厩舎は相楽園の鬼門に位置し、厩舎として建てられたものの生類を嫌い厩舎として一度も使われなかったらしい。ただし、当時ようやく利用され出した自動車のガレージとしてつかわれた。進入ルートついて考察すると、正門は古い写真から木製柵が前面にあり、人だけのようで北門は当時なかったので、厩舎に極めて近い東門からだと推定される。門と本邸と庭園の関係から通常、「樟風館」への通用門は西門だったことは容易にわかる。



■戦前の池と浣心亭と灯籠類（神戸市蔵）



■旧小寺厩舎と畑と薔薇（神戸市蔵）

なお、船屋形は戦前にはなかった。船屋形は江戸時代、姫路藩主が河川での遊覧用に使っていた「川御座船」の屋形部分だけが陸揚げされたものだ。飾り金具の裏に榊原家の家紋でなく本多家の家紋が刻印されていることから、建造年代は 1682～1704 年の間と推定されている。昭和 28(1953)年国の重要文化財に指定された。牛尾吉朗氏より神戸市に寄贈され、明石海峡大橋着地点に近い牛尾邸の池畔(現・苔谷公園の一部)から解体補修の上、昭和 55(1980)年相楽園の西池畔を埋め立て設置した。前面の船泊風護岸は桂離宮の船泊を参考にして設計された。木造 2 階建、切妻造桧皮葺で内部 は 1 階 2 階とも 3 室に分かれていて、前方より「床几の間」「上段の間」「次の間」となっているが、中でも 2 階中央の「上段の間」は小さな床の間付で最も重要な殿様の御座だ。しかし「床几の間」の方が操船する船頭の座だけあって、景色も展望もよい。二階の木部は内外とも全てを春慶塗と黒漆塗 に塗分け、長押や垂木の先には金箔を施した飾り金具を打つなど華麗で繊細な造りである。日本に現存する唯一の川御座船だ。

7．庭園修復計画

「正門から相楽園会館に至る主園路が小砂利敷きで歩きにくいうえ、車椅子の通行は出来ないので園路の舗装をしてほしい」という長年の市民要望にそって、平成 10(1996)年京都造形芸術大学尼崎博正教授の指導のもと、黒玉砂利洗い出し舗装が施工された。その折り、尼崎教授から既存樹の手入れや庭園ディテール復元など多くの改善点の指摘を受けた。この指摘をもとに造営当時に復元するため、平成 12 年度に株式会社 中根庭園研究所に庭園の現況調査・分析評価業務を委託した。その結果、ひらどツツジ等樹木の剪定手入れ、芝生の消失、広葉樹繁茂による灌木・地被類の生育不良、五つの流れ施設の荒廃などが指摘された。ついで平成 17 年度までの改修５カ年計画が策定され、（財）神戸市公園緑化協会に委託して、剪定・伐採・実生樹の除去判定・流失土の補充、流れの復元整備・芝生の復元・根締め等補植・サイン等の整備・斜路の増設を含むユニバーサルデザインの実施などおおむね良好に実施され、見違えるようになった。今後もこの庭園にとって重要な苔等の地被類の復元などが重要課題であるとともに、地下に埋没している旧「又新亭」周辺の発掘、復元とその固有の伝統的意匠の保全に努めていく必要があろう。

8．指定管理者とこれからの相楽園管理

平成 18 年度から相楽園の管理は、庭園部分は指定管理者「神戸市造園共同企業体」が、相楽園会館は神戸市行財政局が、重要文化財は神戸市教育委員会が、それぞれ管理することになった。まだ慣れないせいか少し軋んだ意見を仄聞する。元園長でもあった私の意見は、「相楽園は神戸の誇る本格的な日本庭園と 3 つの国指定重要文化財（旧ハッサム住宅、旧小寺家厩舎、船屋形）と神戸市の行事と外国からの賓客をお迎えする迎賓館がある施設で、三位一体的に管理すべきだと考えている」ということだ。もちろん世の流れとして、民間のできることは民間に委ねることは大切だと思うが、昨今の規制緩和が何をもたらしたか？　と営利と距離を置いた視点での各施設の位置づけを考え直すことも重要なことだと思う。（この項おわり、「神戸のみどり」完）

「六甲山植樹 100 年」（05 年 8 月号と 10 月号）から始まって、「21 世紀都市林“こうべの森”をめざして」（05 年 12 月号）、「しあわせの村誕生異聞」（06 年 2 月号と 4 月号）、「布引ハーブ園誕生異聞」（06 年 10 月号と 11 月号）、「相楽園異聞」（07 年 1 月号と 2 月号、3 月号）まで、５つのテーマで「神戸のみどり」を連載いただきました。小森さんの「みどり」への情熱とさすがの筆に、今再び読み返してみて、先人から受け継ぐ「神戸のみどり」を守ることの意味を思っています。大切な文章のご寄稿を心から感謝申し上げます。ありがとうございました。（天川佳美）

■『コンパクトシティ』を考える（あとがき）

中山　久憲（神戸コンパクトシティ研究会）

1997 年に前神戸市長の笹山幸俊氏が第 3 期目に入った市政方針の中で、震災の教訓として、「小規模で分散し、自律した生活圏の多重ネットワーク社会」を作ることが災害に強く、安全で安心であるとして、震災復興のまちづくりに「コンパクトシティ」政策を提唱された。これが私がコンパクトシティ研究に関係するきっかけとなった。「コンパクトシティ」という単語を最初に聞いた際、言葉の響きに直感的に魅了されたからである。「コンパクト」という「小さくて詰まっている」意味の単語と、巨大化を指向してきた「シティ(都市)」という相反する単語が結びついたことで、それまでの明解な境界もなく拡大を続けてきた「メガロポリス(巨帯都市)」の問題の解決策の大きな鍵になりうると直感したからであった。

しかしながら、市役所庁内での研究会や、『コンパクトシティー持続可能な都市形態を求めて－』の翻訳を通じて、あるいは、仕事から離れた研究会で、日本におけるコンパクトシティの具体性を追求してきたが、「コンパクト」＋「シティ」という相反する単語の組み合わせを満足する都市構造のイメージを創造するまでに至ることができなかった。それには、人類が定住生活を開始して以来、模索し続けている都市のあり方、すなわち苦闘し続ける都市計画や都市政策の形成の経緯を知らずして、欧米人が求める"Compact"＋"City"に込められた意味を理解できないのではないかと感じた。

そこで、2002 年から新たに私的な「神戸コンパクトシティ研究会」を始め、ヨーロッパや米国の都市形成の歴史を順次たどりながら、文明と思想の進化、都市の政治と経済などとの関係から、都市の形態や行政の仕組みについて、都市計画的見地からその系譜の把握に挑戦してみることにした。

そんな折に、2003 年からの「月刊きんもくせい」の発刊において、隔月号での『コンパクトシティを考える』の連載を担当することとなった。そして、2006 年 9 月号の第 21 回（実質的には 20 回分の原稿）で連載を終えることができた。その間 3 年 4 ヶ月、毎回の原稿を送付したら、すぐに次号の企画、資料の整理、執筆、校正、原稿送付を 2 ヶ月毎に繰り返してきた。しかし、毎回それほどの焦りは感じなかった。というのは、毎月の研究会で発表してきたコンパクトシティに関係した欧米の都市計画の資料が先行的にできていたからであった。その資料も既にページ数にして 400 頁を超えている。まさに継続は力なりである。ただし、連載は毎号 2 頁という量的制約があり、企画したかなりの部分を割愛しなければならず、研究会の成果を充分に表現できなかったのは残念である。

5 年にわたる毎月の研究会の活動と「月刊きんもくせい」での連載を通じて、欧米の都市のあり方、すなわち都市の主人公である市民の責任の自覚と義務の履行が、自治力を形成して、都市を自らが愛し守り、子孫に伝えていく持続性を保持してきたことを理解することができた。当初イメージした"Compact"の言葉の訳が、単に「小さく詰まっている」という意味だけではなく、「市民間の契約」、さらには意訳的に「都市の中で多様に活動するコミュニティの働き」であるという解釈に至った。つまり、「コンパクトシティ」は決して意図的に作り上げた都市の形態ではなく、市民がいかに自治力を獲得し、それを維持することで、結果的に「都市はコンパクトになる」ことと、それが都市の「持続性」を維持できるという命題に行き着いた。この命題については、神戸市での震災復興のまちづくりを通じた都市整備のあり方や、地方分権の確立による各地方の都市づくりの中で検証されるものであり、私自身も市民主体のまちづくりの中で実証できるように努めていきたい。

最後になりますが、都市計画論として「コンパクトシティ」を研究する動機を与えていただいた前神戸市長の笹山幸俊氏、研究機会を与えていただいた当時の神戸市震災復興本部主幹で現（財）神戸都市問題研究所主任研究員の本荘雄一氏、また、『コンパクトシティー持続可能な都市形態を求めて－』の翻訳の監修と欧米における事例の紹介をいただいた名城大学都市情報学部教授の海道清信氏、そして「月刊きんもくせい」への連載の機会を与えていただいた編集長で神戸山手大学教授の小林郁雄氏に深く感謝の意を表します。

さらに、2002 年からほぼ毎月開催させていただいた「神戸コンパクトシティ研究会」に場所を提供いただき、私の個人的興味からまとめた欧米における都市計画の系譜に、長年の経験を通じた意見をいただいた前こうべまちづくりセンター長の内田恒氏、現こうべまちづくり会館長の三輪秀興氏には大変お世話になりました。このほか、私的な研究会のメンバーとして参加していただいたことで、毎月資料を調べて原稿を書く機会ができ、その拙文に目を通し、説明に耳を傾け、時には懇親の場で議論や励ましをしていただいた神戸市の若手職員の皆様にも多大の協力を得ることができました。

そして、「月刊きんもくせい」の読者の先輩や後輩の方々から、拙文を読んだという声をかけていただいたことが、何よりもありがたかったことなど、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

■土井　勉（神戸国際大学）

まちの再生と公共交通と「きんもくせい」

「きんもくせい」12年間，本当に有り難うございました。

この 12 年で私も勤務先が神戸市内に替わり、「きんもくせい」的世界に近くなってきたのですから、3月号で終刊ということは大変に残念です。でも，実際の編集，印刷，発送などは大変なお仕事ですし、それを弛まずに継続された小林郁雄さん、天川佳美さん、中井豊さん、吉川健一郎さん、皆様の活動は本当に尊いものだと思います、お疲れ様でした。

あの震災がきっかけで発行された「きんもくせい」ですが、近年は震災と復興を大きな柱としつつ、これからのまちづくりについても展望するというのが編集方針ではなかったのかと思っています。神戸で仕事をするようになって、私自身もまちづくり、まちの再生について考える機会が増えました。

まちの再生に関連して「ソーシャルキャピタル（＝社会関係資本）」ということが良く話題に上るようになってきたと思います。ソーシャルキャピタルを言い出した米国の R.パットナムは、その著作『孤独なボウリング』で、米国でも減少しつつあるソーシャルキャピタル再生のために郊外へのスプロール化に歯止めをかける必要があると述べています。

これは土地利用計画だけの話ではなく、自動車中心の交通政策から徒歩と公共交通中心の交通政策に転換する必要があることを意味します。このことは同時に地域の環境負荷を小さくし、さらに中心市街地活性化や地域の安全・安心にも寄与することになるものです。

そのためには、公共交通をより魅力的にすること、まちと公共交通の関係をより緊密にすること、情報提供やコミュニケーションを通じた公共交通への利用促進など多くの課題があります。

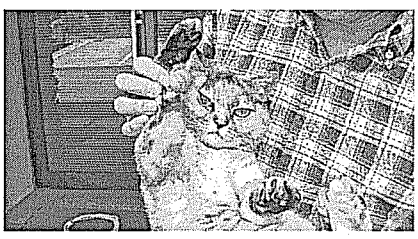
こうした文脈にも関係があるのですが神戸市や阪神間を中心とするエリアにおいて、まちの再生と公共交通に関する取り組みが実施されています．こうした取り組みがさらに充実していくために多くの叡智が必要です。「きんもくせい」の読者の皆様にも交通政策に時々はご関心をお持ちいただければ幸いです。

ホントはもっともっと継続して欲しかった「きんもくせい」です。12年間の発行を心から感謝申し上げます。

■坂和章平（弁護士）

「きんもくせい」ファンのコンサル、コーディネーター、建築士は多いだろうが、「三世代」にわたる「きんもくせい」５０＋３６＋４８をすべて購入し、きちんとファイル・保管している弁護士はわずかしかいないはず・・・。今から１２年前の１・１７阪神・淡路大震災は大変な被害を生み大きな爪痕を残したが、他方、それによって各種各層の専門家とまちづくり住民運動との連携を飛躍的に発展させることになった。そして、一貫してその原動力になったのがこの「きんもくせい」。ペンの力は偉大だが、それを継続させていく力はもっと偉大なことを実感。私にとっては、芦屋中央地区復興土地区画整理事業におけるまちづくり協議会の顧問弁護士としての５年半の苦闘が昨日のことのように思い出されるが、そんな私の活動や異業種交流は、「きんもくせい」によって大いに進化したもの。「きんもくせい」の発行を終える今、異業種の私からは、私の苦労の何十倍もの苦労を重ねてきたはずの、小林郁雄代表をはじめとするスタッフの方々の１２年間の活動に敬意を表するとともに、「ご苦労さま」の言葉を贈りたい。

■みかん（きんもくせい主）



バイにゃんにゃん

■龍鳳麒龜（森崎輝行／建築家）

「きんもくせい」の休止にむけ、長文になりそうなので、詩（死？）をつくり送信します。誰か曲をつけて頂くと、私がうたってみせます。

黄色い紙「きんもくせい」廃刊に捧げる詩

黄色い紙が連れてくる
なえる気力にご紹介
激励・勇気を献上し
『震災復興』へ立ち向かう
和田まことイラスト　伊達じゃない。

黄色い紙は想ってる
怒りの涙とご対面
たわごと・小論を手段とし
『震災復興』へ立ち向かう
和田まことイラスト　伊達じゃない。

黄色い紙は戦ってる
貧乏な仲間と抱き合い
まちづくりを御旗にし
『震災復興』へ立ち向かう
和田まことイラスト　伊達じゃない。

■安田孝（計画史研究者）

月間きんもくせの終刊号に、お礼のつもりで感想を書きました。

阪神淡路大震災は、私の教育・研究生活にも大きな転換点となりました。日本の高度経済成長期に都市計画・住宅問題関連の研究にかかわることになり、産業立地や住宅地開発と公害問題・環境評価が重要課題と思っていました。その中に、安全性が重要という視点は当然のごとく入っていましたが、強烈に実感させられたのは、1995年1月のことです。

その後、相変わらず日英比較研究をやっていますが、災害復興計画にコミュニティ再建が本格的の計画でのことか、と最近は思いつつあります。イギリスでは、1940年代の戦後再建プランの中心にコミュニティ再建があるようです。

近年では、日本全国のどこでも地震が発生し、それぞれの地域でコミュニティ再建が重要課題になりつつあるようです。経済力が大きくない今日では、期待ばかり大きくする復興ではなく、地道な再建計画の必要な時代になりつつあるように思いつつ、お礼の発信でした。

■御舩哲（多摩NPOセンター）

「月刊きんもくせい」47号分、「報告きんもくせい」36号分、「きんもくせい」50号分１２年間計133号分本当に有難うございました。そして迎えた2007年3月号第48号（通巻134号）で静かに一段落とされるとのこと本当にご苦労さまでございました。心から厚くお礼申し上げます。

私はお陰様で阪神・淡路大震災を思いの中にとどめ続けることができ学び続けてきました。心から感謝を！

■片寄俊秀（大阪人間科学大学教授）

何が難しいと言って継続することほど難しいことはない、といつも思っております。あの日から今日まで、よくぞ発行を続けてこられた、そのこと自体に、まず心からの敬意を表したいと存じます。編集の方々と、それを支えられた多くの方々に感謝申し上げます。なかんずく、無謀とも思えたこのような機関誌発行の試みを社をあげて応援された学芸出版社の心意気に、心からの拍手をお送りしたいと思います。多岐にわたる記事の数々から、災害とはその当日だけではなく、その後がかんじんということ、そして日々深まり深化するということを、実感として理解することができましたし、記事の中から、われわれのとるべき方向や、将来の展望についての多くのヒントをいただくことができました。ありがとうございました。

■青池憲司（映画監督）

A Long March

小林郁雄編集長、（編集）担当の天川佳美さん、中井豊さん、吉川健一郎さん、『月刊きんもくせい』3期通巻134号のProjectを全うされたことをおよろこび申し上げます。

命に終りがあるようにProjectにも終りがあることはうれしいことです。とはいえ、終りははじまりですから、Projectも命とおなじように連環していきます。連環は螺旋状に延びていって閉ざされることはついにありません。

阪神大震災があって、そして、わたしがはじめて被災地KOBEのみなさんにお会いしてから12年の歳月がすぎました。さまざまな事柄が走馬燈のごとくに現前します。

遠くまで行くんだ―、とわたしたちは出発したように思います。わたしたちとは、被災地KOBEの住民さんであり、専門家のみなさんであり、勝手に被災地に入り込んだ青池組のような輩をもふくんだ、わたしたちです。わたしたちは、あの日、まだ見ぬまち、をめざして旅立ちました（噫！浪漫）。「阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク」はその先達であり、先達すなわち工作者であり、機関紙『きんもくせい』は、まだ見ぬまち建設の作業工程書でした。「いま」的で「現場」感あふれるこのJournalを、わたしは愛読していました。とくに、足掛け5年の撮影を終えて、被災地KOBEをとりあえず離れてからは、先達たちの工作内容を知る手懸りのひとつでした。

おもえば遠くへきたもんだ―、第3期終刊の知らせをきいて、そんな感慨がわたしのなかになくもありませんが、まあ、これは旅人の感傷というものでしょう。感傷は妥協です、これはいけません。余談ですが、震災後の復興まちづくりを市民の視点でつたえつづけてきたMBS（毎日放送）ラジオの番組『ネットワーク1・17』がこの4月にリニューアルされましたし、カトリックたかとり教会（および、TCC＝たかとりコミュニティセ名所になるでしょうか）が完成して、献堂式（および、新規オープンのセレモニー）が5月末に行なわれます。いまは、ひとつの転換期―終焉と再出発の季節かもしれませんね。

命の連環のように終りのないまちづくりの作業工程書として、機関紙『きんもくせい』がその有効性をいささかも失っていないことは、あらためていうまでもありません。

小林さん、天川さん、中井さん、吉川さん、みなさんと次のステージでお会いする日をたのしみにしています。では、それまで、さよなら3期（三角）またきて四角。

■石東直子（コレクティブハウジング事業推進応援団長）

またお目にかかることを楽しみに、再見！

小林さん、天川さん、吉川さん、中井さん、○△□「きんもくせい」発行スタッフみなさん、震災直後から12年もの長きにわたってありがとうございました。金木犀カラーを見ると、「ああ、連帯してるんだ」と、安堵感を覚えました。

時の刻みとともに、「きんもくせい」の内容も変化してきたようです。震災直後は各地の被災状況やさまざまな復旧活動が実況放送のように伝えられました。ひとりの人間がかかわり行動する範囲や時間は限られますが、「きんもくせい」を通して多くを知り、共感し、学ぶこともできました。

つづいて時が進み、各地の復興過程と人間ドラマが報告され、さらに時が経ち、復興の朗報が披露され、やがて一段落した頃からは震災を契機にした新たな視点のまちづくり、まちの歴史・探検物、創作物語など、知的リラックス情報も届けられるようになりました。なお、国内だけに止まらず世界各地の被災・復興状況もあり、居ながらにして多くのことを学ぶことができました。

12年と言えば、小学校入学から中学校、高校を終えて社会に羽ばたくまでの人生で一番様変わりする時期、「きんもくせい」もまさにそのような時

間についても「きんもくせい」には多分 30 篇余りの報告を掲載していただきました。いい経験になりました。謝謝、再見、再会！

■三輪康一（神戸大学）

一口に通巻 134 号といっても大変なことで，持続は力であるとつくづく感じ入りますが，一方，12 年もたちますと，紙面のどこをみても熱気をはらんでいたあのころからすると，書き手も読み手もヒートダウンするのはやはり自然の成り行きかと，思い知らされも，します。ただ，その時期，復興から普遍に向かうまちづくりの行方を見定める重要な論壇を形づくってきたことは紛れもなく確かであり，まちもひとも変わっていくなかで，続く世代にその種は着実にまかれたと思われます。「きんもくせい」の役割がほんとうに終わったのかどうか，わかりませんが，長い間ほんとうにごくろうさまでした。

■山地久美子（多文化と共生社会を育むワークショップ代表／神戸学院大学客員教授）

多文化共生社会とまちづくり

「多文化共生社会とまちづくり」はまちづくりの達人がまちづくりの最新の現状を発信する『きんもくせい』の中であまり登場してこなかった分野の一つであろう。学芸出版社のホームページに掲載されている『きんもくせい』の 1995 年からの過去全ページを読破したことがあるが、おそらく 2006 年 3 月号に小林郁雄氏が書かれた「六甲アイランド基金と多文化ワークショップ」が唯一ではないかと思う。私たち「多文化と共生社会を育むワークショップ」の活動は小林氏により「国際交流ではなく多方面の文化と共生コミュニティへの取り組み」と紹介されている。2006 年 1 月に結成された多文化と共生社会を育むワークショップは公益信託神戸まちづくり六甲アイランド基金の助と共生社会：Korea 編」事業を終了し、2007 年 4 月から「みんなでつくる文化と共生社会：中国・アジア編」をスタートしている。

多文化共生社会という言葉は日本でも語られるようになって久しい。いくつもの地域で多文化共生社会への取り組みが行われ、様々な活動が繰り広げられている。阪神間では六甲の神戸学生青年センターが数十年前から外国人居住者の人権確保や生活支援活動を行っている。震災以後は長田の FM わぃわぃをはじめとするたかとりコミュニティセンターなどの活動がよく知られている。

日本では多文化共生社会というと、外国人の問題が外国人自身の居住にかかわる私的・法的な問題解決が中心と捉えられている面が強いように思う。しかし、多文化共生社会の構築に向けて重要となるのは「日本人がどのように外国人を受け入れて、多文化共生社会の構築にかかわっていくか」ということである。それは、文化的な側面から社会保障など社会資源の分配にまで及んでくる。

その様な中で私たち多文化と共生社会を育むワークショップの活動は大きく二つの目的がある。一つは、日本人に向けて多文化共生社会について考え、議論できるまちづくりの場を提供することである。もう一つは、音楽やスポーツを通じて、言葉の壁を乗り越え「文化とまちづくり」の面から多文化共生を肌で感じてもらうことである。そのために多文化共生社会シンポジウム（小林郁雄・藤井英映）、各国文化紹介講演・料理会（飛田雄一・山地久美子）、「世界をつなぐ音楽の花束」コンサート（澤井宏仁・飯田美奈子・権龍模）やスポーツ交流会（林敏之）という多様な事業を推進中である。幸いな事に、昨年の事業では延べ 600 人程の方が参加してくださった。今後も、多くの方と多文化共生社会とまちづくりを推進していきたい。

この度の『月刊きんもくせい』終刊にあたって最初で最後の投稿をさせていただきました。次に

ら、ぜひ「多文化共生社会とまちづくり～その後」を報告させていただきたいと思います。

■松本誠（市民まちづくり研究所所長）

「月刊きんもくせい」の終刊、ご苦労様でした。１２年間１３４号まで、よくぞ途切れなく続けていただいたものです。コープランあればこその偉業だと思います。小林さんはじめ、天川さん、中井さん、吉川さん、そしてスタッフを支えてきた皆みなさんの執念のような努力に拍手と感謝を贈らせていただきます。

三度の“創刊”を重ねて書き綴ってきた、震災復興をめざした「市民まちづくり」を支援するネットワークの機関紙は、被災地ＫＯＢＥの多様な市民まちづくりの記録でもあります。１２年間の復興まちづくりへの評価は多々ありますが、成功も失敗も、喜びも苦渋も、そして未だ新しい課題を次々に追い求める市民まちづくりの群像の数々は、９０年代以降の歴史の転換期にふさわしい市民主体のまちづくりへの試行錯誤そのものだと思います。

これらを現場からしっかりと記録して、発信していく情報紙が終刊するのは寂しさを覚えますが、この火を絶やすことなく、また新たな「きんもくせい」が立ち上げられることを期待しています。

「市民まちづくり」とは、市民が主体となったまちづくりを、「市民」という担い手の側面と「まちづくり」というムーブメントの側面の両方から追求していく課題だと認識しています。市民まちづくりを支援する人たちの輪が、新しく登場するであろう「ニューきんもくせい」によって、また新しい地平を切り開いていく日を期したい。

■原口洋一（元・NHK 神戸放送局長）

「きんもくせい」へのオマージュ

私が、復興の戦列から離れて２年近くになります。「きんもくせい」が伝えてくれた神戸の消息は、もう届かないのですね。「きんもくせい」の終刊は、のだなと感じます。

私のふるさと鹿児島の山では、倒木更新という言葉を耳にします。倒れた古木の幹に、次世代の若木が芽を出し古木を肥やしに成長してゆくのです。「きんもくせい」のあとがきにも暗示されていた新生の萌芽に密かな夢を託しましょう。

小林さん、天川さんをはじめ事務局を支えてこられた同志の皆さんにこころからありがとう！そして再見！

■千葉桂司（株式会社ＵＲサポート）

小林さま、ご無沙汰しています。もう遅いかも知れませんが、きんもくせいに一言をと思い、メールしました。長いあいだご苦労様でした。そしてありがとうございました。震災の後、復興関連の事業は公団復興本部の仕事となり、立場上お手伝いするのが難しくなり、以来ずっと気になって今日まで来てしまいました。十分な応援ができなくて皆さんに申し訳なく思っています。「きんもくせい」が来るたびに羨ましく、はがゆく思っていました。今後は、健康に留意され更にご活躍下さい。こんごともよろしくお願いいたします。

「きんもくせい」が終刊されるとか。

震災後１２年間もの間、多くの情報と、多くの問題提起、多くの人たち（の事）を送り続けていただき、ありがとうございました。これに携われた方々に、心からご苦労様と感謝の念を伝えたいと思います。

思い起こせば、震災直後からの数週間は極めて密度の濃い時間でした。とてつもない多くの人たちが、それぞれ自分のできることを見つけて、神戸を救おうと一生懸命でした。その中で、私は神戸市職員の方々の奮闘はすざましいものがあったと、一言言い残しておきたいと思います。まちづくりコンサルタントの人たちもそう、それ以上でした。それを事もあろうに、復興事業を山分けしようとしていると言った評論家がいました。唯一不愉快な出来事でした。

公的な資料の何処にも残らない、しかし生の声、生の現場が飛び交った記録誌「きんもくせい」にお礼を言いたくて。

水の情景十二●ワタシの旅

海が呼ぶ

中川　紺

長い間、探していた水の気配が、海にある。ワタシは半ば確信をしていた。その匂いを辿って、あの煌めく水面を目指して歩いていた。

丘上にあった遊園地から海までは、決して近いとは言えない距離だったけれど、歩き疲れることなど無い。少し春が近くなって来たのか、風も以前ほどには冷たくない。目的が見えてきたせいか、足取りは軽かった。

●●

風の匂いが変化したと思ったら、目の前に砂浜と波打つ青い水面が広がっていた。

この気配だと、体全体が感じていた。ワタシはここに来るために旅をしていたのだと。

でもワタシは一体何者なのか。その謎は解けないままだ。何か言葉を発しようとして、とても喉が渇いていることに気がついた。こんなことは初めてだった。

浜の隅っこにあった小さな売店まで、足を運んだ。中には小柄なおばあさんが背中を丸めて座っている。

「何かお探しかね」

小さくてもはっきりと響く声。

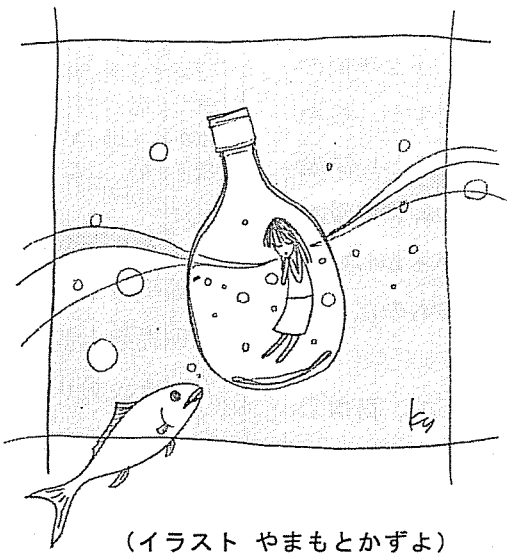
「さしずめ、このあたりかね」

差し出されたのは、水が入ったガラスボトルだった。ラベルは何もついていない。

「…でもワタシ、お金持っていなくて」

「コイン持ってるだろう。それでいいさ」

戸惑うワタシに構わず、おばあさんはあの異国のコインを受け取りボトルを手渡した。



（イラスト　やまもとかずよ）

まるで何も入っていないくらいに、透き通った水だった。

「その水には名前が無い」

つぶやくようにおばあさんが言った。

えっ、とワタシは思わず声をあげた。

「自分が何か、知りたいんだろう？　すべてはその水が知っているさ」

何もかも見通したようなおばあさんは、そう言って水の入ったボトルを指差した。

●●

お礼を言って浜に出ると、波打ち際に立った。この水を飲むのは、ここが相応しい気がしたから。フタを開けてボトルの水を体に流し込んだ。

水を一口呑み込む度に、懐かしい水の情景が浮かび上がってきた。

水道の蛇口、猫よけのペットボトル、水がたまったホース、梅雨明けの睡蓮、虫の石が眠る川、流れている無数の糸、コインが沈んだ水たまり、手押しポンプ、稲穂が実る水田、藻に被われたプール、遊園地のボート。

ああ、何だか体が軽くなった気がする。

気だけではない。実際、軽くなっていた。足先からワタシの体は変化していく。白く薄くなって。髪を巻き込みながら。どんどんと。

そして、最後の一口を飲むと、ボトルを持っていた手も、顔も、すべてがボトルの中に吸い込まれていった。体と服は白い紙に、黒髪は文字となりこれまでの出来事を紡いだ。今や物語の紙片となったワタシは、ボトルにすっぽりと収まっていた。最後に、緑のガラス片だったものがコルクと化し、栓をした。

波がボトルをさらい、ゆっくりと海に導く。

いつか誰かが拾って、栓を開けるとき、この物語が伝えられるのだ。（最終話・完）

■「月刊きんもくせい」終刊の辞

阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク

それでは、皆さん、さよなら、サヨナラ、SAYONARA

小林郁雄

1995年2月10日創刊から2007年5月10日の134号までの12年間にたくさんの方々が原稿をお寄せ下さり、「きんもくせい」の発行を担ってくださいましたことを心から感謝申し上げます。

この度も多くの方々が今後のことに思いを馳せてくださる気持ちを有り難いと思いつつ、発行作業に携わってきた者たちはようやく肩の荷を下ろす気分であります。殊の外その気持ちを強く持っているのは私天川佳美であり、何を隠そう小林郁雄本人でありましょう。

激務の何年かを髪振り乱すことなく「きんもくせい」を発行し続けられたのは中井豊、吉川健一郎の仕事の時間を割いての作業に他なりません。

小林本人が定年いや諦念と決めた時に「暇になった人が編集作業をしたら」といった天川の激励（？）に応えて始まった小林編集長のその後は皆さまご承知の遅配続きでした。（ごめん／小林）

しかし、市民まちづくり支援ネットワークの心意気が終わるはずはなく、皆さまそれぞれの中で「きんもせい」は生き続け、活動が終わることはないと思っております。皆さま、12年間をありがとうございました。いづれ、どこかで、お会いする時まで「さよなら」です。

天川佳美

再々復刊した03年4月号で、小林さんが『現場に真実はあり、細部に神は宿る』と書いていますが、この言葉が今でも印象に残っています。

働き始めた頃、10年をひとつの目標に一人前になるというか、仕事を一人で任されるようになりたいなと思っていました。少し言い訳がましいですが、仕事で手一杯になりきんもくせいの編集まで手が回らなくなったのがちょうど10年が過ぎようとしていた頃でした。現在、自分では“現場主義”に立ち地域に携わっていると思ってます。ただ、“細部に神は宿る”･･･情報の共有といった意味では、僕がこれまでに関わってきた、南芦屋浜や千種川、浜甲子園団地、奥池、六麓荘、長田神社前地域といった地域のことを発信できなかったなあ、と思う今日この頃です。

「きんもくせい」の再々々復刊があるかはわかりませんが、今後はもう少しゆとりを持って、細部へのまなざしでもって僕の関わる地域の香りを何らかの形でお届けできるようになれたらと思っています。

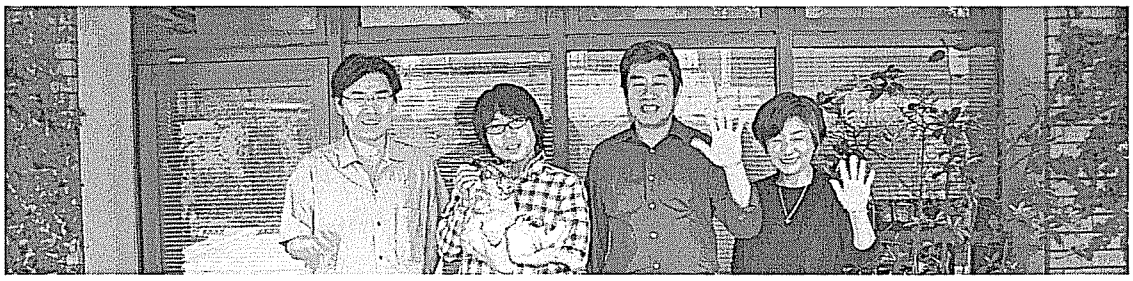
吉川健一郎

“市民まちづくり”とともに歩んだ12年間をふりかえって、いよいよ「きんもくせい」が完全に終わることになり、当然さみしくもありますが、震災から12年もたっているのでこれが現実的なところかな、とも思います。

現在まで続けてみてプランナーの立場から思うのは、やはりまちづくり協議会に代表される地域でのなんらかの持続的な取り組みの大切さでしょうか。このとりくみがあればこそ、地域での様々な課題（平常時においても緊急時においても）に対応できるのだと思います。ただ、協議会等の“空白”エリアの方がまだまだ多いわけで、これからも努力と工夫が必要だと痛感しています。

「きんもくせい」はこれで終わりですが、何らかの機会があればまた報告ができたらと考えています。「きんもくせい」読者の皆さん、長い間おつきあい下さりどうもありがとうございました。

中井　豊



● きんもくせいのｲﾝﾀｰﾈｯﾄｱﾄﾞﾚｽ

◆ http://web.Kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kobe/index.htm

◆ http://www1.plala.or.jp/hos_a/kinmokusei_international.html

■ 阪神大震災復興　市民まちづくり支援ネットワーク　事務局

〒657-0024　神戸市灘区楠丘町2-5-20 まちづくり(株)コー・プラン内

TEL.078-842-2311　FAX.078-842-2203　Email:mican@ca.mbn.or.jp

銀行振込先：みなと銀行六甲道支店(普)1557327　郵便振替：00990-8-61129

編集長：小林郁雄　担当：天川佳美、中井　豊、吉川健一郎